

下元屋敷遺跡・下田遺跡（1）

（一）香林羽黒線地方道路交付金事業並びに
北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

群馬県伊勢崎土木事務所
東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査研究館1F保管

下元屋敷遺跡・下田遺跡（1）

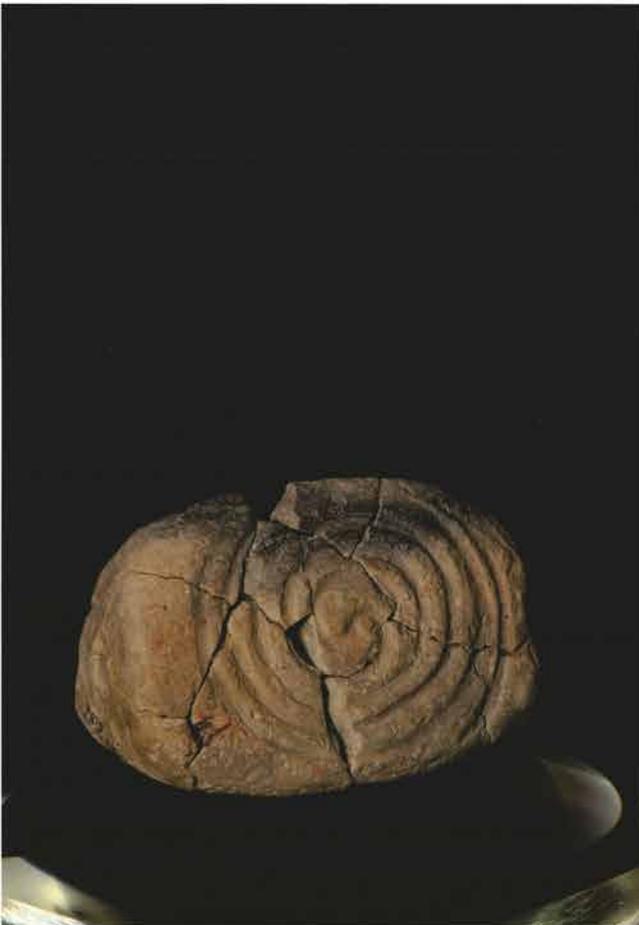
（一）香林羽黒線地方道路交付金事業並びに
北関東自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007

群馬県伊勢崎土木事務所
東日本高速道路株式会社
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



遺跡遠景（中央の早川を挟んで下元屋敷遺跡・下田遺跡、大間々扇状地扇頂部を南から望む）



三角柱形土製品（5区1号住居跡出土）



土偶（下田遺跡Ⅱ区出土）

序

下元屋敷遺跡および下田遺跡は伊勢崎市田部井町に所在し、平成13年度から15年度にかけて北関東自動車道（伊勢崎・県境間）と側道整備事業である香林羽黒線建設に伴って発掘調査が行われました。両遺跡の整理業務は平成17年度から開始され、本書は二分冊中の第1分冊になります。

下元屋敷遺跡・下田遺跡の二遺跡は、伊勢崎市（旧佐波郡東村）を南北に流れる早川を挟んで対峙しています。早川は、赤城山南麓地域に広がる大間々扇状地の桐原面と藪塚面を画するもので、両遺跡はまさにその境界に立地しています。下元屋敷遺跡では、縄文時代の集落縁辺の状況が明らかになった他、製鉄の燃料生産に関連すると想定される古代の炭窯群が検出されました。下田遺跡では、当初遺跡の存在が想定されていなかった低地部分で、河道に面して展開する縄文時代中期後半から後期初頭の大規模な集落が検出されました。また、古代に位置づけられる製鉄関連遺物の出土があり、周辺の遺跡も含めて本地域が鉄生産に深く関わってきたことが確認されました。

本報告書の刊行に至るまでには、伊勢崎土木事務所、県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、旧佐波郡東村教育委員会はじめ関係諸機関並びに関係各位に大変なご尽力を賜りました。ここに銘記して心よりの感謝を申し上げますとともに、本報告書が広く資料として活用されますことを願ひまして、序といたします。

平成19年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

例 言

- 1 本報告書は、(A)一般県道香林羽黒線地方道路交付金事業（通称北関東自動車道側道）および、(B)北関東自動車道（伊勢崎～県境）の建設工事に伴う、下元屋敷遺跡（遺跡略号 KT-410）・下田遺跡（遺跡略号 KT-420）の発掘調査報告書である。今回は(A)事業全体と(B)事業の一部について掲載した二分冊中の第1分冊である。
- 2 下元屋敷遺跡は、群馬県伊勢崎市田部井町2丁目（旧佐波郡東村大字田部井）に所在し、下田遺跡は、群馬県伊勢崎市田部井町3丁目（旧同上）に所在する。
- 3 事業主体 (A)群馬県県土整備局（旧土木部道路建設課） 伊勢崎土木事務所
(B)東日本高速道路株式会社
- 4 発掘調査期間 下元屋敷遺跡 (A)平成13年11月1日～平成14年3月29日
(B)平成13年4月1日～平成13年7月31日
平成13年10月1日～平成14年1月31日
平成15年5月1日～平成15年5月31日
下田遺跡 (A)平成14年3月30日～平成15年7月31日
(B)平成13年4月1日～平成13年7月31日
平成13年10月1日～平成15年7月31日
- 5 整理期間 (A)平成17年10月1日～平成18年11月30日
(B)平成17年4月1日～平成19年3月31日（次年度継続）
- 6 調査・整理組織は以下の通りである。
事務担当者：小野宇三郎・高橋勇夫・赤山容造・吉田 豊・木村裕紀・神保侑史・津金沢吉茂・水田 稔・能登 健・平野進一・住谷 進・萩原利通・矢崎俊夫・萩原 勉・西田健彦・中束耕志・真下高幸・大島信夫・植原恒夫・宮前結城雄・笠原秀樹・相京建史・関 晴彦・小山健夫・高橋房雄・竹内 宏・石井 清・須田朋子・吉田有光・柳岡良宏・森下弘美・片岡徳雄・田中賢一・今泉大作・佐藤聖行・栗原幸代・清水秀紀・吉田恵子・並木綾子・内山佳子・本間久美子・北原かおり・狩野真子・佐藤美佐子・今井もと子・中澤恵子・金子三枝子・若田 誠・武藤秀典・松下次男・吉田 茂・蘇原正義
調査担当者 下元屋敷遺跡 (A)春山秀幸
(B)大西雅広・齋藤 聡・石塚久則・田村 博
下田遺跡 (A)齋藤 聡・高柳浩道・春山秀幸
(B)山口逸弘・大西雅広・金子伸也・渡辺弘幸・津島秀章・小室綾子・小暮育秀・齋藤 聡・齋藤幸男・春山秀幸
整理担当者 (A)春山秀幸 (B)齋藤幸男・小林 徹・春山秀幸
執筆は、第1章第1節を相京建史、同第3節および遺物観察表を小林 徹、第3章第2節第1項（旧石器記載）を中村真理、その他を春山秀幸が行った。
整理補助 (A)荻野恵子・小島佐恵子・針谷友規・小川直子・桜井次男・梅澤きく江
(B)藤井文江・田中富美子・大沢知代・高橋尚子・高橋美恵子・石川裕美・荻野恵子・小島佐恵子・針谷友規・小川直子・梅澤きく江

遺構写真 発掘調査担当者
遺物写真 山際哲章(口絵)・(有)アルケーリサーチ
保存処理 関 邦一・土橋まり子・小材浩一・津久井桂一・多田ひさ子・森田智子・長岡久幸・
小池 緑・佐々木茂美・田中のぶ子・野沢 健
機械実測 友廣裕子・酒井史恵・廣津真希子

- 7 下記事項については、各氏に鑑定およびご教示をいただいた。(敬称略)
- 製鉄関連遺物 穴澤義功(製鉄研究会代表)
石材鑑定 飯島静男(群馬県地質研究会)
石器分類 羽石智治(現つがる市教育委員会) 縄文土器分類 山口逸弘(当事業団)
陶磁器鑑定 大西雅広(当事業団)
- 8 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。研究・教育等での幅広い活用が望まれる。
- 9 発掘調査及び報告書作成には以下の方々に御指導・御協力をいただいた。記して謝意を表します。
群馬県教育委員会・伊勢崎市(旧佐波郡東村)教育委員会・群馬県県土整備局(旧群馬県土木部道路建設課)・伊勢崎土木事務所 等関係各機関・地元関係者各位・梅澤重昭・秋山道生・青木利文・小島通悦・中村真理・寒川 旭・穴澤義功・三奈木義博・松尾充晶・藤原尚樹・吉田利江・東山信治(敬称略、順不同)
また、発掘調査に従事していただいた発掘調査員各位にも改めて謝意を表します。

凡 例

- 1 挿図中に使用した方位は、磁北ではなく座標北を示す。座標系は、国家座標第IX系である。個別遺構図中では座標値の下3桁を表記しているが、5桁表記の全体図と対応する。
なお、調査時には日本測地系を使用したため、本書も日本測地系を用いている。
- 2 遺構実測断面図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は「m」である。
- 3 遺構名称はA・B事業を含め、調査区ごとに遺構の種別により通し番号を付けている。調査工程により同一遺構に複数の遺構名が付された場合は、状況に応じて統合した。
なお、調査区名の表記は、(A)事業は算用数字、(B)事業はローマ数字を使用している。両事業に関わる住居跡については併記した。
- 4 本書における遺構・遺物図にはそれぞれスケールを付したが、以下の縮尺を基本としている。
住居跡：1/60 掘立柱建物：1/60 土坑：1/60 溝：1/200(断面図は1/50) 配石：1/60
埋甕：1/30 水田・畠：1/100、1/200、1/500 炭窯：1/60 井戸 1/60 等
土器 1/3を基本とし、これ以外については挿図内に縮尺を記した。
石器 1/1、4/5、2/3、1/2、1/3、1/6を基本とする。1/3以外は挿図内に縮尺を記した。
遺物写真図版の縮尺は原則として遺物実測図に準じるが、状況により変更している。
- 5 遺構図では、遺構の上端を太線、下端を細線で表している。
- 6 本書で使用した地形図は以下の通りである。
国土地理院 地勢図 1/200,000「宇都宮」 地形図 1/25,000「桐生」「上野境」「大胡」「伊勢崎」

目 次

序

例言 凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の概要	
第1項 発掘調査の方法	3
第2項 発掘調査の経過	4
第3項 整理業務の方針と方法	6
第3節 遺跡の立地と環境	
第1項 地理的環境	7
第2項 歴史的環境	8

第2章 下元屋敷遺跡の調査

第1節 遺跡の層序	13
第2節 検出された遺構と遺物	
第1項 縄文時代	14
第2項 古代	19
第3項 中近世以降	40

第3章 下田遺跡の調査

第1節 遺跡の層序	47
第2節 検出された遺構と遺物	
第1項 旧石器時代	47
第2項 縄文時代	49
第3項 古代	265
第4項 中近世以降	313

第4章 まとめ

第1節 下元屋敷遺跡	395
第2節 下田遺跡	397
第3節 周辺の製鉄関連遺跡	401

附篇 分析結果

はじめに	403
Ⅰ 下元屋敷遺跡炭窯出土炭化材の樹種同定	405
Ⅱ-1 製鉄関連遺物の観察と分析	411
Ⅱ-2 下元屋敷遺跡出土鉄生産関連遺物の金属学的調査	423
Ⅱ-3 下田遺跡出土鉄生産関連遺物の金属学的調査	435
Ⅲ 下田遺跡の自然科学的分析	457

写真図版

抄録

表目次

表 1	下元屋敷遺跡発掘調査工程表	4
表 2	下田遺跡発掘調査工程表	5
表 3	整理業務工程表	6
表 4	周辺の遺跡	11
表 5	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物観察表	28
表 6	下元屋敷遺跡溝一覧表	45
表 7	下元屋敷遺跡土坑一覧表	45
表 8	下元屋敷遺跡遺物観察表	46
表 9	V区 1号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物観察表	279
表 10	下田遺跡溝一覧表	339
表 11	下田遺跡土坑一覧表	341
表 12	下田遺跡遺物観察表	345
表 13	下元屋敷遺跡鉄関連遺構・遺物の主要要素一覧表	398
表 14	下田遺跡鉄関連遺構・遺物の主要要素一覧表	400

挿図目次

第 1 図	北関東自動車道路線図および遺跡の位置	2
第 2 図	調査区およびグリッド設定図	3
第 3 図	遺跡周辺の地形	7
第 4 図	周辺の遺跡	10

【下元屋敷遺跡】

第 5 図	下元屋敷遺跡基本土層	13
第 6 図	下元屋敷遺跡全体図	13
第 7 図	Ⅲ区 1号住居跡	14
第 8 図	縄文時代土坑(1)	15
第 9 図	縄文時代土坑(2)	16
第 10 図	縄文時代出土遺物(1)	17
第 11 図	縄文時代出土遺物(2)	18
第 12 図	Ⅱ区 2号炭窯	20
第 13 図	Ⅱ区 2号炭窯炉壁片出土状況	21
第 14 図	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物構成図	22
第 15 図	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物(1)	23
第 16 図	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物(2)	24
第 17 図	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物(3)	25
第 18 図	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物(4)	26
第 19 図	Ⅱ区 2号炭窯出土製鉄関連遺物(5)	27
第 20 図	Ⅱ区 3号炭窯	31
第 21 図	Ⅱ区 6号炭窯(1)	32
第 22 図	Ⅱ区 6号炭窯(2)	33
第 23 図	Ⅱ区 7号炭窯	35
第 24 図	Ⅱ区 8号炭窯	37
第 25 図	Ⅱ・2区土坑型炭窯、古代土坑	39
第 26 図	中近世土坑(1)	41
第 27 図	中近世土坑(2)、井戸	42
第 28 図	Ⅱ・2区 1～3号溝	43
第 29 図	古代・中近世出土遺物	44

【下田遺跡】

第 30 図	下田遺跡基本土層	47
第 31 図	旧石器時代出土遺物	48
第 32 図	縄文時代遺構全体図	49
第 33 図	縄文時代遺構分布図(Ⅰ・1～Ⅱ・2区)	50
第 34 図	縄文時代遺構分布図(Ⅲ・3～Ⅳ・4区)	51
第 35 図	縄文時代遺構分布図(V・5区)	52
第 36 図	I区 10号住居跡	54
第 37 図	I区 10号住居跡出土遺物(1)	55
第 38 図	I区 10号住居跡出土遺物(2)	56
第 39 図	I区 12号住居跡	57
第 40 図	Ⅱ区 8号住居跡	58
第 41 図	Ⅱ区 8号住居跡出土遺物(1)	59
第 42 図	Ⅱ区 8号住居跡出土遺物(2)	60
第 43 図	Ⅱ区 8号住居跡出土遺物(3)	61
第 44 図	Ⅱ区 8号住居跡出土遺物(4)	62
第 45 図	Ⅱ区 8号住居跡出土遺物(5)	63
第 46 図	Ⅱ・2区 11号住居跡	64
第 47 図	Ⅱ・2区 11号住居跡出土遺物(1)	65
第 48 図	Ⅱ・2区 11号住居跡出土遺物(2)	66
第 49 図	Ⅱ区 13号住居跡(1)	66
第 50 図	Ⅱ区 13号住居跡(2)	67
第 51 図	Ⅱ区 13号住居跡出土遺物(1)	68
第 52 図	Ⅱ区 13号住居跡出土遺物(2)	69
第 53 図	Ⅱ区 13号住居跡出土遺物(3)	70
第 54 図	Ⅱ区 14号住居跡および出土遺物	71
第 55 図	2区 34号住居跡炉	72
第 56 図	2区 34号住居跡	73
第 57 図	2区 34号住居跡出土遺物(1)	74
第 58 図	2区 34号住居跡出土遺物(2)	75
第 59 図	2区 34号住居跡出土遺物(3)	76
第 60 図	2区 35号住居跡	77
第 61 図	2区 35号住居跡出土遺物(1)	78
第 62 図	2区 35号住居跡出土遺物(2)	79
第 63 図	2区 36号住居跡(1)	80
第 64 図	2区 36号住居跡(2)	81
第 65 図	2区 36・39号住居跡遺物出土状況	82
第 66 図	2区 36号住居跡出土遺物(1)	83
第 67 図	2区 36号住居跡出土遺物(2)	84
第 68 図	2区 36号住居跡出土遺物(3)	85
第 69 図	2区 36号住居跡出土遺物(4)	86
第 70 図	2区 36号住居跡出土遺物(5)	87
第 71 図	2区 39号住居跡	88
第 72 図	2区 39号住居跡出土遺物	89
第 73 図	2区 37号住居跡出土遺物	90
第 74 図	2区 37号住居跡	91
第 75 図	2区 38号住居跡	92
第 76 図	2区 38号住居跡出土遺物(1)	93
第 77 図	2区 38号住居跡出土遺物(2)	94
第 78 図	2区 40号住居跡	95
第 79 図	2区 40号住居跡出土遺物	96
第 80 図	2区 41号住居跡	97
第 81 図	2区 41号住居跡遺物出土状況	98

第 82 图	2 区 41 号住居跡出土遺物 (1)	99	第 136 图	縄文時代土坑 4 区・5 区 (1)	154
第 83 图	2 区 41 号住居跡出土遺物 (2)	100	第 137 图	縄文時代土坑 5 区 (2)	155
第 84 图	2 区 42 号住居跡	101	第 138 图	縄文時代土坑 5 区 (3)	156
第 85 图	2 区 42 号住居跡出土遺物	102	第 139 图	縄文時代土坑 5 区 (4)	157
第 86 图	2 区 43 号住居跡出土遺物 (1)	103	第 140 图	縄文時代土坑 5 区 (5)	158
第 87 图	2 区 43 号住居跡出土遺物 (2)	104	第 141 图	縄文時代土坑 5 区 (6)	159
第 88 图	2 区 43 号住居跡	105	第 142 图	縄文時代土坑 5 区 (7)	160
第 89 图	IV 区 1 号住居跡	107	第 143 图	縄文時代土坑 5 区 (8)・V 区 (1)	161
第 90 图	IV 区 1 号住居跡、1 号土器集中遺物出土状況	108	第 144 图	縄文時代土坑 V 区 (2)	162
第 91 图	IV 区 1 号住居跡出土遺物 (1)	109	第 145 图	縄文時代土坑 V 区 (3)	163
第 92 图	IV 区 1 号住居跡出土遺物 (2)	110	第 146 图	縄文時代土坑 V 区 (4)	164
第 93 图	IV 区 1 号住居跡出土遺物 (3)	111	第 147 图	縄文時代土坑 V 区 (5)	165
第 94 图	IV 区 1 号住居跡出土遺物 (4)	112	第 148 图	縄文時代土坑 V 区 (6)	166
第 95 图	IV 区 1 号住居跡出土遺物 (5)、1 号土器集中	113	第 149 图	縄文時代土坑 V 区 (7)	167
第 96 图	5 区 1 号住居跡 (1)	114	第 150 图	縄文時代土坑出土遺物 (1)	168
第 97 图	5 区 1 号住居跡 (2)	115	第 151 图	縄文時代土坑出土遺物 (2)	169
第 98 图	5 区 1 号住居跡出土遺物 (1)	116	第 152 图	縄文時代土坑出土遺物 (3)	170
第 99 图	5 区 1 号住居跡出土遺物 (2)	117	第 153 图	縄文時代土坑出土遺物 (4)	171
第 100 图	5 区 1 号住居跡出土遺物 (3)	118	第 154 图	縄文時代土坑出土遺物 (5)	172
第 101 图	5 区 1 号住居跡出土遺物 (4)	119	第 155 图	縄文時代土坑出土遺物 (6)	173
第 102 图	5 区 1 号住居跡出土遺物 (5)	120	第 156 图	縄文時代土坑出土遺物 (7)	174
第 103 图	5 区 1 号住居跡出土遺物 (6)	121	第 157 图	縄文時代土坑出土遺物 (8)	175
第 104 图	5 区 2 号住居跡	122	第 158 图	縄文時代土坑出土遺物 (9)	176
第 105 图	5 区 2 号住居跡出土遺物 (1)	123	第 159 图	縄文時代土坑出土遺物 (10)	177
第 106 图	5 区 2 号住居跡出土遺物 (2)	124	第 160 图	縄文時代土坑出土遺物 (11)	178
第 107 图	5 区 1 号掘立柱建物跡	125	第 161 图	縄文時代土坑出土遺物 (12)	179
第 108 图	5 区 2 号掘立柱建物跡	126	第 162 图	縄文時代土坑 (13)、III 区土器集中出土遺物	180
第 109 图	V 区 3 号掘立柱建物跡 (1)	127	第 163 图	I 区 1 号河道、II 区 1 号河道出土遺物 (1)	181
第 110 图	V 区 3 号掘立柱建物跡 (2)	128	第 164 图	II 区 1 号河道出土遺物 (2)	182
第 111 图	I 区 5 号配石	129	第 165 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (1)	183
第 112 图	I 区 5 号配石出土遺物	129	第 166 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (2)	184
第 113 图	4 区 1 号配石	130	第 167 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (3)	185
第 114 图	4 区 1 号配石出土遺物	131	第 168 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (4)	186
第 115 图	埋壘出土状況	132	第 169 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (5)	187
第 116 图	埋壘出土遺物	133	第 170 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (6)	188
第 117 图	V 区 1 号屋外炉	134	第 171 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (7)	189
第 118 图	縄文時代土坑 I 区 (1)	136	第 172 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (8)	190
第 119 图	縄文時代土坑 I 区 (2)	137	第 173 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (9)・I 区 (1)	191
第 120 图	縄文時代土坑 I 区 (3)・I 区 (1)	138	第 174 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (2)	192
第 121 图	縄文時代土坑 I 区 (2)・II 区 (1)	139	第 175 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (3)	193
第 122 图	縄文時代土坑 2 区 (1)	140	第 176 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (4)	194
第 123 图	縄文時代土坑 2 区 (2)	141	第 177 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (5)	195
第 124 图	縄文時代土坑 2 区 (3)	142	第 178 图	縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (6)	196
第 125 图	縄文時代土坑 2 区 (4)	143	第 179 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (1)	197
第 126 图	縄文時代土坑 2 区 (5)	144	第 180 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (2)	198
第 127 图	縄文時代土坑 2 区 (6)	145	第 181 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (3)	199
第 128 图	縄文時代土坑 2 区 (7)	146	第 182 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (4)	200
第 129 图	縄文時代土坑 2 区 (8)・II 区 (2)	147	第 183 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (5)	201
第 130 图	縄文時代土坑 II 区 (3)	148	第 184 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (6)	202
第 131 图	縄文時代土坑 II 区 (4)	149	第 185 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (7)	203
第 132 图	縄文時代土坑 II 区 (5)	150	第 186 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (8)	204
第 133 图	縄文時代土坑 II 区 (6)	151	第 187 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (9)	205
第 134 图	縄文時代土坑 II 区 (7)・3 区 (1)	152	第 188 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (10)	206
第 135 图	縄文時代土坑 3 区 (2)・III 区	153	第 189 图	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (11)	207

第 190 図	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (13) ……	208	第 243 図	縄文時代遺構外出土遺物 (79) 石器 ……	261
第 191 図	縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (14)・2 区 (1) ……	209	第 244 図	縄文時代遺構外出土遺物 (80) 石器 ……	262
第 192 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (2) ……	210	第 245 図	縄文時代遺構外出土遺物 (81) 石器 ……	263
第 193 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (3) ……	211	第 246 図	縄文時代遺構外出土遺物 (82) 石器 ……	264
第 194 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (4) ……	212	第 247 図	V 区 3 号住居跡 ……	265
第 195 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (5) ……	213	第 248 図	V 区 3 号住居跡出土遺物 ……	266
第 196 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (6) ……	214	第 249 図	V 区 1 号鉄滓散布地 (1) ……	268
第 197 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (7) ……	215	第 250 図	V 区 1 号鉄滓散布地 (2) ……	269
第 198 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (8) ……	216	第 251 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土遺物再結合滓出土状況 ……	269
第 199 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (9) ……	217	第 252 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物構成図 (1) ……	270
第 200 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (10) ……	218	第 253 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物構成図 (2) ……	271
第 201 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (11) ……	219	第 254 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物構成図 (3) ……	272
第 202 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (12) ……	220	第 255 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物 (1) ……	273
第 203 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (13) ……	221	第 256 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物 (2) ……	274
第 204 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (14) ……	222	第 257 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物 (3) ……	275
第 205 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (15) ……	223	第 258 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物 (4) ……	276
第 206 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (16) ……	224	第 259 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物 (5) ……	277
第 207 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (17) ……	225	第 260 図	V 区 1 号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物 (6) ……	278
第 208 図	縄文時代遺構外出土遺物 2 区 (18) ……	226	第 261 図	I・1 区第 1 面水田・晶全体図 ……	288
第 209 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (1) ……	227	第 262 図	I 区 1 号畠 ……	289
第 210 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (2) ……	228	第 263 図	I 区 1 号河道 (1) ……	290
第 211 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (3) ……	229	第 264 図	I 区 1 号河道 (2) ……	291
第 212 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (4) ……	230	第 265 図	I 区古代溝 ……	292
第 213 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (5) ……	231	第 266 図	I・1 区 As-B 層下面全体図 ……	294
第 214 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (6) ……	232	第 267 図	I・1 区、II・2 区古代溝 (1) ……	295
第 215 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (7) ……	233	第 268 図	I・1 区、II・2 区古代溝 (2) ……	296
第 216 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (8) ……	234	第 269 図	I・1 区、II・2 区古代溝 (3) ……	297
第 217 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (9) ……	235	第 270 図	II・2 区 As-B 層下面全体図 ……	298
第 218 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (10) ……	236	第 271 図	III・3 区 As-B 層下面全体図 ……	299
第 219 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (11) ……	237	第 272 図	III・3 区古代溝 (1) ……	300
第 220 図	縄文時代遺構外出土遺物 III 区 (12)・3 区 (1) ……	238	第 273 図	III・3 区古代溝 (2) ……	301
第 221 図	縄文時代遺構外出土遺物 3 区 (2) ……	239	第 274 図	III・3 区古代溝 (3) ……	302
第 222 図	縄文時代遺構外出土遺物 3 区 (3) ……	240	第 275 図	IV・4 区古代面全体図 ……	303
第 223 図	縄文時代遺構外出土遺物 3 区 (4) ……	241	第 276 図	IV・4 区古代溝 (1) ……	304
第 224 図	縄文時代遺構外出土遺物 3 区 (5) ……	242	第 277 図	IV・4 区古代溝 (2) ……	305
第 225 図	縄文時代遺構外出土遺物 IV 区 (1) ……	243	第 278 図	IV・4 区古代溝 (3) ……	306
第 226 図	縄文時代遺構外出土遺物 IV 区 (2) ……	244	第 279 図	V・5 区古代面全体図 ……	307
第 227 図	縄文時代遺構外出土遺物 IV 区 (3) ……	245	第 280 図	V・5 区古代溝 (1) ……	308
第 228 図	縄文時代遺構外出土遺物 4 区 (1) ……	246	第 281 図	V・5 区古代溝 (2) ……	309
第 229 図	縄文時代遺構外出土遺物 4 区 (2)・V 区 (1) ……	247	第 282 図	V・5 区古代溝 (3) ……	310
第 230 図	縄文時代遺構外出土遺物 V 区 (2) ……	248	第 283 図	V・5 区古代溝 (4) ……	311
第 231 図	縄文時代遺構外出土遺物 V 区 (3)・5 区 (1) ……	249	第 284 図	4 区 1 号土坑 ……	311
第 232 図	縄文時代遺構外出土遺物 V 区 (2) ……	250	第 285 図	古代出土遺物 ……	312
第 233 図	縄文時代遺構外出土遺物 V 区 (3) ……	251	第 286 図	I・1 区第 3 面水田全体図 ……	314
第 234 図	縄文時代遺構外出土遺物 (70) 把手類 ……	252	第 287 図	I・1 区中近世溝 (1) ……	315
第 235 図	縄文時代遺構外出土遺物 (71) 把手類 ……	253	第 288 図	I・1 区中近世溝 (2) ……	316
第 236 図	縄文時代遺構外出土遺物 (72) 把手類 ……	254	第 289 図	I・1 区 (3)、II 区中近世溝 ……	317
第 237 図	縄文時代遺構外出土遺物 (73) 把手類 ……	255	第 290 図	I・1 区中近世溝 (4) ……	318
第 238 図	縄文時代遺構外出土遺物 (74) 土製品・土製円板 ……	256	第 291 図	I・1 区中近世溝 (5) ……	319
第 239 図	縄文時代遺構外出土遺物 (75) 石器 ……	257	第 292 図	IV・4 区中近世面全体図 ……	320
第 240 図	縄文時代遺構外出土遺物 (76) 石器 ……	258	第 293 図	IV・4 区中近世溝 (1) ……	321
第 241 図	縄文時代遺構外出土遺物 (77) 石器 ……	259	第 294 図	IV・4 区中近世溝 (2) ……	322
第 242 図	縄文時代遺構外出土遺物 (78) 石器 ……	260	第 295 図	V・5 区中近世面全体図 ……	323
			第 296 図	V・5 区中近世溝 (1) ……	324

第 297 図	V・5 区中近世溝 (2) ……………	325
第 298 図	V・5 区中近世溝 (3) ……………	326
第 299 図	V・5 区中近世溝 (4) ……………	327
第 300 図	V・5 区中近世溝 (5) ……………	328
第 301 図	V・5 区中近世溝 (6) ……………	329
第 302 図	V・5 区中近世溝 (7) ……………	330
第 303 図	V・5 区中近世溝 (8) ……………	331
第 304 図	中近世土坑 (1) ……………	332
第 305 図	中近世土坑 (2) ……………	333
第 306 図	II・2 区 1 号河道 (1) ……………	334
第 307 図	II・2 区 1 号河道 (2) ……………	335
第 308 図	III・3 区河道 ……………	336
第 309 図	中近世出土遺物 (1) ……………	337
第 310 図	中近世出土遺物 (2) ……………	338
第 311 図	下元屋敷遺跡・根性坊遺跡概略図 ……………	396
第 312 図	下元屋敷遺跡製鉄関連遺物比率 ……………	397
第 313 図	横沢新屋敷遺跡炭窯 ……………	397
第 314 図	下田遺跡製鉄関連遺物比率 ……………	401
第 315 図	周辺の製鉄関連遺跡 ……………	402

PL 28	2 区 36 号住居跡 (2)
PL 29	2 区 37・42 号住居跡
PL 30	2 区 38 号住居跡
PL 31	2 区 39 号住居跡
PL 32	2 区 40 号住居跡、2 区縄文面全景 (2)
PL 33	2 区 41 号住居跡
PL 34	2 区 43 号住居跡
PL 35	IV 区 1 号住居跡
PL 36	5 区 1 号住居跡 (1)
PL 37	5 区 1 号住居跡 (2)
PL 38	5 区 2 号住居跡
PL 39	V 区 3 号住居跡 (1)
PL 40	V 区 3 号住居跡 (2)、掘立柱建物跡
PL 41	1 区 5 号・4 区 1 号配石、1 区河道際遺物出土状況
PL 42	2 区 20・21 号埋壘
PL 43	III 区 1～3 号埋壘
PL 44	5 区 1 号埋壘、V 区 1 号屋外炉
PL 45	1 区 1 号～39 号土坑
PL 46	1 区 38～122 号土坑
PL 47	1 区 123～130 号土坑
PL 48	1 区 131 号、II 区 325～340 号土坑
PL 49	II 区 341～377 号土坑
PL 50	II 区 378～437 号土坑
PL 51	II 区 438～536 号土坑、2 区 750～754 号土坑
PL 52	2 区 755～770 号土坑
PL 53	2 区 771～782 号土坑
PL 54	2 区 782～792 号土坑
PL 55	2 区 795～807 号土坑
PL 56	2 区 808～819 号土坑
PL 57	2 区 820～841 号土坑
PL 58	2 区 842～851 号、III・3 区 2～5 号土坑
PL 59	3 区 9～16 号、4 区 1～3 号土坑
PL 60	4 区 4～8 号、IV 区 9～10 号、5 区 1～4 号土坑
PL 61	5 区 5～20 号土坑
PL 62	5 区 21～42 号土坑
PL 63	5 区 45～62 号土坑
PL 64	5 区 63～77 号土坑
PL 65	5 区 78～93 号土坑
PL 66	5 区 94～108 号土坑
PL 67	5 区 109～122 号土坑
PL 68	5 区 123～125 号、V 区 126～141 号土坑
PL 69	V 区 142～153 号土坑
PL 70	V 区 152～161 号土坑
PL 71	V 区 162～175 号土坑
PL 72	V 区 176～186 号土坑
PL 73	V 区 187～199 号土坑
PL 74	V 区 201～222 号土坑
PL 75	1 区古代洪水層下水田・畠跡全景
PL 76	1 区古代洪水層下水田 (1)
PL 77	1 区古代洪水層下水田 (2)
PL 78	1 区河道土層断面、1 区古代洪水層下水田 (3)
PL 79	1 区古代洪水層下水田畠跡
PL 80	1 区 As-B 層下面全景
PL 81	1・II・2 区 As-B 層下面

写真図版目次

【下元屋敷遺跡】

PL 1	遺跡周辺風景
PL 2	遺跡周辺風景、旧石器試掘、耕作痕
PL 3	II 区 2・3・6・7 号炭窯、II 区 2 号炭窯
PL 4	II 区 3 号炭窯
PL 5	II 区 6 号炭窯
PL 6	II 区 7 号炭窯・8 号炭窯
PL 7	II 区 8 号炭窯、II 区土坑型炭窯
PL 8	2 区土坑型炭窯、1 区土坑、II・2 区土坑
PL 9	2 区土坑、III 区土坑
PL 10	III 区土坑、2・III 区井戸
PL 11	II・2 区 1～3 号溝
PL 12	縄文時代出土遺物
PL 13	II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (1)
PL 14	II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (2)
PL 15	II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (3)
PL 16	II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (4)
PL 17	古代、中近世出土遺物

【下田遺跡】

PL 18	遺跡遠景・全景
PL 19	遺跡周辺風景
PL 20	1 区 10 号住居跡
PL 21	1 区 12 号・II 区 10 号・2 区 11 号住居跡
PL 22	II 区 8 号住居跡
PL 23	II 区 13・14 号住居跡
PL 24	2 区縄文面全景、2 区 34 号住居跡
PL 25	2 区 34 号住居跡
PL 26	2 区 35 号住居跡
PL 27	2 区 36 号住居跡 (1)

PL 82	Ⅲ・3・Ⅳ区 As-B 層下面	PL136	遺構外出土遺物(縄文時代)	I 区
PL 83	Ⅳ・4・Ⅴ・5 区 As-B 層下面	PL137	遺構外出土遺物(縄文時代)	I 区
PL 84	I 区近世水田全景	PL138	遺構外出土遺物(縄文時代)	I 区
PL 85	I 区1号河道、I 区1・2号河道、Ⅱ・2区河道群(1)	PL139	遺構外出土遺物(縄文時代)	I・I 区
PL 86	Ⅱ・2区河道群(2)、Ⅲ・3区河道群	PL140	遺構外出土遺物(縄文時代)	I 区
PL 87	Ⅱ・3区河道群、5区噴砂検出状況	PL141	遺構外出土遺物(縄文時代)	I 区
PL 88	I・1区、Ⅱ・2区土層断面	PL142	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 89	Ⅳ・4区、Ⅴ・5区土層断面	PL143	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 90	I 区1~12号溝	PL144	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 91	I 区13~17・31号溝	PL145	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 92	I 区18~27号溝	PL146	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 93	I 区27~30号溝	PL147	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 94	2区3~5号溝、Ⅲ・3区1号溝	PL148	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅱ区
PL 95	Ⅲ区2~5号溝	PL149	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL 96	Ⅲ・3区5~8・10号溝、4区1・2号溝	PL150	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL 97	Ⅳ・4区3~9・20号溝	PL151	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL 98	Ⅳ・4区10~18・21号溝	PL152	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL 99	Ⅴ・5区1~9・21号溝	PL153	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL100	Ⅴ・5区5~10・16・17号溝	PL154	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL101	Ⅴ・5区11~15・17~19号溝	PL155	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL102	Ⅴ・5区20・21号溝	PL156	遺構外出土遺物(縄文時代)	2区
PL103	Ⅴ・5区20~27・61・62・65・67号溝	PL157	遺構外出土遺物(縄文時代)	2・Ⅲ区
PL104	Ⅴ区3・8・9・34・35・37・38・40~48・76号溝	PL158	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅲ区
PL105	Ⅴ区1・3・21・37・40~45・57・76号溝	PL159	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅲ区
PL106	Ⅴ区17・19・58・59号溝、Ⅴ区鉄滓散布地	PL160	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅲ区
PL107	旧石器時代出土遺物	PL161	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅲ区
PL108	I 区10号住居跡出土遺物	PL162	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅲ区
PL109	I 区10号住居跡、Ⅱ区8号住居跡出土遺物	PL163	遺構外出土遺物(縄文時代)	3区
PL110	Ⅱ区8号住居跡出土遺物	PL164	遺構外出土遺物(縄文時代)	3区
PL111	Ⅱ区8号住居跡、Ⅱ・2区11号住居跡出土遺物	PL165	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅳ区
PL112	Ⅱ区13号住居跡出土遺物	PL166	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅳ・4区
PL113	Ⅱ区14号・2区34号住居跡出土遺物	PL167	遺構外出土遺物(縄文時代)	Ⅴ・5区
PL114	2区34号・2区35号住居跡出土遺物	PL168	遺構外出土遺物(縄文時代)	5区
PL115	2区36号住居跡出土遺物	PL169	遺構外出土遺物(縄文時代)	把手類
PL116	2区36号住居跡出土遺物	PL170	遺構外出土遺物(縄文時代)	把手類
PL117	2区36号・37号・38号住居跡出土遺物	PL171	遺構外出土遺物(縄文時代)	土偶・耳飾・土製円板
PL118	2区38号・39号・40号住居跡出土遺物	PL172	遺構外出土遺物(縄文時代)	石器
PL119	2区41号・42号住居跡出土遺物	PL173	遺構外出土遺物(縄文時代)	石器
PL120	2区42号・43号住居跡出土遺物	PL174	遺構外出土遺物(縄文時代)	石器
PL121	2区43号住居跡、Ⅳ区1号住居跡出土遺物	PL175	Ⅴ区3号住居跡、古代出土遺物	
PL122	Ⅳ区1号住居跡、Ⅳ区1号土器集中出土遺物	PL176	Ⅴ区1号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物(1)	
PL123	5区1号住居跡出土遺物	PL177	Ⅴ区1号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物(2)	
PL124	5区1号住居跡出土遺物	PL178	Ⅴ区1号鉄滓散布地出土製鉄関連遺物(3)	
PL125	5区1号・2号住居跡出土遺物	PL179	中近世出土遺物	
PL126	5区2号住居跡出土遺物	PL180	古銭	
PL127	I 区5号・4区1号配石、埋甕出土遺物			
PL128	I・1区土坑出土遺物			
PL129	I 区、Ⅱ区土坑出土遺物			
PL130	Ⅱ・2区土坑出土遺物			
PL131	2区土坑出土遺物			
PL132	2・3・5区土坑出土遺物			
PL133	5・Ⅴ区土坑出土遺物			
PL134	Ⅲ区土器集中・河道出土遺物(縄文時代)			
PL135	遺構外出土遺物(縄文時代)			I 区

第1章 調査に至る経緯と調査の概要

第1節 調査に至る経緯

北関東自動車道（高崎水戸線のうち）の計画は、高崎・伊勢崎間 14.9km の現地調査を終了し、伊勢崎・群馬栃木県境間 17.7km について発掘調査が開始されたのは平成 12 年度である。伊勢崎から岩舟間の建設事業に先立ち、埋蔵文化財発掘調査が行われるまでには、平成 8 年道路公団高崎工事事務所より伊勢崎以東の埋蔵文化財分布状況の問い合わせに応じ、計画路線周辺の各市町の遺跡分布図を提示した。群馬県教育委員会は埋蔵文化財分布状況の詳細確認を行うため、沿線の伊勢崎市・佐波郡東村・新田郡藪塚本町・太田市の 2 市 1 町 1 村に協力要請を行い遺跡の確認作業に入った。伊勢崎 - 県境間の建設に伴い計画路線に関わる埋蔵文化財発掘調査について、群馬県教育委員会スポーツ文化部文化財保護課、県土木部道路建設課高速道路対策室、日本道路公団と協議した結果、本線部分の発掘調査及び側道部分で県道についての発掘調査は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。平成 12 年 8 月から伊勢崎 - 県境間の現地調査は開始されることとなり、当面、伊勢崎市と東村地区から調査を進めるよう計画が提示された。

平成 13 年度から調査が計画された下元屋敷遺跡と下田遺跡については、平成 12 年度に調査対象遺跡範囲確認調査により、前者はローム台地にあり、縄文時代の遺物包含層が存在することと平安時代の土器片が表土面に散布していた。後者は全域が低湿地であり、ほぼ全域で浅間 B 降下軽石層が確認できた。軽石層下からは水田跡が確認できた。遺物包含層からは縄文時代～平安時代にかけての土器が出土することから集落が存在する可能性が指摘され、全面調査としての計画が提示された。

下元屋敷遺跡・下田遺跡は伊勢崎市田部井町（旧佐波郡東村大字田部井地区）に所在する。本線部分の調査とほぼ同時期に県側道である、一般県道境大間々線（北関東道側道）緊急地方道路整備 A 事業

と一般県道境大間々線地方特定道路整備事業が同時に計画された。当地区は早川橋梁建設を優先させる計画があり、早川右岸にあたる下元屋敷遺跡と左岸に位置する下田遺跡を併行して調査を進めることとなった。このため、遺跡地を現有道路や水路で地区区分して、交通安全対策や湧水対策を念頭に置き、調査の効率化・経費の削減・安全対策等勘案し、用地の引渡しを受けた調査対象地は本線と側道が同時に調査を進めることができるよう各機関に協力を求めた。その結果、基本的には進捗を図るために、各機関で協力することで承諾を得ることができた。これにより結果として湧水対策や残土を近接地で効果的に処理できた。また、交通対策についても一部迂回路を設定することにより、順調に調査は進行した。本線と側道の調査範囲を広く確保でき、同一遺構を一回で調査できたことにより、合理的に調査記録もとることができ計画的に発掘調査を終了させることができた。発掘調査期間の設定については、群馬県教育委員会の調整により、日本道路公団東京建設局高崎工事事務所・群馬県土木部道路建設課・伊勢崎土木事務所・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が協議をし、用地収去、工事工程等との関係においてロスが少ない調整を行い、発掘調査に着手することとした。遺跡地には未収去地もあり、協議を継続していく中で、用地の立ち入りが許可された段階で発掘区を拡大し調査を行うこととした。

調査を行った下元屋敷遺跡の本線部分は平成 13 年度と 15 年度、側道部分は平成 13 年度に調査を実施した。下田遺跡は広大な遺跡であり、発掘調査班を時には複数班投入し、本線・側道とも 13 年度から 15 年度に渡り調査を実施した。

報告書作成についても、資料として使い易くすることを目標に効率的な整理期間と経費削減を考慮した計画立案し、関係機関と協議し、承諾を得て事業実施を行ってきた。

第2節 調査の概要

第1項 発掘調査の方法

(1) 調査の方針

下元屋敷遺跡では、Ⅱ区北東の調査を先行し、その結果をⅢ区・側道部分の調査に反映させた。

下田遺跡では事前の試掘調査により、当初遺跡が予想されなかった西半の低地部分に、縄文時代の遺構・遺物の分布が確認された。同時に、As-B層の堆積がほぼ全域におよぶことが判明し、水田遺構の存在が予想された。これにより、複数面の調査面を想定した調査体制を整えた。

(2) 調査区およびグリッドの設定

下元屋敷遺跡の調査区は、南北方向の生活道により3分割されている。そこで、各調査区を西から北関東自動車道部分はⅠ～Ⅲ区、(一)香林羽黒線部分はⅠ～Ⅲ区とした。

下田遺跡周辺は、昭和50年代の圃場整備を受けた水田地帯となっている。東西に延びる北関東自動車道の路線は、概ね100mごとに南北方向の生活道や用排水路によって分断されているため、各区画を調査単位(調査区)とし、西から東方向に北関東自動車道部分はⅠ～Ⅴ区、(一)香林羽黒線部分はⅠ～Ⅴ区とした。

なお、グリッドは両遺跡ともに日本平面直角座標(国家座標)を使用した。(日本測地系)

(3) 具体的な調査記録の方法

① 遺跡略号・遺構名・遺物番号

ア 遺跡の略号は下元屋敷遺跡「KT410」、下田遺跡「KT420」である。

イ 遺物の取り上げは、遺構・層位を基本単位とした。遺物には遺跡略号と遺構名・層位・遺物取り上げ番号等を記入した。

② 記録の方法

ア 遺構実測図

遺構の測量は地上測量(手実測、デジタル測量)を主体に、一部空中写真測量を併用した。

縮尺は、遺構の規模・性格等に応じて、1/10、1/20、1/40を基本とした。実測図には通番を付し台帳を作成した。

イ 遺構写真撮影

写真撮影には、中型カメラ・小型カメラを使用し、モノクロフィルムとリバーサルフィルムによる記録を行った。フィルムにはコマごとに通番を付し台帳を作成した。

③ 自然科学分析

調査方針の明確化および、調査結果を補完するために各種の自然科学分析を実施した。分析結果については、検討の上、文章中および附篇に記載する。



第2図 調査区およびグリッド設定図

第2項 発掘調査の経過

(1) 下元屋敷遺跡

下元屋敷遺跡は、平成13年度に北関東自動車道関連の調査から開始された。夏季の水田の漏水対策による中断を経て、調査は平成14年1月末日まで行われた。また、平成15年度にはI区の試掘調査を実施したが、遺構は確認されなかった。香林羽黒線関連は、平成14年1月で現地調査を終えた。

①北関東自動車道関連調査日誌抄録
(平成13年度)

- 4月 2日 III区から調査を開始。表土掘削。
- 4月 9日 III区遺構確認。土坑等検出。
- 5月 6日 III区旧石器試掘調査継続。土層断面記録。
- 6月 18日 III区で地下式炭窯と考えられる遺構確認。複数の炭窯の重複が想定される。土坑型の伏窯も確認。
- 6月 20日 III区3号炭窯、土層断面記録。複数回の作業の痕跡確認。2号炭窯調査継続。

- 7月 4日 III区2号炭窯全景写真。
- 7月 6日 III区3号炭窯全景写真、記録化。
- 7月 23日 III区6号炭窯全景写真。1面下部の被熱顕著。
- 7月 30日 III区7号炭窯全景写真、記録化。(8・9月は、調査中断)
- 10月 1日 調査再開
- 1月 9日 II・2区北半部、遺構調査継続。8号炭窯調査。
- 1月 24日 II区8号炭窯全景写真。記録化。
- 1月 29日 II区調査終了。埋め戻し。

(平成15年度)

- 平成15年 5月 1日 I区試掘調査。遺構検出されず。

②香林羽黒線関連調査日誌抄録
(平成13年度)

- 平成14年 1月 4日 調査準備。
- 1月 7日 I区表土掘削開始。
- 1月 9日 2区8号炭窯調査開始。旧石器試掘調査。遺構確認。
- 1月 11日 強風により調査難航。
- 1月 16日 2区1号井戸調査。伏窯タイプの炭窯3基確認。
- 1月 17日 I区遺構確認作業。
- 1月 29日 I・2区調査終了。撤収準備。基礎整理継続。

	平成13年度					平成14年度					平成15年度		備考	
	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7				
I区														試掘調査
II区														
III区														2分割調査
I区														試掘調査 (西半分)
2区														
3区														試掘調査

表1 下元屋敷遺跡発掘調査工程表

(2) 下田遺跡

下田遺跡の調査は、平成13年4月1日に北関東自動車道建設関連のII区から開始された。その後は、事業計画や用地買収状況等の調整を経ながら、最終地点の県道香林羽黒線関連の2区の調査を平成15年7月31日に終了した。

①北関東自動車道関連調査抄録
(平成13年度)

- 4月 2日 II区南半部(II-1区)から調査開始。表土掘削。
- 4月 18日 II-2区As-B下面写真撮影。近世の溝検出。
- 4月 23日 II-2区縄文時代遺物包含層調査。
- 5月 22日 II-2区土坑多数検出。基本土層確認。
- 6月 5日 II-2区南部で集石遺構確認、記録化。
- 6月 8日 II-2区1号炉(石囲炉)調査。
- 6月 12日 II-2区1号住居跡調査。土坑、埋蓮の調査。
- 7月 4日 II-2区3号住居跡調査。柱穴間に小礫がめぐる。
- 7月 5日 II-2区10~14号配石調査。
- 7月 23日 II-1区調査開始。土坑群検出。
- 8月1日~9月30日 水田地帯を寸断する調査のため、掘削に伴う水田

- の漏水を懸念し調査を中断(塚下遺跡に合流)。
- 10月 1日 調査再開。縄文時代遺構調査継続。
- 11月 19日 II区湧水対策溝内に油の浮遊を確認。東村教育委員会・保健所等を交えた立ち会い調査。
- 11月 9日 II-1区6号住居跡調査。敷石を伴う柄鏡型住居。
- 11月 13日 II-1区1号河道調査。複数の河道の重複を確認。
- 11月 29日 II-1区3号配石下部で埋設土器を有する土坑検出。
- 12月 20日 縄文下面確認調査、遺物包含層の遺物収納。
- 1月 22日 縄文下面の遺構群調査。土坑多数検出される。
- 2月 1日 III区北半部調査開始。東半部で縄文遺物包含層確認。
- 2月 4日 III区西半部で、河道の一部を確認。
- 2月 20日 II-1区19号住居跡調査。柄鏡型敷石住居。
- 3月 1日 I区北半部の調査開始。圃場整備に伴う造成土下で、複数の溝確認。水田遺構の基盤面の可能性。
- 3月 5日 II-1区20号住居跡調査。敷石が長方形に分布。
- 3月 19日 I区As-B下面調査。

(平成14年度)

- 4月 5日 I区南半部の表土掘削開始。近世水田の痕跡なし。
- 4月 8日 I区でAs-B層の堆積を確認。土圧による確認面の変形が著しく水田関連施設は未確認。
- 4月 9日 II区における縄文時代集落の調査ほぼ終了。
- 4月 11日 I区で黄褐色洪水土に覆われた水田を確認。

4月24日 I区古代水田下面の調査実施。
 5月7日 III区南半部(III-2区)調査開始。掘削、杭打ち。
 5月8日 I区、縄文時代遺構調査開始。
 5月14日 I区で配石遺構検出。遺物包含層調査。
 6月11日 II区南東部調査実施。河道検出、トレンチ調査。
 6月17日 I区の重油流出地点周辺土壌中に油を確認。
 東村教育委員会・保健所の立ち会いのもと調査方針検討。
 6月24日 III区のAs-B下面調査、畦畔状のライン確認。
 7月1日 I区縄文時代面の調査継続。住居跡、配石検出。
 7月5日 III区、縄文時代遺物包含層調査。溝調査開始。
 7月11日 台風6号により調査区冠水。(7/15まで調査停止)
 7月23日 IV区の調査開始、表土掘削。
 8月27日 III区の調査終了。
 8月28日 IV区、As-B下面および溝群調査。
 8月30日 I区・II区間の道路下部の調査を開始
 9月9日 IV区1号住居跡、遺物包含層調査。
 10月2日 台風21号によりI区調査区冠水。
 10月16日 V区南半(V-II区)の調査開始、表土掘削。
 10月24日 寒川旭氏(地震考古学)来跡。
 10月26日 県遺跡巡回展(於東村公民館)の共催行事として、現地説明会実施(～10/27)。見学者500余名。
 11月19日 IV区調査終了。
 12月5日 V区南半、第1面全景写真。
 12月9日 降雪により調査休止(翌年1/23にも)。
 1月14日 V区南半第2面全景写真(3/18終了)。
 3月4日 強風のため室内作業(1月末以降、度々強風のため調査の休止が強いられる)。

(平成15年度)

4月21日 V区北半部(V-2区)調査開始。表土掘削。
 5月6日 V区As-B下面調査。畦畔の痕跡確認。
 5月9日 V区鉄滓散布地調査。鍛冶関連を想定。
 6月9日 V区野外炉検出。
 6月24日 V区3号掘立柱建物跡調査。旧石器試掘調査。

②香林羽黒線関連調査日誌抄録

(平成14年度)

4月4日 伊勢崎土木事務所立ち会い。
 4月5日 5区調査開始。表土掘削。
 4月9日 5区As-B混土上面遺構確認。4区表土掘削開始。
 4月23日 4区西半部調査。

4月25日 5区のAs-B下面調査。4/26写真撮影。
 5月7日 4区西端部の縄文時代遺物包含層調査開始。
 6月7日 5区で縄文時代遺構調査を開始。
 6月17日 4区で配石遺構を確認し、調査を行う。
 6月19日 4区で旧石器試掘調査を始める。
 7月10日 台風10号のため電柱倒壊(調査区冠水)。
 7月15日 4区調査終了。
 9月2日 5区、縄文下層面への遺構確認調査を開始。
 9月11日 5区、旧石器試掘調査開始。
 9月18日 寒川旭氏(地震考古学)、噴砂等の見学に来跡。
 9月24日 2・3区、工事用道路除去(JH)。
 10月2日 台風21号による冠水からの復旧作業。
 10月7日 3区、表土掘削。
 10月10日 2区東端部を試掘調査。河道確認。
 10月26日 遺跡現地説明会。見学者500余名と盛況。
 11月1日 5区調査終了。
 11月14日 1区表土掘削開始(3面調査となる)。
 11月15日 3区、縄文包含層調査(12/3終了)。
 12月3日 1区、自然科学分析のため土壌サンプリング。
 12月5日 1区古代洪水層下水田と畝確認(12/11空撮実施)。
 1月9日 1区で縄文時代遺構調査開始。配石検出。
 1月30日 1区先行調査範囲終了、引き渡し。
 2月24日 降雪により調査休止(2/27、3/4は強風のため休止)。
 2月28日 1区調査終了。
 3月1日 2区調査開始。As-B下面および東端の河道調査先行。
 3月4日 2区中央部、縄文包含層(上面)調査。
 3月6日 34号住居跡確認。第1次遺構確認面確定。

(平成15年度)

4月17日 2区調査再開。遺物包含層調査および遺構確認作業。
 4月22日 2区2面遺構確認作業。竪穴住居を想定。
 5月8日 2区3面遺構確認作業。
 5月19日 2区西端部の工事用道路付け替え工事。
 5月22日 2区工事用道路下面の調査を開始。
 6月26日 2区縄文調査継続。調査区北壁の崩落防止対策実施。
 7月8日 2区遺構最終調査。東側から埋め戻し開始。
 7月9日 遺構調査終了。埋め戻し(7月11日、引き渡し)。
 以後は、遺物・図面類等の基礎整理。撤収準備。

	平成13年度				平成14年度				平成15年度			備考
	4	7	10	1	4	7	10	1	4	7		
I区												2分割調査
II区												3分割調査
III区												2分割調査
IV区												2分割調査
V区												2分割調査
1区												
2区												3分割調査
3区												
4区												
5区												

表2 下田遺跡発掘調査工程表

第3項 整理業務の方針・方法

1 整理業務の方針

当事業団では、近年、整理業務において遺跡単位で部分的なデジタル編集を実施してきた。それらは一定の成果を上げてはきたが、問題点も見えてきた。そこで、平成16年度からデジタル化検討部会を設置し、発掘調査と整理業務を一体としてデジタル化について議論を重ねた。両事業を通じたデジタル化の目的は、

- ①業務の効率化とそれに伴う経費の節減
- ②情報公開に向けた記録保存資料の活用拡大
- ③多量に蓄積された情報のデータベース化等である。

2 整理業務の方法

(1) 下田遺跡・下元屋敷遺跡の実態

両遺跡の発掘調査段階では、当事業団としてのデジタル化の明確な指針はなかった。そのため平成13年度は、大部分がアナログ測量であった。平成14年度以降は、調査担当の方針でデジタル測量を実施するとともに、前年度の図面をデジタルトレースし、共通のデータ化(DWG)を図った。ただし、データの構築方法については十分な検討を経たものではなく、課題も残った。

なお、カラーリバーサルフィルムについては、全コマPhoto-CD化(16bit)を実施した。

(2) 整理の方法

分類、接合、復元等の通常の手作業後、図化等の段階からデジタル作業を行った。

A：図面編集

【遺構】

- ①デジタルデータ(DWG、アナログ図面のデジタルトレースを含む)を編集
- ②Adobe Illustrator(ver.10.3またはCS2)による編集 → EPSデータ化

【遺物】

- ①実測(手実測、三次元実測器、写真実測)
- ②拓本 採拓 → Adobe Photo Shop(CS2)による加工
- ③Adobe Illustrator(CS2)によるデジタルトレース → 拓本合成
(一部の遺物は手実測、手トレース → スキャニング → ラスター化を行った。)

B：写真編集

【遺構】

- ・Photo-CDの画像をAdobe Photo Shop(CS2)による編集 → Tiff形式

【遺物】

- ・写真撮影(デジタルカメラによる撮影) → Adobe Photo Shop(CS2)による編集

C：編集・版組

本文編・写真図版編はAdobe InDesign(CS2)により、編集組版を行った。

遺跡名	事業名	平成17年度					平成18年度						
		4	7	10	1	4	7	10	1				
下元屋敷遺跡	北関東自動車道	■											
	(一)香林羽黒線				■	■	■	■	■	■	■	■	■
下田遺跡	北関東自動車道		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	(次年度継続) ■
	(一)香林羽黒線				■	■	■	■	■	■	■	■	■

表3 整理業務工程表

第3節 遺跡の立地と環境

第1項 地理的環境

下田遺跡・下元屋敷遺跡は、伊勢崎市東部の田部井町（合併前は佐波郡東村大字田部井）に所在し、東へ1km程で太田市大久保町との市境に接する。

伊勢崎市は群馬県の南部、関東平野の北西に位置し、平成17年1月1日に旧伊勢崎市と佐波郡赤堀町・東村・境町が合併して市域が拡大した。その結果、南部と北部とで地形の違いがより顕著となった。南部は利根川や広瀬川に沿う広大な広瀬川低地帯で、大水田地帯となっている。一方、赤城山南麓や大間々扇状地となる北部は、北側の丘陵地から関東平野へ向かう舌状台地や微高地が多い。赤城山南麓に源を発する早川は、伊勢崎市東部の旧佐波郡3町村を直線的に流れ下り、利根川に合流する。

両遺跡は伊勢崎市北東部の大間々扇状地上に立地している。渡良瀬川によって形成されたこの扇状地は、標高約200mのみどり市大間々町付近を扇頂部とし、扇端部は約16km南下した標高60m付近まで延びる。西は粕川左岸の伊勢崎市街地付近から東は東武桐生線沿いに太田市街地の手前まで、幅約14kmに渡って巨大な扇形を形成する。

扇状地面は形成時期により新旧2面に分けられる。その境界の北半は笠懸町の鹿田山から南に向かう開析谷で、南半は旧東村中央部を南流する早川によって画される。第I面は西側の「桐原面」で、約5万年前、渡良瀬川が現在の早川以西を流れていた頃に形成された。その後渡良瀬川が東へ流路を変えていった約2万年前頃から形成されたのが第II面の「藪塚面」である。現在の渡良瀬川は藪塚面形成後さらに八王子丘陵の東に流路を変更した後の姿である。（第3図参照）

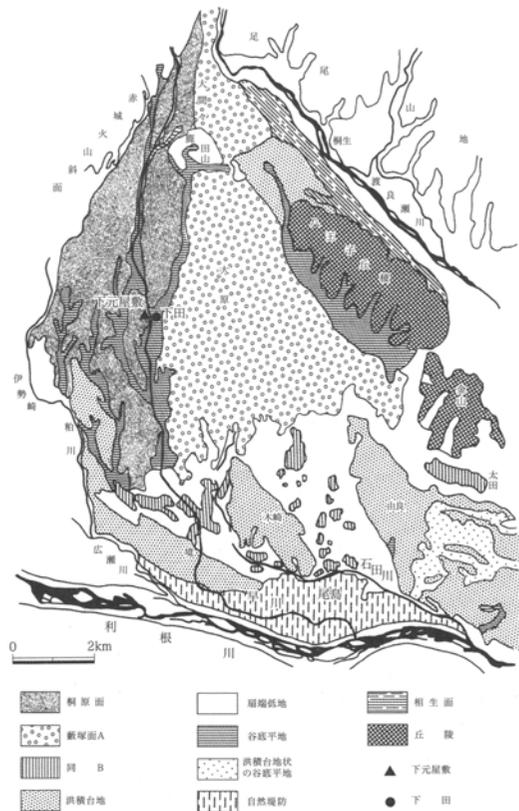
桐原面は、扇中央部の標高90m付近に「天ヶ池」や「男井戸」等の湧水点が最も多く、以下扇端部まで点々と分布する。現在はそれらを谷頭とした開析谷が樹枝状に発達し、早川の沖積低地も含めて低地帯には水田が広がり、台地上は住宅地や畑となって

いる。桐原面では旧石器時代以来、谷地縁辺を中心として遺跡が分布する。

一方、新しく形成された藪塚面は開析谷の形成が未発達で、扇端部の標高60m付近まで湧水点がない。乾燥したこの台地は「笠懸野」といわれ、現在でこそ水道や用水が整備されて住宅も農地も多く見られるものの、もともとは居住や農業に適さず、遺跡の分布も極めて疎らである。

下田遺跡は水田地帯となる早川左岸の低地上に占地し、調査地点はこの低地帯を東西に横断する形となる。旧地形は標高77m前後で全体的には平坦であるが、早川に接する調査区西側（I、II区）には小さな谷地が入り込み、若干標高が下がる。この谷地の縁辺に、縄文中期後半から後期にかけての住居跡が集中して検出された。

下元屋敷遺跡は下田遺跡とは早川を挟んで対岸に位置する。桐原面東端の台地上になるため、早川低地帯とは2mほどの比高差がある。この台地を掘り込んだ平安時代の炭窯が計11基検出された。



第3図 遺跡周辺の地形

第2項 歴史的環境

下田遺跡と下元屋敷遺跡は、ともに大間々扇状地の新旧面を画する早川沿いに位置する。前述したように、水を得にくい藪塚面の台地上では遺跡は極めて少数で、大間々扇状地上の遺跡のほとんどが早川低地帯や多くの谷地が形成される桐原面に分布している。ここでは旧東村域を中心に、桐原面東部と早川低地帯、藪塚面西部の遺跡の分布と歴史的環境について概観する。

旧石器時代 旧東村では、周辺で岩宿遺跡（みどり市笠懸町）や権現山遺跡（伊勢崎市豊城町）等の著名な遺跡があるにもかかわらず、村内の旧石器時代の遺跡はこれまで確認されていなかった。1980年代以降、上武道路や北関東自動車道建設等によって発掘調査が増加してくると、舞台遺跡や光仙房遺跡、書上遺跡(45)、天ヶ堤遺跡(46)、大上遺跡(47)、前道下遺跡(48)、塚下遺跡(49)、そして三和工業団地Ⅰ遺跡等、伊勢崎市三和町から上田町（旧東村上田）にかけて、涌水点に沿った谷地の縁辺で次々と発見されるようになってきた。いずれも始良丹沢火山灰（AT）より下層の約3～2.5万年前とされる遺跡であり、石材は在地の黒色安山岩等が多く、ナイフ形石器や石刃等の狩猟具が多いという特色を持つ。

縄文時代 縄文時代の遺跡も、桐原面に樹枝状に広がる開析谷や早川低地帯の縁辺の台地上を中心に数多く分布している。ただし草創期は少なく、三室坊主林遺跡(31)から押圧縄文系土器片2点と、道上遺跡(29)と曲沢遺跡(59)で当該期と思われる尖頭器が出土したのみで、遺構の検出はない。早期になると撚り糸文系土器を大量に出土した三室坊主林遺跡をはじめ、道上遺跡、中西原遺跡(40)、磯沼遺跡(73)など、遺跡数は若干増えてくる。しかし遺構は八寸大道上遺跡(36)で当該期の可能性を持つ集石遺構が検出されたのみで、住居跡は確認されていない。下田遺跡に近接する下大久保遺跡Ⅱ(5)では、早期と思われる自然流路が検出されている。

縄文時代前期の遺跡は各谷筋に分布し、特に諸磯

期を境に一段と増加していくが、八寸大道上遺跡以北の谷頭側に限定される。中でも天が池筋の大上遺跡(47)では諸磯b～c式期の遺構、遺物が多く、住居跡十数軒と多数の土坑、ピットが検出され、全国的にも珍しい蛇紋岩製の「刀状石製品」が出土している。早川筋では下田遺跡の少し上流域に天神前Ⅰ遺跡(63)、同Ⅱ遺跡(64)、天神沼Ⅰ遺跡(71)、同Ⅱ遺跡(72)等がある。

縄文時代中期になると旧東村域全体に分布するようになり、遺跡数が急激に増加するとともに集落規模も拡大して最盛期を迎える。時期的には加曾利E式が主体であり、早川筋では100軒以上の住居跡を検出した曲沢遺跡をはじめ、天神沼Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡、そして本書で報告する下田遺跡に代表される。天が池の谷筋では園芸試験場第二遺跡(39)や中西原遺跡、天ヶ堤遺跡(46)等がある。これらの遺跡の多くはやはり谷地縁辺の台地上に立地し、時期ごとに若干占地を変えながらも後期初頭まで継続的に集落が営まれている。近接する包蔵地でも中期後半～後期前半の土器が多く見られ、広範囲に渡って同様の傾向があると思われる。(註1)また、早川低地帯に隣接する位置に限られるが、小泉南遺跡(19)、平井裏遺跡(20)、五反歩遺跡(66)等、藪塚面上に遺跡が現れることもこの時期の特色である。

縄文時代中期後半にピークを迎えた遺跡数は、後期からは減少し始め、堀ノ内式期までで終結する。後期後半および晩期の遺跡は現在までのところ知られていない。

弥生時代 弥生時代の遺跡もほとんど見られず、頼光塚遺跡(23)や独鉆田Ⅱ遺跡(56)等で後期の土器片が散見されるのみである。

古墳時代 古墳時代になると遺跡数は再び増加に転ずる。前期の集落遺跡は、谷筋ごとに数ヶ所に集中する傾向が窺える。まず天が池の谷筋の南半に伊勢崎・東流通団地遺跡、鬼ヶ島遺跡(30)、西ノ畑遺跡(33)等に代表される一大拠点とも言うべき集落が形成される。中でも伊勢崎・東流通団地遺跡では、谷を挟んで古墳時代の住居跡約450軒が検出され、

時期による占地状況の変化が辿れた。また、前期の方形周溝墓 11（前方後方形 I を含む）が台地の一角に集中して検出された。ほかには、古早川筋で独鈷田 I 遺跡 (55)・同 II 遺跡 (56) 周辺、上慶本遺跡 (42)・塚下遺跡 (49) 周辺、早川筋で天神沼 I 遺跡 (71)・II 遺跡 (72) 周辺、平井西遺跡 (21)・岡谷遺跡 (22) 周辺、さらに鹿田山からの谷筋で水殿遺跡 (67)、磯沼遺跡 (73) 周辺等で、前期の住居跡や土器散布が見られる。

古墳時代中～後期になると遺跡数はわずかに減るものの、立地を谷地の上流側や台地の奥側に拡散していく傾向が見られる。天ヶ池の谷筋では、飾り玉製作工房と思われる八寸大道上遺跡 (36) から中西原遺跡 (40)、さらに天ヶ堤遺跡 (46) にかけての一带に広く分布し、原ノ城遺跡 (37) では 6 世紀中頃の大豪族居館を検出した。古早川や現早川流域縁辺の台地でも下中西 I 遺跡 (12)、同 II 遺跡 (13) 周辺への進出が見られる。塚下遺跡、天神沼 I・II 遺跡、曲沢遺跡 (59) 等では前期からの集落が継続されている。これらの動向は、谷地の開発、すなわち水田の拡大と連動するものと思われる。

当地域には前期から中期に属する古墳は見あたらない。後期になって、古早川と現早川の低地が合流する地点に下谷古墳群 (24) が形成される。境町淵名に中心を置く淵名古墳群の一支群とされ、1936 年の『上毛古墳綜覧』によれば、東村内の古墳の約 6 割にあたる 35 基で構成されていた。大半が小円墳であるが、全長 51 m の下谷 A 号古墳や直径 34 m の鶴巻古墳、さらに現在は消滅してしまったが直径 60 m 超と伝えられる雷電神社跡古墳など、この時期としては大規模な古墳も含まれている。

奈良・平安時代 律令制によって中央集権国家が樹立された奈良・平安時代には、当地域は佐位郡と一部新田郡に編成された。佐位郡は『和名類聚抄』によると名橋、岸新、反治、佐井、淵名、駅家、雀部、美侶の 8 郷が設置され、現在の伊勢崎市東部がおよそその範囲とされる。近年、伊勢崎市上植木本町の三軒屋遺跡で八角形の建物跡が発見され、文献に残

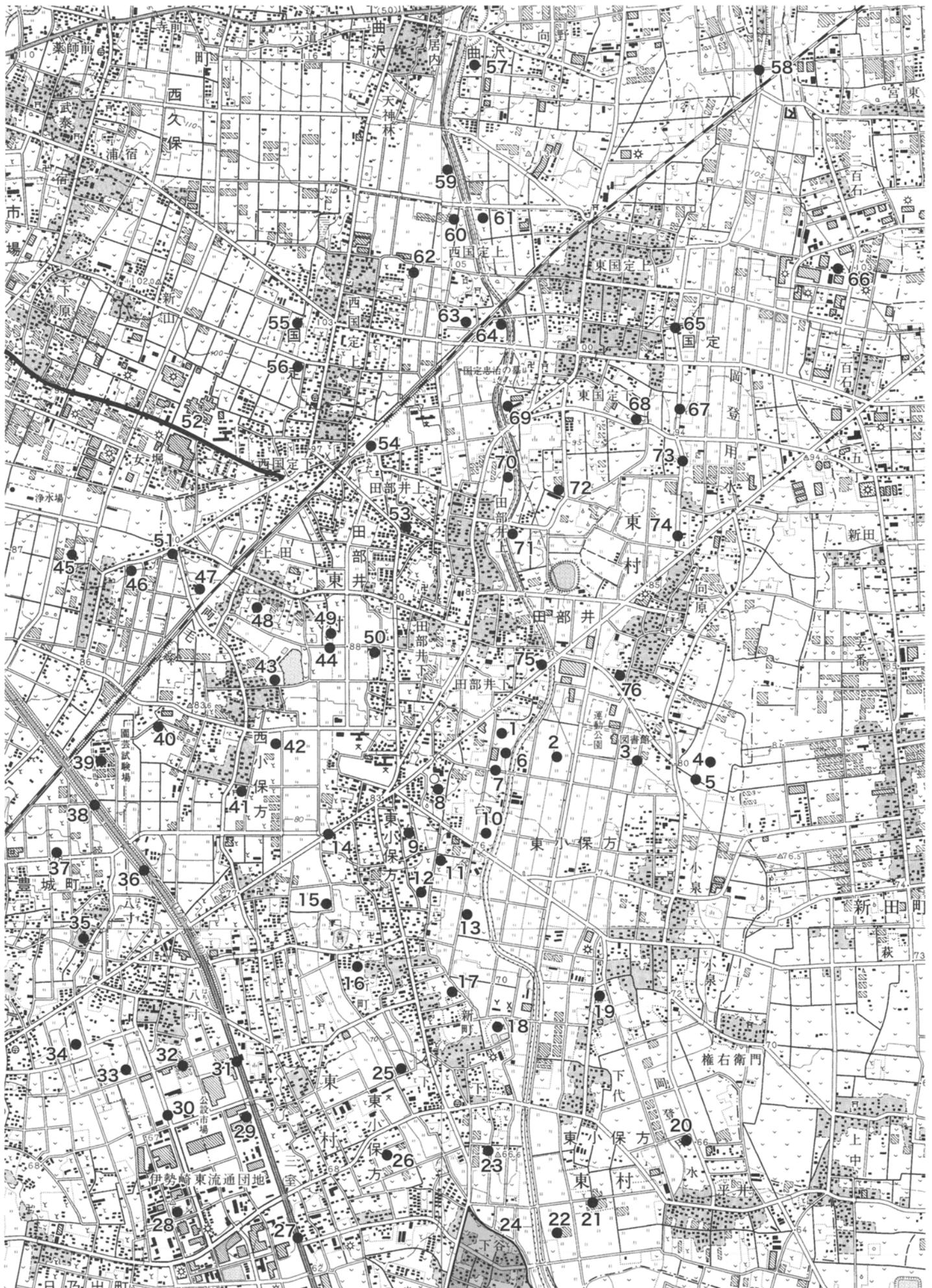
る佐位郡衙の「八角甲倉」と一致したことで、郡衙の位置が特定された。付近には上植木廃寺もあり、佐井郷または駅家郷と推定されるこの近辺が佐位郡の中心地であったと見られる。佐位郷は国定、東小保方あたりまでで、下田遺跡・下元屋敷遺跡のある田部井地区は、新田郡に組み込まれていたのではないかと推定されている。(註 2)

当該期には桐原面全体に集落や包蔵地が分散し、上中西 II 遺跡 (10) や新町遺跡 (16)、田部井大根谷戸遺跡 (54)、諏訪山遺跡 (69) 等、この時代になって初めて集落が営まれた遺跡も出現する。これは、井戸を掘る技術の発達、定着の結果と思われる。

平安時代の本地域の特徴として、製鉄関連遺構が挙げられる。本書の下元屋敷遺跡 (1) に近接する南原間遺跡 (3) では堅型炉、炭窯、鍛冶遺構が、天神沼 I 遺跡 (71) では羽口や鉄滓を伴う堅穴遺構が、下大久保 II 遺跡 (5)、田部井館跡遺跡 (75) ではともに炭窯が調査されている。他でも伊勢崎・東流通団地遺跡 (28) で堅型炉、鍛冶遺構、頼光塚遺跡 (23) と高原遺跡 (26)、塚下遺跡 (49) で羽口や鉄滓が出土している。(58) の遺跡名の「かなくそ」も鉄滓のことである。

中近世 平安時代末期の天仁元年 (1108 年) に浅間山が大噴火した。その災害から復興した佐位郡の田畑を寄進して成立したのが淵名荘である。利根川から農業用水を引き込もうとして 12 世紀中葉に女堀 (52) が開削されたが、失敗に終わった。

鎌倉時代以降は淵名荘をさまざまな武将が奪い合い、江戸時代においても天領・旗本領・大名領とめまぐるしく支配が変わる。当該期の遺構は館跡や溝が中心であり、上中西 II 遺跡 (10) や三室坊主林遺跡 (31)、田部井館跡遺跡 (75) 等で検出されている。また、田部井大根谷戸遺跡 (54) では幹線道の「あずま道」が検出され、路面改修痕が 6 面確認された。



第4図 周辺の遺跡

表4 周辺の遺跡

No.	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	中近世	概要	文献
1	下元屋敷遺跡							本報告	本報告書
2	下田遺跡							本報告	本報告書
3	南原間遺跡		中			○	○	縄文中期(包蔵地)、平安製鉄関連、中近世溝(以上本線分)平安B水田、近世(以上側道分)	『年報』22・23 群埋文'02・03 『南原間遺跡・下大久保遺跡』東村遺跡調査会'04
4	下大久保遺跡		中		○	○	近	縄文中期(包蔵地)、近世溝(以上本線分)古墳、古代溝(以上側道分)	『年報』22・23 群埋文'02・03 『南原間遺跡・下大久保遺跡』東村遺跡調査会'04
5	下大久保II遺跡		早			○	○	縄文早期(包蔵地)、平安炭窯、中近世溝	『下大久保II遺跡』東村遺跡調査会'04
6	下元屋敷遺跡		中後				○	縄文中・後期(集落)、中近世溝、近世炭窯	『下元屋敷遺跡』群埋文'05
7	根性坊遺跡		中後	○				縄文中・後期(集落)、古墳以降住居	『根性坊・上中西遺跡』東村教委'82
8	野間遺跡		中後			○		縄文中・後期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
9	上中西I遺跡		中後			○	○	縄文中・後期、平安(住居)、中世館堀	『根性坊・上中西遺跡』東村教委'82
10	上中西II遺跡					○	○	平安、中世(住居跡、居館跡)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
11	上中西III遺跡		中後			○	○	縄文中・後期、奈良・平安、中世(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
12	下中西I遺跡		中		中		○	縄文後期、古墳中期(包蔵地)、鎌倉時代(寺院跡)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
13	下中西II遺跡		中後		後	○		縄文中・後期、古墳後期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
14	下柳沢遺跡		中後			○		縄文中・後期、平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
15	寺東遺跡						○	平安(水田跡)	『寺東遺跡』東村教委'84・85
16	渡戸遺跡				後	○		古墳後期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
17	新町遺跡					○		奈良・平安(住居跡)	『新町遺跡』東村遺跡調査会'01
18	旗本久永氏陣屋跡						○	近世(陣屋跡)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
19	小泉南遺跡		中後			○	○	縄文中・後期、平安、近世	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
20	平井裏遺跡		中後		前	○		縄文中・後期、古墳前期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
21	平井西遺跡		中		前	○		縄文中期、古墳前期、奈良・平安	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
22	岡谷遺跡		中		前			縄文中期、古墳前期	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
23	頼光塚遺跡		早中後	後		○	○	縄文早・中・後期、弥生後期、古墳(住居跡)、奈良、平安	『頼光塚遺跡』東村遺跡調査会'04
24	下谷古墳群				○			鶴巻古墳、雷電神社跡古墳、東村7～22、31～41号墳	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
25	下ノ西遺跡					○		奈良、平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
26	高原遺跡		○		○	○		縄文、古墳、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
27	三室間ノ谷遺跡				○	○	○	古墳(住居跡)平安B水田、近世溝 堤池、	『上瀬名真神谷遺跡、三室間ノ谷遺跡』群埋文'91
28	伊勢崎・東流通団地遺跡				○	○	○	古墳前・後期、奈良・平安(住居跡、製鉄遺構)、中世(住居跡)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
29	道上遺跡		早・中		○	○	○	縄文早・中期、古墳、奈良・平安(住居跡)、中世、近世	群馬県文化財情報システム
30	鬼ヶ島遺跡				○	○		古墳前期、奈良、平安(住居跡)	『佐波郡東村鬼ヶ島遺跡』東村教委'79
31	三室坊主林遺跡(三室B)		草早		○	○	○	縄文草創・早期(包蔵地)、古墳前期(住居跡)、中世館、近世溝	『三室坊主林遺跡』群埋文'89
32	御手下遺跡				前			古墳前期(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
33	西ノ畑(西畑)遺跡				前	○		古墳前期、奈良・平安(住居跡)	『西ノ畑遺跡』東村教委'81
34	大道下遺跡		中		○			縄文中期、古墳前・後期(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
35	渡利遺跡				○	○		古墳、奈良・平安	群馬県文化財情報システム
36	八寸大道上遺跡		早～後		○	○		縄文早・前・中・後期(包蔵地、集石遺構)、古墳後期、奈良・平安(集落)	『八寸大道上遺跡』群埋文'89
37	原之城遺跡				○	○		古墳、奈良・平安(居館跡、集落跡)	『原之城遺跡』伊勢崎市教委'86 『原之城遺跡発掘調査報告書』伊勢崎市教委'88 他
38	下吉祥寺遺跡		前中		○	○		縄文前期～中期、古墳、奈良・平安(集落)、平安製鉄遺構	『下吉祥寺遺跡』伊勢崎市教委'80 他
39	園芸試験場第二遺跡		中			○		縄文中期、奈良・平安(集落)	『園芸試験場第二遺跡』県教委'74
40	中西原遺跡(佐波農業高校第二農場)		早～後		後	○		縄文早・前・中・後期、古墳後期、奈良・平安(住居跡)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
41	八幡付遺跡		中		後	○		縄文中期、古墳後期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
42	上慶本遺跡				○	○		古墳前期、奈良・平安(住居跡)	『佐波郡東村上慶本遺跡』東村教委'80
43	溜井上遺跡		中後					縄文中・後期(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
44	塚下(かき揚塚下)遺跡		前～後		○	○		縄文前・中・後期、古墳前・後期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村かき揚塚下遺跡』東村教委'80、 『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
45	書上遺跡	○	○		後		○	旧石器石器集中部16地点、縄文(包蔵地)、古墳後期(住居跡、島)、中近世溝、井戸	『年報』20～22 群埋文'01～03
46	天ヶ堤遺跡	○	中後		○	○	○	旧石器石器ブロック4、縄文中・後期、古墳前・後期、奈良・平安(集落)、中近世(建物跡)	『年報』20～22 群埋文'01～03
47	大上遺跡	○	前中				○	旧石器7文化層、縄文前・中期(集落)、中近世溝	『年報』21～23 群埋文'02～04

No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中近世	概要	文献
48	前道下遺跡	○	○		○	○	○		旧石器3文化層、縄文、古墳後期、奈良・平安(住居跡)、中近世溝、井戸、墓	『年報』21～23 群埋文'02～04
49	塚下遺跡	○	前中		○	○	○		旧石器石器・剥片、縄文前・中期、古墳前・後期、奈良・平安(集落)、中近世溝	『年報』21・22 群埋文'02・03
50	上柳沢遺跡				○		○		古墳溝、近世溝	『年報』23 群埋文'04
51	六道遺跡		前～後				○		縄文前・中・後期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
52	女堀遺跡						○		中世用水路	『女堀』群馬県教委'80、『川上遺跡、女堀遺構発掘調査概報』赤堀村教委'82、『中畑遺跡、女堀用水遺構発掘調査概報』赤堀町教委'87、『女堀』群埋文'86
53	北西山遺跡		中後						縄文中期～後期(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88、『佐波の古墳』相川龍雄'28、『上毛古墳総覧』群馬県教委'38
54	田部井大根谷戸遺跡					○	○		奈良・平安(住居跡)、中世道(あずま道)、溝、近世道、溝	『田部井大根谷戸遺跡』群埋文'02
55	独鉆田Ⅰ遺跡		前		前	○			縄文前期、古墳前期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
56	独鉆田Ⅱ遺跡		中	後	前	○			縄文中期、弥生後期、古墳前期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
57	あみだ坂遺跡	○	○		○		○		旧石器、縄文、古墳、中世、近世	群馬県文化財情報システム
58	かなくそ遺跡				○	○			古墳、奈良・平安	群馬県文化財情報システム
59	曲沢遺跡		中後		○				縄文中・後期、古墳前・後期(住居跡)	『曲沢遺跡発掘調査概報』赤堀村教委'79
60	曲沢Ⅰ遺跡		中		○				縄文中期、平安(住居跡)	『曲沢遺跡』東村教委'79
61	曲沢Ⅱ遺跡		中後						縄文中・後期、平安(住居跡)	『曲沢遺跡』東村教委'79
62	開発遺跡		前						縄文前期(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
63	天神Ⅰ遺跡		前中			○			縄文前・中期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
64	天神Ⅱ遺跡		○			○			縄文前・中期、奈良・平安	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
65	見取遺跡					○			平安以降(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
66	五反歩遺跡		中後			○			縄文中・後期、奈良・平安	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
67	水殿遺跡		中		前	○			縄文中期、古墳前期、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
68	諏訪原遺跡		○			○			縄文、奈良・平安(包蔵地)	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
69	諏訪山遺跡					○			平安(住居跡)	『諏訪山遺跡発掘調査報告書』東村教委'94 『諏訪山』東村教委'99 『諏訪山遺跡Ⅲ』東村遺跡調査会'02
70	東ノ宿遺跡		後			○			縄文後期、奈良・平安(集落)	『天神沼遺跡群』東村教委'88
71	天神沼Ⅰ遺跡		前～後		○	○	○		縄文前・中・後期、古墳前・後期、奈良・平安(集落)、平安製鉄関連遺構、中近世(建物跡)	『天神沼遺跡群』東村教委'88 『天神沼Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』東村教委'94
72	天神沼Ⅱ遺跡		前～後		○	○			縄文前・中・後期、古墳前・後期、奈良・平安(集落)	『天神沼遺跡群』東村教委'88 『天神沼Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』東村教委'94
73	磯沼遺跡		早～後		前	○			縄文早・前・中・後期、古墳前期、奈良・平安	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
74	西磯遺跡		中			○			縄文中期、奈良・平安	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88
75	田部井館跡遺跡					○	○		平安(炭窯)、中世館内堀	『田部井館跡遺跡』東村遺跡調査会'04
76	向原遺跡		中後		○				縄文中・後期、古墳前期	『佐波郡東村の遺跡』東村教委'88

(註1) 広く東毛地域全体と同様の傾向が把握できるといふ。山口逸弘は『水のめぐみ ～大間々扇状地周辺の歴史～』の中で縄文中期～後期の集落について、赤城山西麓域でも湧水地点を中心に占地するのは同様で、東毛地域随一の特性ではないとしつつ、「ただ、湧水地点を中核とした集落規模の広がり、山麓域に比して広範囲にわたる様相である」と指摘している。

(註2) 古代の郷制は1郷を50戸で区切るため、範囲を特定することは非常に難しい。ここでは『東村誌』の「田部井(ためがい)」を新田郡の「淡甘(たんかい?)郷」に比定する説によったが、淡甘郷を太田市新田上田中町、下田中町周辺や新田高尾町など、田部井地区以外に求める説も根強い。

中世には、田部井(田部賀井)郷は新田荘に含まれ、近世では佐位郡に田部井村、新田郡に田部村が存在する。両村は明治10年に併合されて田部井村となり、さらに同22年東村に統合された。そして平成17年の伊勢崎市との合併に至る。

*上記以外の主な参考文献

- 『東村誌』1979
- 『群馬県史 通史編1 原始古代1』1989
- 『群馬県史 通史編2 原始古代2』1991
- 『群馬県史 通史編3 中世』1989
- 『群馬県史 資料編2 原始古代2』1986
- 『伊勢崎市史 通史編1 原始古代中世』1987
- 『境町史 第3巻 歴史編上』1996
- 『新田町誌 第1巻 通史編』1989
- 『佐波郡東村の古墳』東村々誌編纂委員会 1969
- 『角川日本地名大辞典 10 群馬県』角川書店 1988
- 『群馬県遺跡大辞典』群埋文 1999
- 『水のめぐみ ～大間々扇状地周辺の歴史～』
- 『水のめぐみ ～大間々扇状地の歴史を語る～』
- 以上 群馬県教委・群埋文 2002
- 『平成18年度 調査遺跡発表会』群埋文 2006

第2章 下元屋敷遺跡の調査

第1節 遺跡の層序

Ⅲ区 (080, - 015) 旧石器試掘坑の層序を基本土層とする。なおⅡ層よりも上位層は、削平により失われ不明である。

- I層 表土
 - Ⅱ層 黄褐色ローム 白色パミスを多く含む。
 - Ⅲ層 黄褐色ローム 白色、黄色パミスを非常に多く含む。
 - Ⅳ層 暗褐色ローム 黄褐色ローム中に暗褐色ロームをブロック状に多く含む。固くしまっている。
 - V層 黄褐色ローム 暗色帯への漸移層 (AT層極大層)
 - Ⅵ層 暗色帯
 - Ⅶ層 黄褐色ローム
 - Ⅷ層 Ⅶ層に比してやや砂質。よりしまっている。
- Ⅱ～Ⅳ層中の白色パミスはAs-BP (Ⅱ層中についてはAs-Opi) の可能性あり。

I
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
V
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷ

第5図 下元屋敷遺跡基本土層



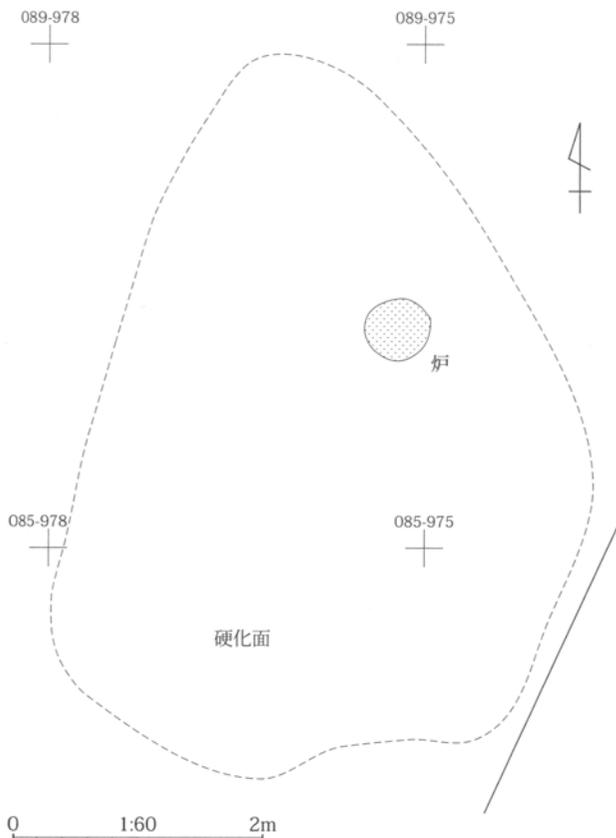
第6図 下元屋敷遺跡全体図

第2節 検出された遺構と遺物

調査区は早川西岸の縁辺から県道桐生伊勢崎線の中間部分にあたる。県道の西側は現況が水田であり、低地帯に移行することが予想された。調査の結果、西側の1区東半部は微高部から低地への移行部であることが確認され、遺構の存在は希薄であった。1区西半部とI区については、トレンチ調査を行った結果、遺構は検出されなかった。II・2～III区では西半部には古代、東半部には縄文時代の遺構の分布が認められた。なお、3区は全体が大規模な攪乱を受け、遺構面は残存していなかった。

第1項 縄文時代

調査地点周辺は、全体に削平を受けており調査区内では、遺構の遺存状況は全体によくない。住居跡1軒と土坑13基が確認されたにとどまる。



第7図 III区1号住居跡

(1) 住居跡

III区 1号住居跡 (第7図)

早川に面したIII区北東端部、(085, - 975) グリッドに位置する。

上面の削平が著しく、床面の硬化面と炉が確認されたのみであり、形状・規模は不明である。炉は、0.53cm×0.48cmの範囲に焼土面が検出されたが、火床面下部が残存する程度である。柱穴は確認されなかった。

遺物は出土しなかったが、近隣の調査結果から推定して縄文時代に属する可能性が考えられる。

(2) 土坑

縄文時代に属する土坑は、II・2～III区の範囲に散漫に分布する(第8・9図、PL 8～10、表7)。

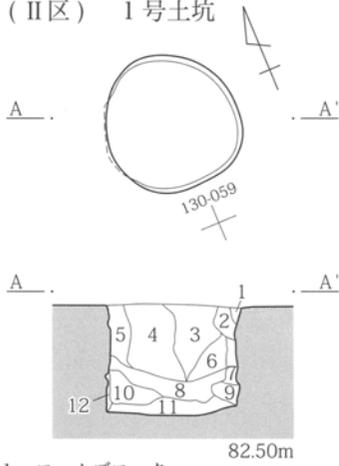
II区1号土坑は、直径1.19×1.08mの円形を呈し、深さは87cmである。底面は平坦で、壁面は直立する円筒状の断面を呈する。II区2号土坑は形状・規模は不明な点があるが、深さ1.51mの斜方向への掘り込みが確認された。

III区2号土坑は、直径1.32mの円形で深さは35cmで壁面は垂直に立ち上がる。炭化物が少量出土した。III区9号土坑は、直径0.4mのほぼ円形、深さは13cmを測る。土坑外縁に沿って深鉢胴部破片が埋設された状況で出土しており、埋甕の可能性も考えられる。III区11号土坑は、上面は直径1.40mのほぼ円形、中位は0.8mとくびれ、底面は1.5mと広がる断面がフラスコ形を呈する土坑である。深さは1.38mを測る。縄文土器の破片が出土した。加曾利E II式の深鉢(1)の口縁部破片と称名寺式の深鉢(4)等が出土した。他に、III区の5号土坑では加曾利E II式と称名寺式、6号土坑では加曾利E II～III式、7号土坑では加曾利E II式の土器片が出土した。

(3) 遺構外の遺物

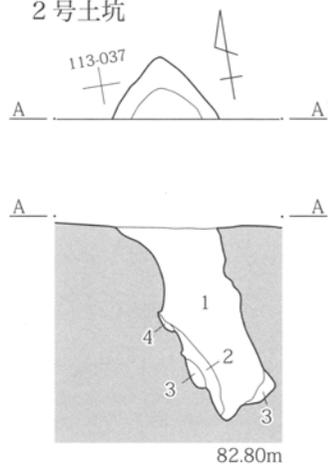
全体に遺物量は少数であり全点を掲載した(第10・11図)。いずれも小破片であり縄文時代中期前半から後期前半に位置づけられる。

(II区) 1号土坑



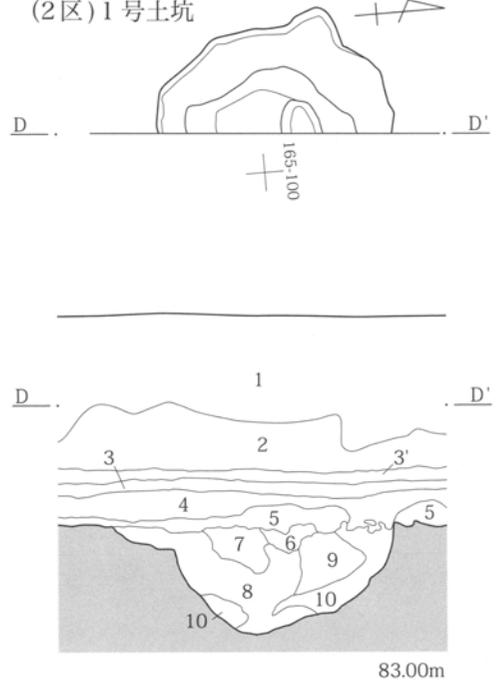
- 1 ロームブロック
- 2 茶褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土 ローム粒 (径1~2mm) 混入。ロームブロック (薄) (径15~20mm) 混入。
- 4 黒褐色粘質土
- 5 暗褐色粘質土 ローム粒 (径1~4mm) 混入。ロームブロック (径20mm程度) 混入。3層よりもロームの割合多い。
- 6 暗茶褐色土 5層と同じ。
- 7 褐色粘質土 6層よりもローム多い。
- 8 黒色粘質土 ローム粒 (径1~4mm) 混入。
- 9 褐色粘質土 暗褐色粘質土微量混じる。
- 10 暗褐色粘質土 ローム粒 (径2~5mm) 混入。ローム混じり。
- 11 褐色粘質土 茶褐色粘質土混じり。
- 12 ロームブロック

2号土坑



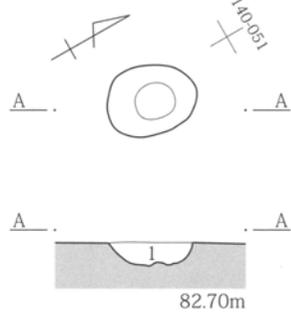
- 1 黒褐色粘質土 ローム粒混入。
- 2 1層土と黄褐色粘質土の混土。
- 3 2と暗色帯の混土。
- 4 1層と黄褐色粘質土の混土。

(2区) 1号土坑



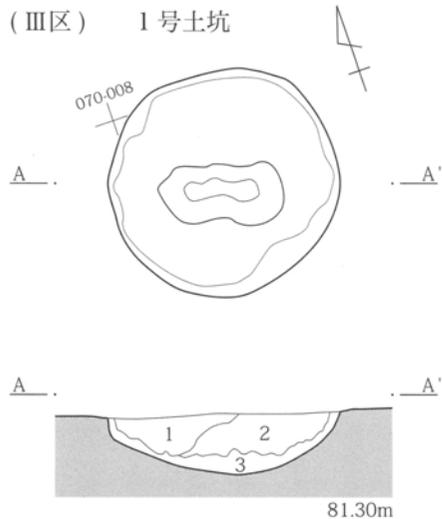
- 1 表土 (造成土)
- 2 灰褐色砂質土 均質で緻密。白色軽石を含む。
- 3 暗灰褐色砂質土 均質で緻密。白色軽石を含む。
- 3' 暗褐色砂質土 3層下部の鉄分の沈殿顕著。
- 4 暗茶褐色砂質土 白色軽石を少量含む。鉄分沈殿。
- 5 明茶褐色ローム質土
- 6 暗黄褐色ローム質土
- 7 暗黄褐色ローム質土と暗灰褐色土の混層。
- 8 暗茶褐色土
- 9 暗茶褐色土 8層に比し暗色。
- 10 暗茶灰褐色土 粘性あり。

17号土坑



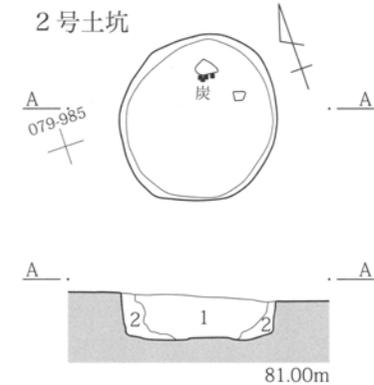
- 1 暗褐色土 ローム粒30%含む。

(III区) 1号土坑



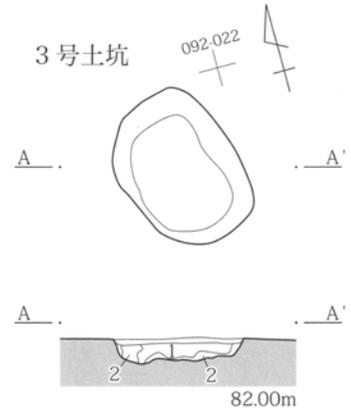
- 1 黒褐色土 ローム小ブロック (5mm程度) を少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを非常に多く含む。
- 3 黄褐色土 ローム土を主体とし、黒色土粒を少量含む。

2号土坑



- 1 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土粒を少量含む。

3号土坑

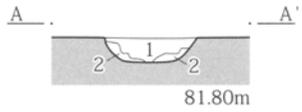


- 1 黒褐色土 ローム小ブロック (5mm程度) を多く含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック (30mm) 程度を多く含む。



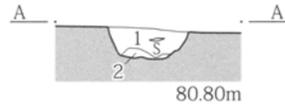
第8図 縄文時代土坑 (I)

4号土坑



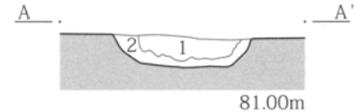
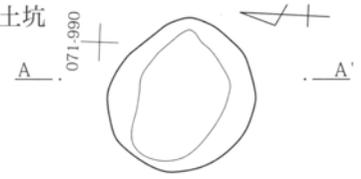
- 1 暗褐色土 ローム粒を非常に多く含む。
- 2 黄褐色土 ロームを主体とし、黒褐色土小ブロックを少量含む。

5号土坑



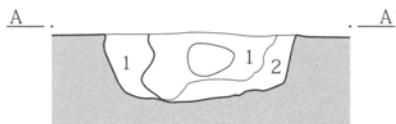
- 1 暗褐色土 ローム粒を非常に多く、炭粒を僅かに含む。
- 2 黄褐色土 ロームを主体とし、暗褐色土ブロックを微量含む。

6号土坑

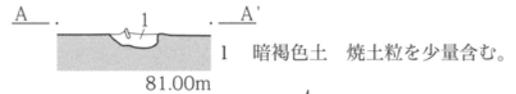
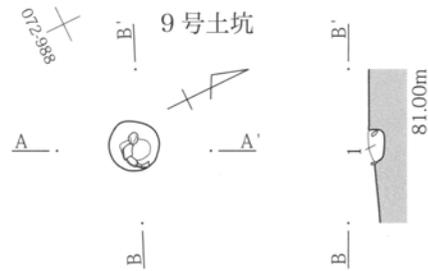


- 1 暗褐色土 ロームブロック(2~4cm)を多く含む。
- 2 黄褐色土(ローム) 暗褐色土ブロック(径1~2mm)を微量含む。

7、8号土坑



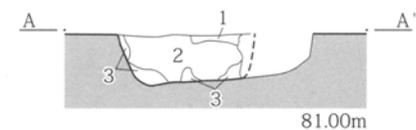
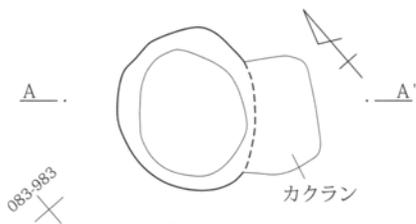
- 7号土坑
- 1 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 ロームを主体とし黒褐色土粒を少量含む。
- 8号土坑
- 1 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土粒を少量含む。



9号土坑

- 1 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

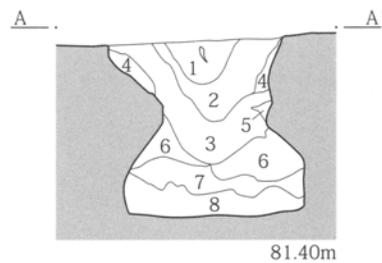
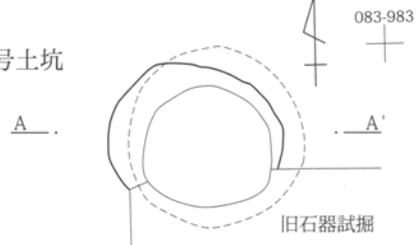
10号土坑



- 1 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロックを多く含む。
- 3 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土小ブロックを少量含む。

0 1:60 2m

11号土坑



- 1 茶色のロームブロックを多く含む。土器片を含む。硬くしまっている。
- 2 茶色のロームブロックをやや多く含む。硬くしまっている。
- 3 茶色のロームブロックを含む。やや粘りがある。
- 4 壁面崩落によるローム。
- 5 ロームブロック。
- 6 大きな褐色のロームブロックを含む。粘りがある。
- 7 灰色のローム。軟らかく粒子がやや粗い。
- 8 大きな褐色のロームブロックを多く含む。粘りがある。

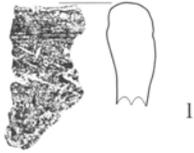
第9図 縄文時代土坑(2)



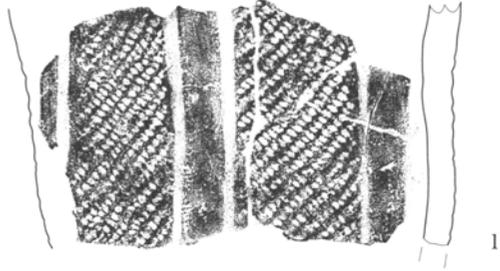
Ⅲ区 5号土坑



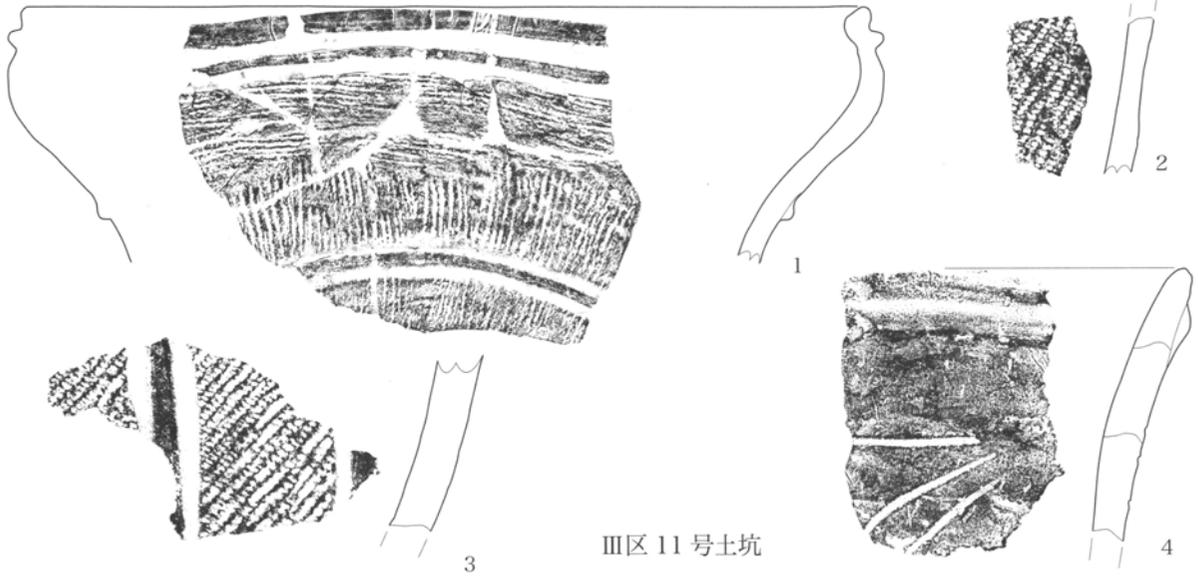
Ⅲ区 6号土坑



Ⅲ区 7号土坑

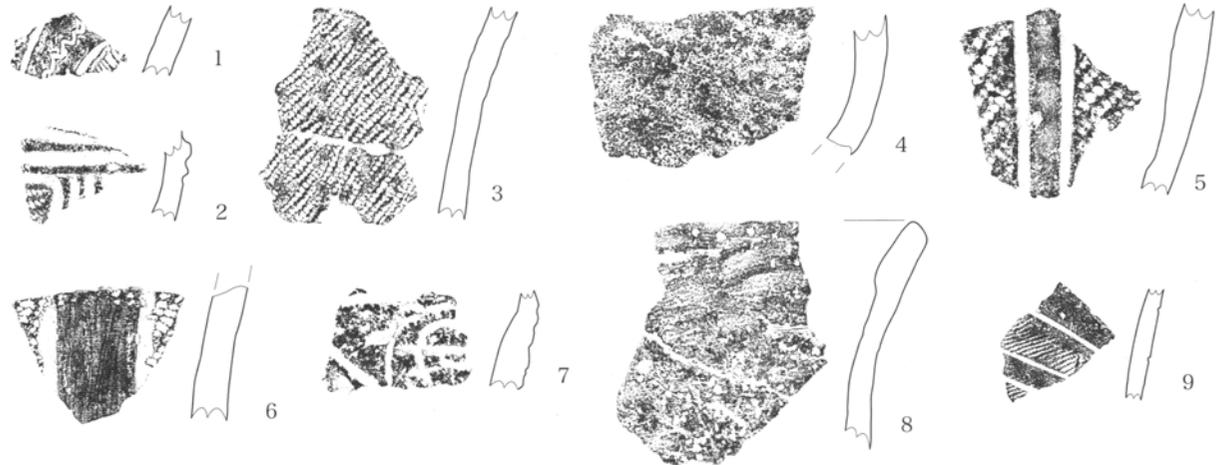


Ⅲ区 9号土坑



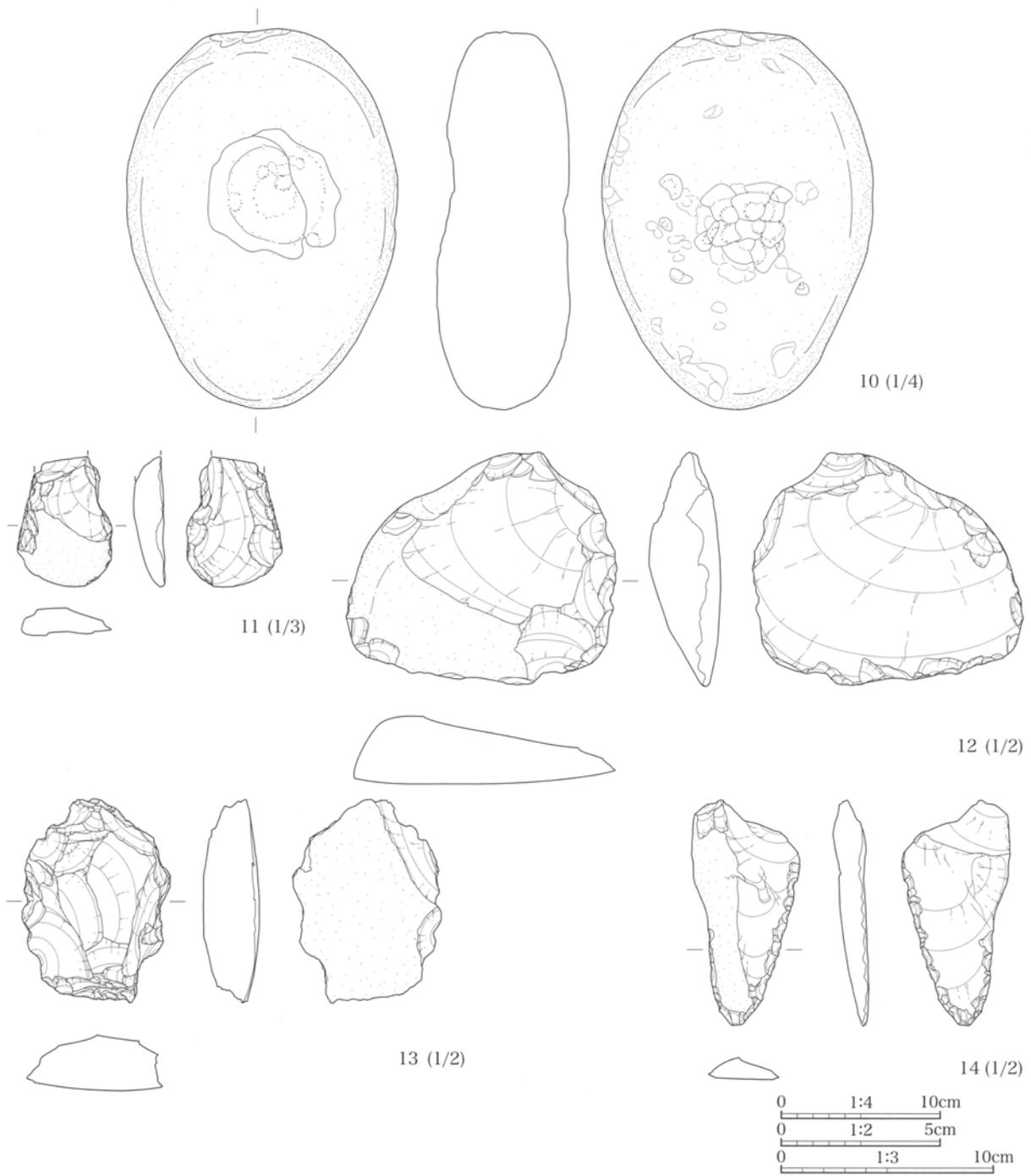
Ⅲ区 11号土坑

遺構外出土遺物



0 1:3 10cm

第 10 図 縄文時代出土遺物 (1)



第 11 図 縄文時代出土遺物 (2)

第2項 古代

(1) 木炭窯

木炭窯は、大間々扇状地桐原面東縁部の早川西岸に沿う南北方向の微高部鞍部にあたるⅡ区に集中している。地下式木炭窯5基、土坑型木炭窯4基が検出された。また、北側に隣接する県側道調査部分には、境界上に位置する8号炭窯の他、土坑型炭窯2基が分布する。

1. 地下式木炭窯

Ⅱ区で5基が確認された。2・3・6・7号炭窯はⅡ区中央南端で重複しあって検出された。土層の切り合い状況から、7号炭窯が最初に築かれたことが確認され、最終的には「7号→3号」「7号→6号→2号」という時間的な変遷が確認された。8号炭窯は、これらの炭窯群の北に単独で存在する。

安定したローム層中に構築された炭窯は、天井部は残存しないが全体として良好な状況で検出された。各炭窯では複数回の操業の痕跡が確認された。

なお、操業面に残された炭化材については、材の同定を実施した。

Ⅱ区2号炭窯（第12図、PL3）

(102～110, -063～-069) グリッドに位置する。6号炭窯の北西部を掘り込んで構築されている。

全長8.38m、最大幅3.12mを測り、長軸方向はN-54°-Wを示す。焼成室は長軸5.20m、最大幅3.12mで、焚口に向かってすばまる胴張りの羽子板形（隅丸長方形）を呈する。天井部は崩落しているが、側壁は湾曲して立ち上がることから、緩やかなアーチ状の横断面を呈するものと考えられる。

煙道は、奥壁北西コーナー部分に設けられた痕跡があり、基部を補強するために大形の鉄滓5点を組み合わせた状況が確認された（第13図）。観察の結果、竪型炉の炉壁片であることが判明した。

作業場はやや胴の張る長楕円形で、長さ3.18m、最大幅3.06mである。作業場の底面は幅67cmと狭く、横断面の下半部はU字形に立ち上がり、上

半部は大きくハの字状に開く。焚口は下端64cmと狭まっている。

確認面からの深度は、作業場が1.54m、焚口1.50m、燃焼室1.37mである。

燃焼部の堆積土には4面の炭化物層が認められ、本窯では4回以上の操業が行われたことがうかがわれる。

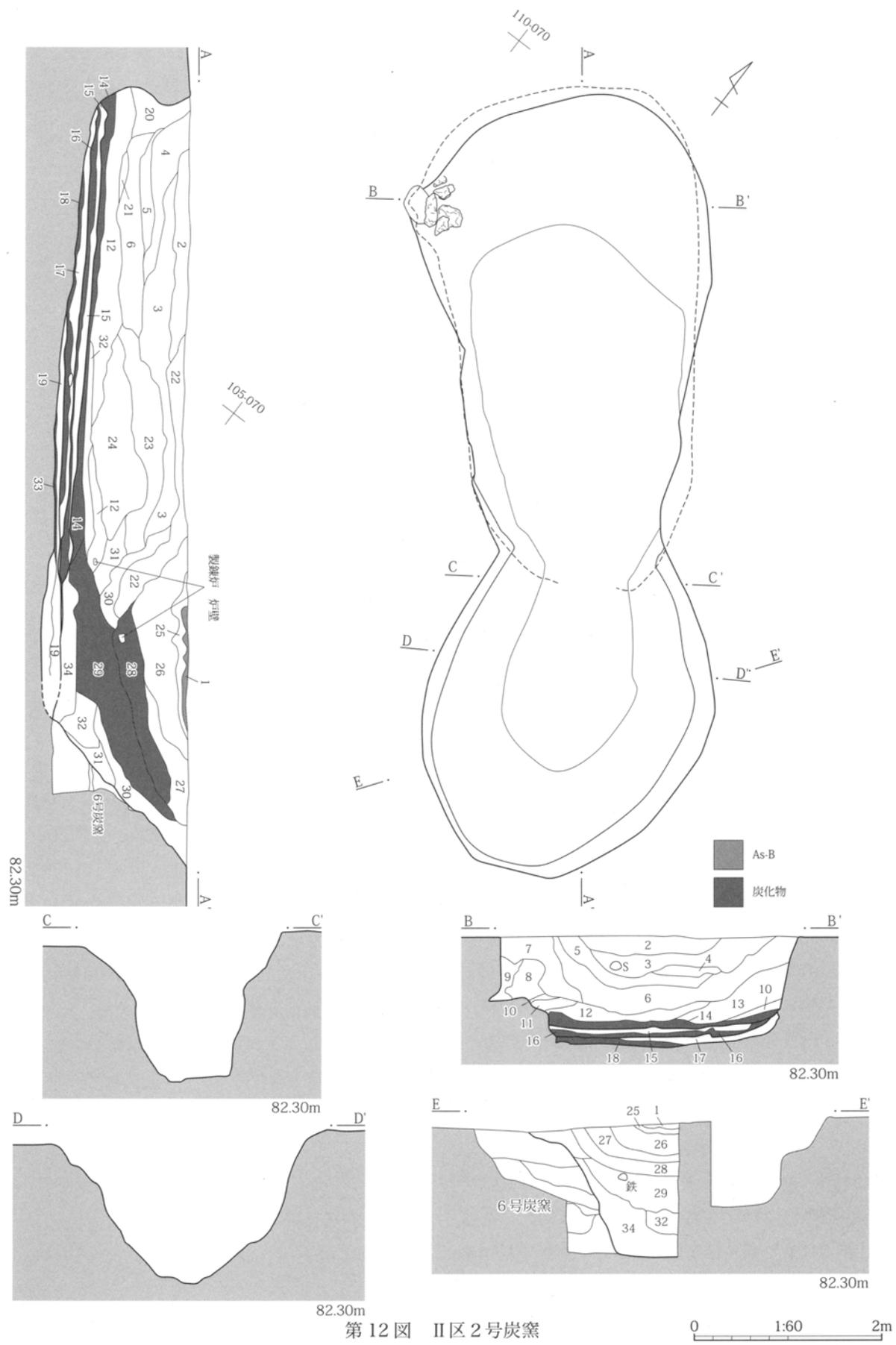
1回目の操業に伴う炭化物層は焚口付近から焼成室の手前半分程度まで残存するにとどまり、奥部では2面の操業面が共通した状況である。傾斜は0～6.5°である。

2回目以降の操業面は炭化物層上面に堆積した薄い天井崩落土上面を整地している。傾斜は1回目と同様0°～7°前後である。3・4面の傾斜は4～5°である。また、作業場は4回目の操業時とほぼ同一面が使用されていたようである。

操業終了後の堆積土は、焼成室下半は天井部崩落土が主体となり、上半部は崩落後の窪地への流入土である。作業場流入土の下半には多量の炭化物が含まれ、覆土中からは、製鉄炉の炉壁の小破片や鉄滓等が出土した。

出土した製鉄関連遺物は、遺構内全体で総重量54.8249kgである。内訳は、炉壁50.8703kg（総重量の約92.8%）、炉内滓0.423kg（同約0.8%）、木炭1.995kg、木炭窯の目地土（4点）1.5366kgである。（遺物収納用パン箱4箱相当）。炉壁は、製鉄炉の構成部位でみると、中段下半以下が4分の3以上を占める。（第14～19図、PL13～16、表5）

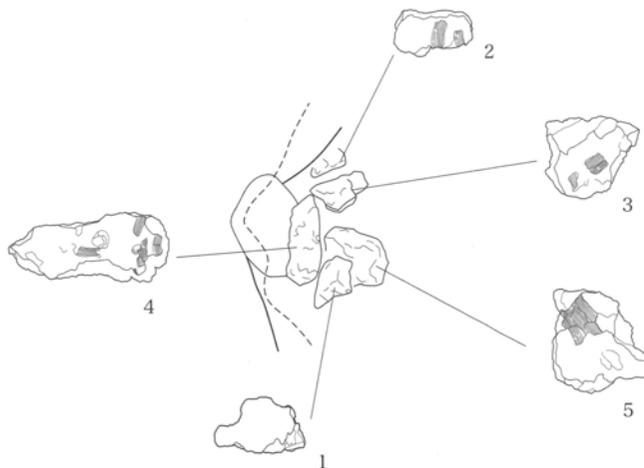
本遺構の時期を特定しうる遺物の出土はないが、覆土の最上位でAs-B層の一次堆積層が確認されたことから、平安時代の所産と考えられる。



第 12 图 II 区 2 号炭窠

2号炭窯土層

- 1 As-B層(一次堆積と考えられている)
- 2 黒褐色土 ローム粒「小」を5～10%不均質に含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒「小」10%、焼土粒「小」を5%含む。3～5mmの炭片5%以下含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒「少」を不均質に20%含む。5mm程度の木炭片を微量含む。
- 5 黒褐色土 2層に比してローム粒「少」を多く(20%)含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒「小～中」を不均質に5～30%含む。
- 7 褐色土 ソフトローム2次堆積土を主体とし、ハードローム(BP下BB上)小塊を20%含む。
- 8 黄褐色土 BP下BB上のハードローム2次堆積土。煙道壁面を不均質に5%含む。
- 9 褐色土 ローム粒と褐色土の均質な混土層。煙道内流入土。しまりなく軟らかい。
- 10 ハードローム粒と焼土「小」粒、炭片の混土層。
- 11 8層と同質。壁崩落土。
- 12 暗褐色土 BP下BB上ハードローム粒「小～中」不均質に10%含む。
- 13 黄褐色土 8層と同質。暗色帯(BB)も1部含む。壁と天井の崩落に伴う。
- 14 黒色土 黒色灰を主体とし、焼土粒「極小」を20%含む。木炭10%含む。下面が三次床面。焼成に伴う土層。煙道付近は焼土化した壁や天井粒「中」を主体とする。
- 15 黄褐色土 BP下～BB上のハードロームを主体とし、灰、焼土化した壁・天井粒「大」、焼土粒小～中を不均質に30%含む。床面整地層。
- 16 14層と同質であるが、灰色味が強い。二次焼成時の灰層。下面が二次床面。
- 17 黄褐色土 15層と同じ。二次床面を作るための整地層。
- 18 褐色～黒色土 14層と同じ部分と灰の含有量が多い場所と不均質であるが、同一層位である。下面が一次床面で焼成時に形成された層である。
- 19 黄褐色土 15層と同じ。
- 20 黄褐色土 ハードロームの二次堆積土。締まりなく軟らかい。暗褐色土粒「小」を10%含む。
- 21 6層にローム粒「小～中」20%含む。
- 22 2層に焼土粒「小」を均質に5%、炭細片を微量含む。
- 23 黄褐色土 ロームと黒色土下の漸移層に近い。締まりなく軟らかく、3層を均質に20%含む。
- 24 黄褐色土 ハードロームの二次堆積土。ローム塊と締まりのないローム粒の不均質な混土層。
- 25 黒色土 焼土粒「小」、ローム粒「小」5%均質に含む。
- 26 黒色土 焼土粒極小5%含む。
- 27 暗褐色土 焼土粒・炭細粒、ローム小粒5%含む。
- 28 褐色土 ロームと25層の均質な混土層。焼土粒「小」を10%、炭細片を50%含む。
- 29 27層にローム粒「小～大」5%、焼土粒「小～大」10%、炭径5mm～1.5cmを50%含む。
- 30 暗褐色土 ロームの上の土を主体とし、焼土・ローム小粒を微量含む。締まりなく軟らかい。
- 31 30層と焼土粒「小～大」・ローム粒「小～大」の混土層。しまりなく軟らかい。
- 32 ローム塊「中～大」すきまに3層を含む。
- 33 18層と同様第一面の操業で堆積した土。
- 34 暗褐色土 焼土粒「小～中」20%含む。しまりなく軟らかい。

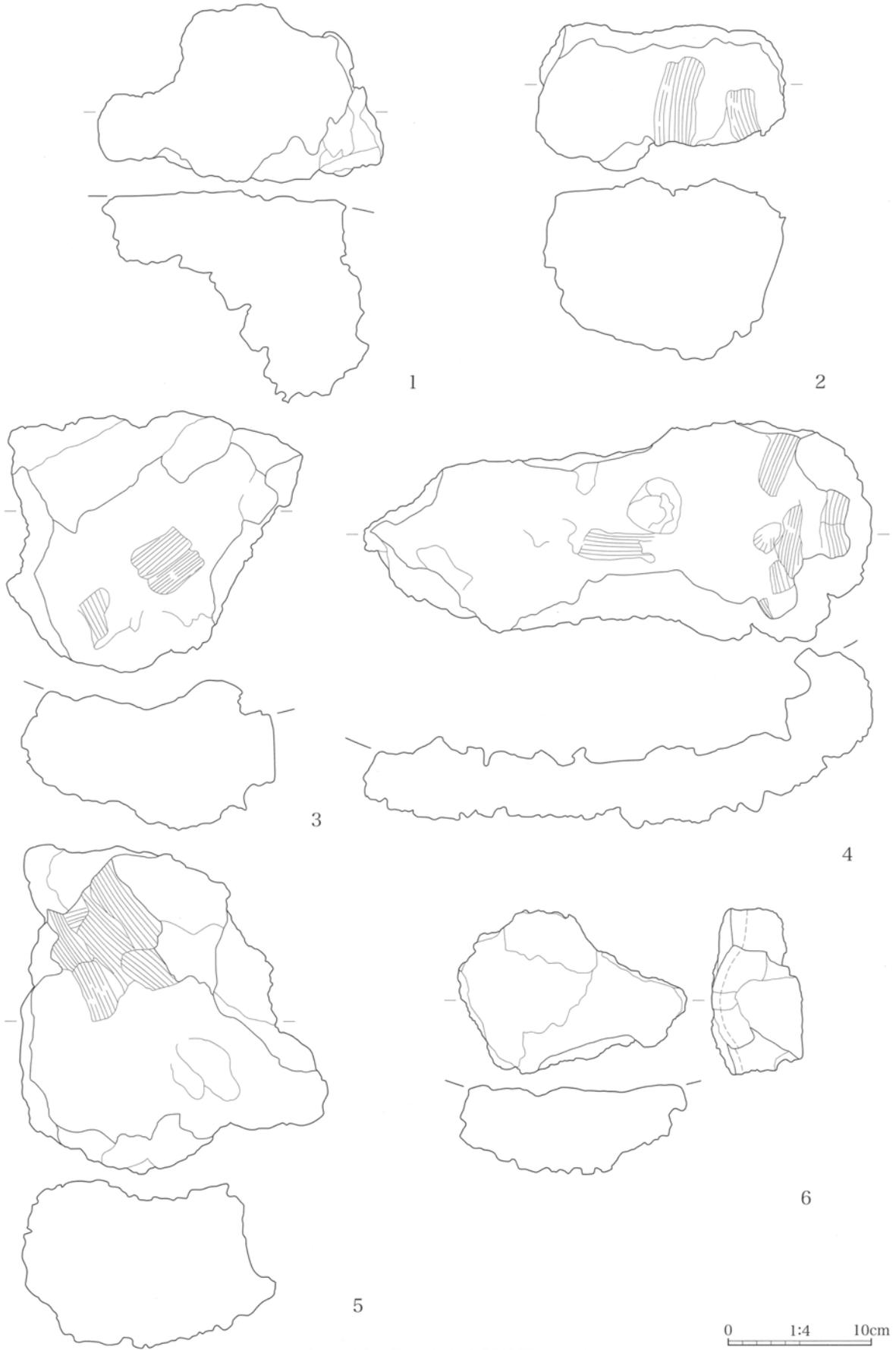


0 1:30 1.0m

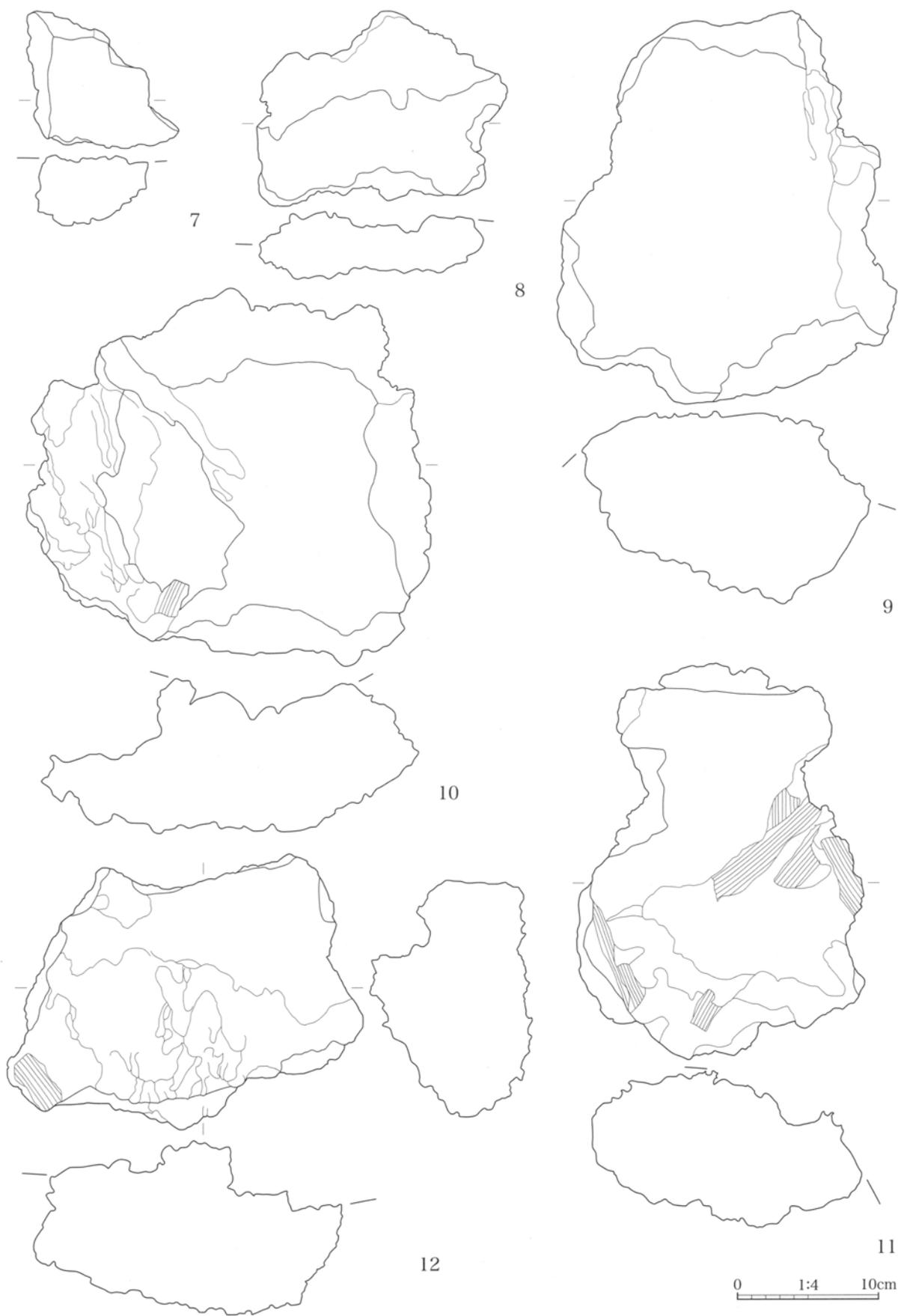
第13図 II区2号炭窯炉壁片出土状況

2号炭窯煙道		2号炭窯前庭部作業場			2号炭窯焼成室	
	炉壁	炉壁	炉壁 (補修) (中段上半、滓化)	炉内滓 (炉内流動滓)	木炭窯目地土	木炭
上段上半 (被熱)		上段上半 (被熱)				
上段下半 (砂鉄焼結)		上段下半 (砂鉄焼結)				
中段上半 (発泡)	1, 2, 3	6 分析資料No.1 7, 8, 9	21	22	25 分析資料No.4	
中段下半 (滓化)	4, 5	10, 11, 12		23 分析資料No.3	26, 27	
下段上半 (滓化強)		13, 14, 15				
下段下半 (滓付き)		16 分析資料No.2 17, 18, 19, 20		24	28	
分析		2		1	1	炭化材樹種同定参照

第 14 図 II区 2号炭窯出土製鉄関連遺物構成図



第 15 図 II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (1)

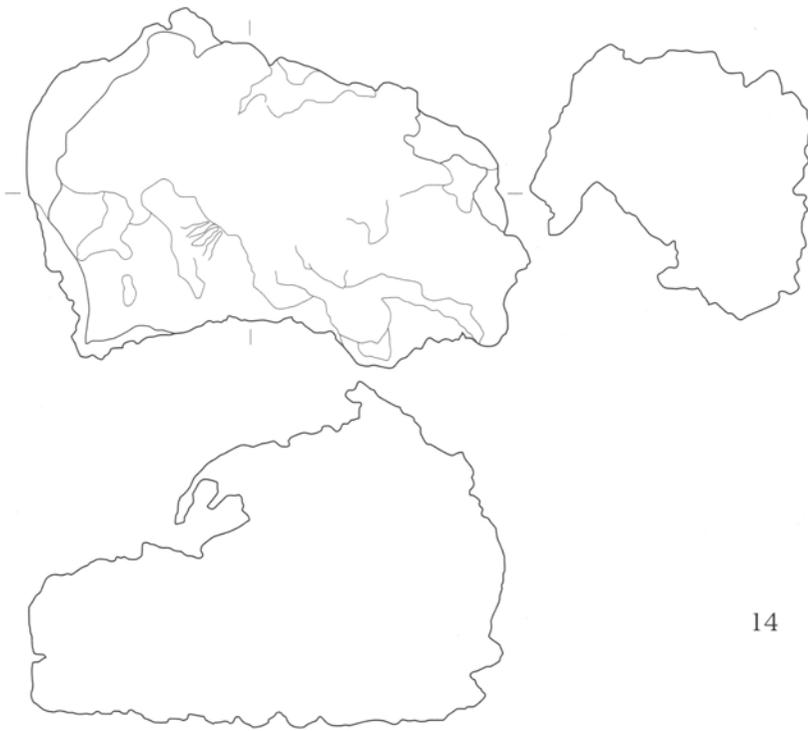


第 16 図 II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (2)



13

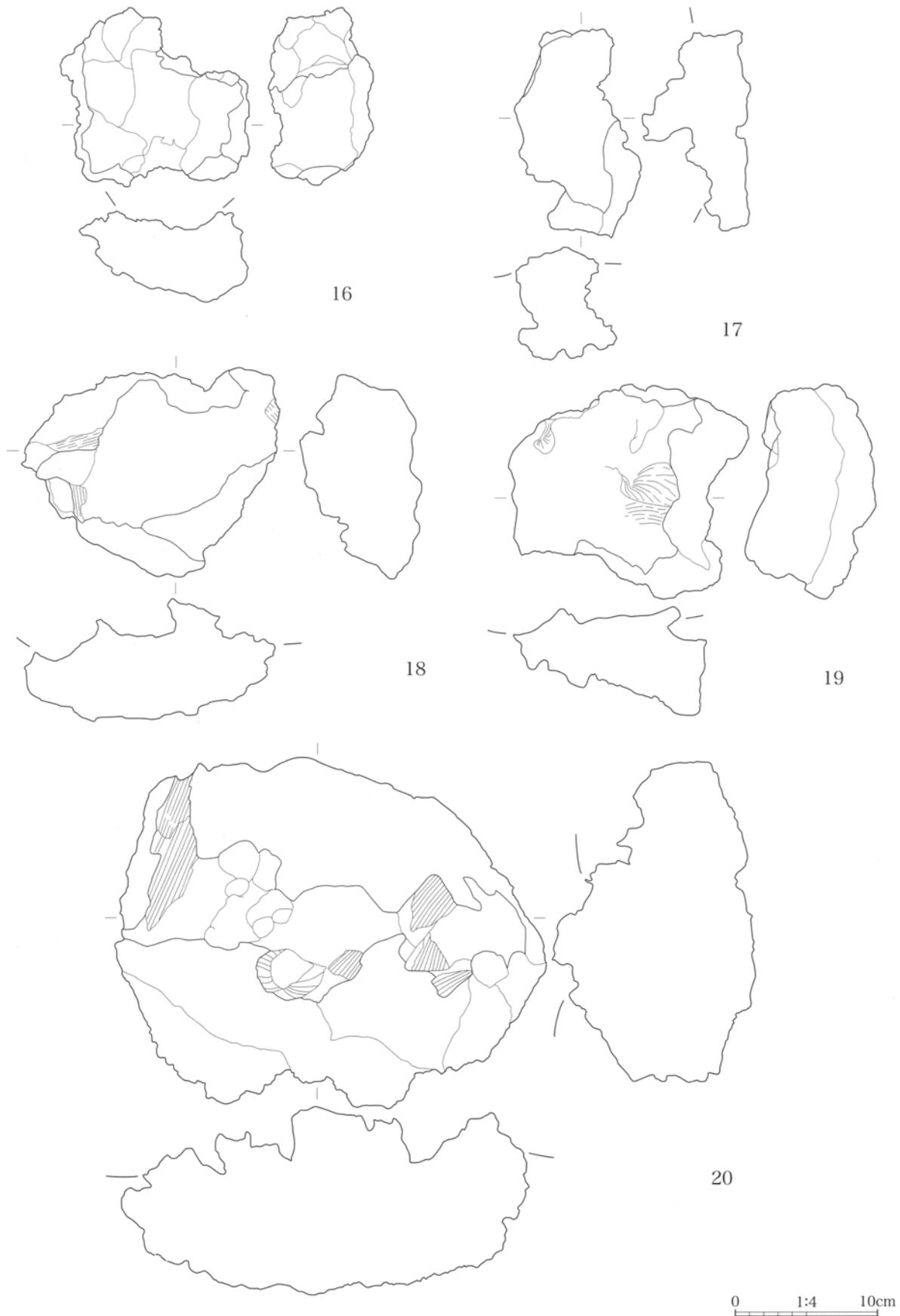
15



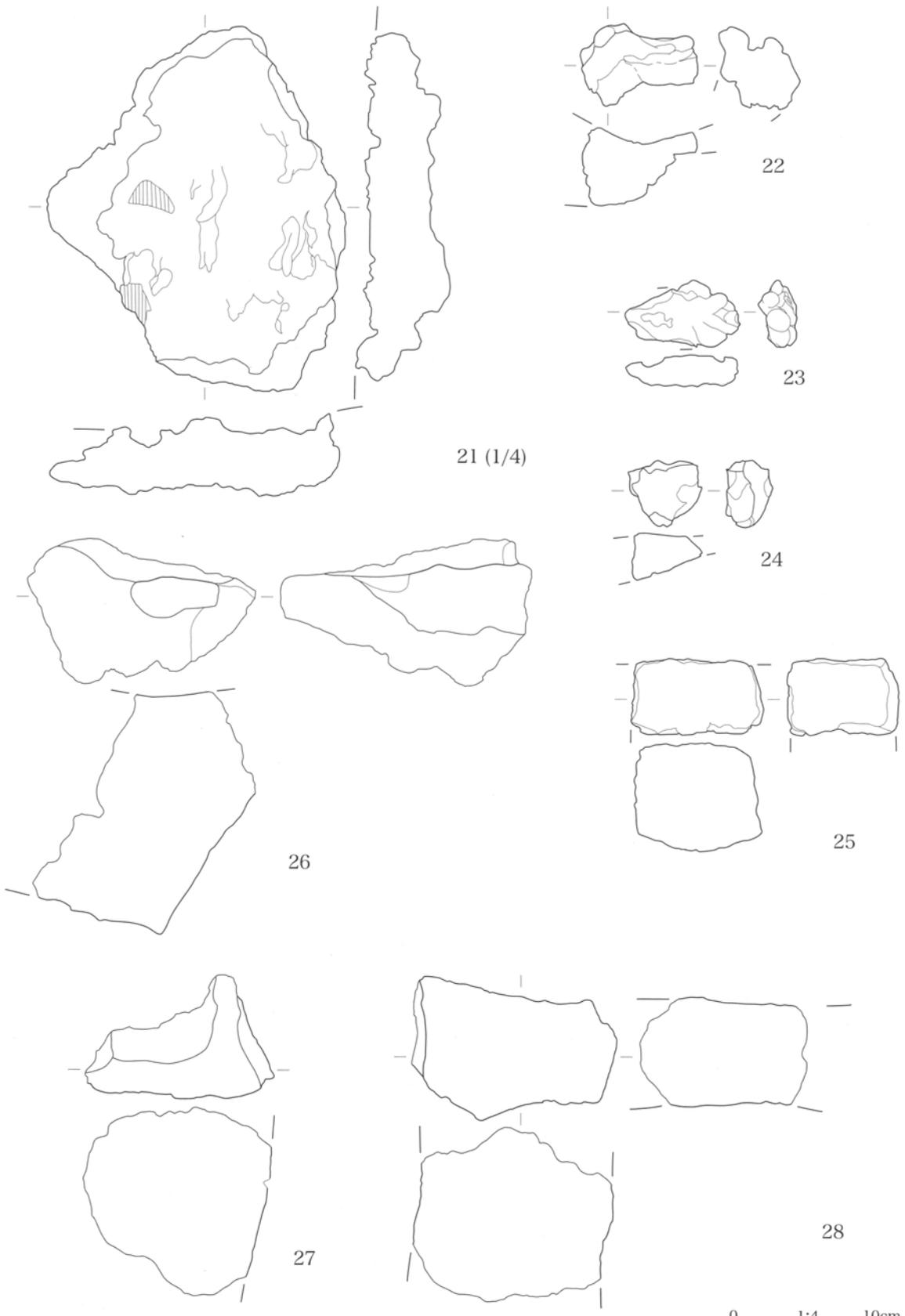
14

0 1:4 10cm

第 17 図 II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (3)



第 18 図 II 区 2 号炭窯出土製鉄関連遺物 (4)



第19図 II区2号炭窯出土製鉄関連遺物(5)

表5 II区2号炭窯出土製鉄関連遺物観察表

構成No.	遺物名	地区	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
			長さ	幅	厚さ					
1	炉壁 (上段下半、砂鉄焼結)	II区 2号 炭窯	12.4	19.9	14.4	780.9	2	なし	内面が薄く滓化・発泡した補修炉壁片。平面形はほぼ直線状で、内面右側部寄りに補修面が露出している。また、補修面周辺や裏面上面には点々と砂鉄が焼結している。外周部は全面破面で下端部は炉壁胎土が滓化して、ツララ状に炉壁溶解物が垂れている。補修壁の厚みは右端部で0.5cm。焼結した砂鉄は0.2mm大前後の粒子でやや角張った形状を持つ。一部、光沢も残る。炉壁胎土は多量にスサを混じえる粘土質で、練りが甘いためか、ひび割れが激しい。	
2	炉壁 (中段上半、発泡)	II区 2号 炭窯	9.6	17.2	12.5	734.9	2	なし	内面側や上面が激しく発泡した炉壁片。裏面は細い平坦面で掘り方の剥離面。下面は炉壁土が滓化しつつあり、小さく垂れ始めている。内面の発泡部分には幅3cm程の木炭痕が上下方向に連続して残る。炉壁胎土はスサ入りで、ひびがやや目立つ。	
3	炉壁 (中段上半、発泡)	II区 2号 炭窯	17.7	20.2	10.0	1703.2	1	なし	内面が黒色ガラス化して発泡から滓化状態を示す炉壁片。平面形は弧状。上端部は粘土単位の接合部のためか水平に途切れている。内面は4cm大を超える木炭痕が下半ほど強い。上面に僅かに段があり、補修炉壁の可能性もある。またその段の付近には砂鉄が焼結する。炉壁胎土は極めて多量のスサを混じえる粘土質。スサ自体が灰化して多量に残されている点も特色となる。	
4	炉壁 (中段下半、滓化)	II区 2号 炭窯	15.2	35.5	5.6	1982.1	1	なし	内面が滓化した中段下半の炉壁片。横方向に長手で、右側部が急激に折れ曲がっており、左側は比較的緩やかな弧状の平面形を持つ。内面の滓化状態は、左側に行くにつれて黒みが強く、特に左端部から13cm程の範囲はイガイガした質感を持つ。それ以外の右側は滓化して垂れも生じ、大型の木炭痕が点在する。裏面の一部に赤褐色の掘り方からの剥離面が残る。胎土は多量のスサ混じりの粘土質。整形炉の炉壁部位としては、大口徑羽口の左側で、ハート型の炉肩部から左側壁の中段下半であろう。	
5	炉壁 (中段下半、滓化)	II区 2号 炭窯	22.5	21.5	11.2	2353.8	1	なし	内面下端部が滓化して、上半の大半が発泡した炉壁片。滓化部分は大きく溶損して窪み、発泡部分は7cm以上の厚みで全体に突出し、4cm大を超える木炭痕が縦方向に主体に残る。上端部は発泡した自然面で、粘土単位の接合部の可能性を持つ。被熱もやや弱めで茶褐色気味。炉壁の平面形はやや弧状。構成No.4よりやや上部の可能性を持つ。上端部の状態は構成No.2、3と類似点あり。外面は面がきれいに残っており、掘り方からの剥離面か。胎土は多量のスサを混じえる粘土質。	
6	炉壁 (上下下半、砂鉄焼結)	II区 2号 炭窯	8.6	11.8	4.5	228.0	4	なし	分析資料No.1 詳細観察表参照。	No.1
7	炉壁 (中段上半、発泡)	II区 2号 炭窯	8.9	9.9	4.7	216.3	1	なし	内面が粗く発泡した炉壁片。外面の8割以上が赤褐色の酸化色で、上端部には砂鉄が焼結して点々と固着する。外面は掘り方からの剥離面。平面形は内側が僅かに弧状で外面の方が弧状が強い。構成No.2と同レベルの炉壁片か。胎土は多量のスサ混じり。	
8	炉壁 (中段上半、発泡)	II区 2号 炭窯	13.4	17.5	4.6	532.3	1	なし	内面が発泡状態からやや進んだ滓化気味の炉壁片。木炭痕や小振りの垂れが残されている。平面形は僅かに弧状。上端左側はくすんだ赤褐色で、ひび割れからの被熱か。炉壁としては極めて薄く、外面は剥離面の可能性大。胎土には粉殻を多量に混じえ、小さなひび割れも目立つ。	
9	炉壁 (中段上半、発泡)	II区 2号 炭窯	27.2	23.9	13.0	2898.3	1	なし	内面が厚く発泡して表面が黒褐色に滓化した炉壁片。平面形はやや逆弧状。発泡した厚みは6cm前後。側部は全面破面で、右側部上半には垂れが目立つ。内面下半の1/3は僅かに溶損が進み窪んでいる。裏面は掘り方からの剥離面。胎土は多量のスサ入りの粘土質。	
10	炉壁 (中段下半、滓化)	II区 2号 炭窯	25.7	28.7	10.6	3144.4	1	なし	内面がツララ状に複雑に滓化した炉壁片。左側部側が大きく窪んでいる。内面上端部から6cm程の範囲は被熱が弱く、壁表面にやや段を持つ。壁厚の半分程が下端部では発泡している。左側部の窪みはひび割れからの脱落部または大口徑羽口の脱落痕の可能性を持つ。表面は滓化して垂れが激しい。炉壁全体の平面形はきれいな弧状。外面上半部の酸化色が強く、掘り方からの剥離面を残している。胎土は多量の粉殻を含む粘土質。	
11	炉壁 (中段下半、滓化)	II区 2号 炭窯	27.8	20.2	10.2	2733.8	1	なし	内面の上中下で質感の異なる炉壁片。上部は分厚く発泡し、中段下半は大型の木炭痕が目立つ黒色ガラス質層。下端部から5cm程は一段窪んでおり溶損が進む。中段の木炭痕は部分的に明瞭で、長さ10cmを超えるものや5cmを超えるものなどが認められる。上端部寄りの裏面は、ひび割れからの被熱のためか、くすんだ赤褐色。これに接するように砂鉄が点々と焼結する。下半は赤褐色の酸化色で、掘り方からの剥離面。左側部内側は、大型の木炭痕の残るややイガイガした層。炉壁胎土は他と同様。	
12	炉壁 (中段下半、滓化)	II区 2号 炭窯	17.2	24.0	12.0	2741.9	1	なし	内面が強く滓化して上半部が平板となった炉壁片。内面上端部は発泡しており、滓の付着が見られない。上半部の表面には1~2cm大の錆化した鉄粒が少なくとも2ヶ所に固着する。下半部分は徐々に溶損して窪む。炉壁の平面形は緩やかな弧状。外面はくすんだ酸化色で、下端部はひび割れからの被熱のためか、やや紫紅色気味。胎土は多量のスサを混じえる粘土質。	
13	炉壁 (下段上半、滓化強)	II区 2号 炭窯	17.0	30.7	13.3	3073.7	1	なし	内面が10cm程の厚さに黒色ガラス化して大きく張り出す炉壁片。直径2~3.5cm程の棒状の木炭痕が横方向に連続的に残る。木炭痕は最大15cmを超える。木炭痕の表面には広葉樹材と推定される筋目が確認される。内面に張り出したガラス質層は、上下で途切れ気味で、特徴的。炉壁全体の平面形はきれいな弧状。裏面左寄りにはひび割れからの被熱、または、大口徑羽口の装着位置と関係するためか、くすんだ酸化色。胎土は多量のスサが混じる粘土質。小さなひび割れも発達している。	
14	炉壁 (下段上半、滓化強)	II区 2号 炭窯	17.1	25.2	18.0	3697.8	1	なし	前者に似た部位が呈される炉壁片。個々の形態は異なるが、中段の炉壁溶解物の張り出しが目立つ。内面の左下端は大きく溶損して、中段には本来の炉壁表面から13cm近い厚みで、炉壁溶解物が突出する。炉壁の平面形はきれいな弧状。外面はきれいな面をなし、掘り方からの剥離面か。胎土はスサ入りの粘土質。	
15	炉壁 (下段上半、滓化強)	II区 2号 炭窯	26.0	20.2	11.9	2024.6	1	なし	右側部の7cm程が大きく内側に折れ曲がった炉壁片。内面は全体に滓化して、4cm大前後の木炭痕が中段以下に密集する。上端部から約5cm下に滓の突出部が水平方向に走る。炉壁の平面形は緩やかな弧状。胎土は他と同様。内面右下端に木口を示す木炭痕が残りかなり大型の木材をミカン割りして炭材として使っていることがわかる。材は広葉樹。なお、右側端部が折れ曲がっているのは、操業直後に炉体の一部が解体されているためか。	
16	炉壁 (下段下半、滓付き)	II区 2号 炭窯	9.5	9.1	4.4	306.9	1	なし	分析資料No.2 詳細観察表参照。	No.2
17	炉壁 (下段下半、滓付き)	II区 2号 炭窯	14.1	8.3	7.6	549.2	1	なし	接合こそしないが、質感の面では構成No.16と極めてよく似た炉壁片。内面には木炭痕が目立つ炉内滓が6cm以上の厚みで固着する。木炭痕と破面がほぼ共存する。外面に残る炉壁は灰黒色でスサ入り。平面形は弧状。	

構成No.	遺物名	地区	計測値(cm)			重量(g)	磁着度	メタル度	備考	分析番号
			長さ	幅	厚さ					
18	炉壁 (下段下半、滓付き)	II区 2号 炭窯	14.2	17.7	7.8	1424.7	2	なし	やや大型の炉壁片。内面の木炭痕の激しい厚い滓層は構成No.16~17、並びに、20の一部とよく似ている。木炭痕は2.5~4cm大。内面の中央部に石英質の石粒を含む黒色ガラス質滓が張り付いている。木炭痕の一部に酸化土砂が厚く、僅かに黒錆も確認される。平面形はきれいな弧状。外面は褐色から灰黒色に被熱した掘り方からの剥離面。炉壁胎土は多量のスサ入り。外面に目立つ錆部分は二次的なもの。	
19	炉壁 (下段下半、滓付き)	II区 2号 炭窯	11.1	11.9	5.0	514.3	1	なし	内面に流動状の滓が面的に流れ下っている炉壁片。滓表皮はくすんだ紫紅色となり、流れじわも生じている。流動滓の直下は錆色の強い炉内滓で、右方向に向かい厚みを増す。流動状の滓は炉壁土由来の粘土質。炉壁胎土はややスサが少なめ。	
20	炉壁 (下段下半、滓付き)	II区 2号 炭窯	23.7	30.2	14.2	6760.0	1	なし	内面に木炭痕の激しい炉内滓が10cm以上の厚みで遺存する大型の炉壁片。内面の下端部には炉壁粉や滓片を混じえる付着物があり、ほぼ炉床と接していたことがわかる。木炭痕は滓内部にも深く食い込んでおり、最大は7cmを超える。木炭の断面形はミカン割り状と丸棒状のものが混在するが、ミカン割り状のものが主体。滓質はややガサガサしており、部位により差がある。炉壁自体の平面形はきれいな円弧状。外面は掘り方からの剥離面で、内側に炉底塊が生じていたためか、水平方向に色調の変化を生じている。中段上半がくすんだ紫紅色で炉底塊の頂部の高さを反映している可能性が高い。下端部から約15cmの高さの炉壁土は多量のスサを混じえた粘土質。ひび割れの一部に砂鉄が僅かに焼結する。外面の下端部は内側に向かい徐々に丸みを持ち、炉底部を反映している。	
21	炉壁 (補修、中段上半、滓化)	II区 2号 炭窯	24.3	20.2	5.9	1884.2	1	なし	左側面の破面に滓層が重層する扁平な炉壁破片。内面は右側ほど強く滓化して、細い垂れが残されている。左半分の滓はややイガイガした滓部で流動性が低い。内面下端部の滓は錆色で、やや内側に突出気味。左側部の補修面は、当初の面と補修面に張り付いた滓部が肌別れしており、両者の間に隙間が生じている。炉壁の平面形は極めて僅かに弧状。炉壁胎土は初殻を多量に混じえ、全体にくすんだ被熱状態となる。	
22	炉内滓 (炉内流動滓)	II区 2号 炭窯	5.9	4.1	4.0	81.2	1	なし	右方向に向かい幅0.5cmほどの細長い流動滓が柱状に突出している炉内流動滓破片。左右の端部が破面で、下面は炉壁に接した剥離面。滓の左半部は炉内滓そのもので錆色が強い。流動滓は磁着が弱くマグネタイト化していない。炉底塊から垂れ落ちたものである。	
23	炉内滓 (炉内流動滓)	II区 2号 炭窯	5.8	3.2	1.7	37.8	1	なし	分析資料No.3 詳細観察表参照。	No.3
24	炉内滓 (炉内流動滓)	II区 2号 炭窯	3.6	3.4	2.3	23.3	1	なし	炉壁表面から剥離したと推定される流動状の炉内滓破片。ややガス質で、表皮は微細な流れじわを持つ紫紅色。構成No.19の炉内滓の一部とほぼ同質。下面には炉壁の剥離面が弧状に残されている。	
25	木炭窯、目地土	II区 2号 炭窯	6.7	3.9	5.5	128.0	2	なし	分析資料No.4 詳細観察表参照。	No.4
26	木炭窯、目地土	II区 2号 炭窯	11.4	7.3	12.1	406.5	2	なし	上面に帯状の削り痕を残す、やや厚みを持った木炭窯の目地土破片。内面は浅い弧状に窪み吸炭が強い。左側部から下面は新しい破面。胎土は粘土質。右側部下半は弧状の自然面で、なんらかの掘り方に接していた可能性あり。上面の削り痕は幅4cm弱。本来は木炭窯の焼き口部を形成していた目地土か。表面全体が濃淡はあるが吸炭している。	
27	木炭窯、目地土	II区 2号 炭窯	9.6	6.3	9.6	243.8	2	なし	右側面と下面に緩やかな弧状の接合痕を残す木炭窯の目地土破片。内面は吸炭して僅かに垂れ気味。上面と左側部は新しい破面。裏面はほぼ生きており厚み方向は9.5cmほどとなる。胎土は僅かに植物質の入る粘土質。練りはかなり甘い。	
28	木炭窯、目地土	II区 2号 炭窯	10.2	6.7	8.7	408.3	1	なし	側部5面が接合痕となる木炭窯の目地土破片。各面がやや弧状となるのは石材等に接していたためか。下面の一部と芯部が吸炭気味で、側面は基本的に灰色から暗褐色。胎土は僅かに植物質を含む粘土質。植物は混和というよりも粘土採取地で自然混入したのか。	

II区3号炭窯（第20図、PL4）

（111～118，-060～-067）グリッドに位置する。7号炭窯の焼成室北端を掘り込んで構築されている。

全長は、8.64mを測り、長軸方向はN-46°-Wを示す。焼成室は長軸5.22m、最大幅2.56mで、焚口に向かってすぼまる隅丸の羽子板形を呈する。天井部は崩落しているが、側壁は湾曲して立ち上がり、残存高は1.15mである。燃焼室北西コーナーにはトンネル状の煙道が設けられており、径0.62×0.49mの煙出しが残存する。煙道の基部は燃焼室床面から20cmほど高い段から穿たれている。煙道断面には操業回数に対応すると考えられる焼土面が形成されている。

作業場はやや胴の張る長円形で、長軸3.42m、短軸2.76mである。断面はU字形に緩やかに開く。

なお、確認面からの深度は作業場で1.67m、焚

口1.45m、焼成室1.40mである。

燃焼部の堆積土には4面の炭化物層が認められ、本窯では4回以上の操業が行われたことがうかがえる。

1回目の操業面は2°の傾斜で奥部へ向かって上っている。

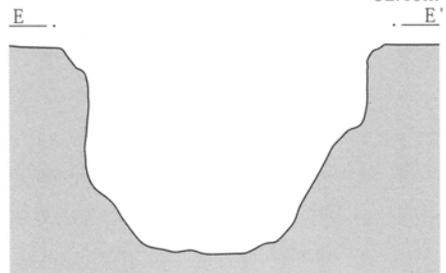
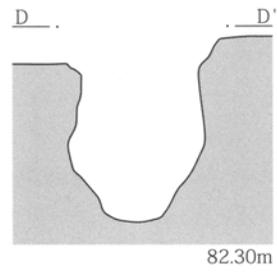
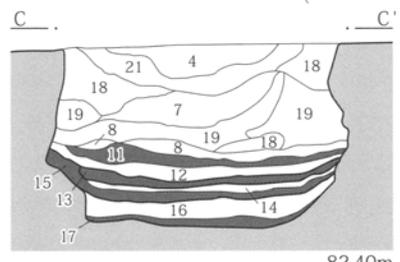
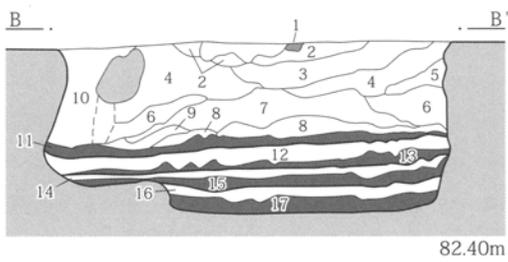
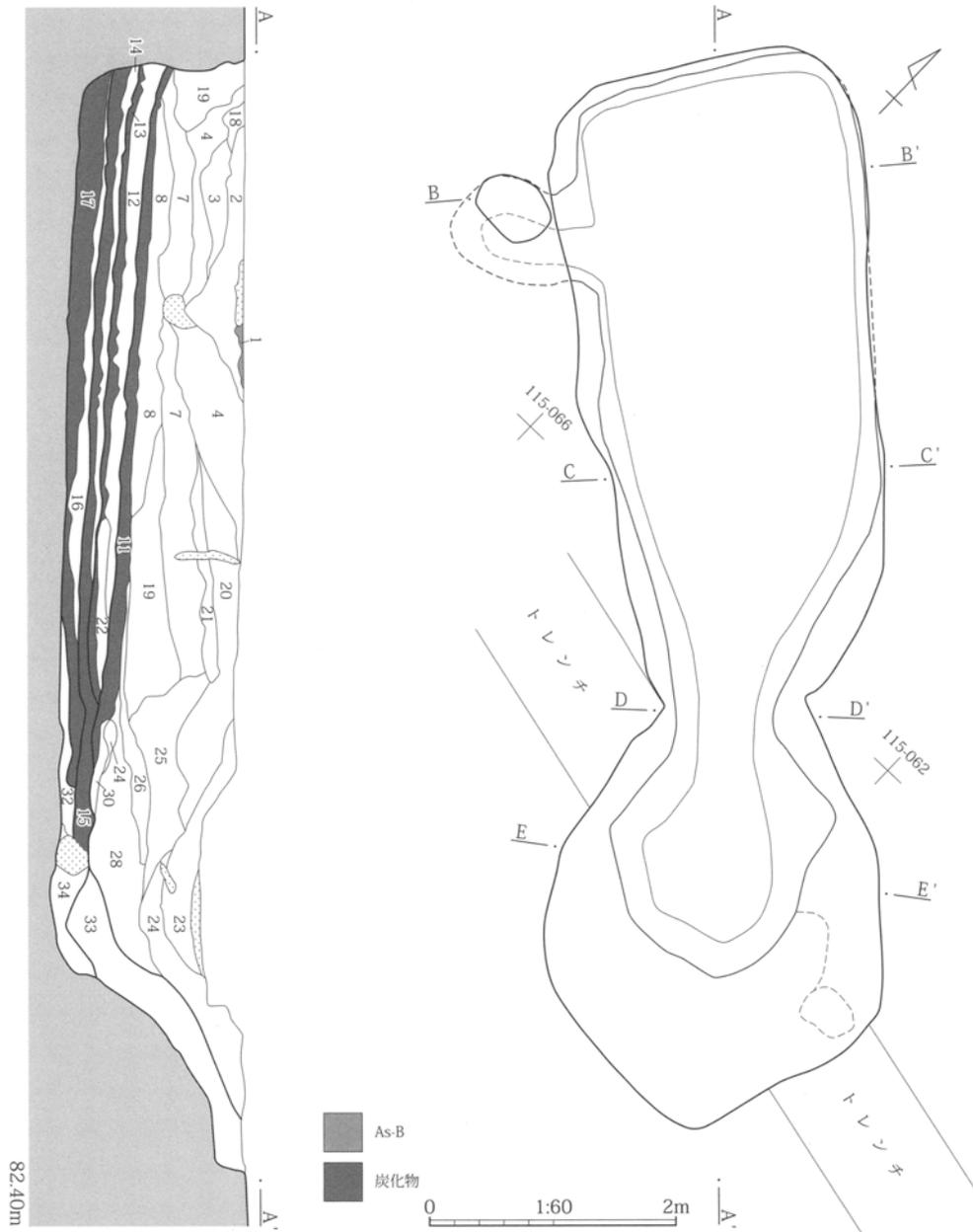
2回目以降の操業面は炭化物層上面に堆積した薄い天井崩落土上面を整地している。傾斜は3～4°前後である。燃焼面および作業場は2回目以降、徐々に堆積・整地の繰り返しにより上位に移行している。

操業終了後の堆積土は、焼成室下半は天井部崩落土が主体となり、上半部は崩落後の窪地への流入土である。作業場は流入土がレンズ状に堆積している。

本遺構の時期を特定しうる遺物の出土はないが、覆土の最上位にはAs-Bの純層の堆積が確認されたことから、平安時代の所産と考えられる。

3号炭窯土層

- 1 As-B層（一次堆積と考えられている）
- 2 黒褐色土 ローム粒「小」を5～10%不均質に含む。
- 3 黒褐色土 ローム粒「小」10%、焼土粒「小」を5%含む。3～5mmの炭片5%以下含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒「少」を不均質に20%含む。5mm程度の木炭片を微量含む。
- 5 黒褐色土 2層に比してローム粒「少」を多く（20%）含む。
- 6 暗褐色土 ローム粒「小～中」を不均質に5～30%含む。
- 7 褐色土 ソフトローム2次堆積土を主体とし、ハードローム（BP下BB上）小塊を20%含む。
- 8 黄褐色土 BP下BB上のハードローム2次堆積土。煙道壁面を不均質に5%含む。
- 9 褐色土 ローム粒と褐色土の均質な混土層。煙道内流入土。しまりなく軟らかい。
- 10 ハードローム粒と焼土「小」粒、炭片の混土層。
- 11 黒みを帯びた焼土小粒と灰、8層の混土層。（煙道部分によく焼土化する）
- 12 14層と同じ。ハードローム（暗色帯より上位）を主体とし、焼土粒「小～大」20%不均質に含む。
- 13 11層に類似するが、下面は11層に比してやや良く焼ける。
- 14 12層と同じ。
- 15 灰色土とローム粒「小～大」、炭、灰の混土層。下面はよく焼土化する。
- 16 ハードローム（暗色帯上位）を主体とし、焼土粒「小～大」30%含む。
- 17 ハードローム粒小～大、焼土粒「小～大」の混土層。炭を20%含む。
- 18 黒褐色土 ローム粒「少」5%含む。
- 19 黄褐色土 ハードロームの二次堆積土。締まりなく軟らかい。暗褐色土粒「小」を10%含む。
- 20 黒褐色土 ローム粒「小」を5～10%不均質に含む。焼土粒「小」を均質に5%、炭細片を微量含む。
- 21 黒褐色土 ローム粒「小」10%、焼土粒「小」を5%含む。3～5mmの炭片5%以下含む。
- 22 2層に焼土粒「小」を均質に5%、炭細片を微量含む。
- 23 黒褐色土 ローム粒「小」、炭細片5%含む。
- 24 黒褐色土 ローム粒「中」、炭小片10%含む。
- 25 黒褐色土 ロームを主体とし、20層を均質に20～30%含む。ロームと上層の漸移層的な土。
- 26 11層の上に位置する。11層に似るが、土がやや多く、分岐する。この様子は2号窯と同じ。
- 28 ローム漸移層（25層）にローム粒「小～大」を30%含む。焼土粒「中」5%含む。しまりなく軟らかい。
- 30 28層に似るが、ローム粒がやや少ない。
- 32 暗色帯大の粘性ロームを主体とし、焼土粒「小～中」10%含む。
- 33 25層にローム塊「小」を不均質に5%、下部に焼土粒「小」を5%含む。
- 34 33層と暗色帯下ローム小塊の混土層。



第20図 II区3号炭窯

II区6号炭窯（第21・22図、PL 5）

（101～106，-059～-068）グリッドに位置する。7号炭窯燃焼部を掘り込んで築かれ、また燃焼部北壁中央を2号炭窯により破壊されている。

全長は、9.67mを測り、長軸方向はN-110°-Wを示す。焼成室は長軸7.82m、最大幅2.44mで、焚口に向かってすばまる隅丸の羽子板形を呈する。天井部は崩落しているが、側壁は湾曲して立ち上がり、残存高は1.07cmである。燃焼室南西コーナーにはトンネル状の煙道が設けられており、径0.42m前後の煙出しが残存する。煙道基部は、焼成室側壁から大きく外側に膨らんで掘り込まれており、底面と奥壁の焼土化が著しい。

作業場は、先行する7号炭窯の作業場を再利用しているため、他の炭窯と異なり燃焼室に直交する方向に設けられている。流線形ともいえる平面形で、長軸4.52m、短軸1.78mである。出入り口側は平面・断面ともV字形の形状で、一段20～30cm前後の階段状の削り出しが認められた。作業場奥部はU字形に立ち上がる。7号炭窯との境界の壁面中位には、長さ30cmほどの長円形の川原石が並んで検

出され、壁面の補強的な性格が窺われる。

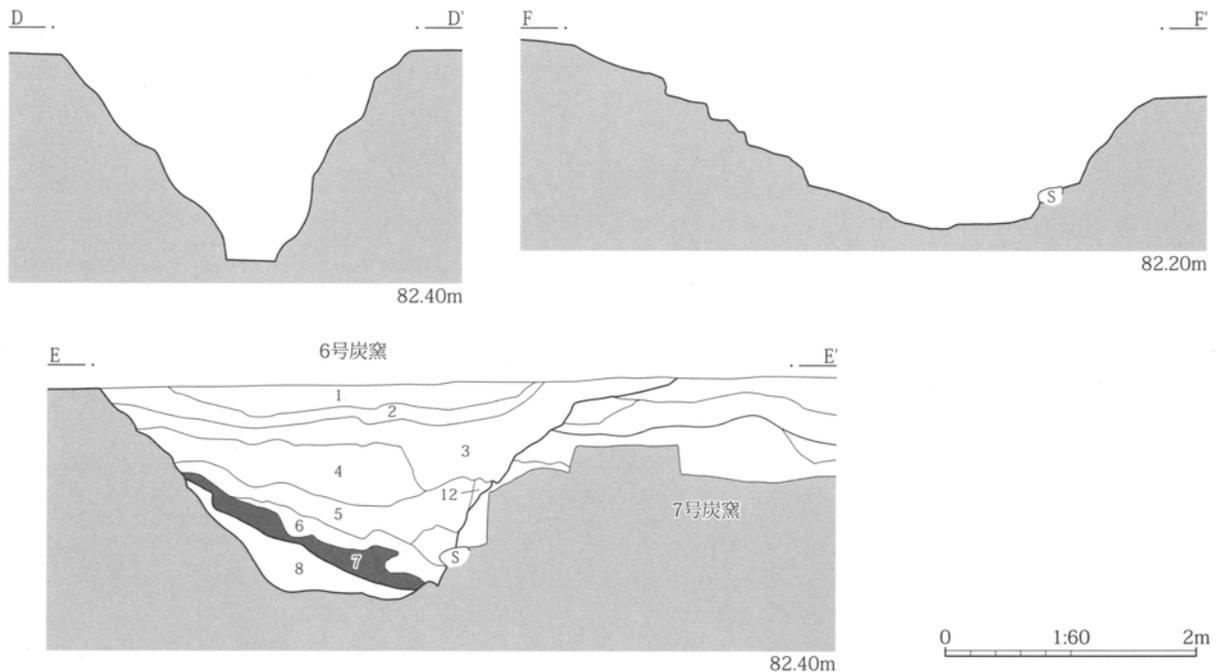
なお、確認面からの深度は作業場で1.56m、焚口1.66m、焼成室1.48mである。

燃焼部の堆積土には3面の炭化物層が認められ、本窯では3回以上の操作が行われたことが窺える。

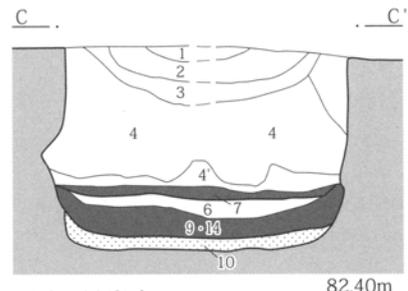
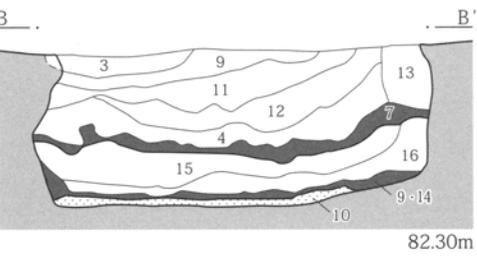
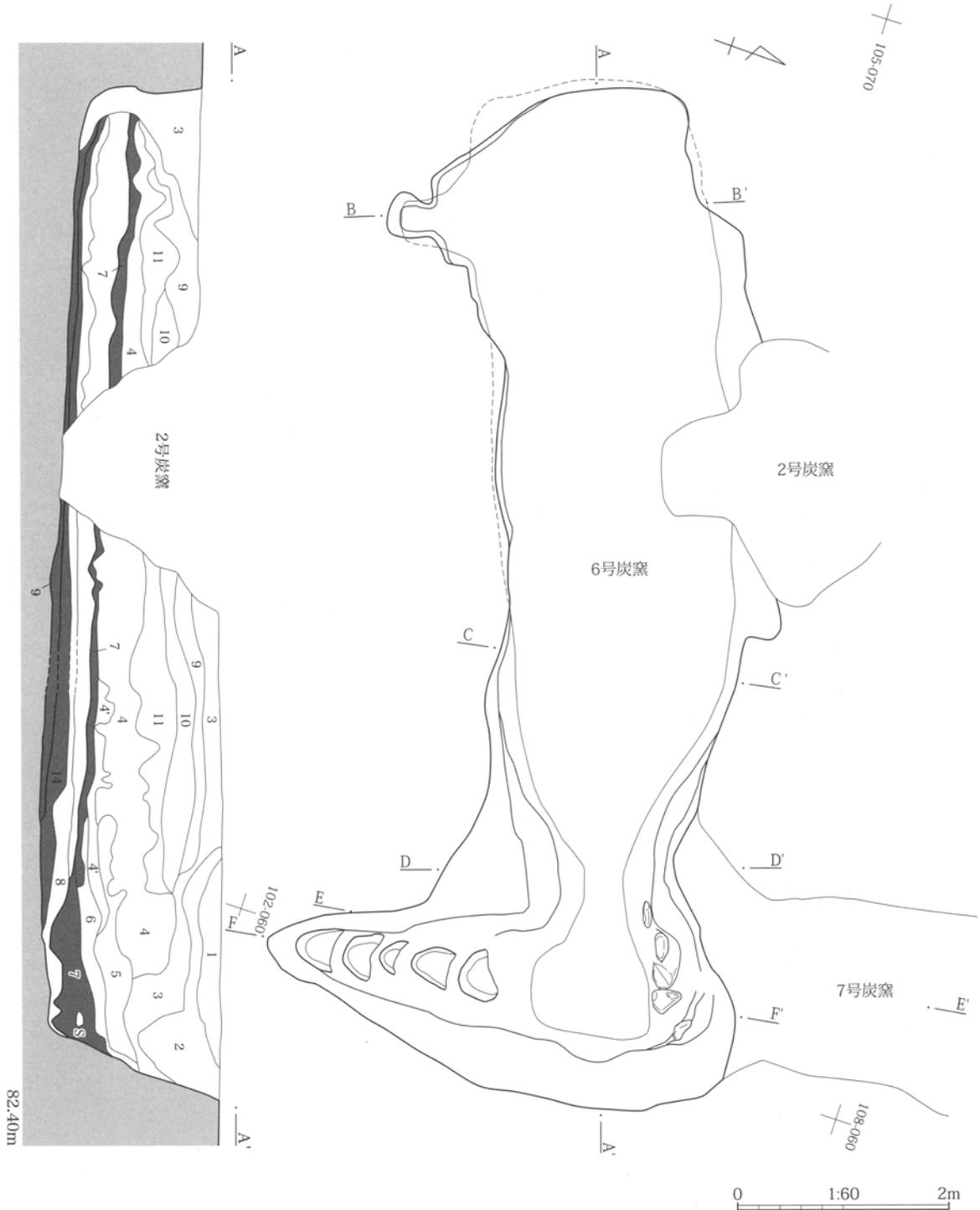
1回目の操作面は3.5°の傾斜で奥部へ向かって上っている。床面は焼土化が著しく、部分的にひび割れ状を呈する。

2回目以降の操作面は、炭化物層上面に堆積した薄い天井崩落土上面を整地している。傾斜は、3°～4.5°前後である。また、作業場の1・2面は共通した面を使用し、3面は堆積物により上位に移行している。

操業終了後の堆積土は、焼成室下半は天井部崩落土が主体となり、上半部は崩落後の窪地への流入土である。作業場は流入土がレンズ状に堆積している。本遺構の時期を特定しうる遺物の出土はない。本遺構覆土にはAs-B軽石の堆積は認められなかったが、覆土の状況や他遺構との関連から近接する時期に築かれた遺構と考えられる。



第21図 II区6号炭窯(1)



■ 炭化物

第 22 图 II 区 6 号炭窯 (2)

6号炭窯土層

- 1 暗色帯下のローム層。粘性あり。
- 2 6号炭窯3層と区別がつきにくい部分があるが、本炭窯内ではローム、暗色帯下ローム粒「小～中」、炭片、焼土粒を20%含む。
- 3 ローム漸移層。焼土小粒微量含む。
- 4 ローム漸移層を主体とし、ローム粒、焼土粒「小～中」、炭片10%含む。
- 4' 4層に比してロームの含有多。
- 5 ローム漸移層2次堆積土。を主体とし、ローム粒「小～中」微量含む。
- 6 ローム漸移層を主体とし、ローム粒「小～大」20%含む。
- 7 炭化物

II区7号炭窯（第23図、PL6）

（102～114，-059～-063）グリッドに位置する。燃焼室先端を3号炭窯に、作業場の大半を6号炭窯により破壊されており、全体像は把握できない。全長は、11.65m以上、長軸方向はN-15°-Wを示す。焼成室は長軸7.3m以上、最大幅1.85mで、焚口に向かってややすぼまる隅丸の羽子板形を呈する。天井部は崩落しているが、側壁は湾曲して立ち上がり、残存高は1.45cmである。

燃焼室北東コーナーにはトンネル状の煙道が設けられており、径43cm前後の煙出しが残存する。煙道基部は、焼成室底面から60cmほど高い段から掘り込まれており、全体的に焼土化が著しい。

焚口は、下端で0.58mと狭い。作業場は西壁を6号炭窯により破壊された後、再利用されているため構築当時の状況から変容している可能性もあるが、概ね現況に近いと想定できる。長軸4.26m、短軸推定2.4mの流線形を呈する。階段状の段差が本遺構に伴うかは不明である。

7号炭窯土層

- 1 暗褐色土とローム漸移層の混土層。
- 2 1層に焼土粒を10%含む。
- 3 暗褐色砂質土 焼土粒「小～大」10%程含む。
- 4 褐色帯下ロームを主体とし、焼土粒「小～中」20%含む。下面に木炭層薄く入る。下面が床面（6面）
- 5 4層と同様で、焼土粒「小～中」を30%含む。下面に木炭層薄く入る。下面が床面（5面）
- 6 暗色帯上のロームを主体とし、焼土粒「小～中」10%含む。中に2層の部分的に薄い木炭層を含む。
- 7 ローム・灰・木炭混土層。床面堆積物、下面が床面（4面）
- 8 ロームと焼土の混土層。

- 8 6層に類する。
- 9 炭、焼土、黒色土が主体。ローム小粒を含む。
- 10 均質な焼土層。さらさらした焼土。
- 11 木炭と炭の混土層。床面堆積物。
- 12 8層に類する。
- 13 タール状物質を含んだ窯壁粒「小～大」を主体とし、10%木炭を含む。
- 14 2面操業時の堆積土。下面が床面。黒変や焼土化はあまり認められない。ローム小塊やローム粒「中～大」10～20%含む。木炭も5%程と少ない。暗褐色土層は場所により灰が少ない。
- 15 ローム塊（暗色帯より上）「小～中」を主体とする。
- 16 15層に焼土粒「小～大」を20～30%含む。

確認面からの深度は作業場で1.77m、焚口1.56m、焼成室1.59～1.49mである。

燃焼部の堆積土には6面の炭化物層が認められ、6回以上の操業が行われたことがうかがえる。

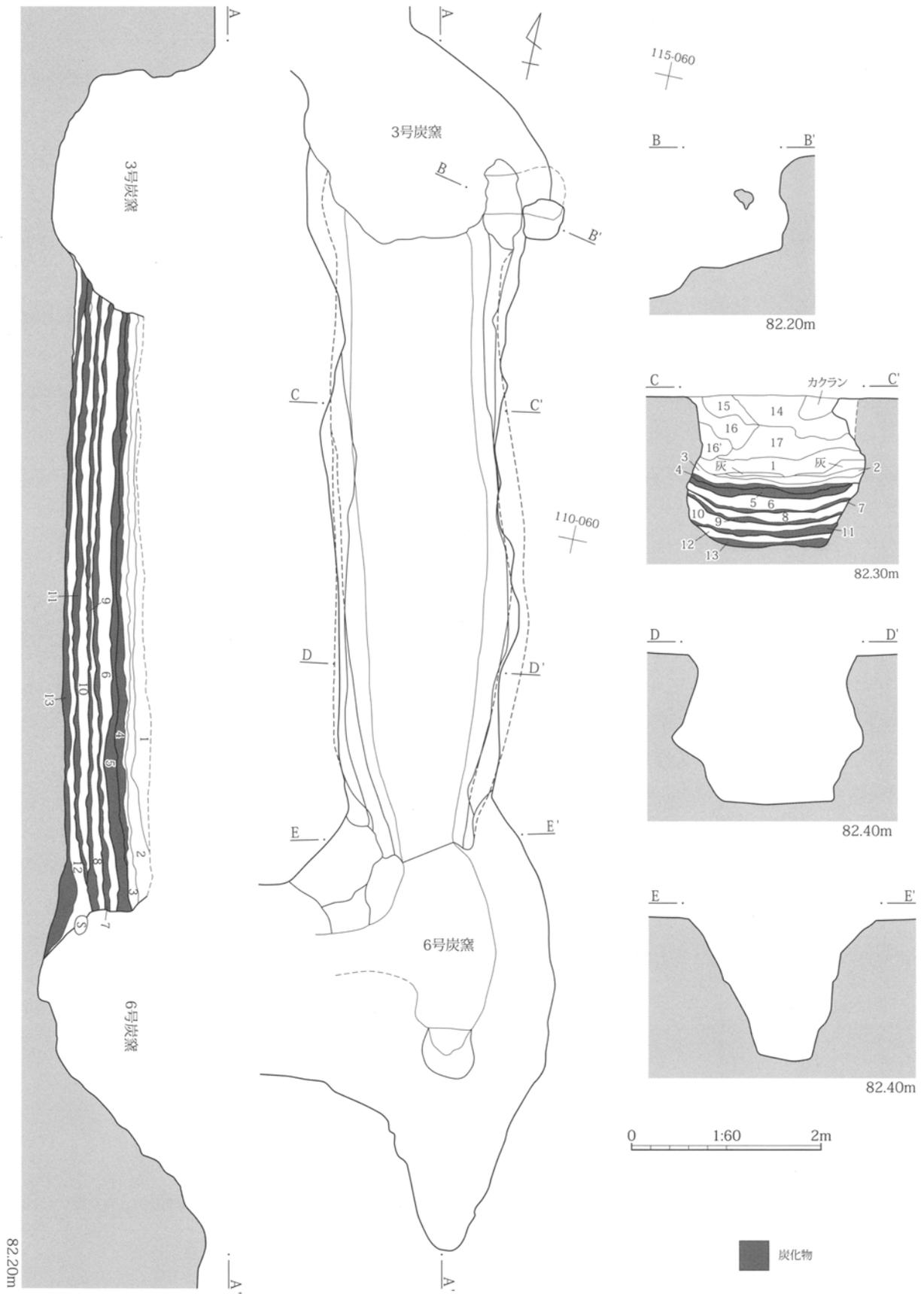
1回目の操業面はほとんど傾斜がない。床面は焼土化が著しく、部分的にひび割れ状を呈する。

2回目以降の操業面は炭化物層上面に堆積した薄い天井崩落土上面を整地している。傾斜は1回目と同様である。当初の操業面から最終操業面では80cmもの高低差が生じている。作業場は6号炭窯により破壊されているため不明であるが、操業を重ねるたびに上位に移行していると考えられる。

操業終了後の堆積土は、焼成室下半は天井部崩落土が主体となり、上半部は崩落後の窪地への流入土である。作業場は上述のとおり不明である。

本遺構の時期を特定しうる遺物の出土はない。本遺構覆土にはAs-B軽石の堆積は認められなかったが、覆土の状況や他遺構との関連から近接する時期の遺構と考えられる。

- 9 7層と同じ。床面堆積物、下面が床面（3面）
- 10 8層と同じ。
- 11 木炭と灰の混土層。床面堆積物、下面が床面（2面）
- 12 8層と同じ。
- 13 タール状物質を含んだ窯壁粒「小～大」を主体とし、10%木炭を含む。下面が床面（第1床面）
- 14 暗色帯下のローム層。粘性あり。
- 15 榛名軽石を含む黒色土。6号炭窯と同じ。
- 16 ローム漸移層①。
- 16' ローム漸移層②。
- 17 ローム漸移層2次堆積土。を主体とし、ローム粒「小～中」微量含む。



第23図 II区7号炭窯

II区8号炭窯（第25図、PL6・7）

II区中央北、県側道との接点に当たる、(133～139, -048～-054)グリッドに位置する。他の重複しあう4基の地下式木炭窯から離れて単独で存在する。

全長7.78mを測り、長軸方向はN-45°-Wを示す。焼成室は長軸4.48m、最大幅3.06mで、焚口に向かってすぼまる胴張りの羽子板形を呈する。奥壁周辺の壁面は内湾する掘削が行われており、断面はカマボコ形を呈すると考えられる。北東コーナー部分で検出された煙道はトンネル状の掘り込みで、径0.48×0.40cmの長円形の煙出しが残存する。焚口は下端で幅0.62m、作業場はやや中央が張る流線形で、長さ3.3m、最大幅2.24mである。

燃焼部の堆積土には4面の木炭層が検出され、本窯では4回以上の作業が行われたことが確認された。

燃焼室の壁面は高熱の影響で、焼土化が著しい。

1面目の作業時は、作業場は焚口部に向かい13.5°の傾斜で下り、焚口部を境に焼成室の底面はほぼ平坦となる。木炭層は極めて薄い。

2面目の焼成室底面は天井崩落土上面を整地しているが、作業場から焚口にかけては1面と共通した面を使用している。焼成室の傾斜は4.5°である。

8号炭窯土層

- 1 黒褐色土 ローム粒「小」、焼土粒「小」5%以下含む。炭化物粒3mm。
- 2 暗褐色土 ローム粒「中～大」20%含む。焼土粒「小」5%以下含む。
- 3 黒色土 ローム粒「小」わずかに含む。木炭片5mm～1cm5%不均質に含む。
- 4 暗褐色土 ローム粒「中」20%含む。
- 5 黒褐色土 ローム上の漸移層。焼土粒「小」と木炭細片(5mm～1cm)不均質に10%含む。
- 6 黒褐色土 5層に比して黒味が強い。
- 7 ハードローム崩落土。
- 8 黒色灰層 焼成による灰層。木炭片不均質に20～30%含む。
- 8' 15層に焼土粒「小～中」木炭片を10%含む。下面が4面床面。
- 9 にぶい赤褐色土 焼土粒「中～大」を主体とし、6層を10%ほど不均質に含む。(上面が4面床面)

3面は、30cm前後の整地土上を使用している。作業場の傾斜は緩まり、焼成室は5°の傾斜を持つ。

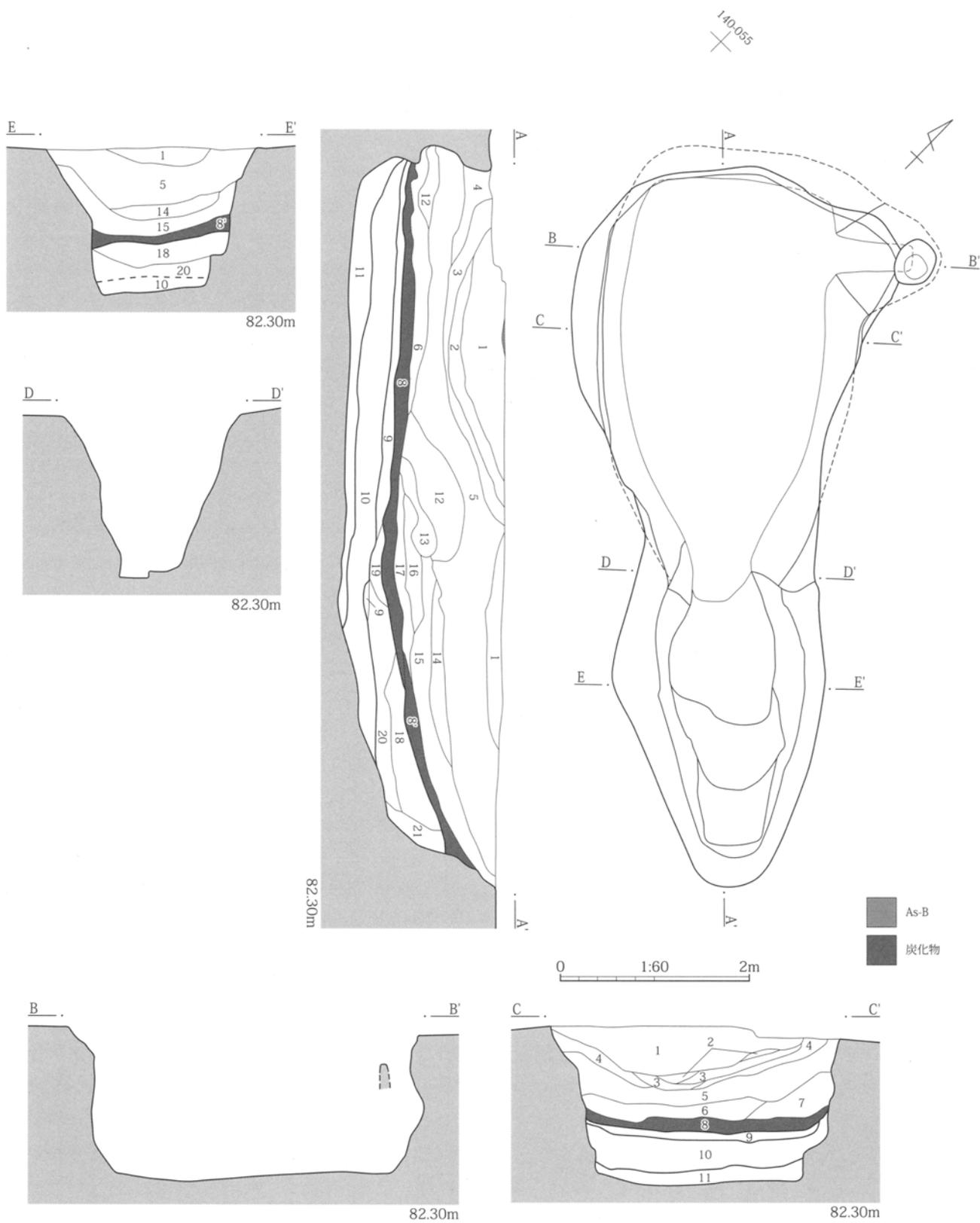
4面の作業場は15cmほどの崩落土上面を整地しており、傾斜は13°。焼成室は3°の傾斜で上る。最終操業面であり、12cm前後の灰・木炭層が残されている。

操業終了後の堆積土は、下部に天井崩落土であるロームが認められるが、上位は崩落後の窪みへの流入土が主となる。

覆土中から、土師器の土製品(1)が出土した。指頭による成整形が施されているが、用途・性格ともに不明である(第29図、PL17)。

本遺構の時期を特定しうる遺物の出土はないが、窪みの最上位にはAs-B層の一次堆積が確認されたことから、平安時代の所産と考えられる。

- 10 明黄褐色砂壤土 ハードローム崩 土層。木炭片1cmを不均質に10%含む。大部1/3に焼土塊「小～中」含む。(天井崩れか)(上面が3面床面)
- 11 にぶい赤褐色 焼土小塊とハードローム小塊の混土層。(上面が2面床面)
- 12 褐色砂壤土 ローム漸移層。
- 13 7層に同じ。
- 14 3層に同じ。
- 15 褐色砂壤土 ローム漸移層。
- 16 15層同様ローム漸移層であるが、色調が明るい。
- 17 15層と焼土焼塊の混土層。
- 18 焼土粒「小～大」ローム塊に15層の混土層。
- 19 8層と焼土の混土層。
- 20 18層に近いが、焼土の量が30%と少ない。
- 21 ハードローム崩落土層。



第24图 II区8号炭窰

2. 土坑型炭窯

土坑型炭窯としたものは、概ね直径1～1.5 m前後の土坑の形状を持つ。伏焼式の「焼成土坑」等と呼称される遺構である。

土坑内の焼土化の状況および覆土中の炭化物や焼土の含有などを基準に認定した。

II区1号炭窯（第25図・PL7）

(114, -038) グリッドに位置する。1.40m×1.18 mの長円形で、深さは38cmを測る。南側を2号溝に切られるが、壁は直角に近い立ち上がりが確認されている。

覆土中には炭化物が混入する。壁の下半部には被熱による焼土化が認められた。また、南端底面には灰が分布している。

遺物は出土しなかったため、時期を特定することは困難だが、地下式の炭窯と関連する遺構であると考えられる。

II区4号炭窯（第25図・PL7）

(140, -079) グリッドに位置する。1.48m×1.12 mの長円形で、深さは5cmと底面のみの残存である。

覆土中には多量の炭化物が混入する。北西の壁の下半部には被熱による焼土化が認められた。

遺物は出土しなかったため、時期を特定することは困難だが、地下式の炭窯と関連する遺構であると考えられる。

II区5号炭窯（第25図・PL7）

(100, -040) グリッドに位置する。底面のみが残存し、0.94m×0.88 mの円形を呈し、深さは8cmを測る。

底面等に顕著な焼土化は認められないが、覆土中には灰・炭化物片が多量混入する。

遺物は出土しなかったため、時期を特定することは困難だが、地下式の炭窯と関連する遺構であると考えられる。

2区9号炭窯（第25図・PL8）

(148, -066) グリッドに位置する。大半を攪乱により失う。残存部の最大幅は1.48mの円形を呈すると考えられる。深さは11cmである。

底面に微弱な焼土化があり、覆土中には灰・炭化物片が多量混入するため、土坑型の伏窯とした。

覆土中から須恵器甕の小破片が出土したが、時期の特定には至らなかった（第29図・PL17）。地下式の炭窯との関連が窺われる。

II区10号炭窯（第25図・PL7）

(098, -064) グリッドに位置する。0.94m×0.82 mの長円形で、深さは13cmを測る。

底面等に顕著な焼土化は認められないが、覆土中には灰・炭化物片が多量混入する。

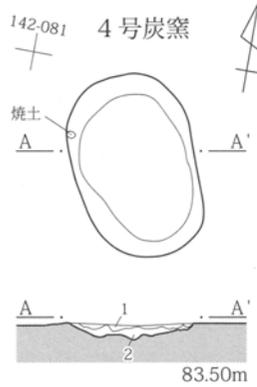
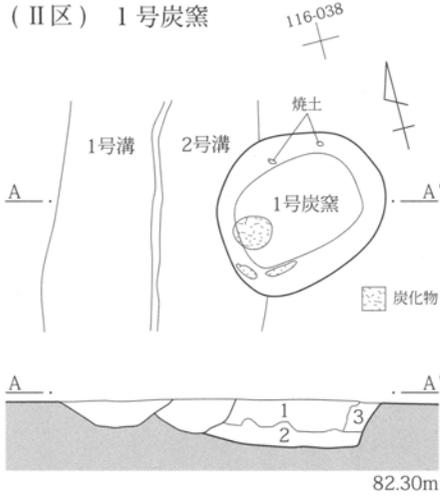
遺物は出土しなかったため、時期を特定することは困難だが、地下式の炭窯と関連する遺構であると考えられる。

2区11号炭窯（第25図・PL8）

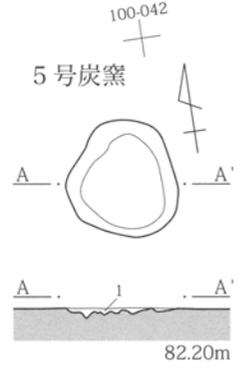
(158, -084) グリッドに位置する。0.94m×0.76 mの長円形で、深さは23cmを測る。

底面には部分的に顕著な焼土化があり、炭化物の分布も認められた。覆土中には灰・炭化物片が多量混入する。遺物は出土しなかったため、時期を特定することは困難だが、地下式の炭窯と関連する遺構であると考えられる。

(II区) 1号炭窯

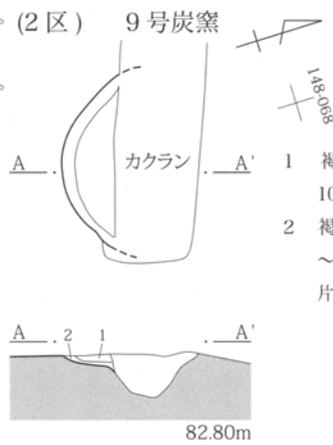
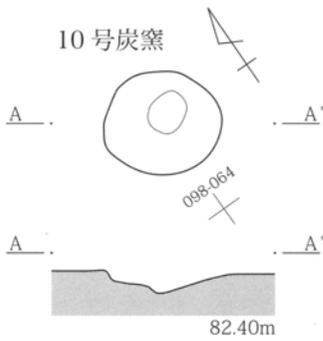


- 1 茶褐色粘質土 ローム混じり。炭(径4mm程度)40%混入。
- 2 茶褐色粘質土 地山の土。

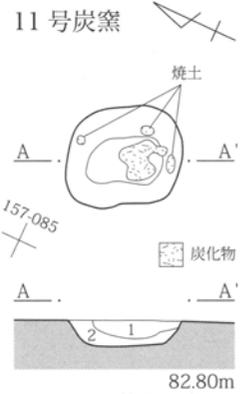


- 1 黒色土とローム小粒の混土層。黒色土中には灰を含む。2~4mmの木炭細片を20%含む。

- 1 黒色粘質土 炭粒(径1~3mm)混入。(2区) (20%)
- 2 茶褐色粘質土 炭粒(径2~4mm)微量混入。
- 3 茶褐色粘質土 ローム混入。(30%)

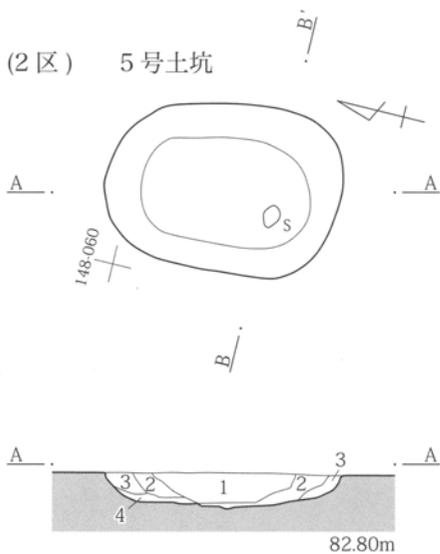


- 1 褐色土 ローム小粒10%含む。
- 2 褐色土 ローム極小粒~中粒20%含む。木炭片5mm前後5%含む。



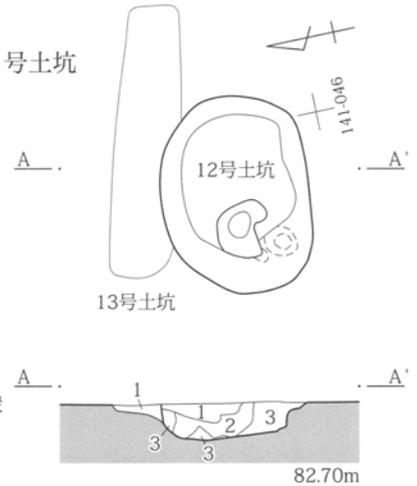
- 1 褐色土 ローム小粒10%含む。
- 2 褐色土 ローム極小粒~中粒20%含む。木炭片5mm前後5%含む。

(2区) 5号土坑



- 1 暗褐色土 ローム小粒10%、炭化物粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム小粒20%含む。
- 3 明褐色土 ローム小粒30%含む。
- 4 暗褐色土 炭化物を多く含む。ローム小粒10%含む。下部でやや大きめの炭化物あり。

12号土坑



- 1 暗褐色土 ローム小粒10%、炭化物粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム小粒20%含む。
- 3 明褐色土 ローム小粒30%含む。



第25図 II・2区土坑型炭窯、古代土坑

(2) 土坑

2区5号土坑(第25図・PL9)

(147, -058) グリッドに位置する。1.92×1.36mの長円形で、深さは27cmである。覆土中には多量の炭化物が含まれる。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から古代に属する可能性があると考えられる。

土坑型の伏窯である可能性も残る。

2区12号土坑(第25図・PL9)

(141, -046) グリッドに位置する。1.57×1.18mの長円形で、深さは27cmである。覆土中には多量の炭化物が含まれる。遺物は出土しなかったが、覆土の状況から古代に属する可能性があると考えられる。

土坑型の伏窯である可能性も残る。

第3項 中近世以降

(1) 溝

溝はⅡ区で3条検出された(表6、第28図・PL11)。調査区南北面の土層の観察によれば、いずれも調査区を南北に貫いており、60m以上の長さとなる。

3条とも現道に並行しており、現代の地割りに先行する溝である。各溝は重複し合い、Ⅱ区3号溝→Ⅱ区2号溝→Ⅱ区1号溝の順で掘り返されたことがわかる。

遺物は、出土しなかったが、覆土等の状況から近世以降に位置づけた。

(2) 井戸

2区1号井戸(第42図・PL10)

2区西端部、(148, -082) グリッドに位置する。平面形は直径0.95×0.86cmのほぼ円形である。

壁面の上半部は円筒状にほぼ垂直に立ち上がるが、確認面から0.7mほどの深さから、やや開き気味になる。

崩落の危険性があり、深さ0.9mの地点で調査を断念した。

覆土中から、焙烙(2)の底部破片や砥石(3)が出土している。

Ⅲ区1号井戸(第42図・PL10)

Ⅲ区南東隅、(067～065, 001～002) グリッドに位置する。平面形は直径1.73mの円形で、深さは2.98mを測る。壁面の下半部は円筒状にほぼ垂直に立ち上がり、1.4mほどの深さからやや開き気味になる。

覆土は、全体にしまりがなく、部分的に礫の混入が見られる。

覆土中から捏鉢(第29図・PL17)の破片が出土しており、中世にさかのぼる可能性がある。

(3) 土坑

中近世以降に属する土坑は、2区で検出された(表7)。(第26・27図・PL8・9)。覆土の特徴から近世以降の可能性はある。

(4) 耕作痕

Ⅰ区東端の低地際で検出された。径10cmほどの楕円形の窪みが密集した状況である。植物の根株の痕跡と考えられるが、人為的な生産に伴うかは確定しえなかった。

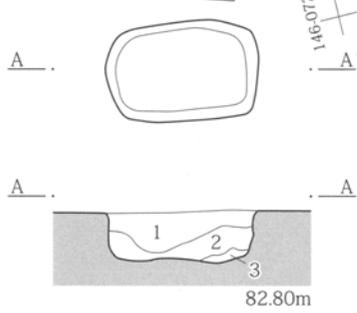
(5) 遺構外の遺物

表土の削平が著しいこともあり、遺物量は極めて少ない(第29図・PL17)。

陶磁器類の小破片や鉄砲玉(10)などが出土した。(1)は瀬戸美濃系の皿で17世紀の所産である。その他の陶磁器類も近世段階に位置づけられる。焙烙も中近世に位置づけられる。

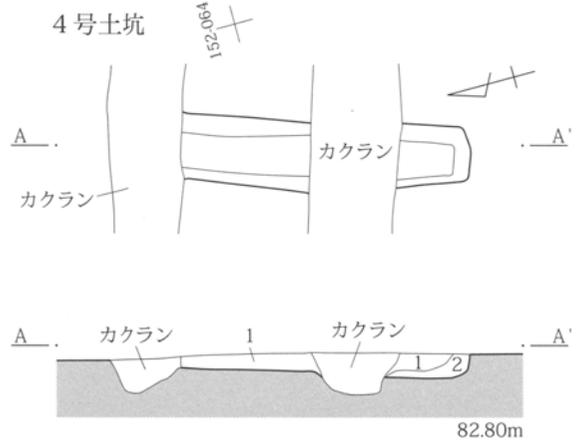
また、Ⅰ区の試掘トレンチ中からは、石臼が2点出土した。

(2区) 3号土坑



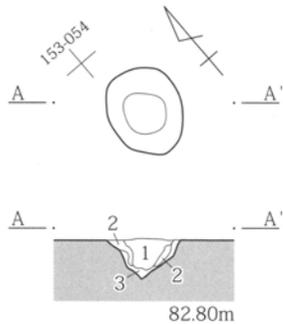
- 1 褐色砂壤土 ローム小粒~小塊 30%含む。
- 2 褐色砂壤土 ローム小粒 10%含む。
- 3 ローム小塊

4号土坑

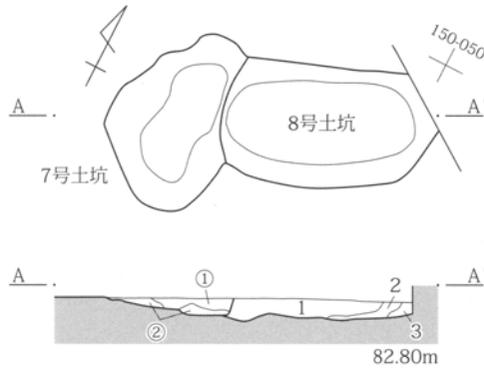


- 1 暗褐色土 ローム小粒 10%含む。
- 2 暗褐色土 ローム小~中粒 20%含む。

6号土坑

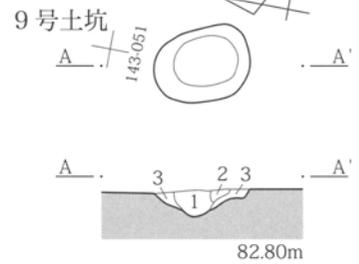


- 1 暗褐色土 黒色がかかる。ローム小粒 10%含む。
- 2 褐色土 ローム小~中粒 50%含む。1層が混じる。
- 3 明褐色土 ローム中粒 (70%) 主体。



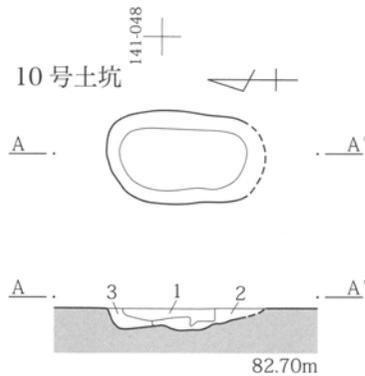
- 7号土坑
- ① 褐色土 ローム小~中粒 20%含む。
 - ② 明褐色土 ローム粒~小ブロック 40%含む。
- 8号土坑
- 1 暗褐色土 やや黒みがかかる。ローム小粒 10%含む。
 - 2 暗褐色土 ローム小粒 20%含む。
 - 3 暗褐色土 ソフトローム。攪乱か。

9号土坑



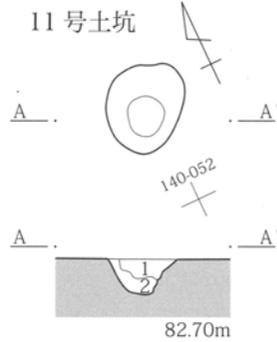
- 1 暗褐色土 ローム小粒 20%含む。
- 2 明褐色土 ローム小粒 30%含む。
- 3 明褐色土 ローム粒 40%含む。

10号土坑



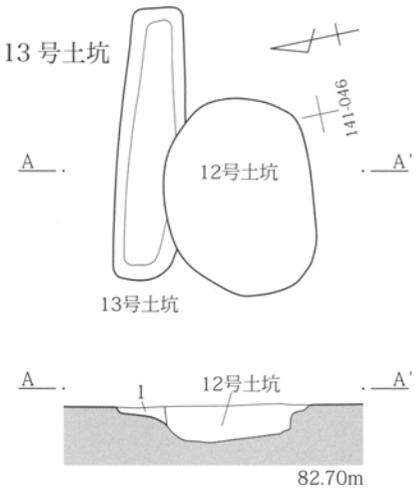
- 1 暗褐色土 ローム小粒 10%、炭化物粒を多く含む。
- 2 暗褐色土 ローム小粒 20%含む。
- 3 明褐色土 ローム小粒 30%含む。

11号土坑



- 1 暗褐色土 ローム小粒 20%含む。
- 2 明褐色土 ローム小粒 30%含む。

13号土坑

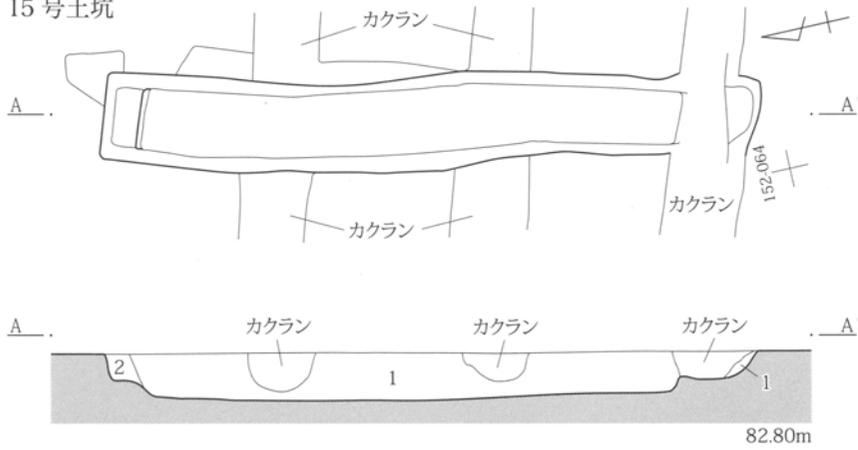


- 1 暗褐色土 ローム小粒 10%、炭化物粒を多く含む。



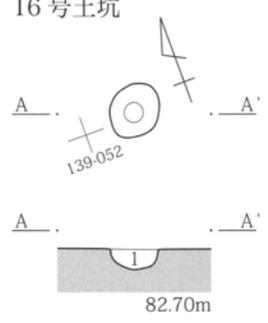
第26図 中近世土坑(1)

15号土坑



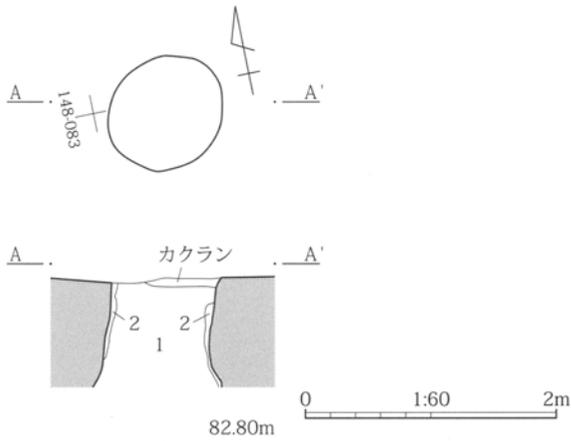
- 1 暗褐色土 ローム小粒〜小ブロック（〜2cm）を30%含む。
- 2 1層に比してロームの含有が少ない。20%

16号土坑



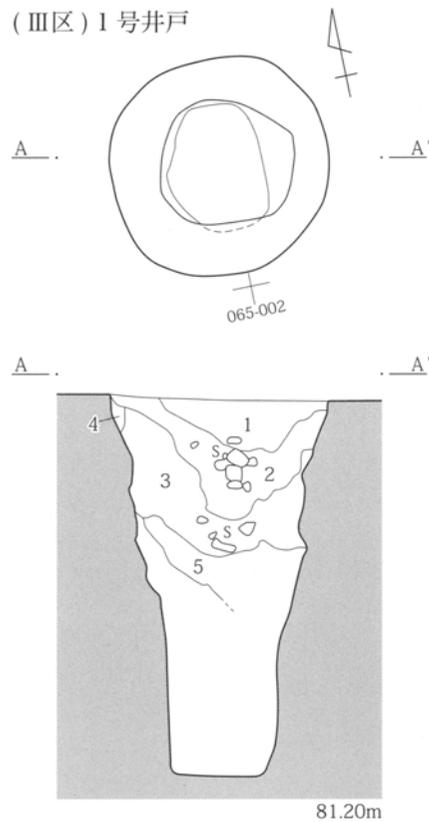
- 1 暗褐色土 ローム粒30%含む。

(2区) 1号井戸



- 1 暗褐色砂壤土 部分的にローム小粒「少〜中」20%含む。
- 2 暗褐色砂壤土 1層と同じだが壁との隙間に入ったもので、しまりが無い。

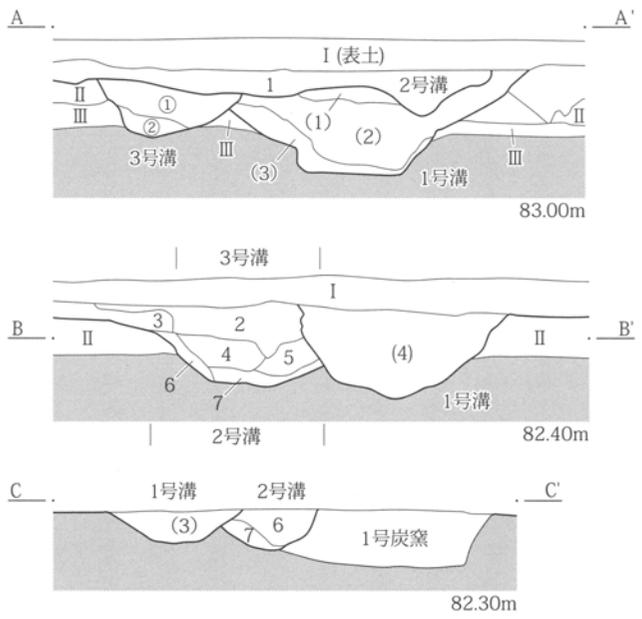
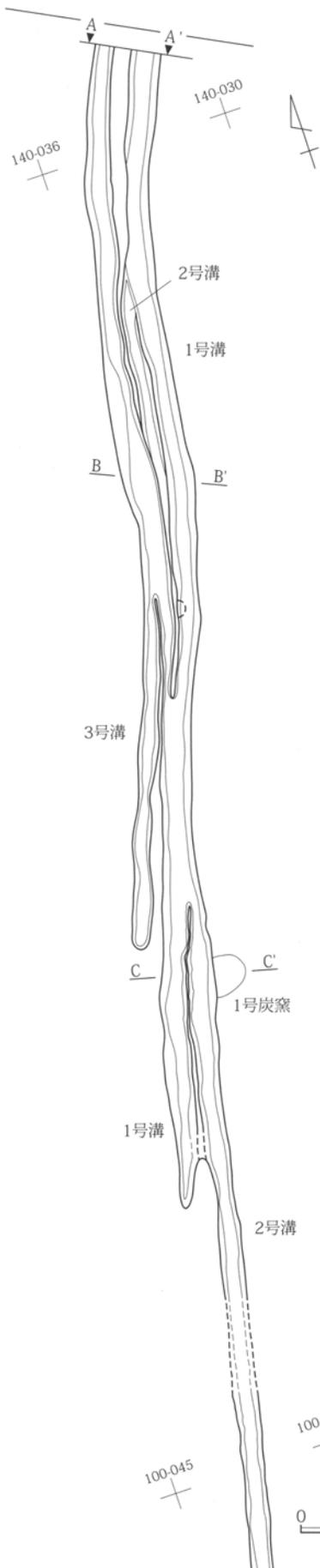
(Ⅲ区) 1号井戸



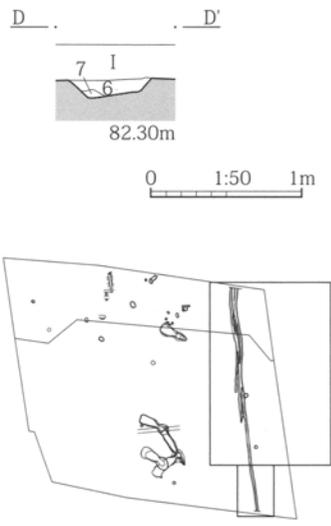
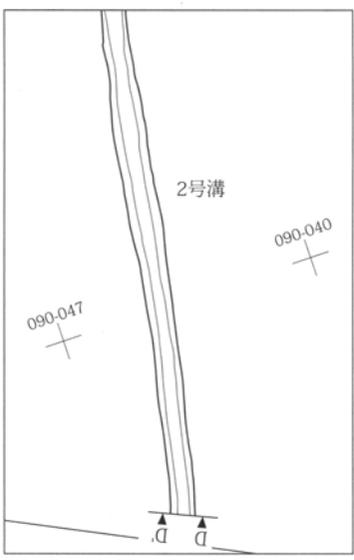
- 1 暗褐色土 ローム粒多量含む。しまりなし。
- 2 暗褐色土 ローム粒多く含む。全体にしまりなくボソボソした感じ。
- 3 暗褐色土 ローム粒非常に多く含む。全体にしまりなくボソボソした感じ。
- 4 黄褐色土 ロームを主体とし、黒色土粒を少量含む。
- 5 黒褐色土 全体にしまりなくボソボソした感じ。

第27図 中近世土坑(2)、井戸

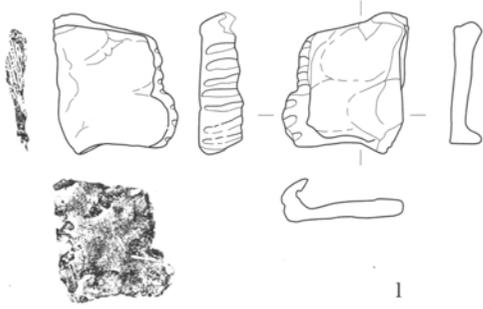




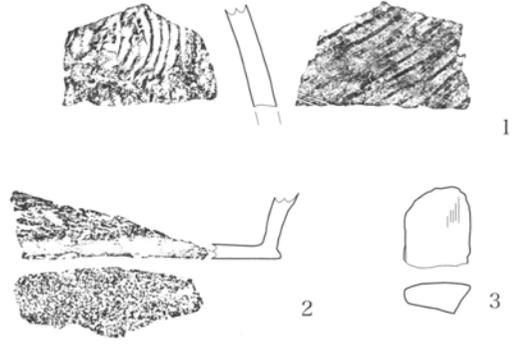
- 1号溝
- (1) 明灰黄褐色土 2号溝1層に類するが、しまり弱く明色。
 - (2) 褐色土 ローム小粒30%含む。
 - (3) 褐色土 ローム小～中粒50%含む。暗褐色土を少量含む。
 - (4) 暗茶褐色粘質土 ローム粒(径2～5mm)混入。黒色粘質土全体に混じる。
- 2号溝
- 1 灰黄褐色砂質土 ローム細粒20%含む。
 - 2 茶褐色粘質土 ローム微量全体に混じる。
 - 3 黒褐色土 ローム粒(径1mm以下)微量混入。
 - 4 茶褐色粘質土 ロームブロック(径10～25mm)混入。黒色土全体に均一に混じる。
 - 5 茶褐色粘質土 黒色土粒(径2～3mm)全体に均一に混じる。ロームブロック(径5～10mm)混じる。
 - 6 茶褐色土 ローム混入。(40%)
 - 7 茶褐色粘質土 8層よりもロームの割合多い。(50%)
- 3号溝
- ① 褐色土 ローム小粒30%含む。明褐色土ブロックを含む。
 - ② 黄褐色土 ローム粒～小ブロック主体。褐色土が含まれる。



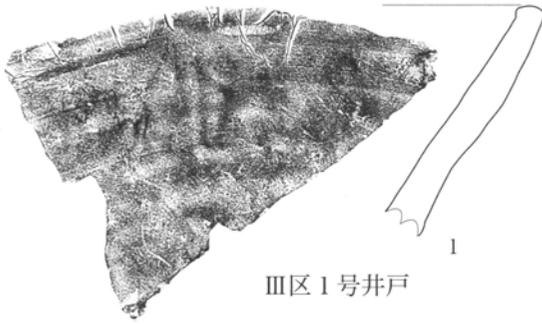
第28図 II・2区1～3号溝



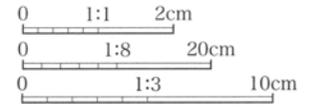
II区 8号炭窯



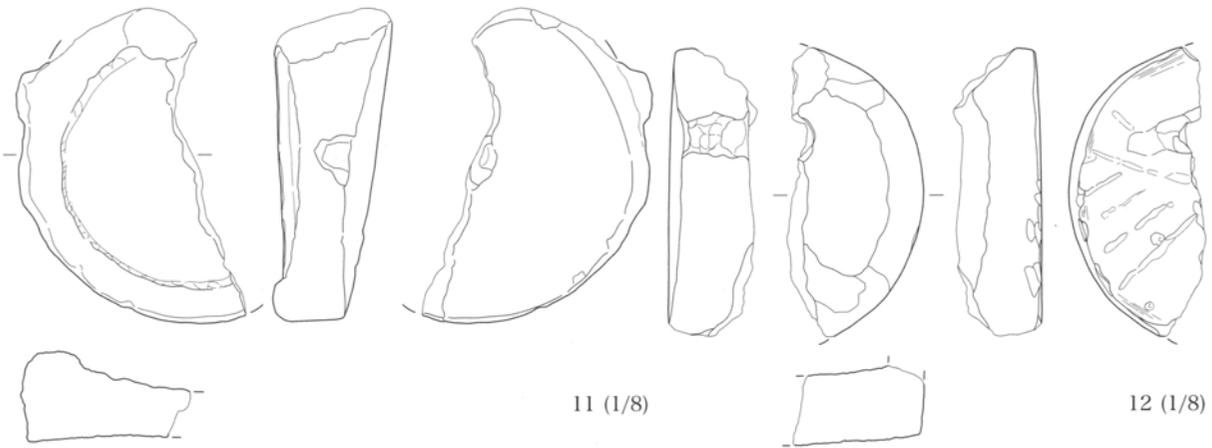
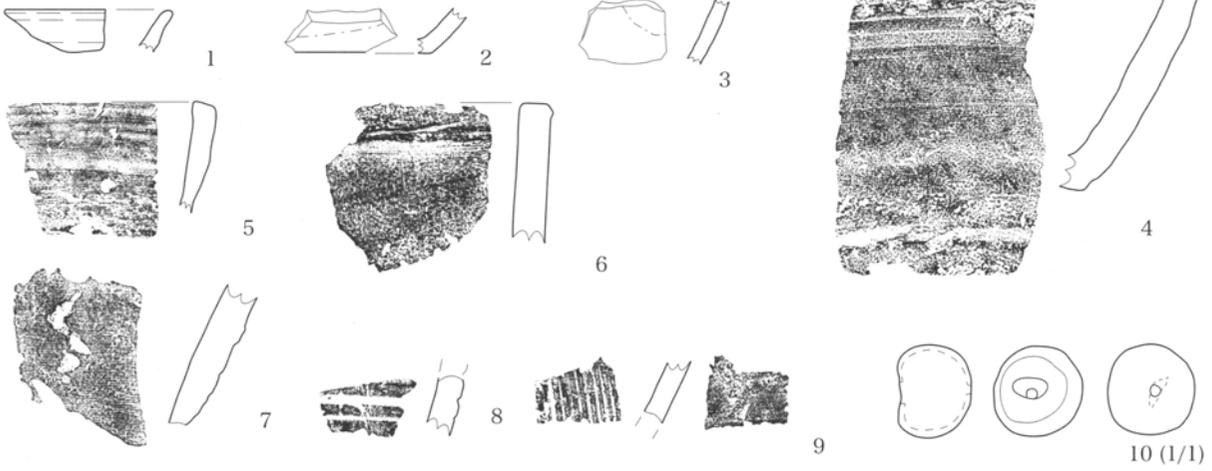
2区 1号井戸



III区 1号井戸



遺構外出土遺物



第 29 図 古代・中近世出土遺物

表6 下元屋敷遺跡溝一覧表

溝No.	位置	長(m)	幅(m)	深(m)	走行	重複/備考	(末尾の近=近世、古=古代)
II-1	(098,-041)~(129,-035)	35.91	1.40	0.60	N- 13°-E	3→2→1溝と掘り直し、1号炭窯を掘り込む。2区1溝へ続く。	近
II-2	(108,-042)~(130,-036)	60.46	1.03	0.47	N- 13°-E	3→2→1溝と掘り直し。2区2溝へ続く。	近
II-3	(108,-042)~(116,-040)	28.12	0.84	0.60	N- 13°-E	3→2→1溝と掘り直し。2区3溝へ続く。	近

表7 下元屋敷遺跡土坑一覧表

区	No.	位置	形状	規模 (cm)			時期
				長径	短径	深度	
I	1	165,-100	円形か	184	-	84	縄文
II	1	131,-059	ほぼ円形	108	-	88	縄文
II	2	112,-036	円形か	86	-	151	縄文
2	3	146,-072	隅丸長方形	122	77	41	近世
2	4	152,-065	長方形	(232)	37	20	近世
2	5	147,-059	隅丸長方形	192	136	27	古代
2	6	152,-054	長円形	73	63	32	近世
2	7	149,-051	長円形	145	102	12	近世
2	8	150,-049	長円形	(175)	94	15	近世
2	9	142,-051	長円形	78	60	20	近世
2	10	141,-048	長円形	130	73	17	近世
2	11	140,-052	長円形	70	60	28	近世
2	12	141,-046	長円形	157	118	27	古代
2	13	142,-046	長方形	215	50	12	近世
2	15	154,-063	長方形	525	74	37	近世
2	16	139,-051	円形	47	41	15	近世
2	17	139,-051	長方形	76	55	18	縄文
III	1	069,-007	円形	185	-	48	縄文
III	2	079,-984	円形	132	125	35	縄文
III	3	091,-022	隅丸長方形	125	90	20	縄文
III	4	085,-014	やや円形	76	67	20	縄文
III	5	073,-984	長円形	77	60	24	縄文
III	6	070,-990	ほぼ円形	122	110	25	縄文
III	7	069,-995	円形	88	-	56	縄文
III	8	069,-996	円形	77	-	50	縄文
III	9	072,-986	円形	40	-	13	縄文
III	10	083,-981	長円形	130	122	37	縄文
III	11	082,-984	円形	140	-	138	縄文

表8 下元屋敷遺跡遺物観察表

出土地点	No.	器種	部位	色調	胎土	特徴、法量等	時期
Ⅲ-5土	1	-	胴	鈍い橙	赤色粒、輝・角	縄文。	加E II
Ⅲ-5土	2	-	胴	橙	白粒、輝・角、小石	沈線、刺突文。	称
Ⅲ-6土	1	-	口	橙	白粒、輝・角	隆帯・沈線区画、区画内縄文。	縄文
Ⅲ-6土	2	-	胴	橙	白粒、輝・角	沈線、縄文。	加E III
Ⅲ-6土	3	-	胴	橙	輝・角	条線文?	加E II
Ⅲ-7土	1	-	口	灰黄褐	白粒、輝・角	口唇部肥厚、無文。	加E II
Ⅲ-9土	1	深鉢	胴	浅黄橙	輝・角、小石	平行沈線、充填縄文。	加E III
Ⅲ-11土	1	深鉢	口~胴	褐	白粒、輝・角、小石	口唇部に沈線。口縁部から胴部に横位、縦位の燃糸文。括れ部に隆帯貼付。	加E II
Ⅲ-11土	2	-	胴	褐	赤色粒、輝・角、小石	縄文。	加E II
Ⅲ-11土	3	-	胴	淡い橙	白粒、輝・角、小石	平行沈線、充填縄文。	加E III
Ⅲ-11土	4	-	口	橙	赤色粒、輝・角	口縁部沈線。胴部沈線文。	称・新
G	1	-	胴	灰褐	白粒、輝・角	沈線文。	中期前半?
G	2	-	胴	橙	白粒	沈線文、縄文。	加E II
G	3	-	胴	暗褐	金雲母、輝・角	縄文。	加E II
G	4	-	胴	鈍い橙	白粒、小石	無文。	加E II?
G	5	-	胴	浅黄橙	白粒、輝・角	平行沈線、充填縄文。	加E III
G	6	-	胴	橙	白粒、赤色粒、輝・角	平行沈線、充填縄文。	加E III
Ⅲ-1井戸	7	-	胴	淡い橙	赤色粒、輝・角	沈線文。	称?
Ⅲ-1井戸	8	-	口	橙	赤色粒、輝・角、小石	無文。	堀1
G	9	-	胴	灰黄	白粒、輝・角	沈線。充填縄文部と無文部の交互構成。	堀2
Ⅱ-8炭窯	1	不明	完形	暗赤褐	輝・角	手捏ねによる不整形土製品。指頭押圧痕が顕著。用途不明。	古代
2-1井戸	1	-	胴	明緑灰	黒色微粒、小石	外面平行敵き目、内面同心円文。	古代
2-1井戸	2	焙烙	底	暗褐	白粒	立ち上がり内面横撫で。底部は平坦。	中近世
Ⅲ-1井戸	1	捏鉢	口	鈍い橙	輝・角、小石	内面と外面口縁部横撫で。外面体部は指頭押痕見られる。	軟質
2-G	1	皿	口	灰白	夾雑物特になし	美濃、陶器。	17c
2-G	2	碗	胴	灰白	黒色微粒	瀬戸美濃、陶器。鉄釉。	江戸
2-G	3	碗	胴	暗褐	黒色微粒	瀬戸美濃、陶器。鉄釉。	江戸
Ⅱ-G	4	焙烙	口~胴	灰黄	小石	軟質陶器。やや開いて立ち上がる。内面と外面口縁部横撫で。内面黒色。	中近世
2-G	5	焙烙	口~胴	暗灰黄	黒粒	軟質陶器。やや開いて立ち上がる。内面と外面口縁部横撫で。	中近世
Ⅱ-G	6	不明	口	暗灰	輝・角	軟質陶器。外面口縁部横撫で。直線的で、方形の器形か。	中近世
Ⅱ-G	7	不明	胴	暗褐	白粒、黒粒	ロクロ整形。内面剥離。	軟質
2-G	8	-	胴	鈍い橙	白粒、黒粒、小石	沈線文。	縄文?
2-G	9	搦鉢	胴	暗赤褐	夾雑物特になし	瀬戸美濃、陶器	江戸
2-G	10	鉄砲玉				球形、一面が強い衝撃で平坦か。	近世

(石器)

出土地点	No.	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
I-G	10	石皿?	粗粒輝石安山岩	23.8	16.9	8.3	5150	
2-8土	11	打製石斧	黒色頁岩	6.1	4.4	1.3	40.7	
2-9炭窯	12	スクレイパー	黒色頁岩	7.4	8.5	2.1	133.1	
2-8炭窯	13	スクレイパー	黒色頁岩	6.4	4.7	1.8	59.1	
2-9炭窯	14	リタッチドフレイク	黒色頁岩	7.2	3.4	0.7	18.1	
2-1井戸	3	砥石	流紋岩	2.8	5.7	5.6	29.6	割れ。
I-G	11	石臼	牛伏砂岩	33.6	32.7	6.2	8210	
I-G	12	石臼	粗粒輝石安山岩	31.2	13.6	8.9	4400	

第3章 下田遺跡の調査

第1節 遺跡の層序

下田遺跡は早川左岸の低地帯に立地するが、全体を俯瞰すると南北方向の侵食を受けた微地形の連続であることがわかる。そのため、侵食を受けた浅い谷や旧河道部分と微高部では異なる土層の堆積状況がある。また、東半部は圃場整備による削平が著しく、上層部の土層が確認できない。以下に記す基本土層は、微高部を主に各地点の状況を合成したものである。なお、低地部に関しては地点による差異が大きいので、各地点の土層断面図に記した。

- I 表土 現代の水田耕作土等
- II 暗褐色土 As-B 軽石を多量含み、やや砂質。
- III 暗褐色土 非常に多量の As-B 軽石を含み、砂質。II層に比して黒みがかかる。
- IV As-B 層
- V 黒褐色粘質土 白色軽石を含む。(水田耕土)
- VI 黒灰褐色土 白色軽石を含む。(遺物包含層)
- VII 黒褐色土 白色軽石を多量含む。(遺物包含層)
- VIII 黒褐色砂質土 白色軽石を少量含む。
- IX 明黄褐色砂質土 砂質ローム層。
- X 礫層 (大間々扇状地藪塚面礫層)

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X

第30図 下田遺跡基本土層

第2節 検出された遺構と遺物

第1項 旧石器時代

下田遺跡の調査では、旧石器時代に属する遺構は検出されなかったが、遺物はII区で1点V区で5点の計6点出土した(第31図・PL107)。

(1)はV区970-530Gの砂質ローム中から出土したスキー状スポールである。甲板面から片面に連続した調整を施している。その後、甲板面にも調整を行っている。打面付近は欠損しているため、打撃部の細部調整は不明である。

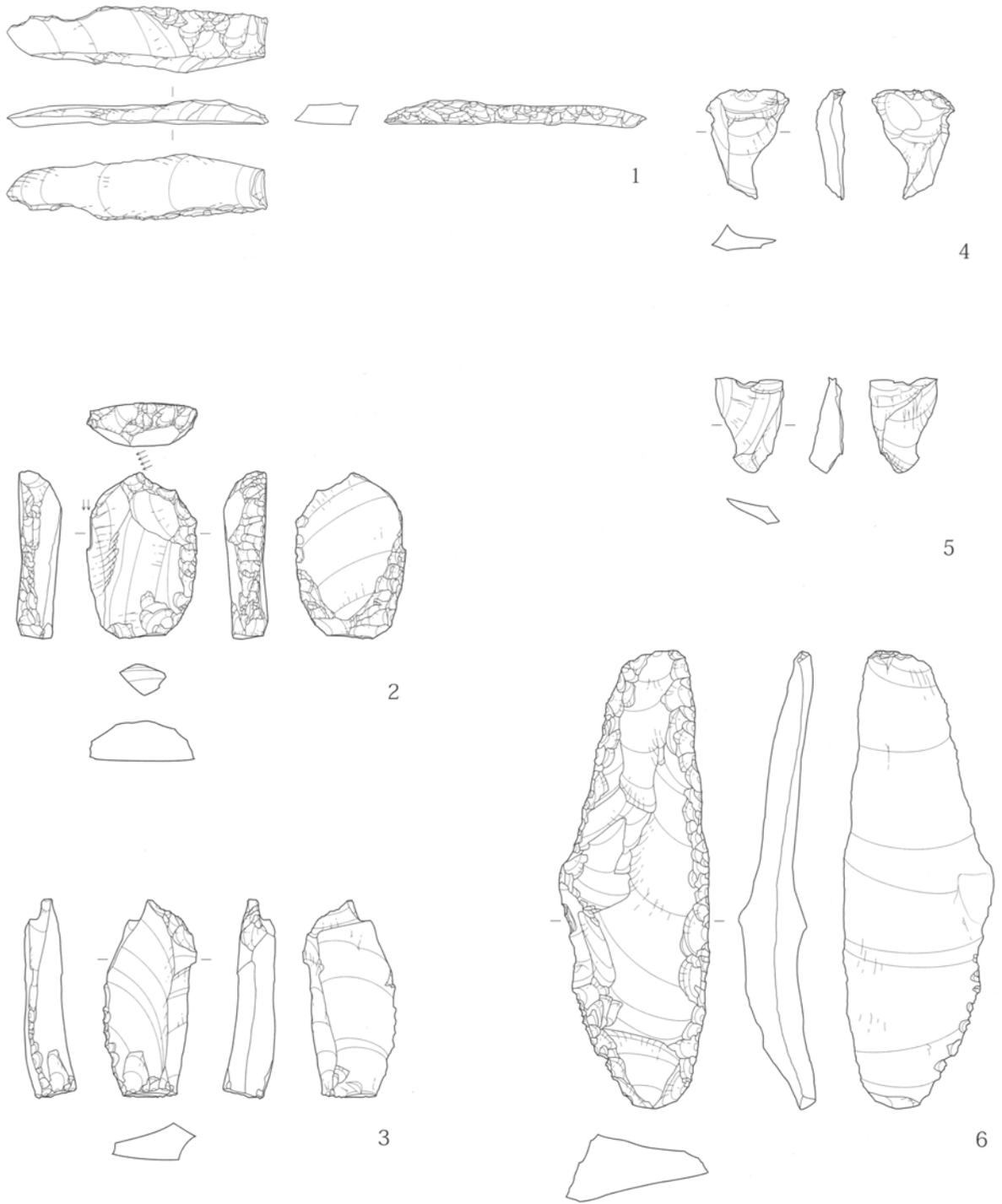
(2)はV区970-540Gの砂質ローム中で出土した荒屋型彫刻刀である。背面の右側縁と背面の基部に細かい調整が施され、左肩に彫刀面を作出している。彫刻刀打面は右肩でノッチ状を呈する。素材剥片の打面は残置していない。基部の剥離を見ると下面を縁辺の剥離が切っており、このことから打面付近を除去してから、縁辺に調整を施したと思われる。

(3)はV区36号溝の覆土中から出土した荒屋型彫刻刀である。背面の左縁部と主要剥離面のヒンジフラクチャーに細かい調整を施している。彫刻刀面は右肩の調整を打面にして、左肩と逆行して素材剥片の打面を彫刻刀打面として右側縁に作出している。素材剥片の打点は残置している。

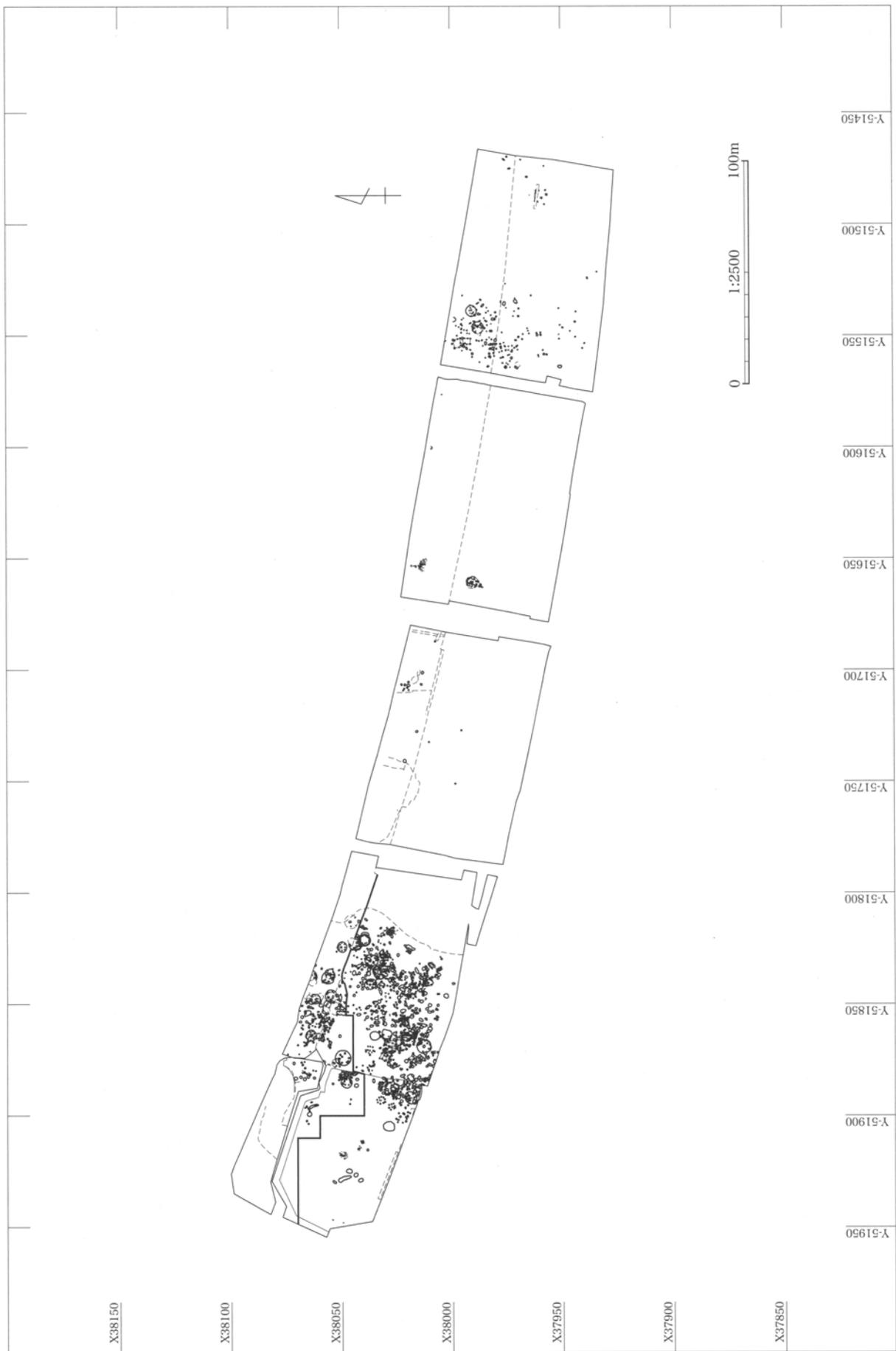
(4)(5)はV区遺構外で出土した小形の不定形剥片である。(4)は背面上部の剥離面と主要剥離面は同地割れと思われる。(5)は打面付近を欠損している。背面下部に原礫面が残置している。

(6)はII区表採のスクレイパーである。石刃を素材とし、背面の両側縁に急角度による連続した調整を施している。打面は残置していない。

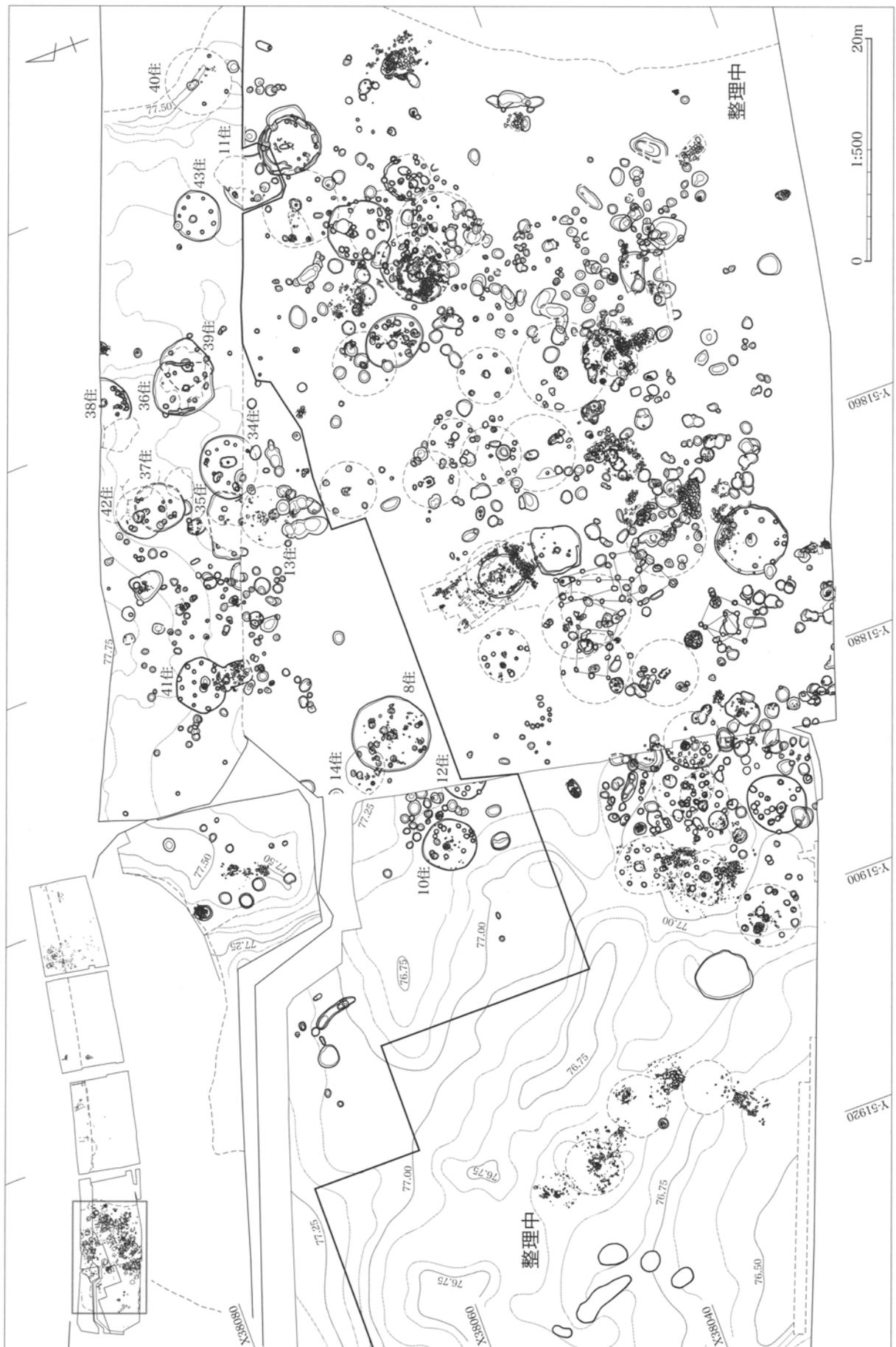
6点ともチョコレート色を呈する硬質頁岩製であり、大間々扇状地の低地部分の水浸かった砂質ローム層中に帰属する石器群と考えられる。



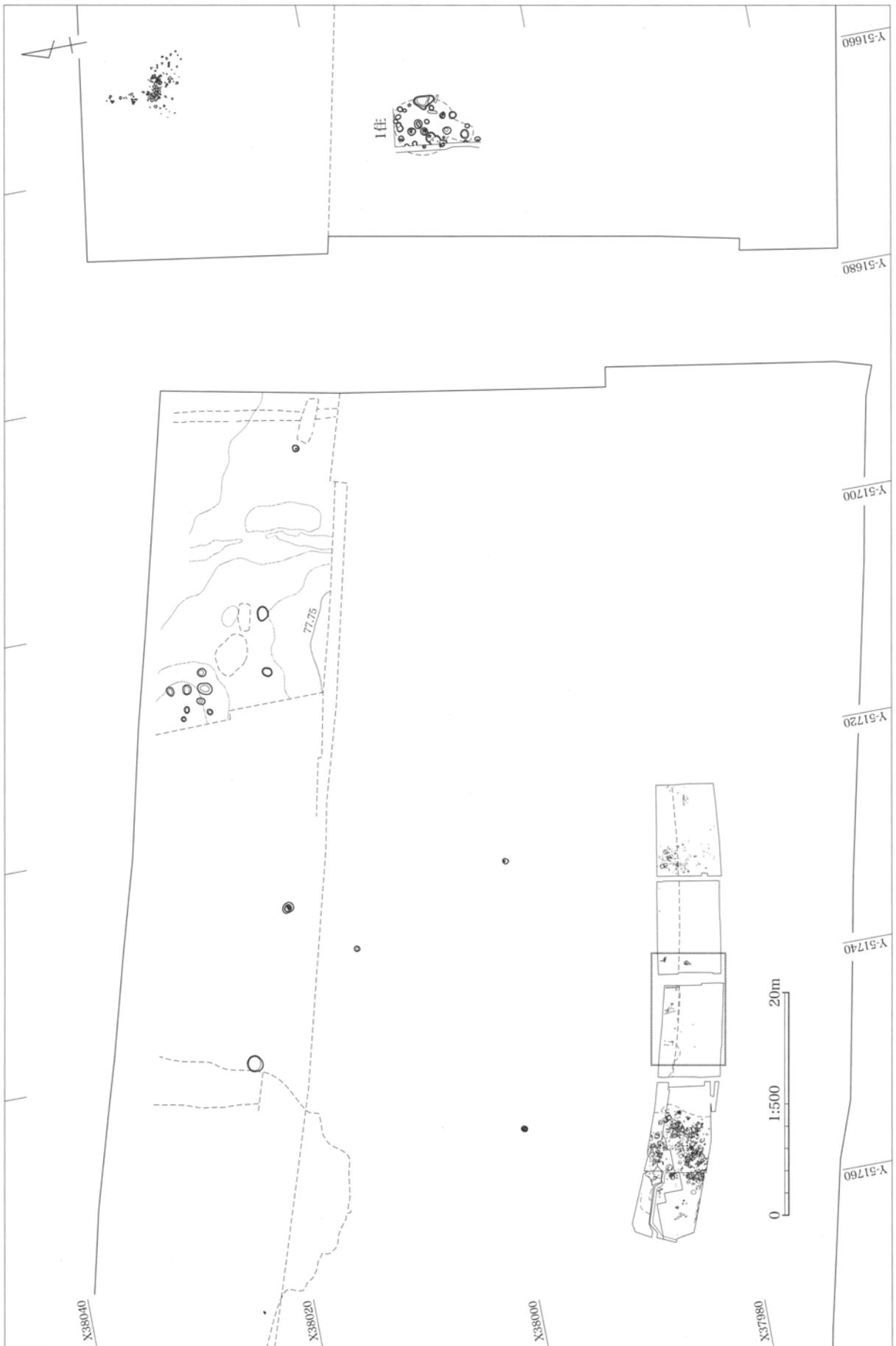
第 31 图 旧石器时代出土遺物



第 32 図 縄文時代遺構全体図



第33図 縄文時代遺構分布図 (I・1~II・2区)



第 34 図 縄文時代遺構分布図 (Ⅲ・3～Ⅳ・4区)



第 35 図 縄文時代遺構分布図 (V・5区)

第2項 縄文時代

縄文時代の遺構は、Ⅰ・Ⅰ区～Ⅴ・Ⅴ区全域に分布している。特に、大間々扇状地の桐原面と藪塚面を画する崖線以東、Ⅱ・Ⅱ区とⅢ・Ⅲ区の境界で検出された河道までのⅠ・Ⅰ区、Ⅱ・Ⅱ区には濃密な分布状況が認められる。河道に面して多数の住居跡や土坑群が展開した状況である。Ⅱ区北東部からⅠ区南東部へ斜行する浅い谷地を挟んで遺構の分布が分離される。出土遺物の半数はこの範囲から集中して出土した。この区域では、中期後半（加曾利EⅠ式）以降、後期前半（堀之内Ⅱ式）まで集落の継続的な展開が認められる。また、遺構は検出されなかったが、中期前半や後期後半の土器も出土している。

Ⅲ区西半部は、旧河道による浸食を受けている。Ⅲ区も含めて、少数の土坑、埋甕が検出されたのみである。遺物包含層は河道以外のほぼ全域に及ぶが、Ⅲ区北東部では包含層が厚く、多数の遺物が出土した。中期後半（加曾利EⅡ式）以降の土器群であるが、後期段階の遺物が多数を占める。

Ⅳ・Ⅳ区では、住居跡1軒、配石遺構1基、土器集中の他に、Ⅲ・Ⅲ区から続く遺物包含層が西端部で認められた。中期後半（加曾利EⅢ式）以降、後期前半までの遺物が出土したが、加曾利EⅣ式～称名寺式の時期が多数を占める。

Ⅴ・Ⅴ区では、側道西半部で、住居跡2軒と掘立柱建物跡3棟が検出された。また、土坑はほぼ全域に分布している。遺物は中期後半加曾利EⅣ式が主体である。また、少数だが、早期や前期の遺物も出土した。

Ⅳ・Ⅳ区からⅤ・Ⅴ区の微高地上では、加曾利EⅣ式の時期に集落が拡散した状況が明らかになった。

(1) 住居跡

Ⅰ区 Ⅰ0号住居跡（第36図・PL20）

Ⅰ区南東隅、(046～051, -883～-888) グリッドに位置する。平面形は長径4.99m、短径4.68mのやや不整な円形で、深さは22cmである。壁面下部はやや開き気味に立ち上がる。

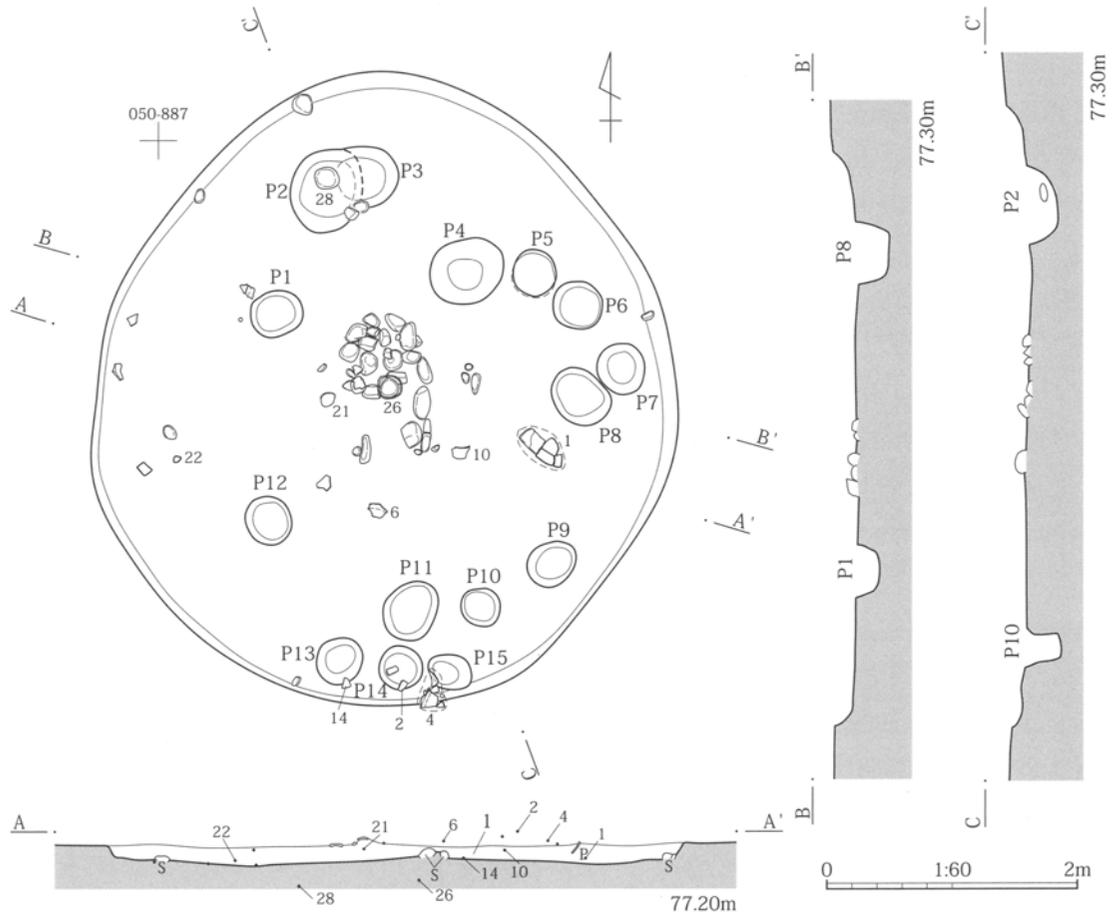
炉は床面中央やや北に寄った位置で検出された。1.32m×0.92cmの長円形を呈し、深さ18cmの石囲炉である。中央に深鉢形土器下半部が埋設されている。北半部には15cm前後の礫が円形に密集して出土したが、長円形にめぐる縁石が崩れた状況と考えられる。

床面はほぼ平坦で、15基の円形もしくは長円形のピットが検出されており、規模（径・深さ）は、以下の通りである。P1（42×35cm・20cm）、P2（68×57cm・26cm）、P3（49cm・13cm）、P4（62×52cm・28cm）、P5（35cm・25cm）、P6（40cm・28cm）、P7（41cm・29cm）、P8（50cm×40cm・27cm）、P9（42×34cm・32cm）、P10（31cm・29cm）、P11（49×41cm・17cm）、P12（40×36cm・12cm）、P13（39cm・23cm）、P14（35cm・19cm）、P15（34×27cm・19cm）。すべてのピットが本住居跡に帰属するかについては検討の余地がある。

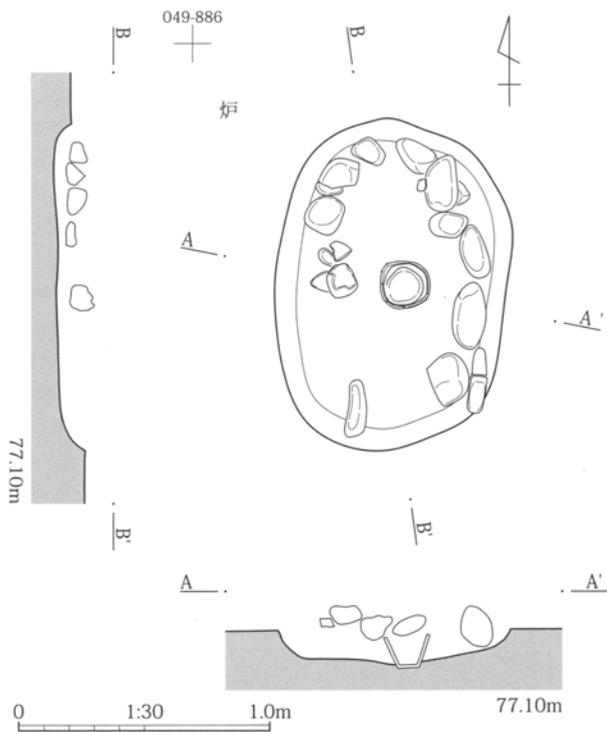
覆土は、地山の砂質土が混入する粘質土で、細かくは分層されなかった。

遺物の大部分は覆土中の遺物であり、(1)は床面+7cm、南壁際の(4)は+13cmと浮いた状況で出土している。(27)は炉埋設土器である。大部分は加曾利EⅠ式だが、阿玉台Ⅳ式(24)や称名寺式(25)、堀之内Ⅱ式(12)も混入する。なお、(25)は加曾利EⅠ式の前段階に相当する。打製石斧は覆土中、台石(29)はP5内から出土した。(第37・38図、PL108・109)

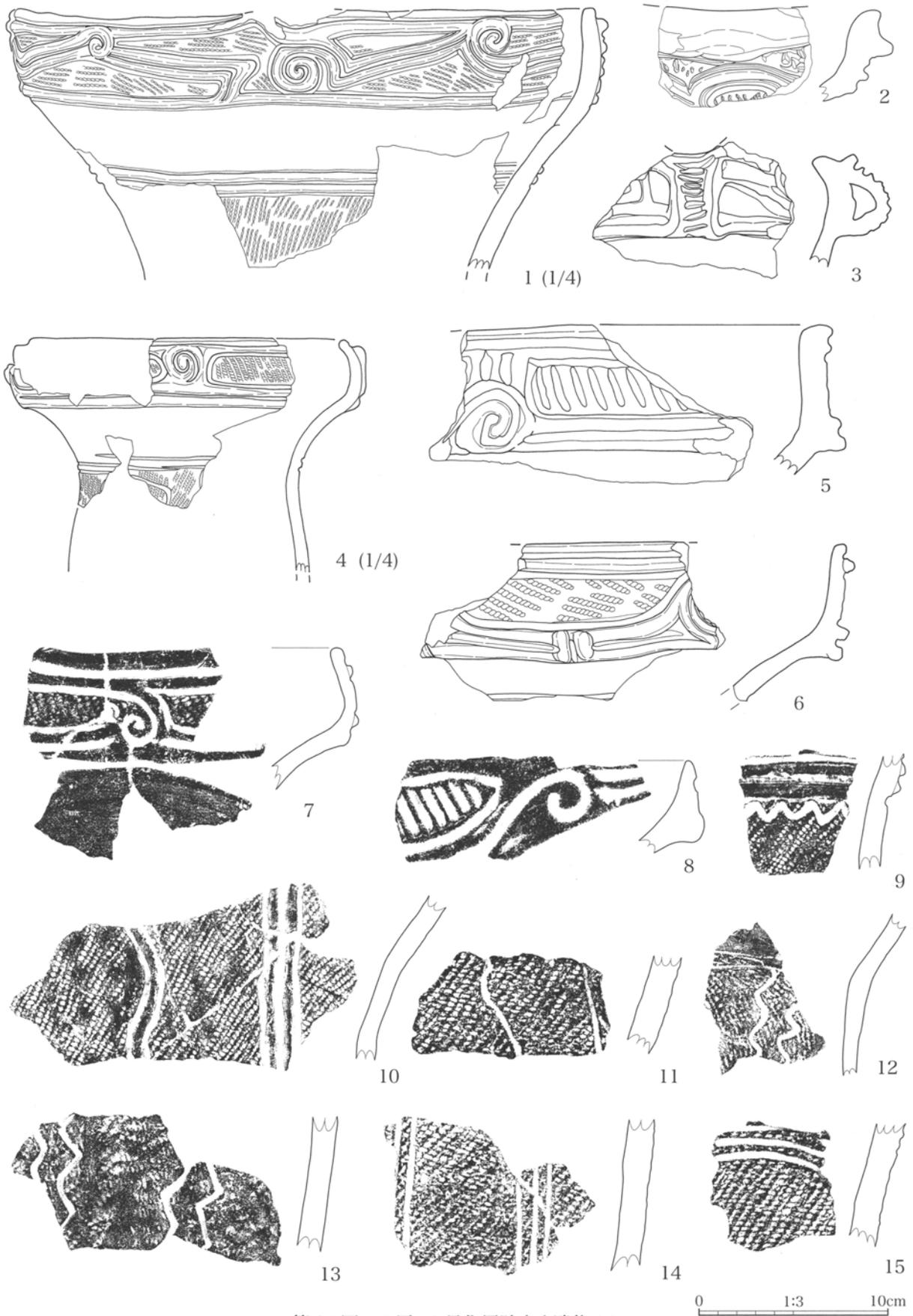
本住居跡は、出土遺物から縄文時代中期後半（加曾利EⅠ式）に位置づけられる。



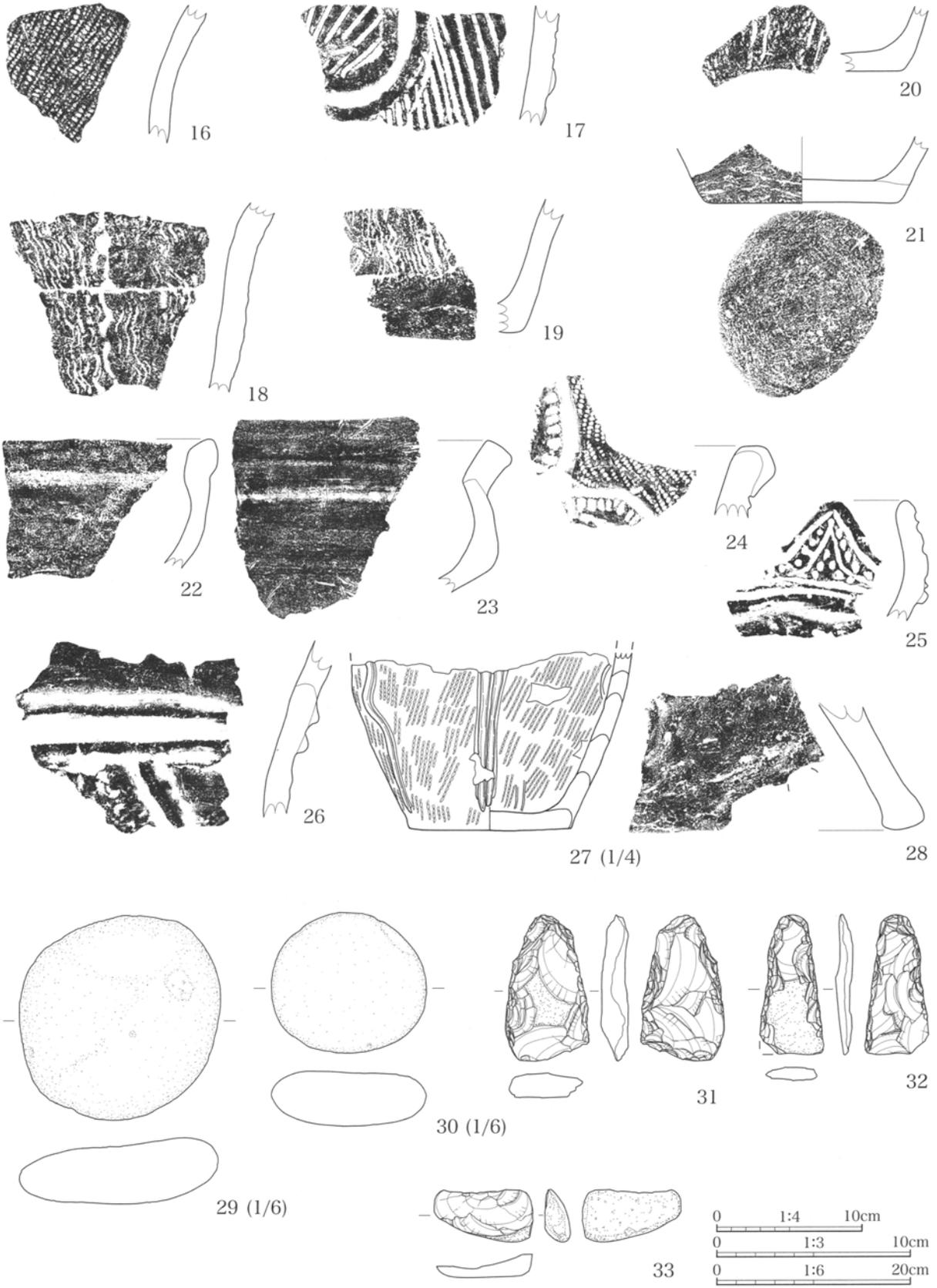
1 暗褐色粘質土 地山砂質土粒(径1~2mm)を少量含む。



第36図 I区10号住居跡



第 37 图 I 区 10 号住居迹出土遗物 (1)



第 38 图 I 区 10 号住居跡出土遺物 (2)

I区 12号住居跡 (第39図・PL21)

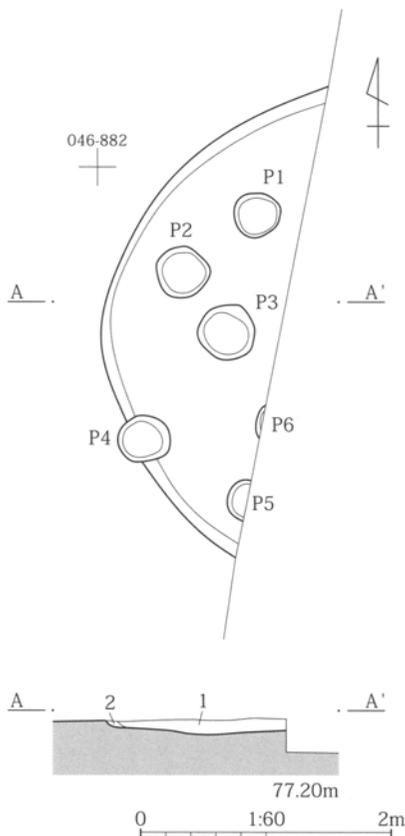
I区東端部、(042～046, -880～-881) グリッドに位置する。II区調査時に検出できなかったため、規模等を含めて詳細は不明であるが、検出部分からは直径4m程度の円形を呈すると想定される。深さは、残存箇所では最大13cmを測る。壁は床面から緩やかに開いて立ち上がる。

炉は、確認部分では検出されなかったが、東のII区側に位置する可能性が高い。

床面はほぼ平坦で、6基のピットが検出されている。規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(43×36cm・15cm)、P2(38cm・15cm)、P3(48cm・21cm)、P4(41cm・17cm)、P5(33cm・16cm)、P6(40cm・28cm)。

覆土は、2層に分層された。

住居跡に明確に伴う遺物は出土しなかったため、本住居跡の時期は特定できない。



- 1 暗褐色粘質土 地山ローム土
微量混入。
- 2 暗褐色粘質土 黒色土混じり。

第39図 I区12号住居跡

II区 8号住居跡 (第40図・PL22)

II区北西隅、(046～053, -871～-877) グリッドに位置する。平面形は直径7.09m×6.71mのやや不整な円形で、深さは46cmを測る。壁はやや開き気味に立ち上がる。

炉は床面中央で検出された。直径103cmの円形を呈し、深さは16cmであり、深鉢(5)が埋設されている。上面には15cm大の礫が円形に密集して出土した。また、南壁際では、連弧文が施された深鉢が埋設された埋甕が検出された。

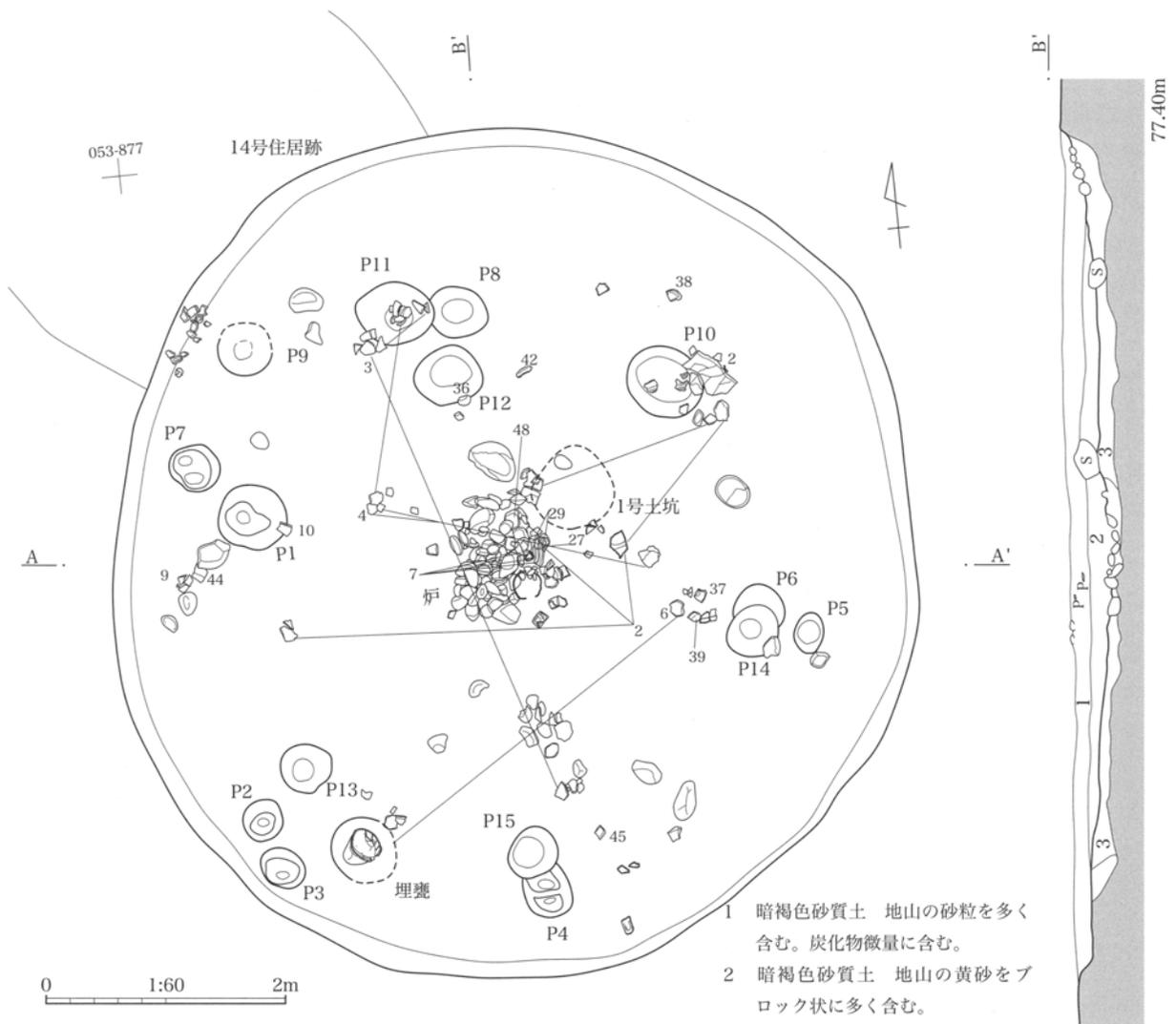
床面はほぼ平坦で、15基の円形もしくは長円形のピットが検出されており、規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(57×50cm・38cm)、P2(34cm・21cm)、P3(39cm・32cm)、P4(52×38cm・25cm)、P5(43×38cm・40cm)、P6(42cm・21cm)、P7(43cm・8cm)、P8(51cm×42cm・26cm)、P9(46cm・17cm)、P10(66×56cm・36cm)、P11(67×53cm・8cm)、P12(58×50cm・31cm)、P13(43cm・38cm)、P14(43cm・25cm)、P15(43×38cm・40cm)。ピットは壁に沿って二重にまわることから、住居の建て替えが想定できる。

覆土中には、大小の礫が含まれており2層に分層される。人為的な埋め戻しの可能性がある。

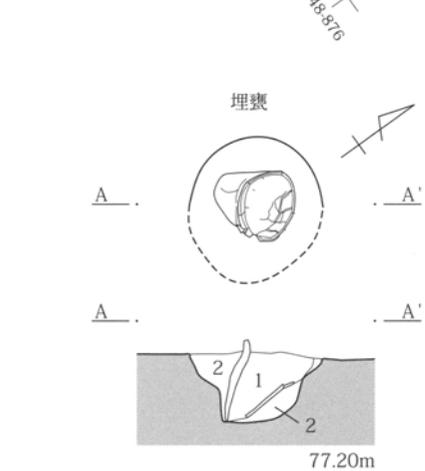
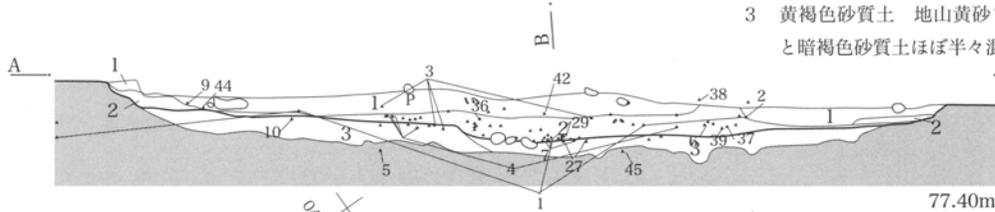
遺物の大半は、加曽利E II式であり、床面からやや浮いた位置で散乱した状況で出土した。他に、堀之内I式の破片も少量混入する。なお、覆土中からは、打製石斧10点、石錐(62・63)、石核(51)、リタッチドフレイク(64)や礫石器が出土した。(第41～45図・PL109～111)

北西部で先行するII区14号住居跡(加曽利E I式)を壊している。住居中央の炉付近にはII区1号土坑(堀之内I式)が掘り込まれている。

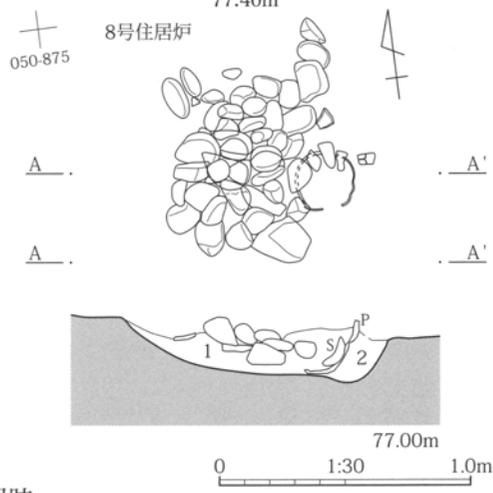
時期は、炉埋設土器や埋甕などから、縄文時代中期後半(加曽利E II式)に位置づけられる。



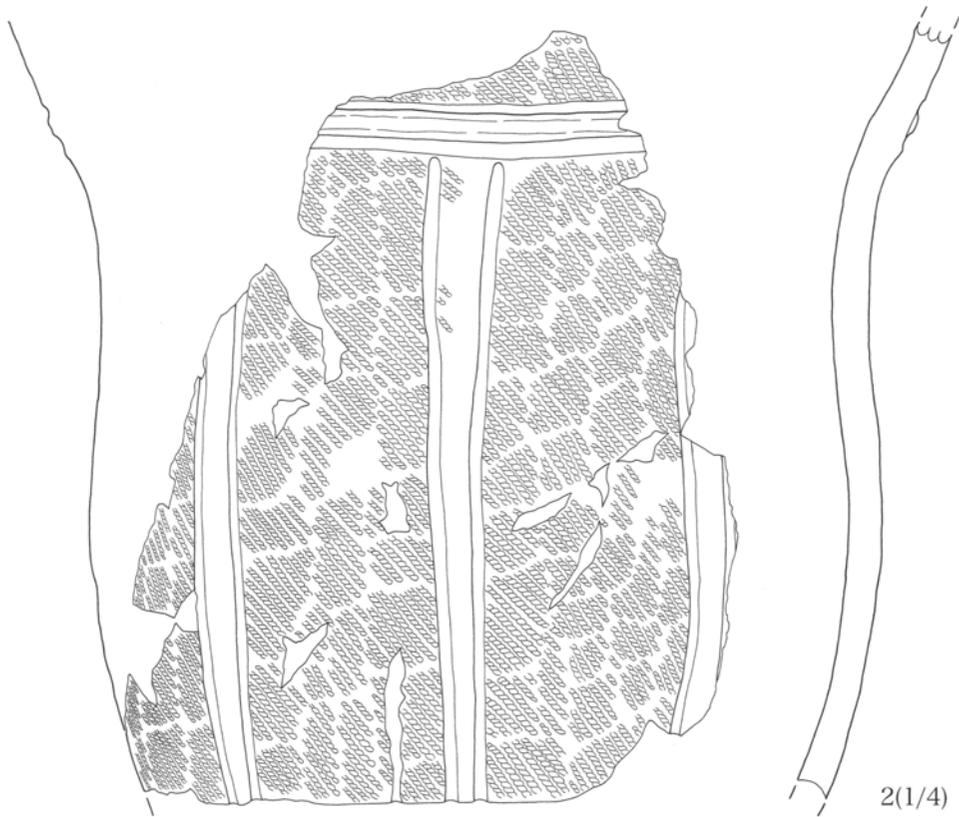
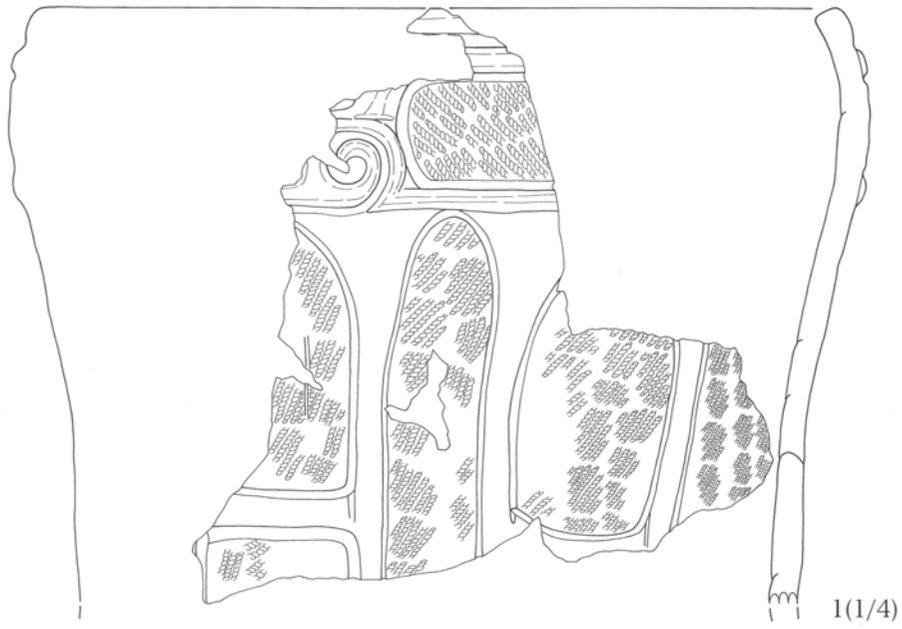
- 1 暗褐色砂質土 地山の砂粒を多く含む。炭化物微量に含む。
- 2 暗褐色砂質土 地山の黄砂をブロック状に多く含む。
- 3 黄褐色砂質土 地山黄砂ブロックと暗褐色砂質土ほぼ半々混ざる。



- 埋葬**
- 1 暗褐色砂質土 地山黄砂を含む。黄砂ブロック(3cm以下)少有。
 - 2 黄褐色砂質土 1層が混じる。
- 炉**
- 1 暗褐色砂質土 地山黄砂を含む。微量の炭化物を含む。
 - 2 黄褐色砂質土 1層が混じる。



第40図 II区8号住居跡

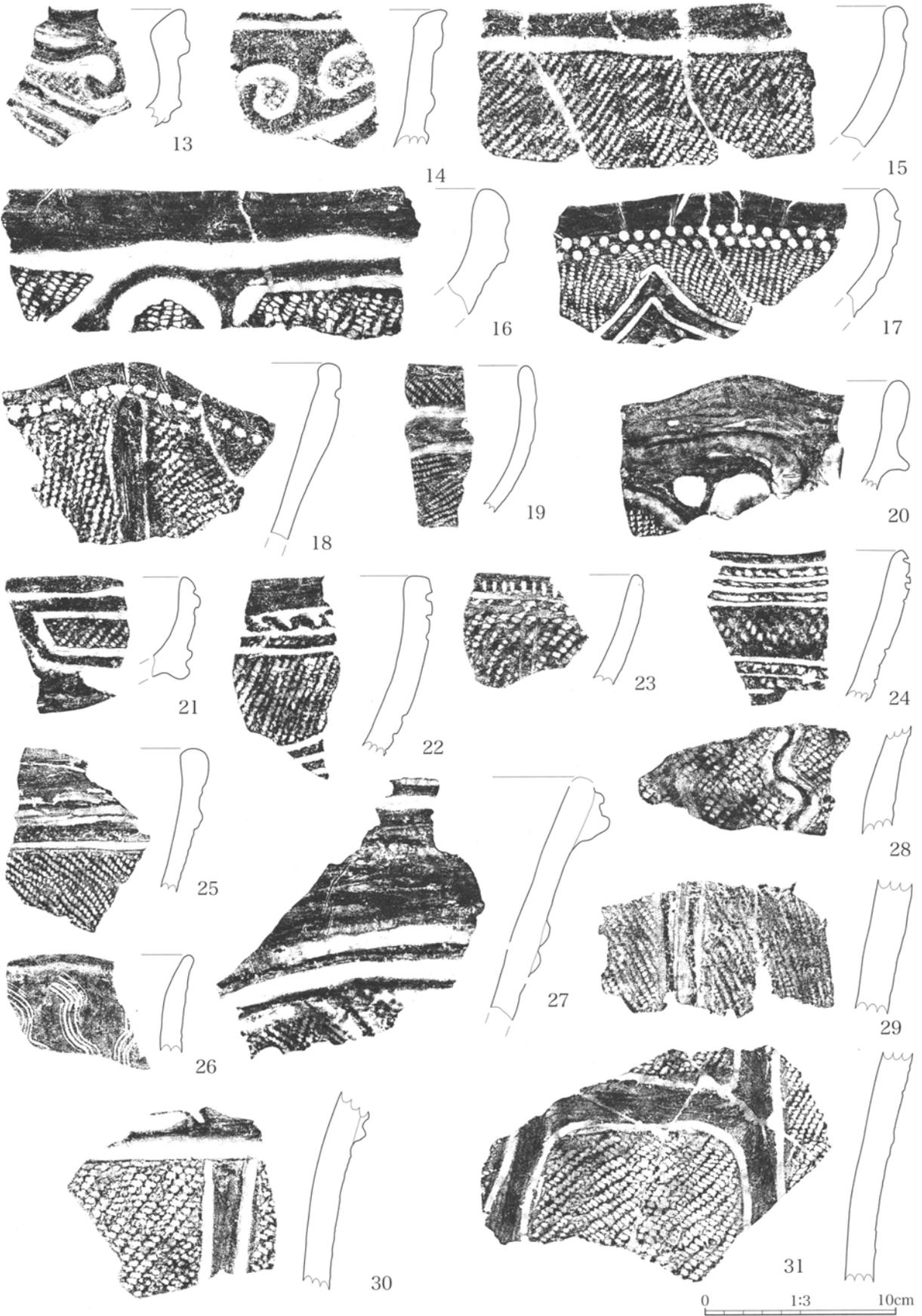


0 1:4 10cm

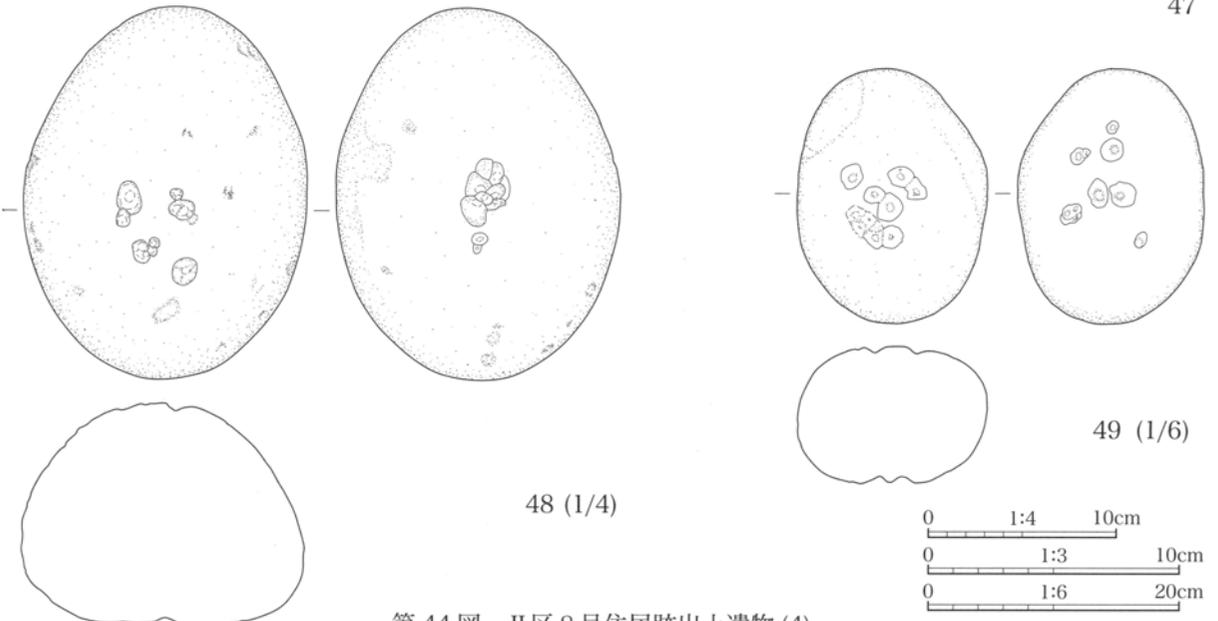
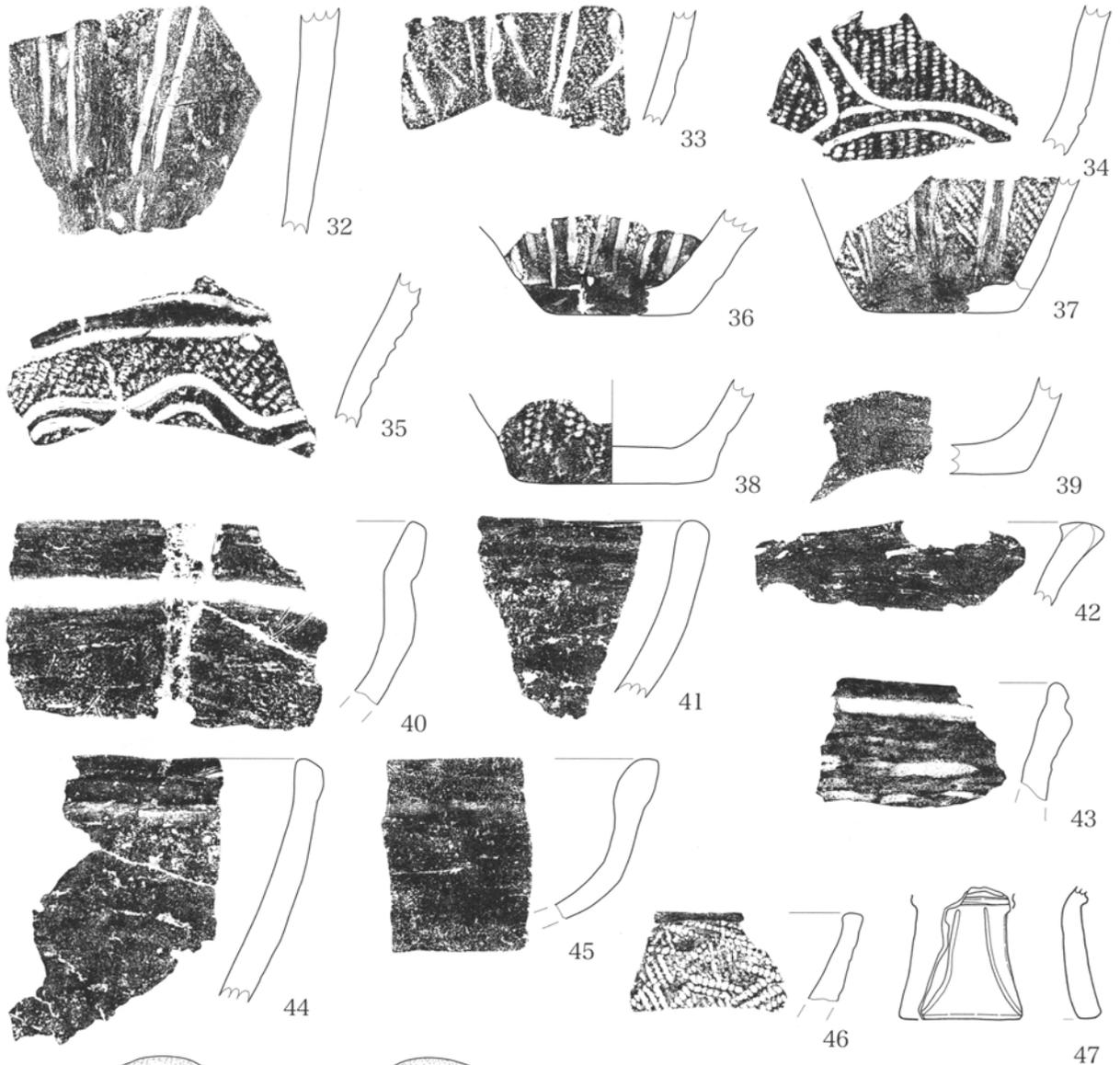
第 41 图 II 区 8 号住居跡出土遺物 (1)



第 42 图 II 区 8 号住居迹出土遗物 (2)



第43图 II区8号住居跡出土遺物(3)



第 44 图 II 区 8 号住居迹出土遗物 (4)



第 45 图 II 区 8 号住居跡出土遺物 (5)

II・2区 11号住居跡 (第46図・PL21)

II区と2区にわたる住居跡で、(042～046, -821～-825) グリッドに位置する。北東部1/4が風倒木による攪乱により破壊されているが、平面形は長辺5.01m、短辺4.36mのやや不整な隅丸長方形と考えられる。壁は、開き気味に立ち上がり、北壁際での深さは52cmである。

炉は、風倒木による攪乱を受け遺存しない。

床面はほぼ平坦で、8基のピットが検出されており、規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1 (65×52cm・14cm)、P2 (85cm・14cm)、P3 (66×60cm・54cm)、P4 (26cm・14cm)、P5 (99×73cm・13cm)、P6 (34cm・19cm)、P7 (40cm・

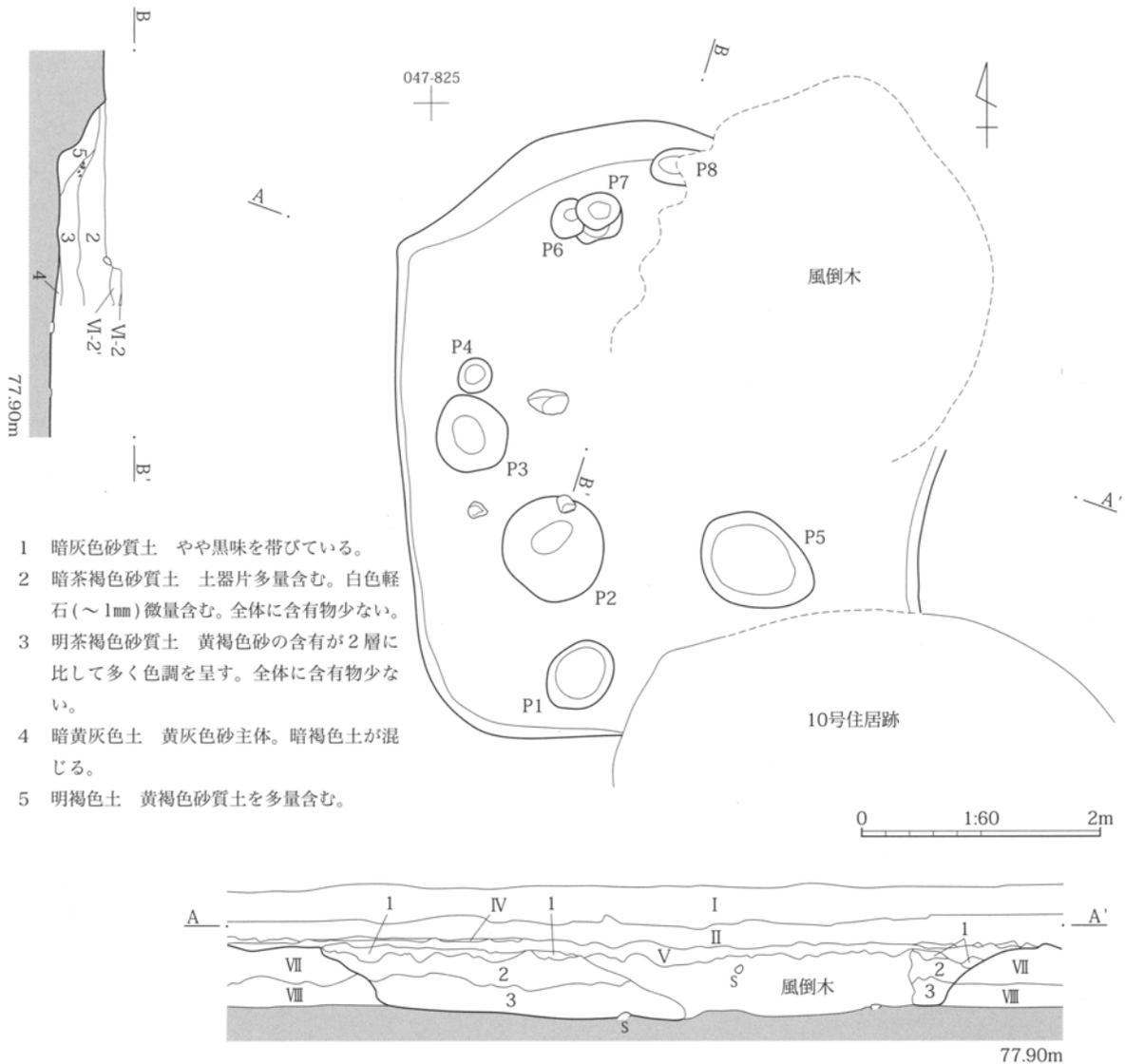
41cm)、P8 (29cm・10cm)。

覆土は、レンズ状の自然堆積状況を示し、4層に分層できる。

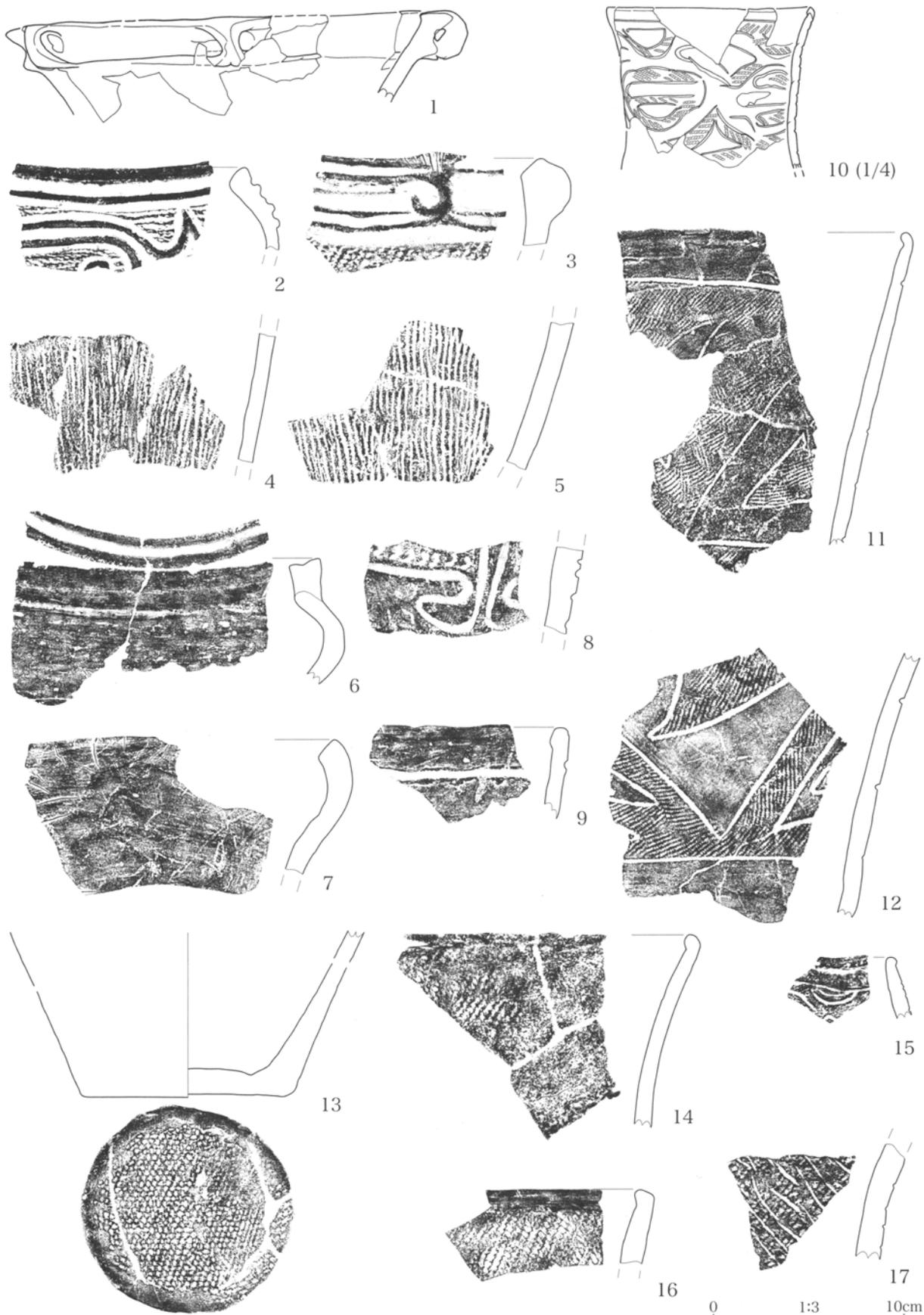
遺物は、覆土中から出土しているが、加曾利E I式、称名寺式、堀之内2式等が混在した状況である。覆土中からは打製石斧(22)や棒状礫(21)が出土した。磨石(19・20)は、風倒木に巻き込まれた状況で出土した(第47～48図、PL111)。

本住居跡の南東部は、後出するII区10号住居跡により壊されている。

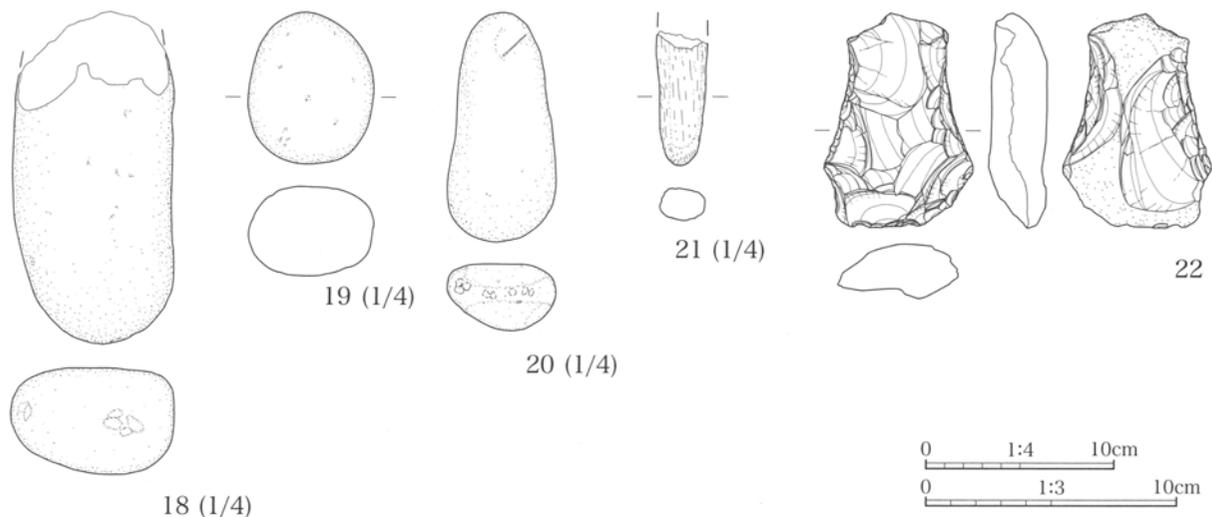
時期は、縄文時代後期前半(加曾利E I式)に位置づけられる。



第46図 II・2区11号住居跡



第47图 II·2区11号住居跡出土遺物(1)



第48図 II・2区11号住居跡出土遺物(2)

II区 13号住居跡 (第49・50図・PL23)

II区北西部の浅い谷地の北縁部にあたる、(051～055, -850～-854) グリッドに位置する。

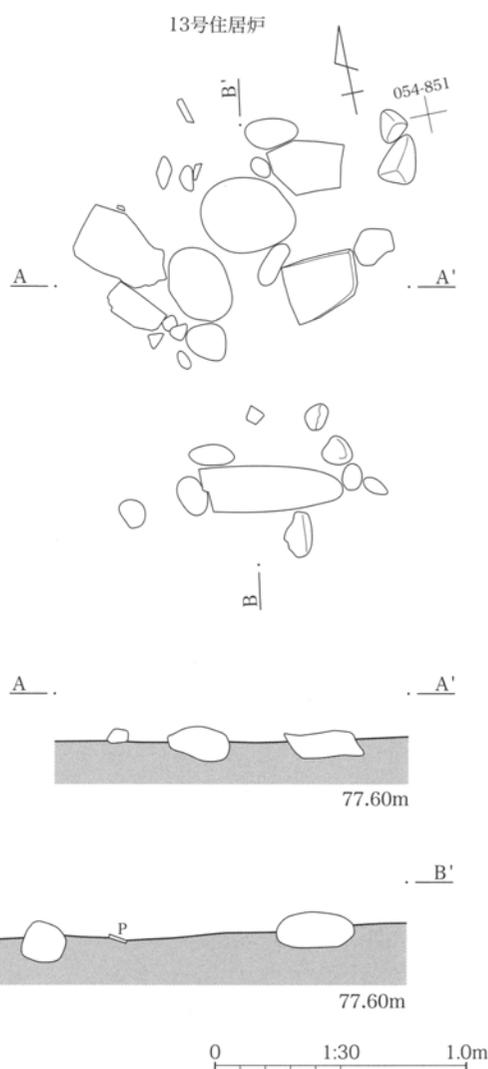
炉と考えられる石組み周辺の状況から住居跡と認定された遺構である。柱穴等も確認されないことから、平面形や規模は推定できない。

炉の南縁には石棒が枕石状に置かれており、北側には被熱により表面が赤化した扁平な礫等が認められた。炉の掘り込みは地山と覆土が類似し、焼土面も確認されないため判然としない。

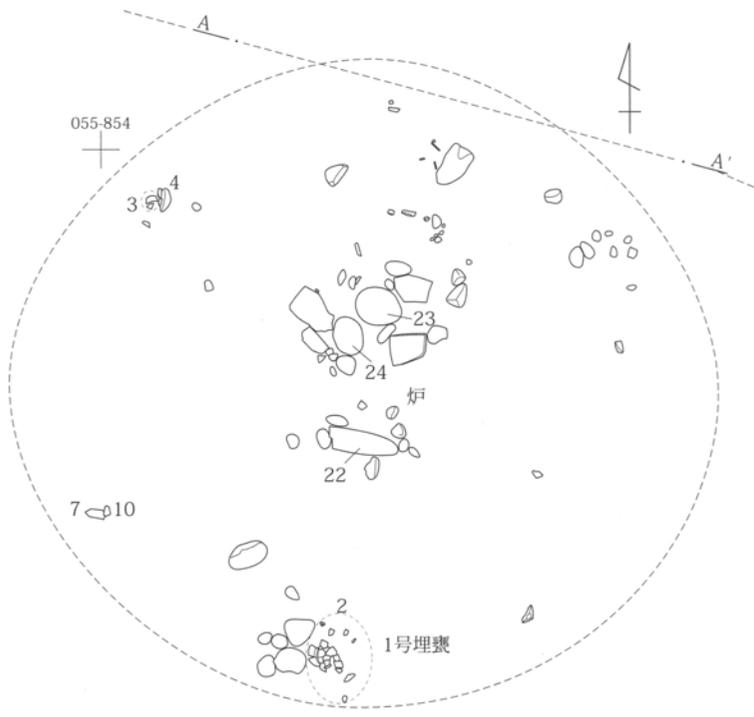
本遺構は敷石の一部が残存した状況と考えられ、柄鏡形住居の可能性もある。また、南壁際に想定される位置で、埋甕(2)が検出された。

遺物は、覆土下層～床面にかけて出土した。加曾利E IV式から称名寺式の遺物が混在する。なお、敷石中には台石(24)、石皿(23)が配されている(第51～53図、PL112)。石棒(22)は緑色片岩製で、一端を欠失するが、径18.9cm、長さ58.6cmが残存する。

時期は、縄文時代後期前半(称名寺式)に位置づけられる。



第49図 II区13号住居跡(1)



055-854

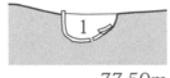
051-853

1号埋囊

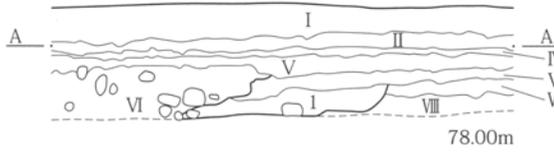
0 1:60 2m



A . . . A'



77.50m

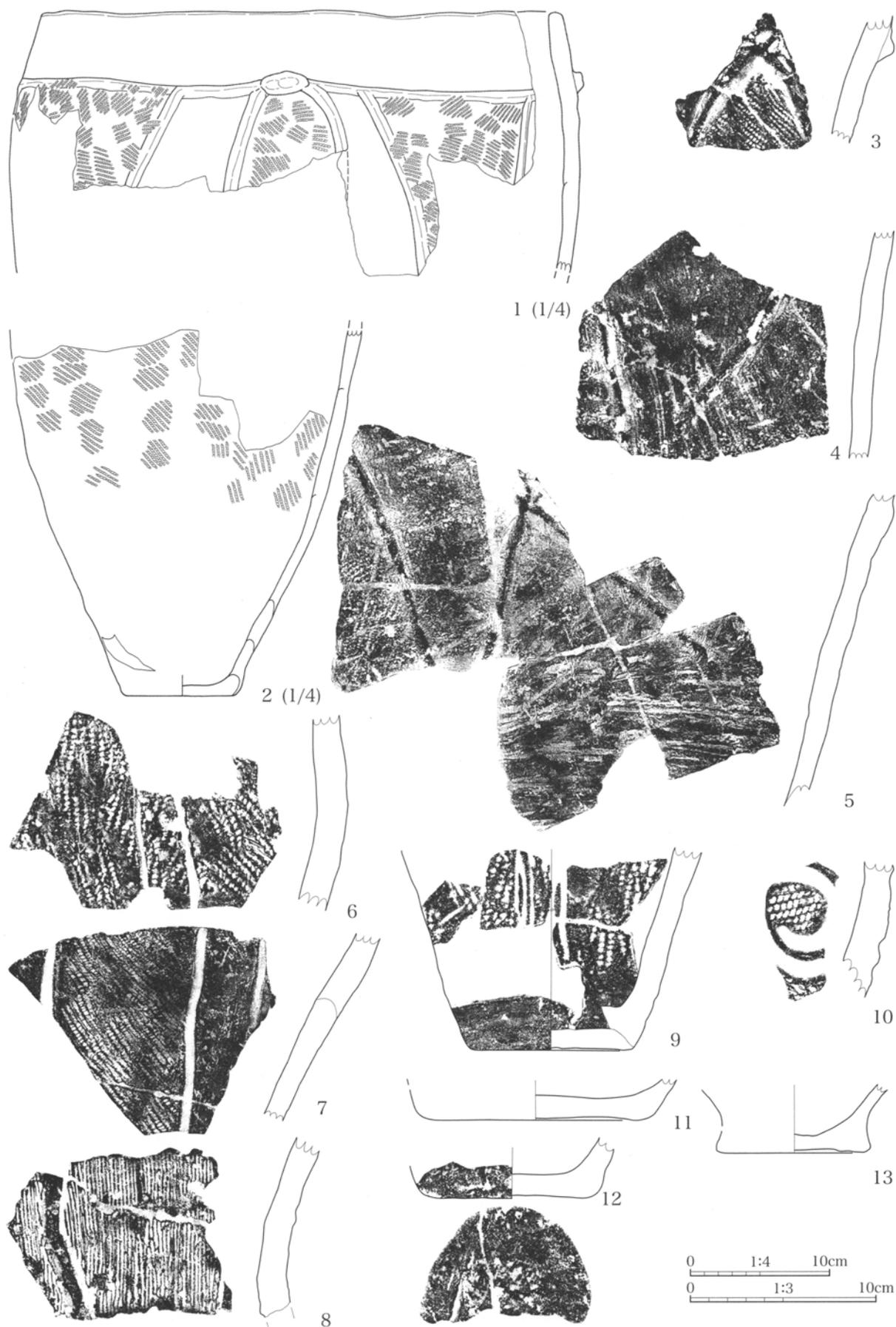


0 1:30 1.0m

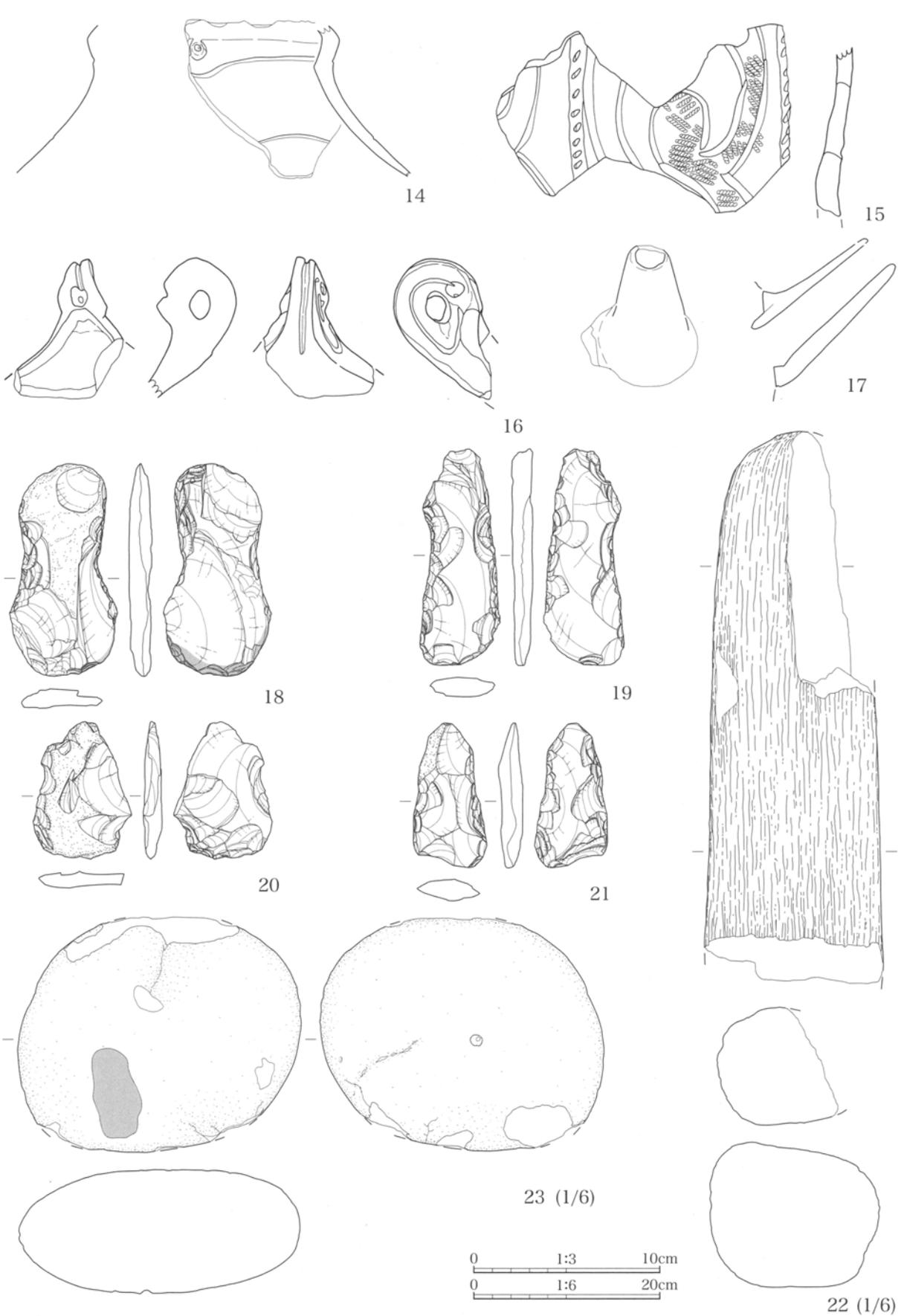
I 黑褐色土 地山砂質土粒少量含む。

I 黑褐色土 地山砂質土粒少量含む。

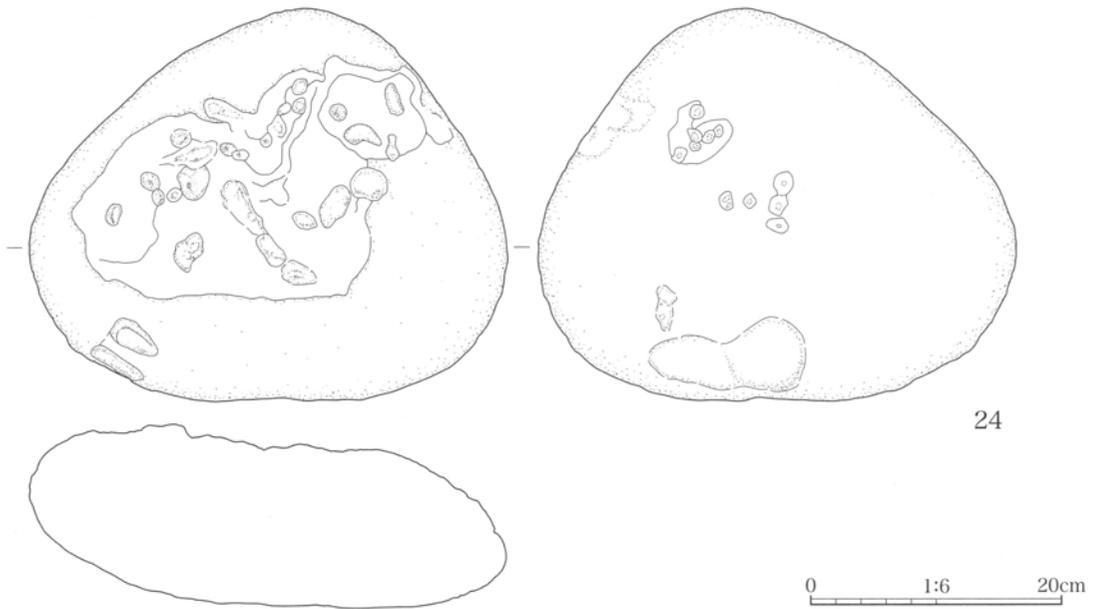
第 50 图 II区 13号住居跡 (2)



第 51 图 II 区 13 号住居跡出土遺物 (1)



第52图 II区13号住居跡出土遺物(2)



第 53 図 II 区 13 号住居跡出土遺物 (3)

II 区 14 号住居跡 (第 54 図・PL23)

II 区北西隅、(049 ~ 054, -873 ~ -879) グリッドに位置する。平面形は長辺 3.55 m、短辺推定 3.45 m の不整な隅丸長方形を呈するが、確認状況が不良なため不明確な点が多い。

壁は緩やかに開き気味に立ち上がり、深さは最大 46cm を測る。

炉は検出されなかったが、竪穴の形状や柱穴と考えられるピット、床面から出土した遺物の分布状況等から住居跡と認定された遺構である。

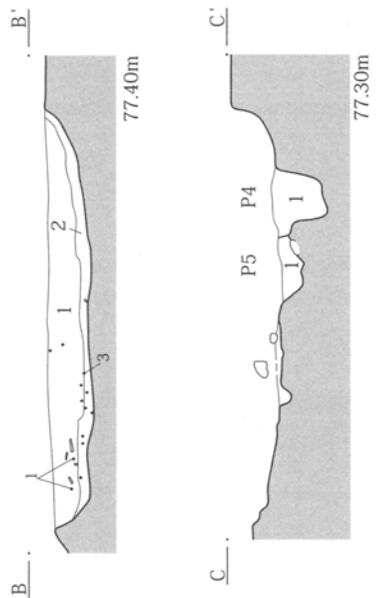
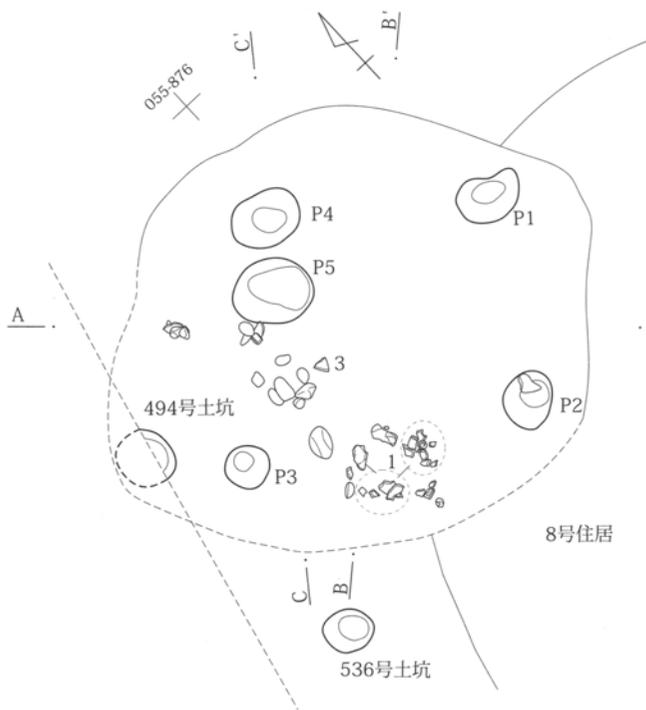
やや凹凸のある床面では、5 基のピットが検出されており、規模 (径・深さ) は、以下の通りである。P1 (53×46cm・33cm)、P2 (46×38cm・45cm)、P3 (48cm・32cm)、P4 (57×42cm・54cm)、P5 (66×52cm・46cm)。なお、494 号土坑も本遺構に関連する可能性がある。

覆土は、レンズ状の堆積を示し、2 層に分層される。

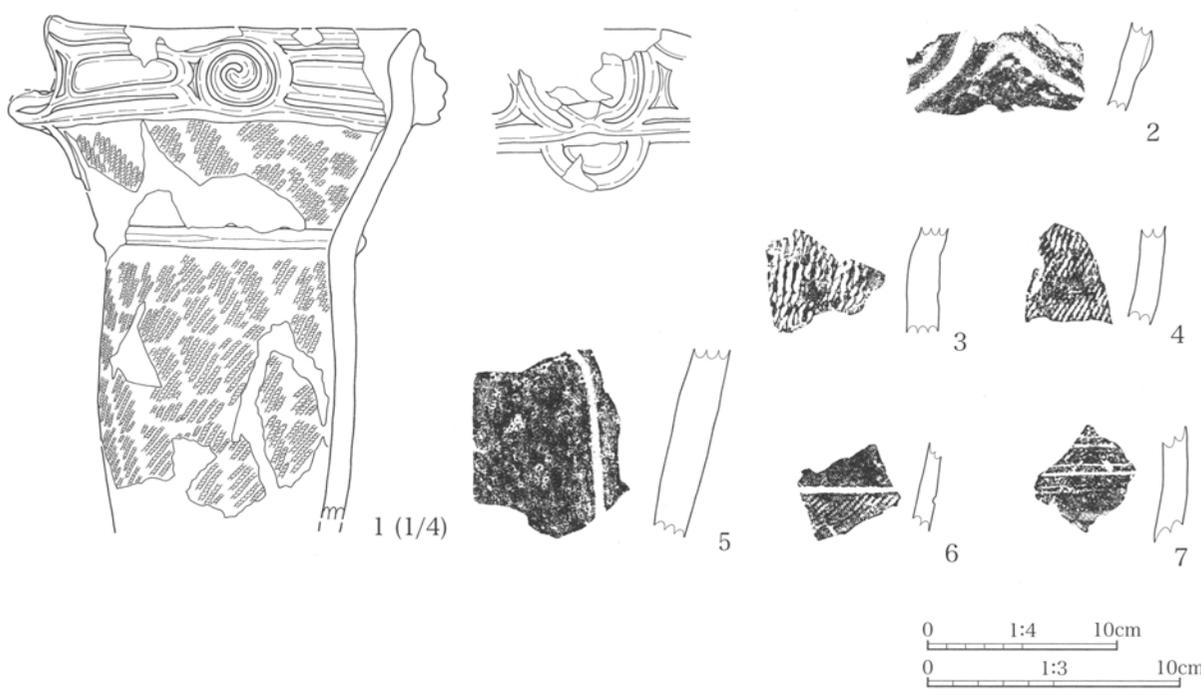
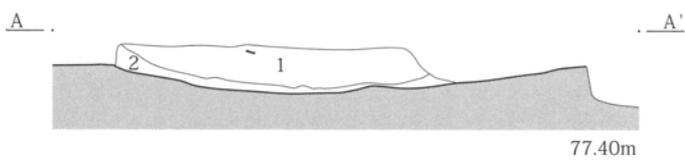
南東部は、II 区 8 号住居跡により破壊されている。

遺物は、土器片が少量出土しているが、大部分は覆土の一次堆積後の窪みに流入した状況を示す。底部付近を欠損する深鉢 (1) は、口縁部に隆帯による渦巻文と橋状突起を有し、頸部にも隆帯が巡る。加曾利 E II 式を主とするが、覆土中には堀之内 2 式の破片 (6) の混入もある。(第 54 図、PL113)

本住居跡の時期は、出土土器から縄文時代中期後半 (加曾利 E II 式) に位置づけられる可能性がある。



- 1 暗褐色砂質土 径2cm大の黄褐色砂ブロックを含む。
- 2 暗褐色砂質土 地山黄褐色砂混じる。



第54図 II区14号住居跡および出土遺物

2区 34号住居跡 (第55・56図・PL24・25)

2区 (053～058, -844～-849) グリッドに位置する。未検出のII区側を含め、平面形は直径5.5m前後の円形と想定される。壁面は垂直気味に立ち上がり、深さは最大40cmを測る。

炉は、ほぼ中央部で検出された。細長い自然礫を縁辺に配した石囲炉で、南縁は礫が省かれている。炉の内法は長径1.31m、短径0.85mの長円形を呈し、縁石からの深さは21cmである。炉の掘り方は、長径1.64m、短径1.17m、深さ最大21cmの長円形を呈する。礫の内面は被熱により赤変している。炉の中央部には、底部付近を欠損する深鉢の上半部(2)が埋設されている。埋設された土器の口縁部上面は、使用に伴うと考えられる摩滅が顕著である。燃焼部の焼土化は認められないが、一部で灰が薄く分布している状況が確認された。南縁の床面には灰や焼土粒・炭化物が散布しており、灰の掻き出し行為が想定される。

床面は、地山の砂質ロームを叩き締めており、北から南へかけての下り傾斜が認められ、その比高差

は15cmである。床面は全体的に硬化しているが、炉の周辺は特に顕著である。

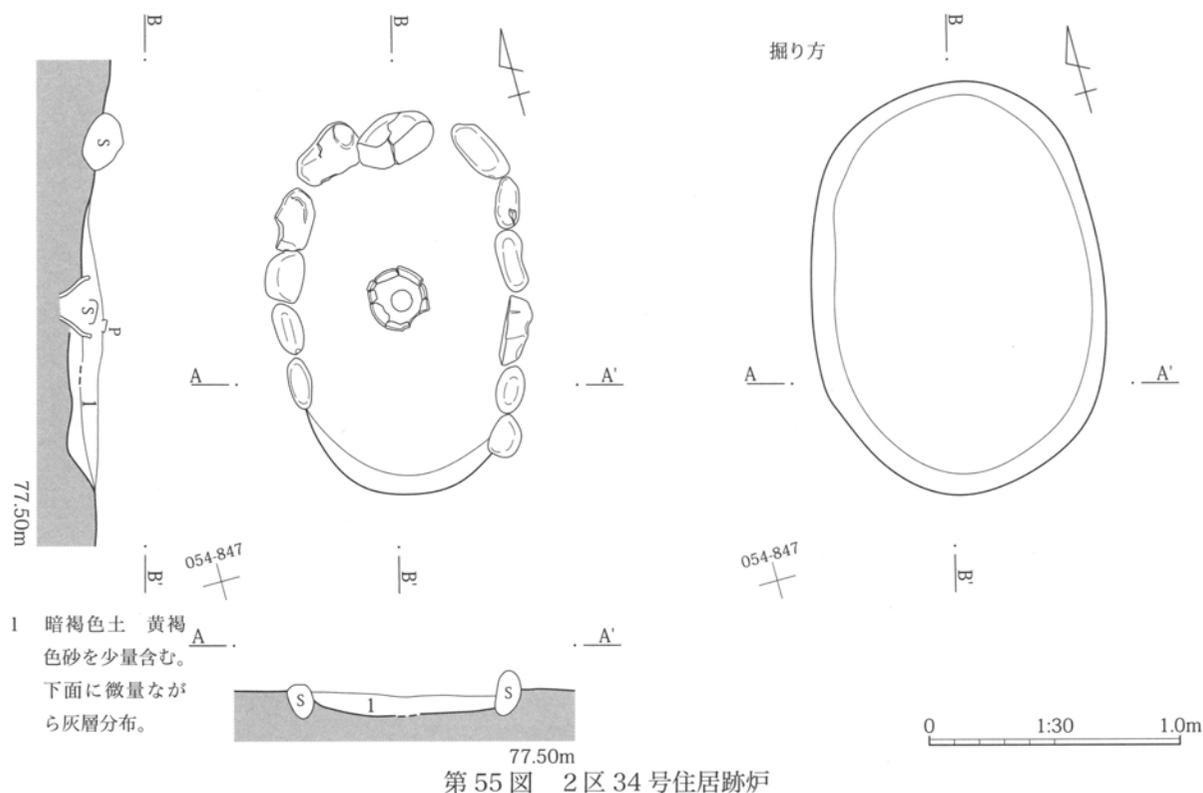
13基のピットが壁際に沿って円形に検出されており、規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1 (48×51cm・29cm)、P2 (32×26cm・22cm)、P3 (51cm・40cm)、P4 (61cm・42cm)、P5 (32cm・32cm)、P6 (33cm・27cm)、P7 (47×43cm・25cm)、P8 (23cm・17cm)、P9 (43cm・23cm)、P10 (29cm・12cm)、P11 (28cm・21cm)、P12 (38×33cm・20cm)、P13 (38×33cm・28cm)。

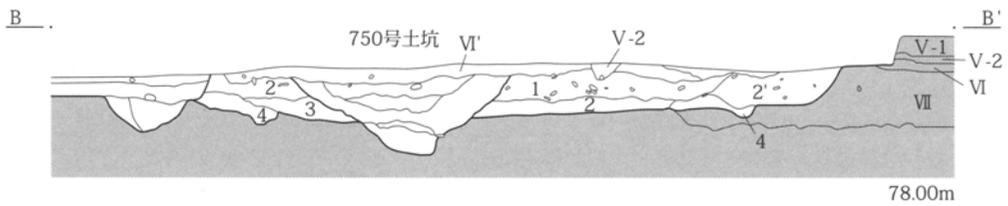
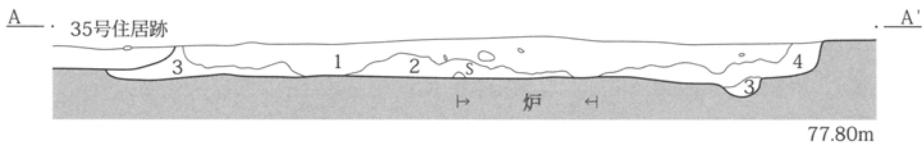
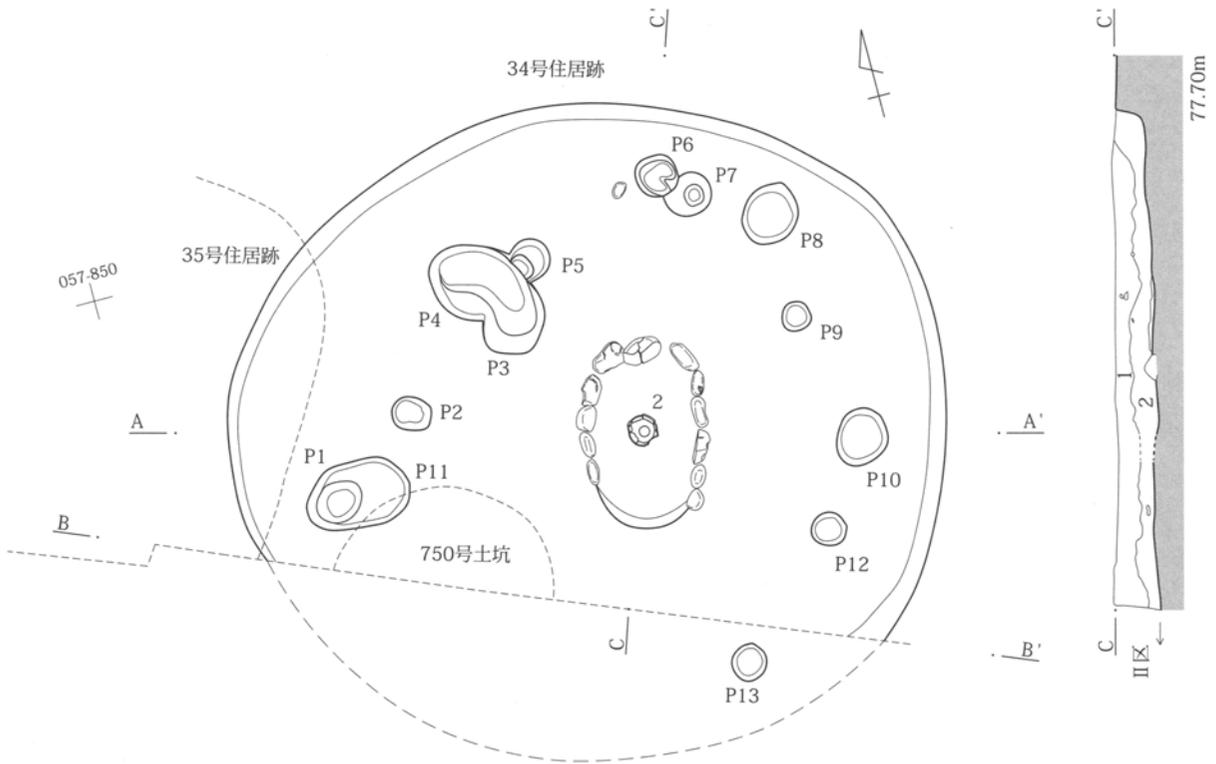
覆土は、レンズ状の堆積が認められ4層に分層される。

重複関係から、2区35号住居跡や750号土坑よりも時期的に先行することがわかる。

遺物は、覆土中層から土器片が多数出土した。(2)が炉の北西で出土した以外に床面に残された遺物は少ない。(第57～59図、PL113・114)

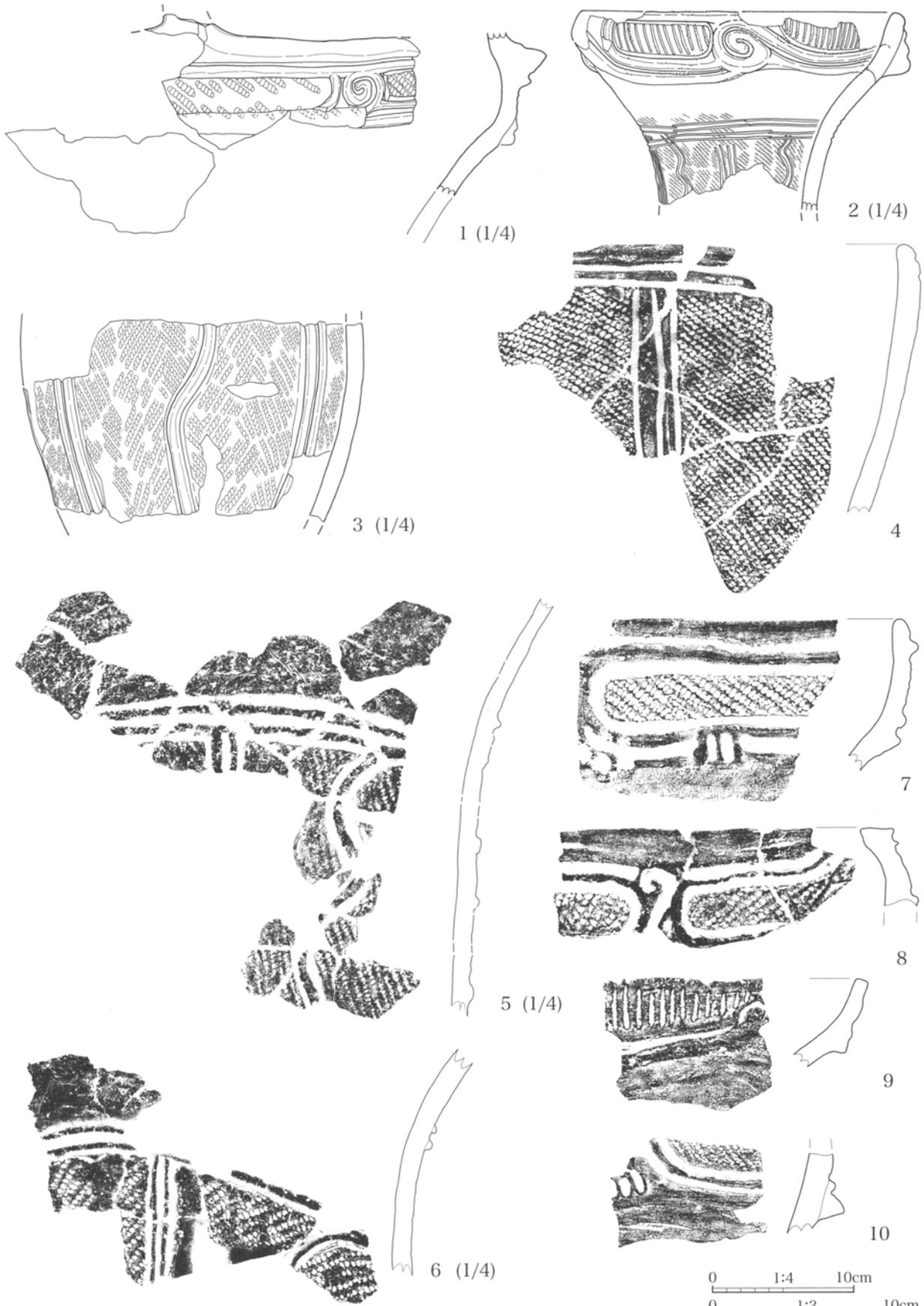
時期は、床面で出土した遺物等から縄文時代中期後半(加曽利E1式新)に位置づけられる。



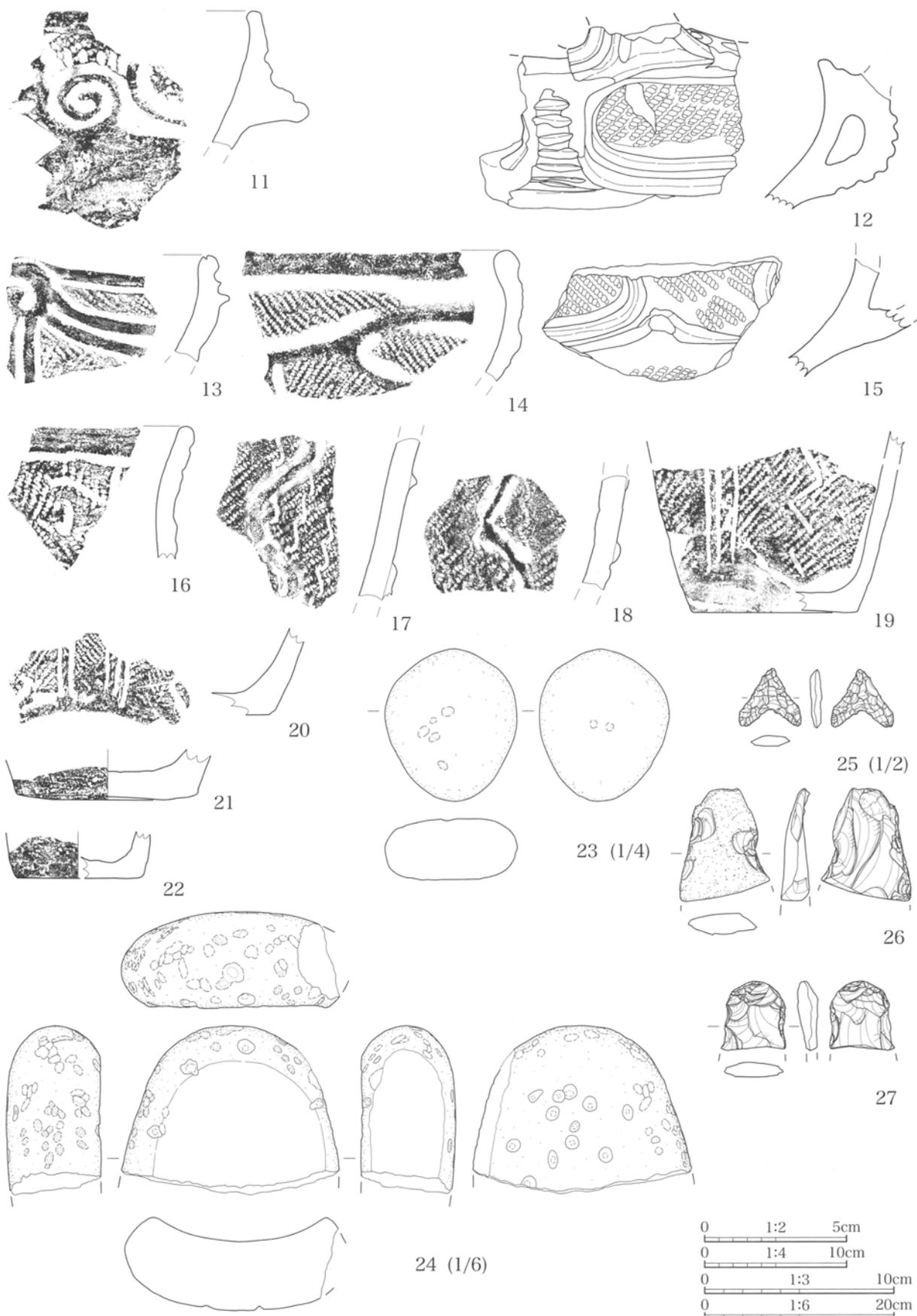


- 1 明褐色土 明黄褐色土の小ブロックが混じる。焼土粒微量含む。多量の土器の廃棄が行われる。
- 2 暗褐色土 微量の焼土粒、炭化物粒と微小白色軽石が含まれる。
- 3 暗褐色土 多量の黄褐色土がブロック状に含まれる。
- 4 暗褐色土 多量の黄褐色砂を混じる。

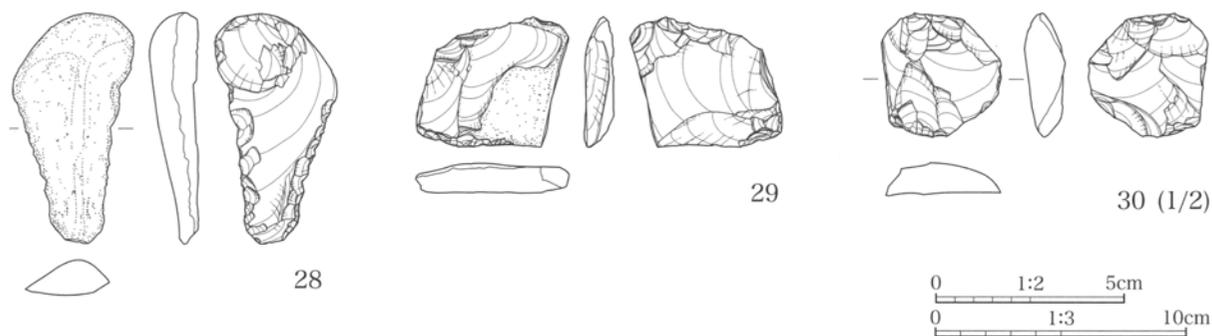
第 56 図 2 区 34 号住居跡



第 57 图 2 区 34 号住居跡出土遺物 (I)



第 58 图 2 区 34 号住居跡出土遺物 (2)



第 59 図 2 区 34 号住居跡出土遺物 (3)

2 区 35 号住居跡 (第 60 図・PL26)

2 区 (053～050, -848～-854) グリッドに位置する。平面形は東西 6.0 m の隅丸 (長) 方形と想定されるが、西半部は後世の風倒木による攪乱を受け、また II 区の範囲が未検出であるため詳細は不明である。また、調査工程の関係で風倒木を挟んだ東西での分割調査となった。

壁面は、垂直気味に立ち上がり、深さは最大 24cm を測る。床面は、地山の砂質ロームであり、さほど硬化していない。

炉は、中央付近と想定される位置で確認された。直径 63cm の円形を呈し、深さは 22cm の地床炉である。燃焼面の焼土化が他の住居跡の炉と比較して特に顕著であった。炉中央部には長さ 20cm ほどの礫が転落した状況で出土した。II 区の調査段階では、半円形の焼土範囲のみが確認されていた。

床面では、壁際に沿って 5 基のピットが検出された。規模 (径・深さ) は、以下の通りである。P1 (47cm・22cm)、P2 (50×43cm・15cm)、P3 (45cm・23cm)、P4 (35cm・11cm)、P5 (44cm・30cm)。

覆土は、4 層に分層される。

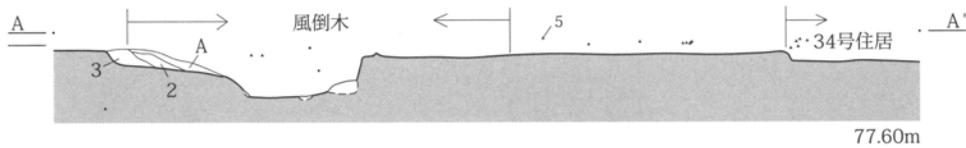
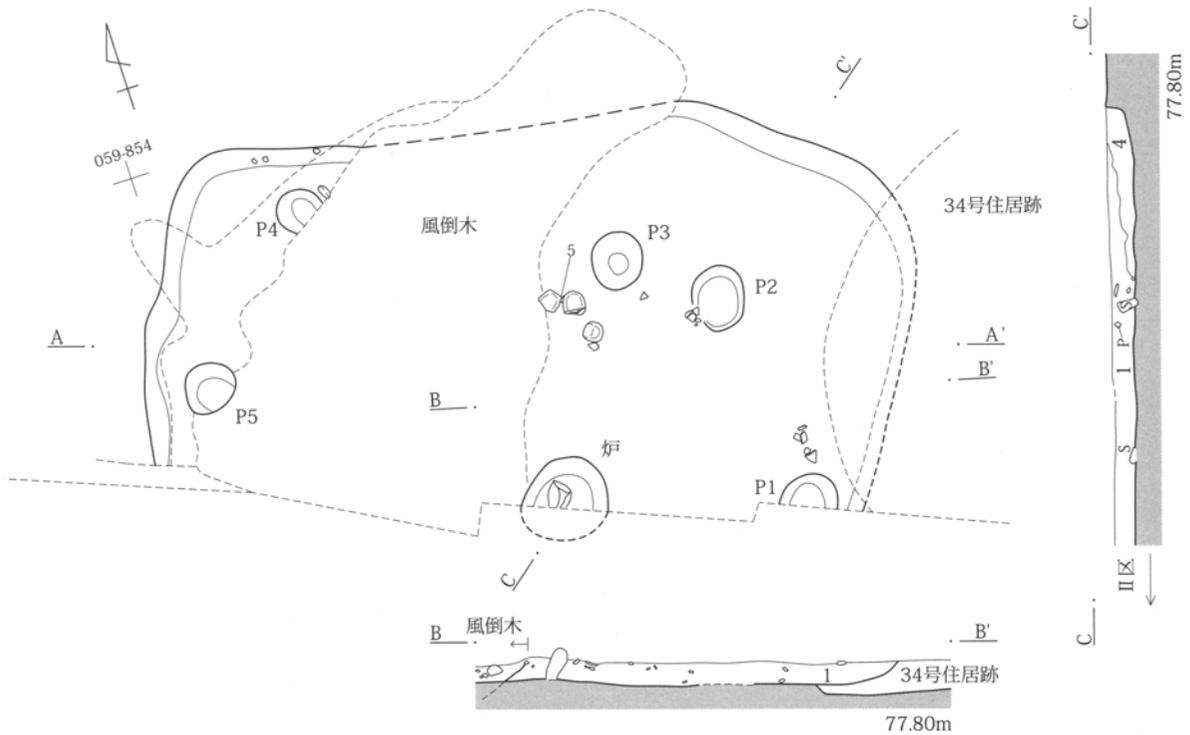
重複関係から、2 区 34 号住居跡よりも後出することが判明した。

遺物は、覆土中および床面からやや浮いた状況

で出土した。称名寺式が主体で、堀之内 2 式 (11～13) が混入する。(2) は波状口縁を呈する深鉢で、波頂部には沈線による渦巻き文が施されている。平行沈線による区画文中に刺突文が施される土器と、条線を有する土器がある。(13) は、注口土器の注口部である。

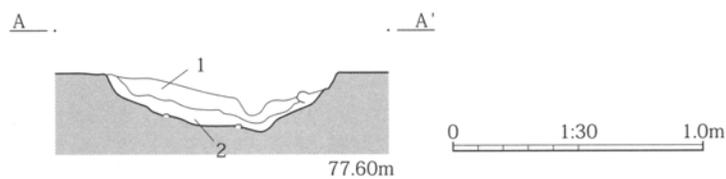
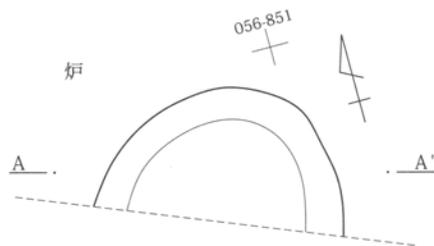
覆土中から打製石斧 (15・16)、スクレイパー (17) が出土した。(第 61・62 図、PL114)

時期は、不明な点はあるが、縄文時代後期前半 (称名寺式か) と考える。



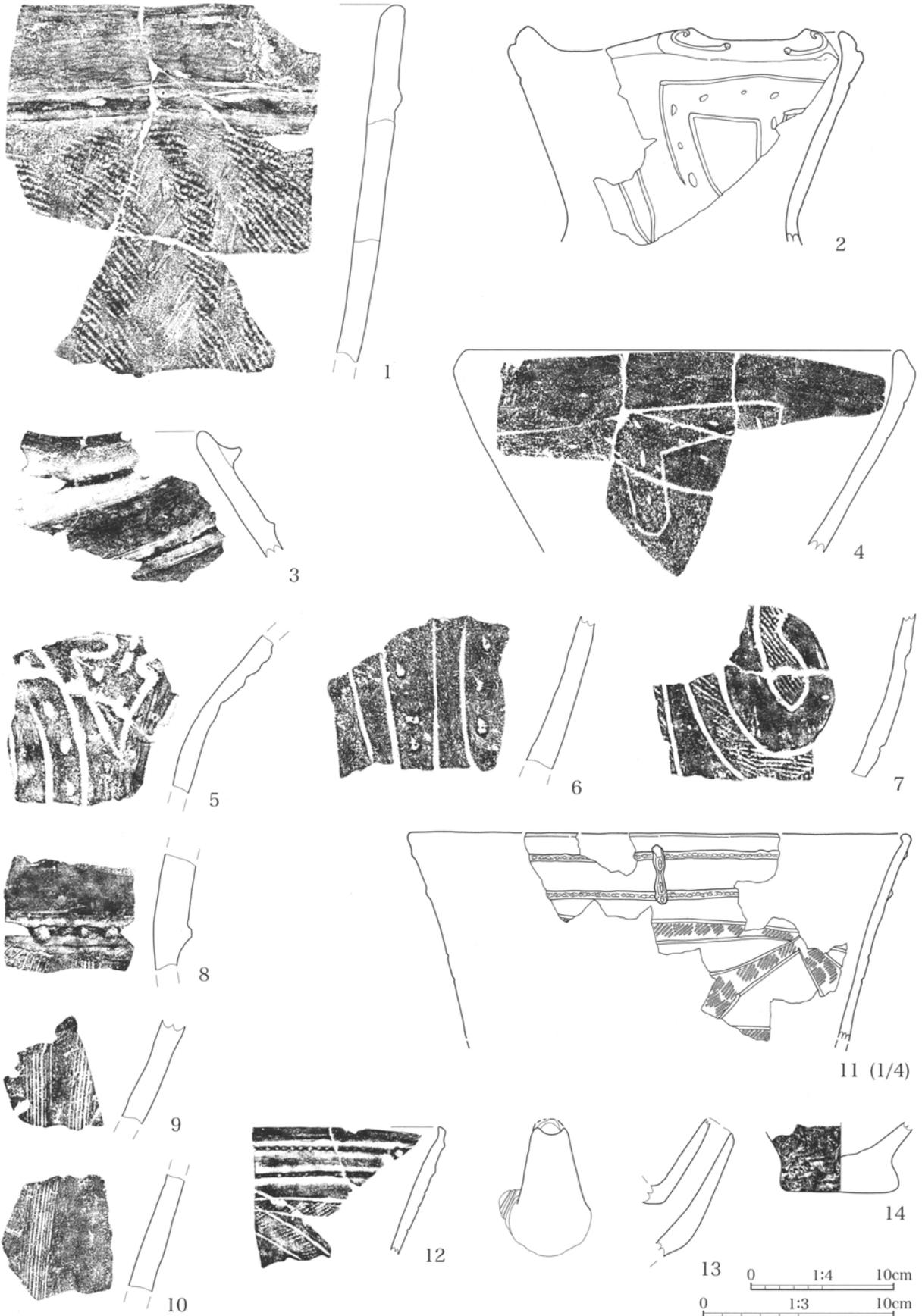
- 1 暗褐色土 やや砂質。小礫～人頭大の礫が含まれる。
 - 2 暗褐色土 褐色ローム粒径1mmを微含する。炭化物粒、土器片を微含する。やや軟らかい。やや粘性がある。
 - 3 黒褐色土 砂を多含する。明色の黒褐色土を2%程度含む。軟らかく粘性なし。
 - 4 明褐色土 1に比して多量の黄褐色砂が含まれる。
- A 風倒木による攪乱

0 1:60 2m

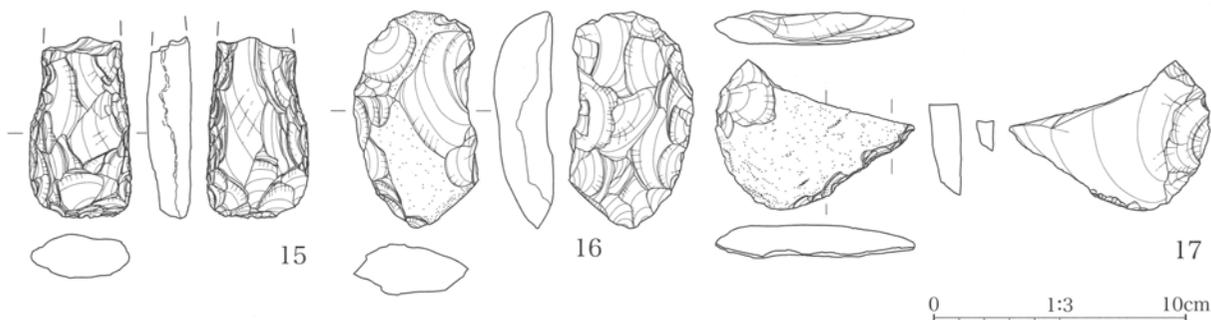


- 1 赤褐色土 焼土層、炭化物少量含む。
- 2 暗褐色土 砂質。焼土粒、炭化物粒を少量含む。

第60図 2区35号住居跡



第 61 图 2 区 35 号住居跡出土遺物 (1)



第 62 図 2 区 35 号住居跡出土遺物 (2)

2 区 36 号住居跡 (第 63～65 図・PL27・28)

2 区中央部 (053～059, -835～-840) グリッドに位置する。埋没した谷地の西縁部を掘り込んで築かれている。平面形は南北 5.4m、東西 4.7m のやや不整な隅丸長方形である。壁面は、垂直気味に立ち上がり、深さは最大 49cm である。東西の壁際では長さ 2.5m 前後、幅 25cm 前後、深さ 6～10cm の周溝が、対応する形で検出された。

炉は、ほぼ中央部で検出された。炉の南半部には自然礫、北半部は深鉢 (2) の部大形破片が配された変則的な石囲炉となっている。炉は内法が 40 cm の隅丸方形を呈し、深さは 15cm である。燃烧面の焼土化は不明瞭だが、礫の内面は被熱により赤変している。炉の掘り方は直径 99cm 前後の不整円形で、深さは 30cm である。

床面はやや凹凸はあるが、炉を中心とした範囲から東壁にかけて硬化が顕著であった。9 基のピットが検出されたが、一部は隣接する 39 号住居跡に伴う可能性がある。規模 (径・深さ) は、以下の通りである。P1 (48×44cm・36cm)、P2 (40cm・43cm)、P3 (62×42cm・32cm)、P4 (34cm・38cm)、P5 (48cm・24cm)、P6 (31×25cm・32cm)、P7 (41×37cm・23cm)、P8 (63×35cm・19cm)、P9 (38cm・32cm)。

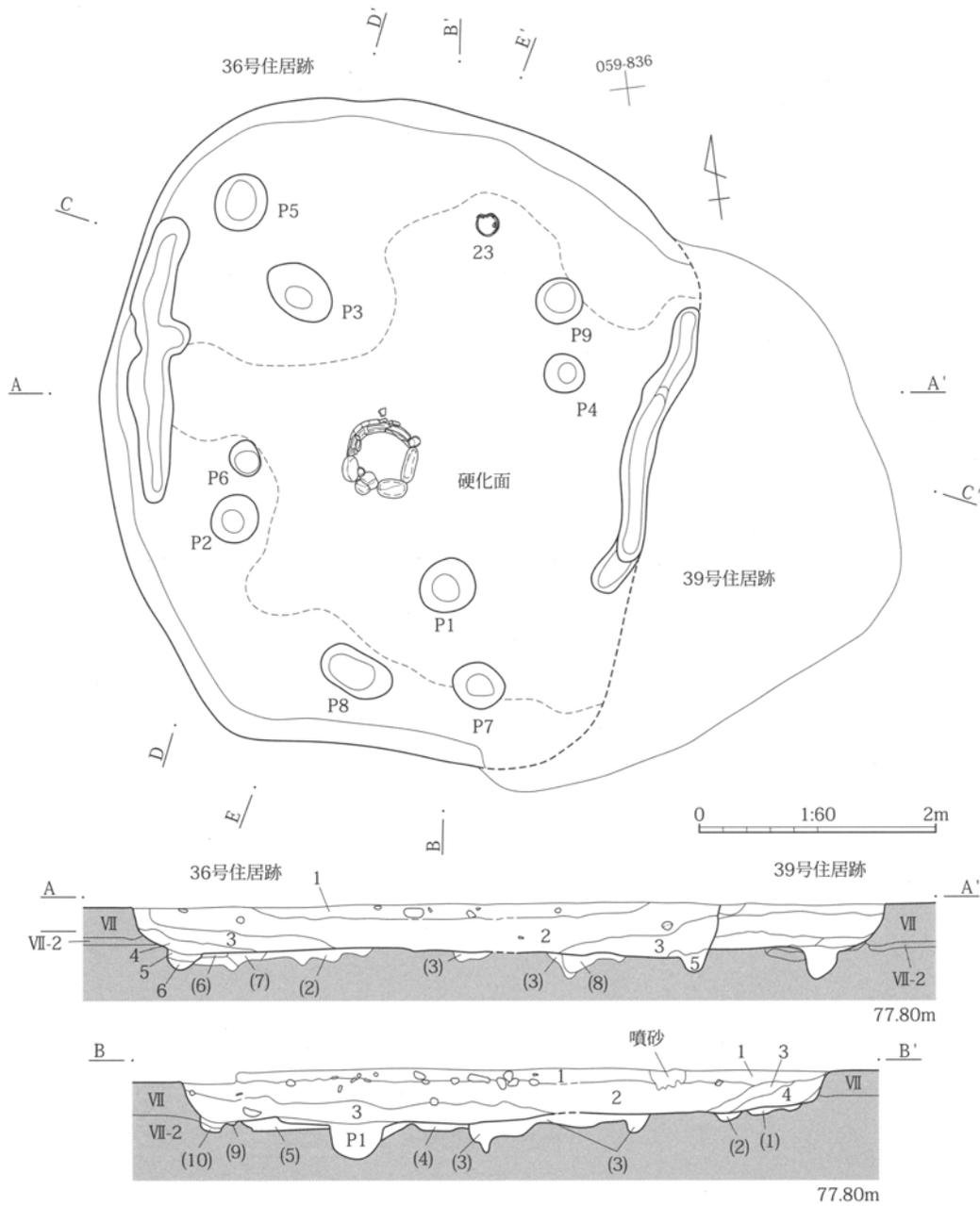
覆土が地山の土層と類似するため平面形の確認が困難であったが、上～中層への多量の礫・土器片の

廃棄が顕著であったことから、上面からの調査が可能となった。廃棄遺物の状況からレンズ状の堆積状況が観察され、5層に分離された。

重複関係から、2 区 39 号住居跡よりも後出する状況が確認された。

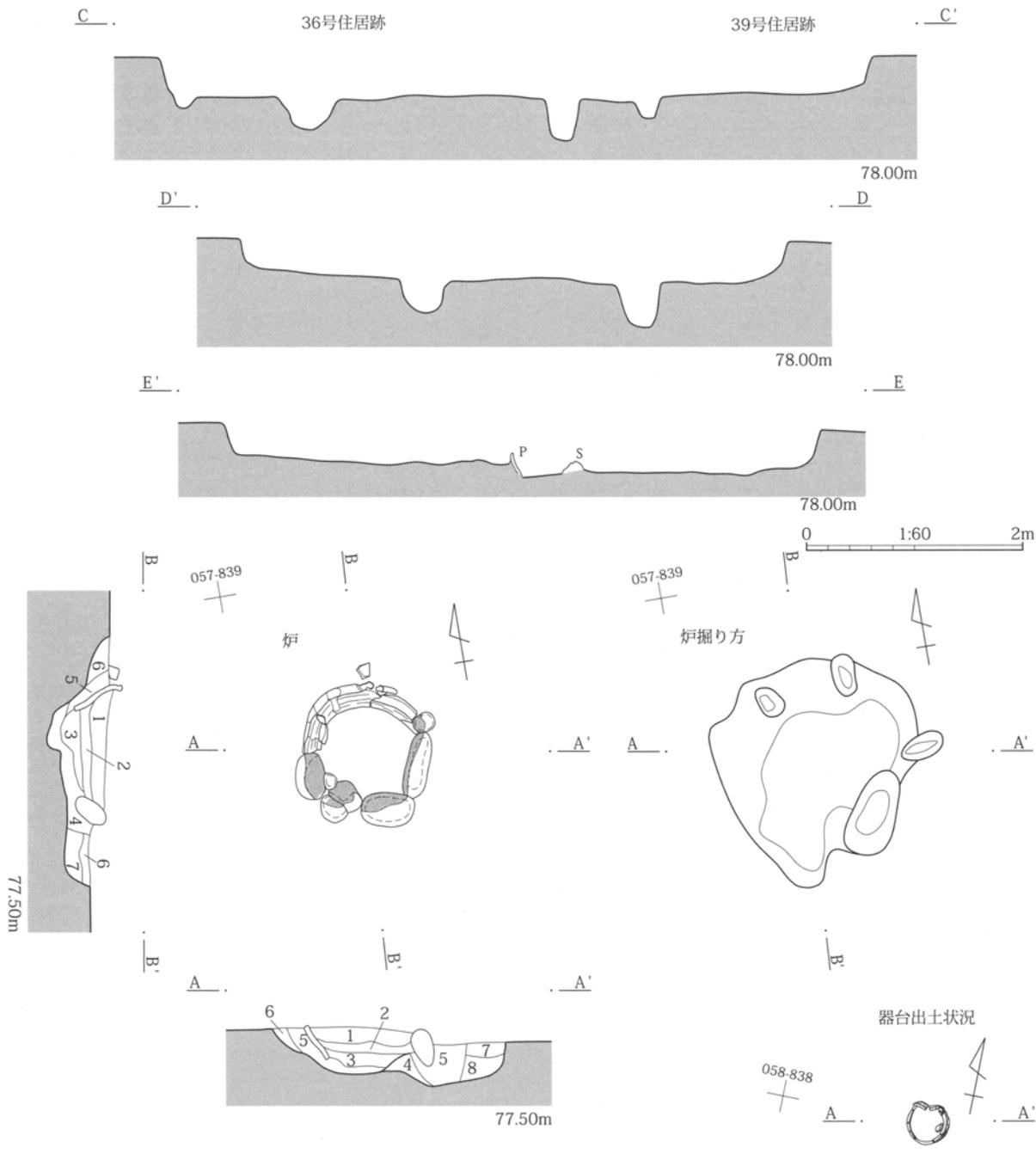
遺物 (第 66～70 図・PL115～117) は、大部分が上～中層の廃棄遺物で、床面からの出土は少なかったが、北壁よりで完形の器台 (23) が逆位で出土した。覆土中の土器片は加曾利 E III 式が主体であるが、廃棄遺物中には称名寺式 (25～28) や堀之内 I 式 (29・30)、加曾利 B I 式 (39) も混在する。石器類は、打製石斧 (64～74)、石錐 (59～61、63)、スクレイパー (57・58) の他、磨石・敲石・石皿等が多数出土した。(62) は、石鏃の未製品と考えられる。

時期は、縄文時代中期後半 (加曾利 E III 式) に位置づけられるが、廃絶後は廃棄空間として機能していた状況が認められる。



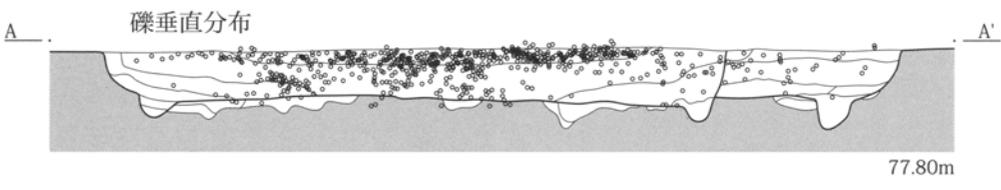
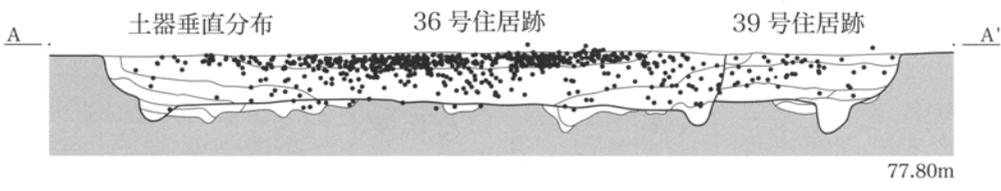
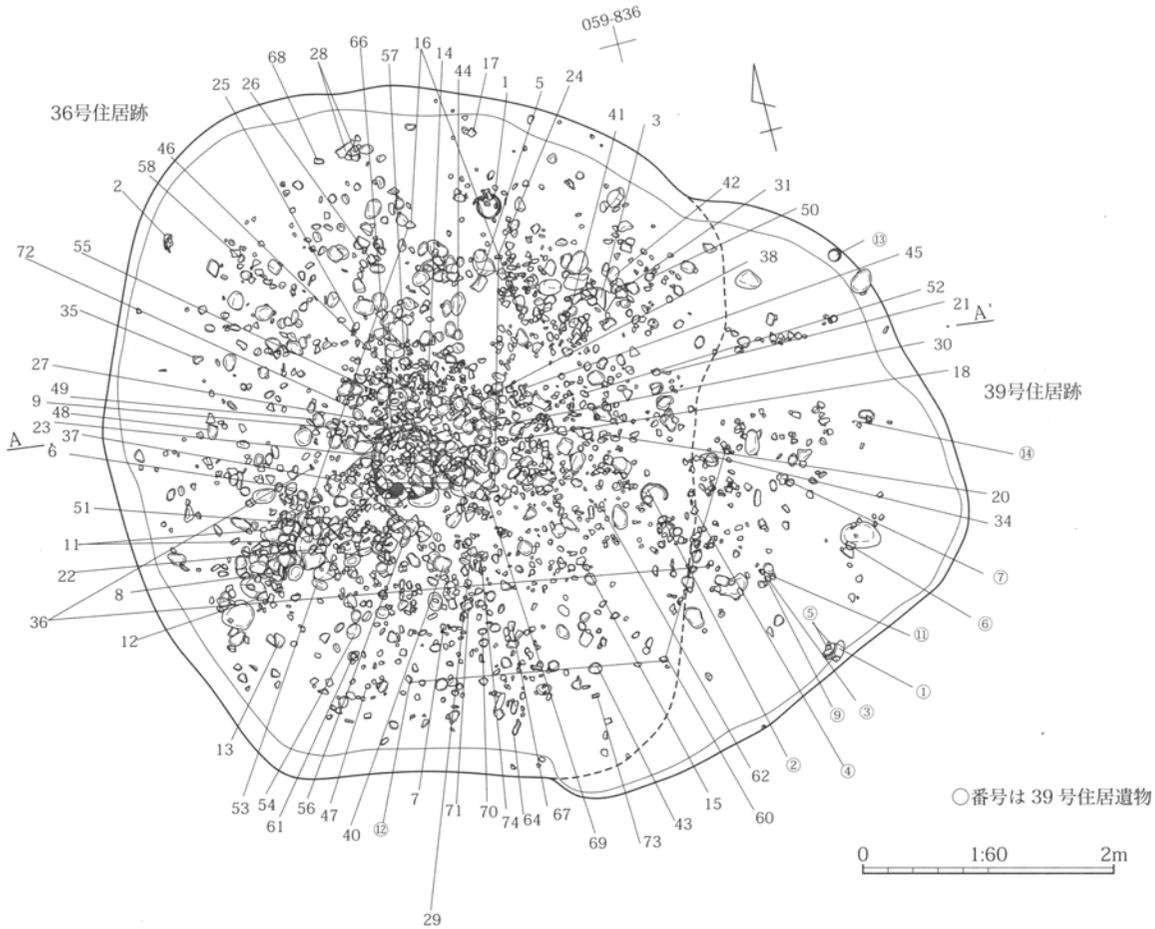
- | | |
|--|---|
| <p>1 暗茶褐色砂質土 炭化物粒(～1mm)、焼土粒(径1mm前後)少量、白色軽石(SPorYP)を含む。多量の土器片、礫(径数cm～20cm程度)が多量廃棄された状況を示す。</p> <p>2 暗茶褐色砂質土 明茶褐色ブロック(～3cm前後)を多量混じる。白色軽石(SPorYP)と炭化物粒、焼土粒(径1mm程度)を微量含む。本層も多くの土器片、礫が含まれる。</p> <p>3 暗褐色土 焼土粒(～3mm)炭化物粒(～3mm)を少量、白色軽石を(～3mm)を含む。下部周辺部でより粘質。</p> <p>4 暗褐色土 3層に比して、黄褐色砂が多量含まれ明色を呈す。</p> <p>5 暗褐色土 4層に類するが、より多量の黄褐色砂が含まれる。周溝覆土。</p> <p>6 黄褐色砂質土 黄褐色砂主体。含有物少ない。</p> | <p>(1) 黒褐色土 灰白色軽石、褐色ローム粒径1cmを含む。</p> <p>(2) 黒褐色土 1層より暗色。下部はやや明色。明黄褐色ローム径1cmを含む。</p> <p>(3) 黒褐色土 白色軽石粒、中～下部に褐色ロームブロックを含む。</p> <p>(4) 黒褐色土 白色軽石粒、褐色ロームブロックを含む。</p> <p>(5) 暗褐色土 白色軽石粒、褐色ローム粒を含む。赤みを帯びる。</p> <p>(6) 黒色砂質土 灰白色軽石粒を含む。</p> <p>(7) 黒色砂質土 軽石粒を含まず。</p> <p>(8) 黒色土</p> <p>(9) 暗褐色土 褐色ロームを斑状に含む。灰白色軽石粒を多く含む。</p> <p>(10) 黒色土 褐色ロームを斑状に含む。</p> |
|--|---|

第63図 2区36号住居跡(1)

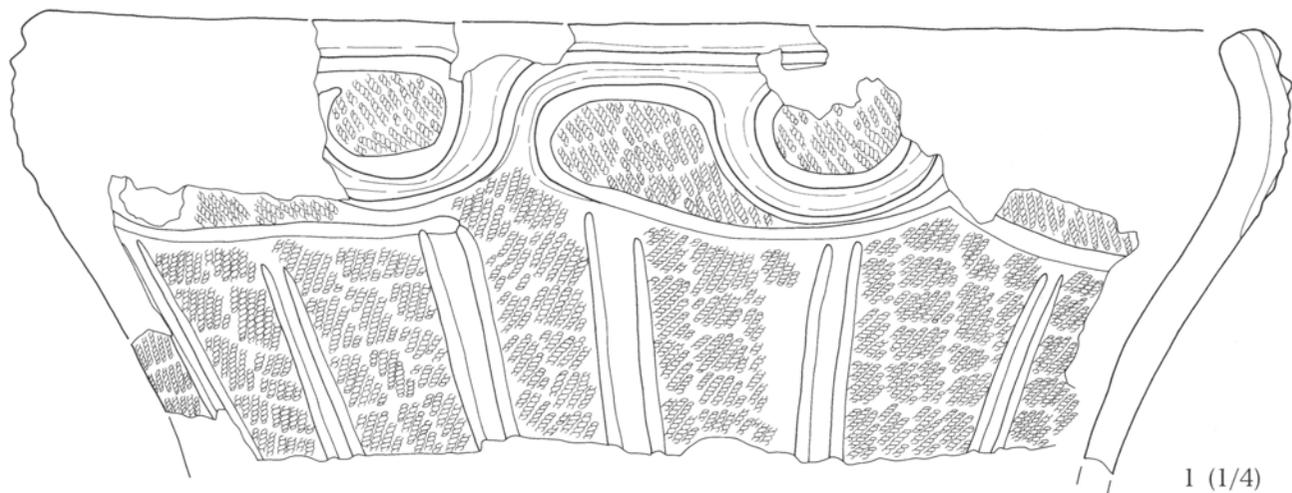


- 1 黒褐色土 焼土粒、炭化物粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 1層に比し含有物が多い。
- 3 黒褐色土 炭化物、焼土流を含む。黄褐色砂を含み、1層より明色を呈する。
- 4 明褐色土 多量の黄褐色砂が主体。
- 5 黒褐色土 含有物少なくやや粘質。
- 6 暗褐色土 暗褐色土と黄褐色砂の混土。硬くしまっている。貼り床材。
- 7 暗褐色土 黄褐色砂少量含む。
- 8 暗褐色土 7層に類するが含有物より少ない。

第64図 2区36号住居跡(2)



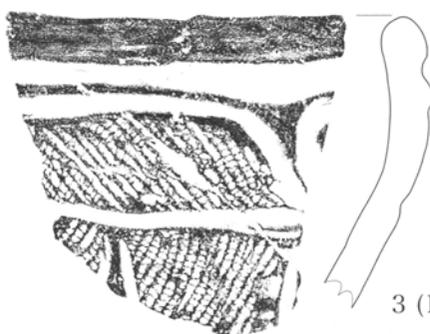
第65図 2区36・39号住居跡遺物出土状況



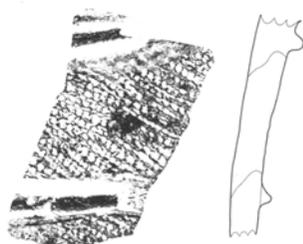
1 (1/4)



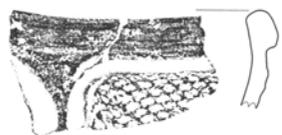
2 (1/4)



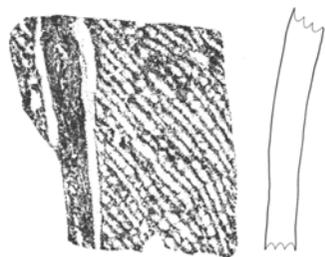
3 (1/4)



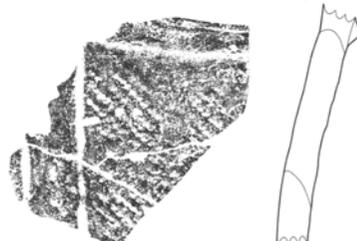
5 (1/4)



4



7



8



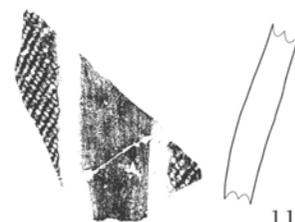
6



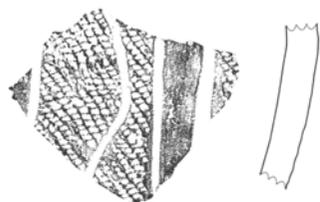
9



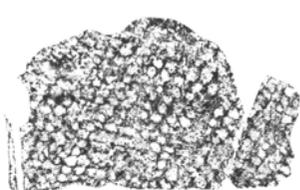
10



11



12



13

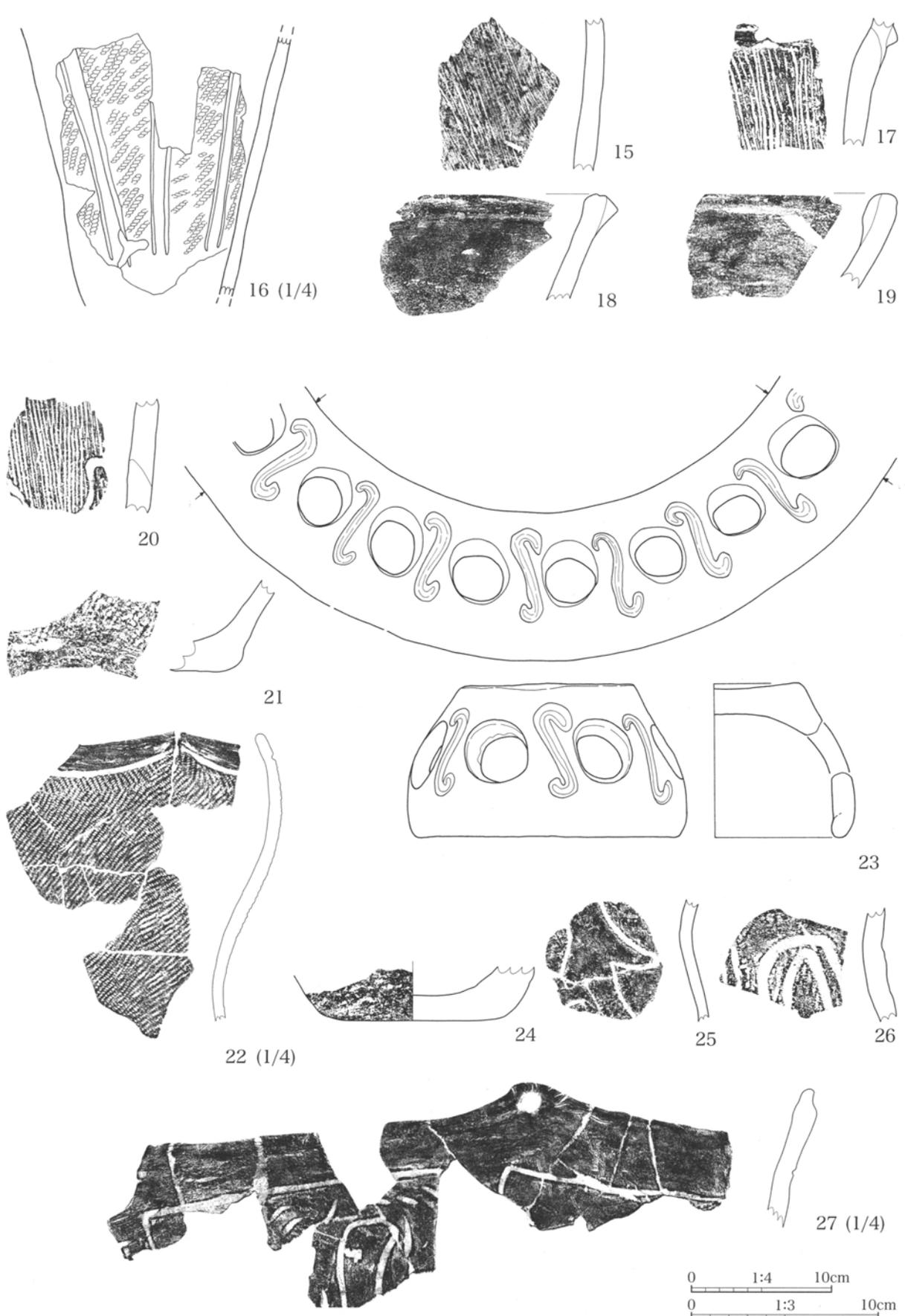


14

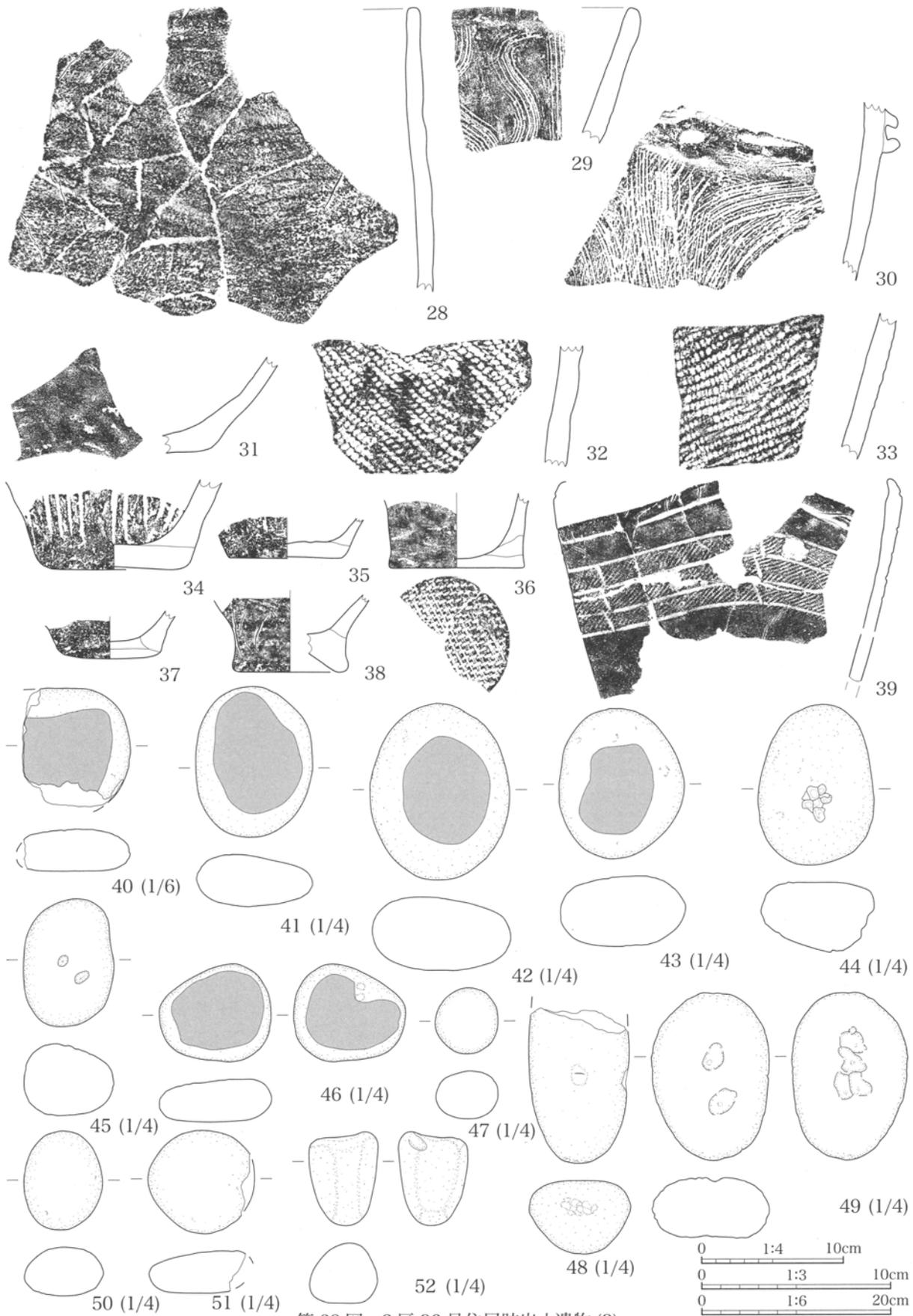
0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

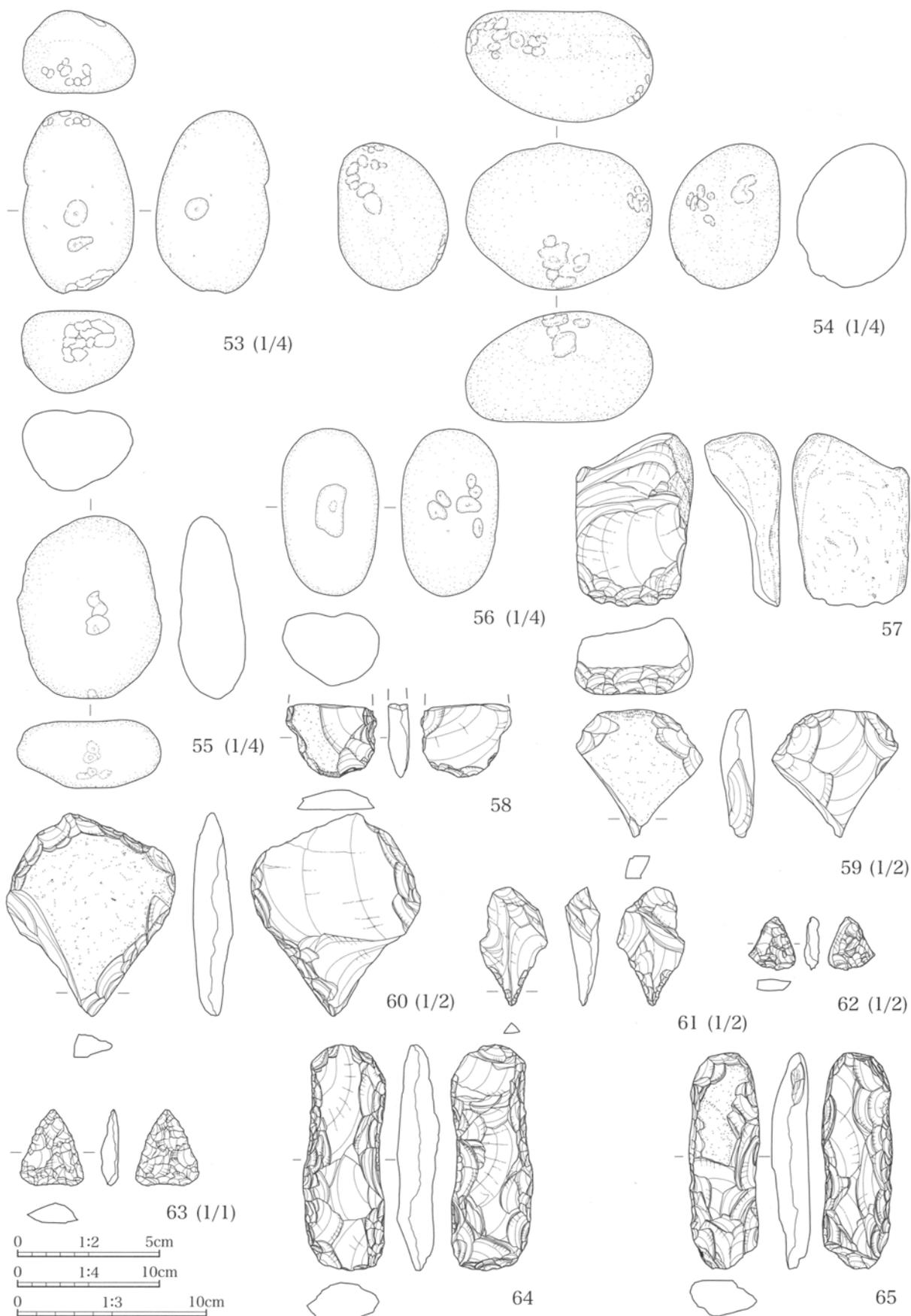
第66图 2区36号住居跡出土遺物(1)



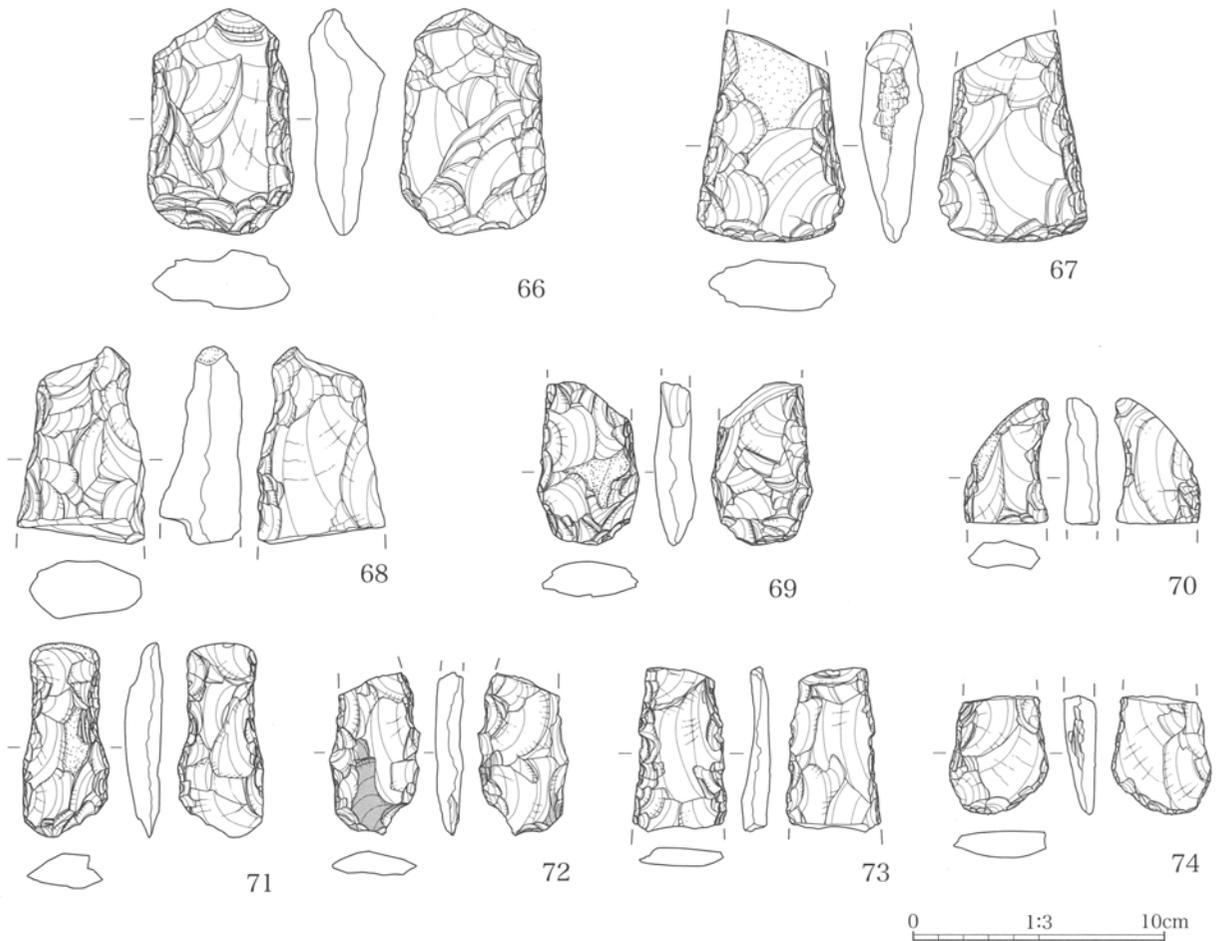
第 67 图 2 区 36 号住居跡出土遺物 (2)



第 68 图 2 区 36 号住居跡出土遺物 (3)



第69图 2区36号住居跡出土遺物(4)



第70図 2区36号住居跡出土遺物(5)

2区 39号住居跡(第71図・PL31)

2区(053~057, -834~-837)グリッドに位置する。西半部は36号住居跡により破壊されているが、一辺約4.1×3.7mの隅丸方形を呈すると考えられる。壁面は、垂直気味に立ち上がり、深さは最大42cmを測る。

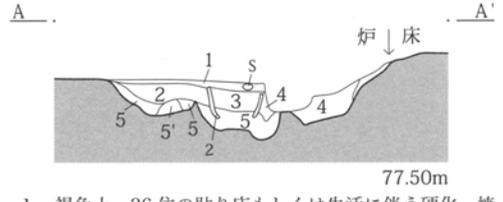
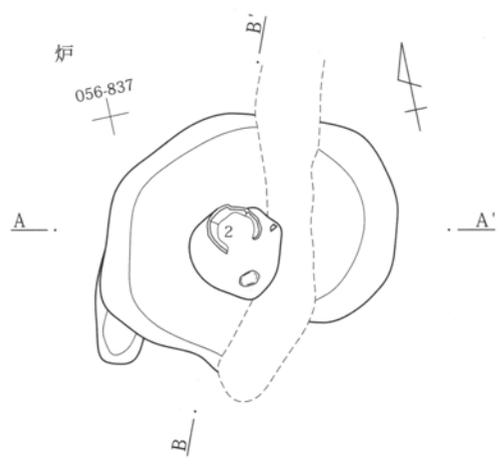
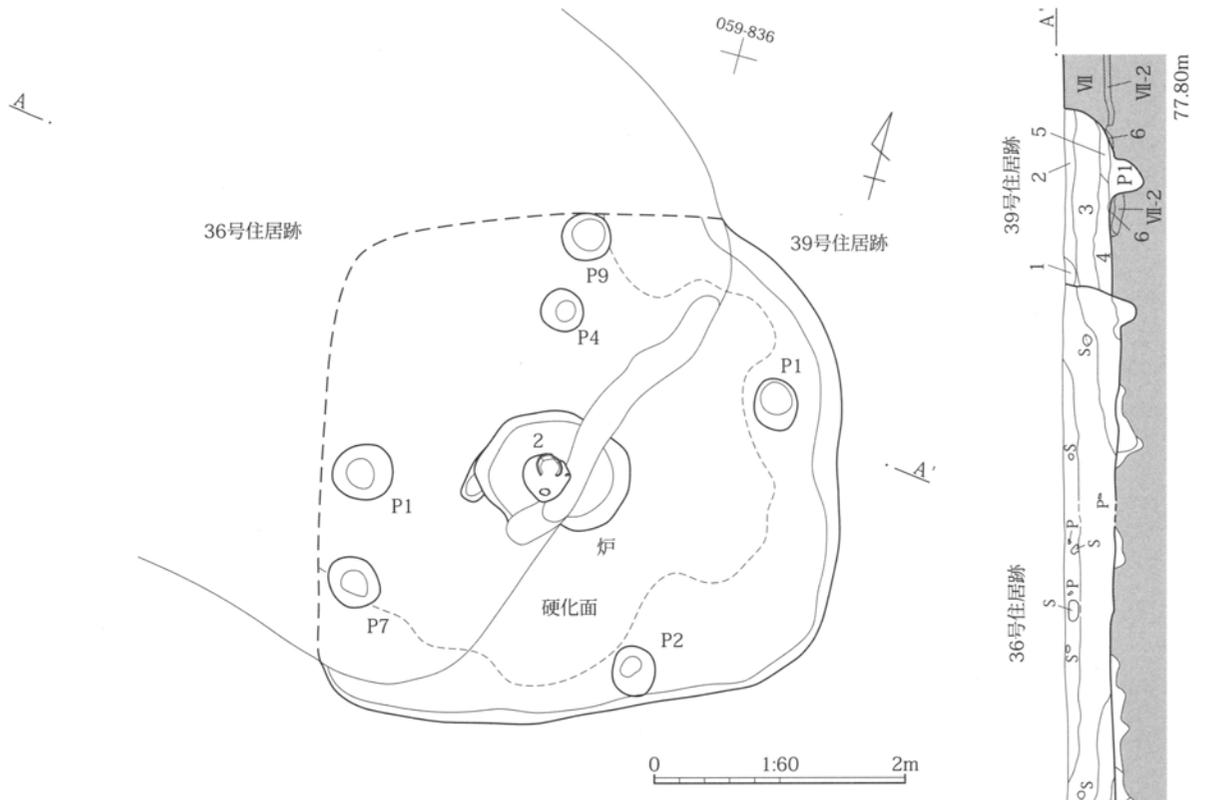
炉は、ほぼ中央に位置し、西半部は36号住居跡の床面下部に残存する。東西1.15m、南北1.0mの長円形で、深さは24cmである。中央部には深鉢胴下半部(2)が正位に埋設されている。縁部に10~20cm前後の礫が抜けた状況の窪みが検出され、石囲炉であった可能性がある。燃焼面の焼土化は顕著でないが、覆土中には炭化物粒、焼土粒が確認された。

床面は、壁際を除き、ほぼ全面が硬化している。東半部で検出された2基のピットの規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(39×34cm・31cm)、P2(39×33cm・17cm)。なお、これ以外に36号住居跡内で検出されたピットの一部が本遺構に帰属するとみられる。

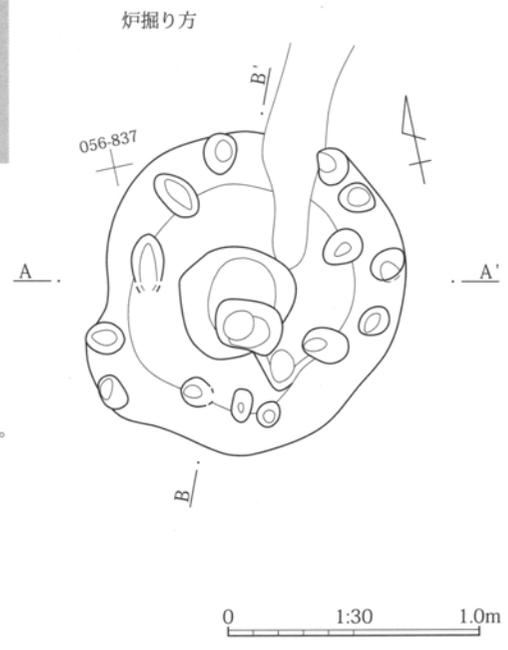
覆土は、レンズ状の堆積を示し、V層に分層される。

遺物(第72図、PL118)は、覆土上層から中層にかけて土器小破片が多数出土した他、石核(14)が出土した。

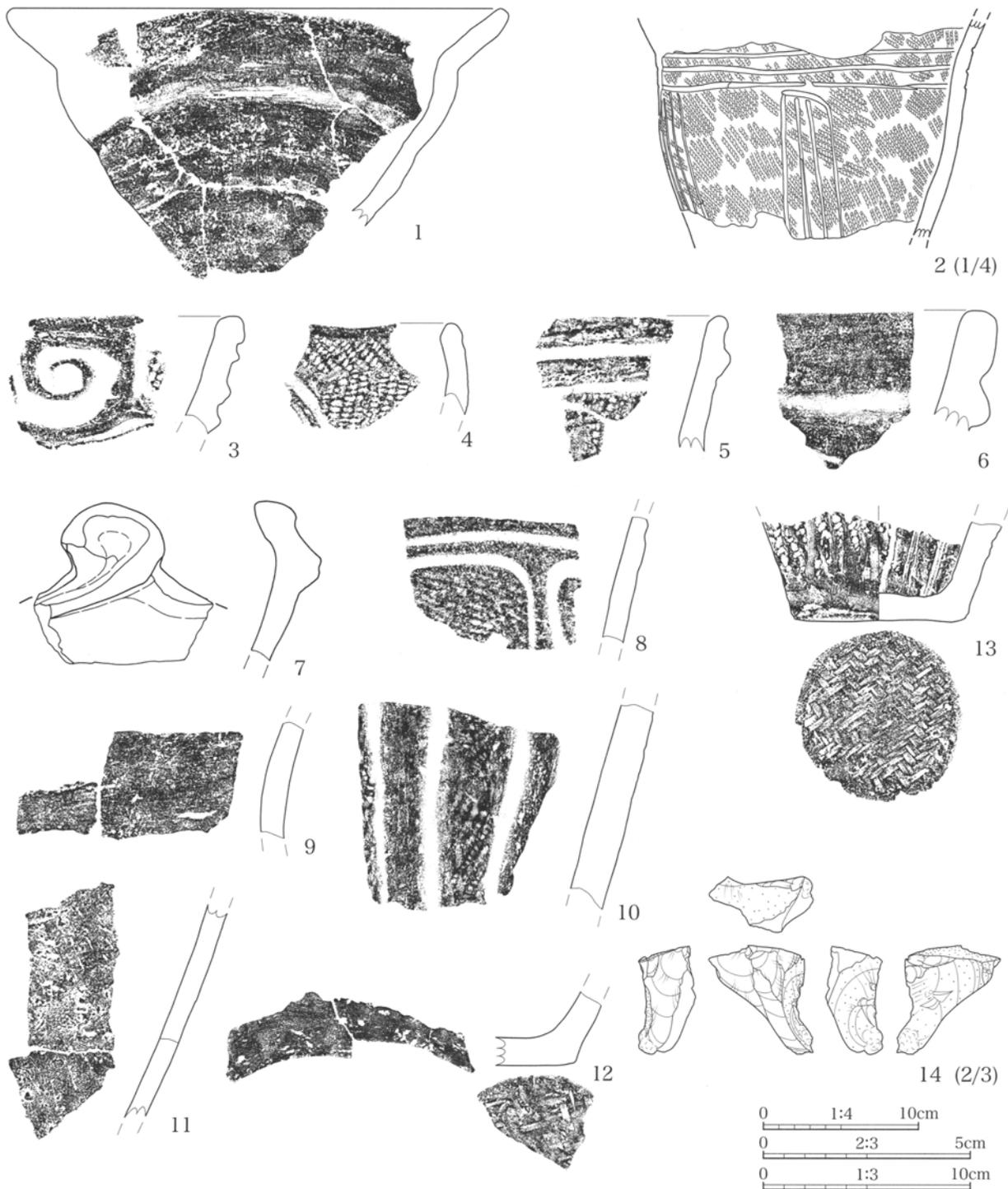
時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曽利EⅡ式)に位置づけられる。



- 1 褐色土 36 住の貼り床もしくは生活に伴う硬化。焼土粒、炭化物粒多く含む。
- 2 暗褐色土 少量の焼土粒、炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色土 2 層に類するがやや暗色。
- 4 黒色粘質土 焼土粒、炭化物粒を含む。東側の覆土と同様。
- 5 黄褐色砂と明褐色土の混土層。
- 6 5 層に比し、暗褐色土多くやや粘質。
- 5' 5 層に比して砂層。



第 71 図 2 区 39 号住居跡



第 72 图 2 区 39 号住居跡出土遺物

2区 37号住居跡 (第74図・PL29)

2区 (059～064, -845～-849) グリッドに位置する。平面形は直径4.3mほどの円形と想定されるが、北半部が隣接する42号住居跡に、南壁際は後世の風倒木や797号土坑による攪乱を受けているため詳細は不明である。遺存部分では、壁面は開き気味に立ち上がり、深さは最大25cmを測る。

炉は、後出する42号住居跡により失われている。

床面は、地山の礫層面を整えている。9基のピットが検出された。規模(径・深さ)は、P1(30cm・11cm)、P2(36cm・47cm)、P3(34×30cm・10cm)、P4(34cm・28cm)、P5(30×26cm・16cm)、P6(28×24cm・28cm)、P7(30cm・24cm)、P8(36cm・12cm)、P9(40×35cm・16cm)である。

覆土中には、直径15～30cm前後の川原石が多数含まれるが、ほぼ同質で分層できない。

重複関係の検討により、2区42号住居跡(加曽利E I式)よりも先行することが判明した。

遺物は、覆土中から加曽利E I式の破片が出土している他、堀之内式(2)が1点混入する(第73図、PL117)。

時期は、不明確な点があるが、縄文時代中期後半の加曽利E I式段階、またはそれに先行する可能性もある。



0 1:3 10cm

第73図 2区37号住居跡出土遺物

2区 38号住居跡 (第75図・PL30)

2区中央北端(061～064, -835～-840)グリッドに位置する。北半部は調査区外に広がり、西端は後世の風倒木の攪乱を受けているが、平面形は円形を呈すると想定される。直径は推定5.3mである。壁面は、やや開き気味に立ち上がり、深さは最大34cmを測る。

炉は、中央やや東よりの位置と想定される。炉の縁部に20cm前後の自然礫が配された石囲炉であり、東西72cm、深さは16cmである。炉縁石の内面は被熱により赤変が著しい。

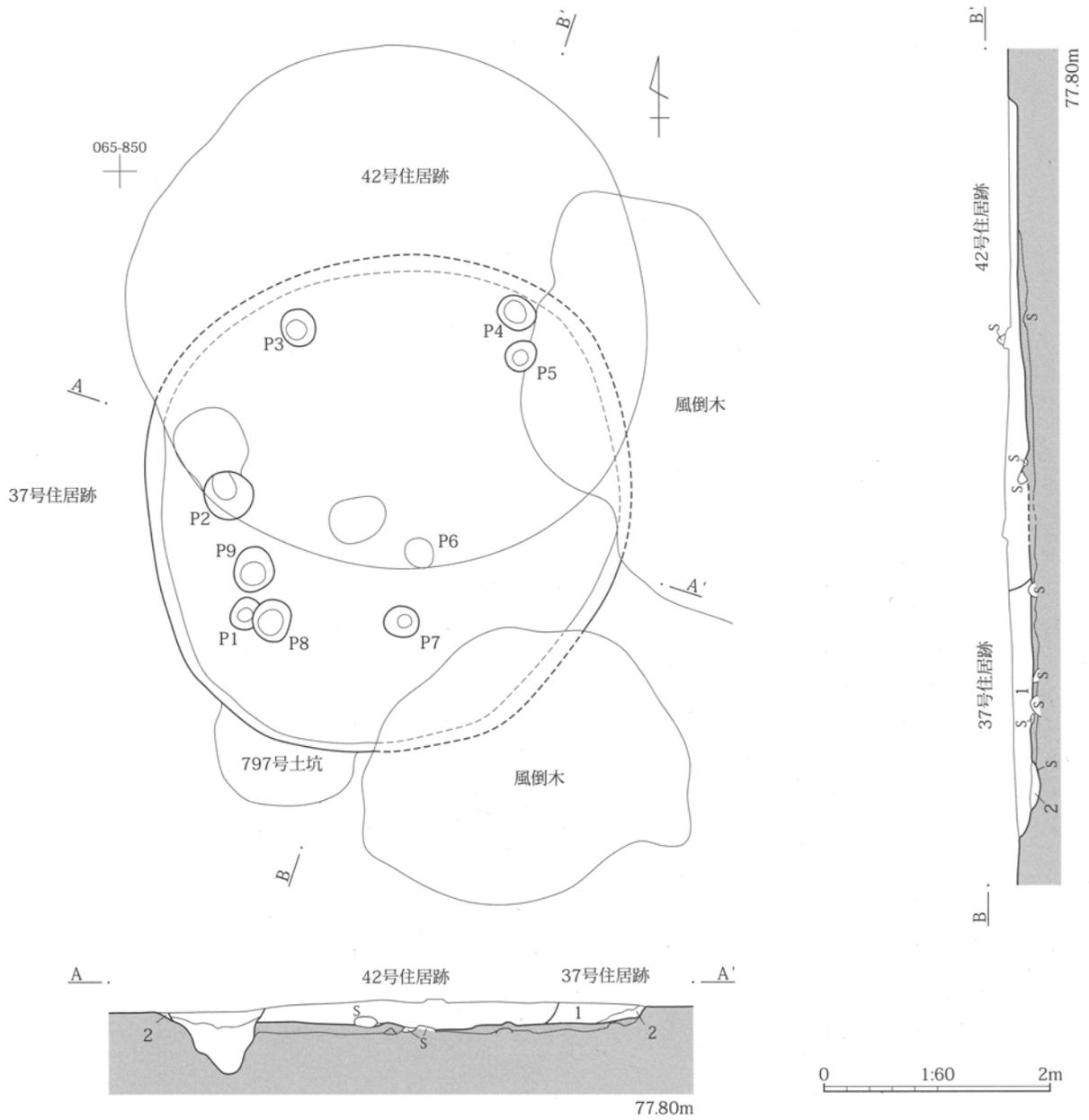
床面は、地山の礫層面を整えているが、中央に向かってやや低くなっている。南壁際には幅25cm前後の周溝があり、これに沿って6基のピットが検出された他、計9基のピットが検出された。規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(40cm・22cm)、P2(46×36cm・19cm)、P3(38×33cm・24cm)、P4(40cm・17cm)、P5(41×32cm・18cm)、P6(31cm・16cm)、P7(37×25cm・14cm)、P8(33×29cm・11cm)、P9(27×23cm・10cm)。

周溝沿いのP2・P3の間で埋甕(17・20)が1基確認された。直径22cm、深さ8cmのやや不整な円形の窪み内に、深鉢胴下部が正位で埋設されるが遺存状況は良くない。

覆土は、均質であり細別はできない。

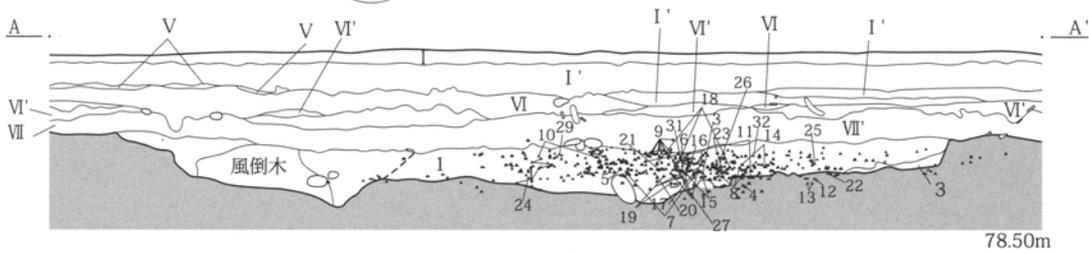
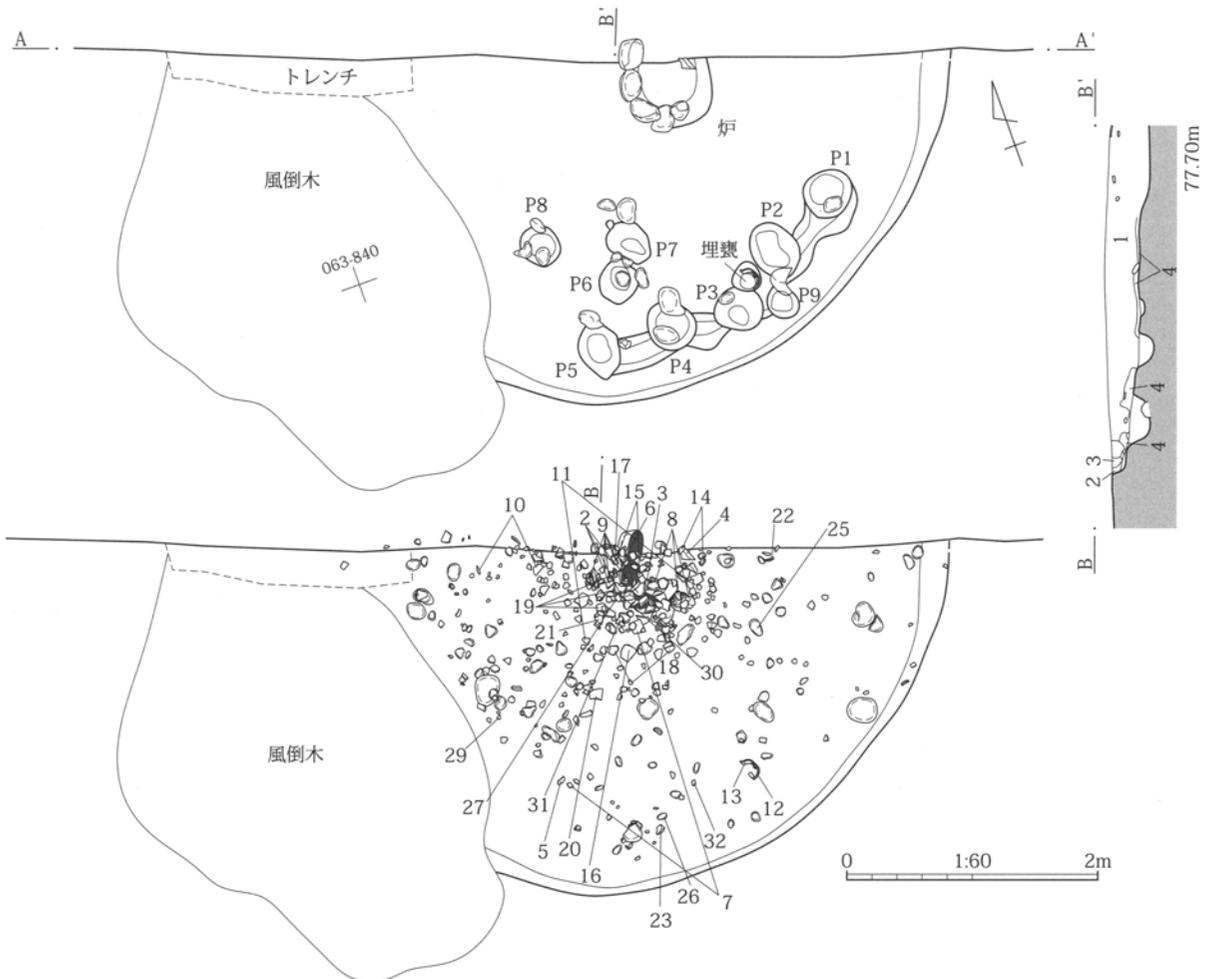
覆土中位から下層を中心に土器片や礫が出土し、特に中央部で多数出土した。(第76～77、PL117・118) 深鉢(1)と石皿(24)は住居跡西側の風倒木に巻き込まれた状況で出土した。また、覆土中から打製石斧(30～32)、スクレイパー(27・28)、楔形石器(29)、石鏟(33)や磨石(25)、敲石(26)が出土した。

時期は、縄文時代中期後半(加曽利E II式)に位置づけられる。

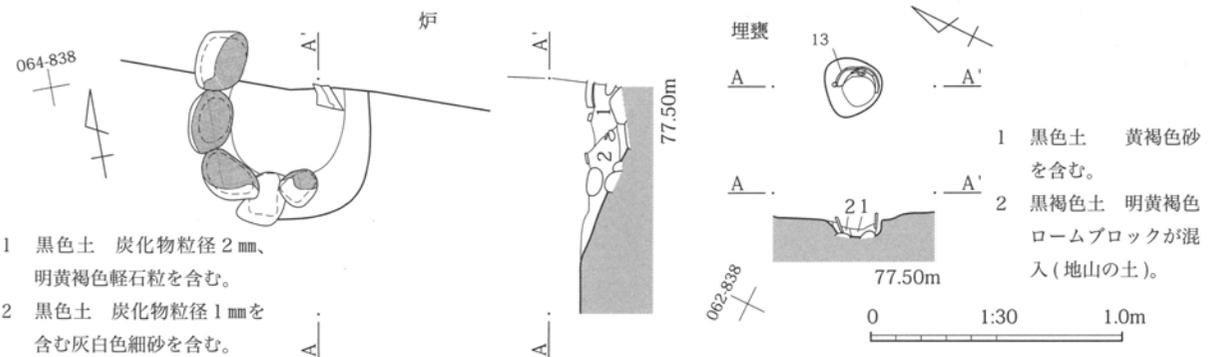


- 1 黒褐色土 やや赤味のある黒褐色土を斑状に3%含む。全体に灰白色軽石粒を含む。褐色ロームブロック径3cmが混入。土器片を多量に含む。炭化物は上部に多い。
- 2 黒褐色土 1層の土に似るが、軽石粒が少ない。

第74図 2区37号住居跡



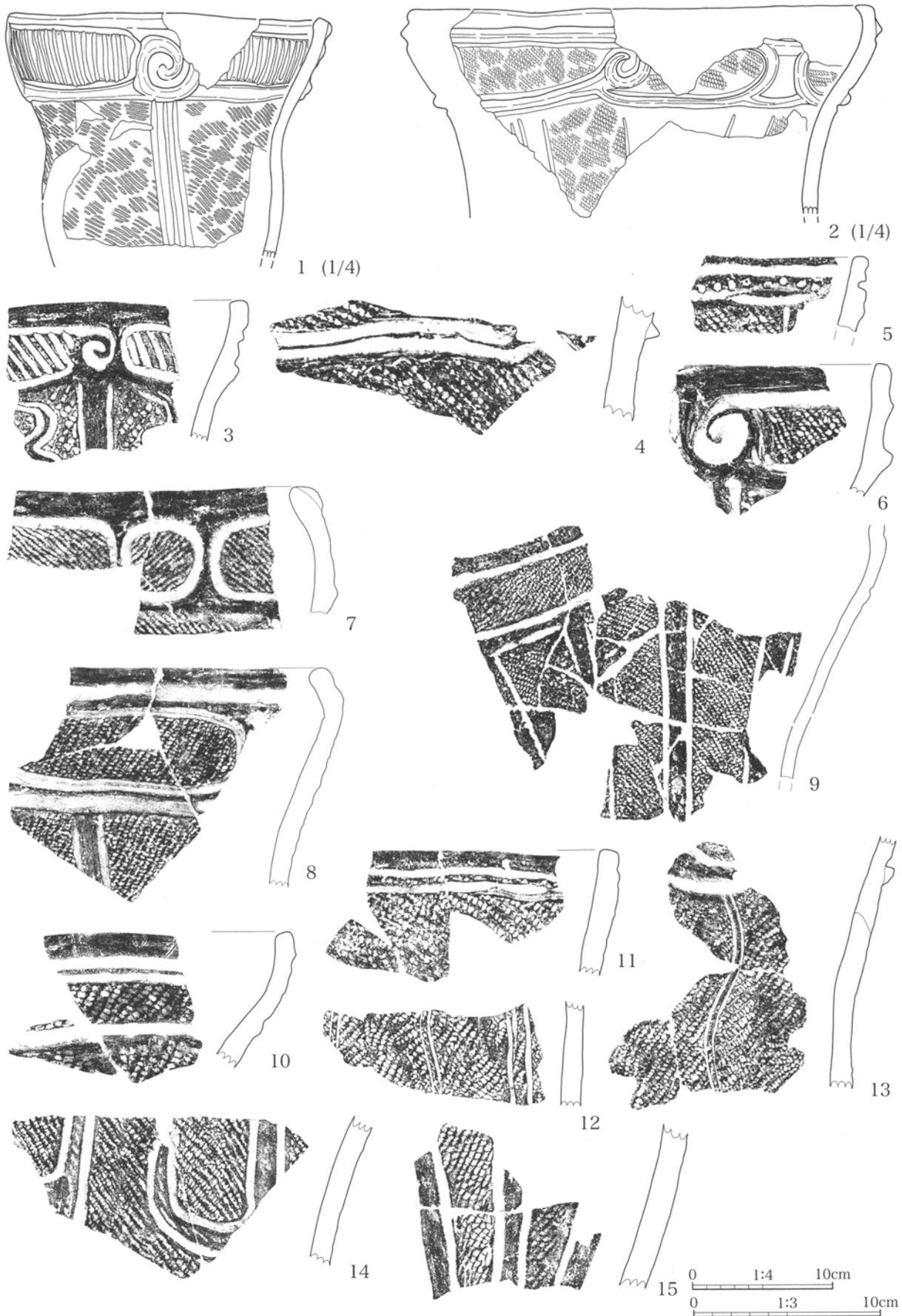
- 1 黒色土 黒褐色土が斑状に混入。
- 2 黒褐色土 暗褐色土が斑状に混入。下部に焼土粒、炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色土 やや明色の暗褐色土が斑状に混入。褐色ロームブロックを含む。
- 4 3層と砂質ロームの混土層。
- I' 圃場整備に伴う整地土



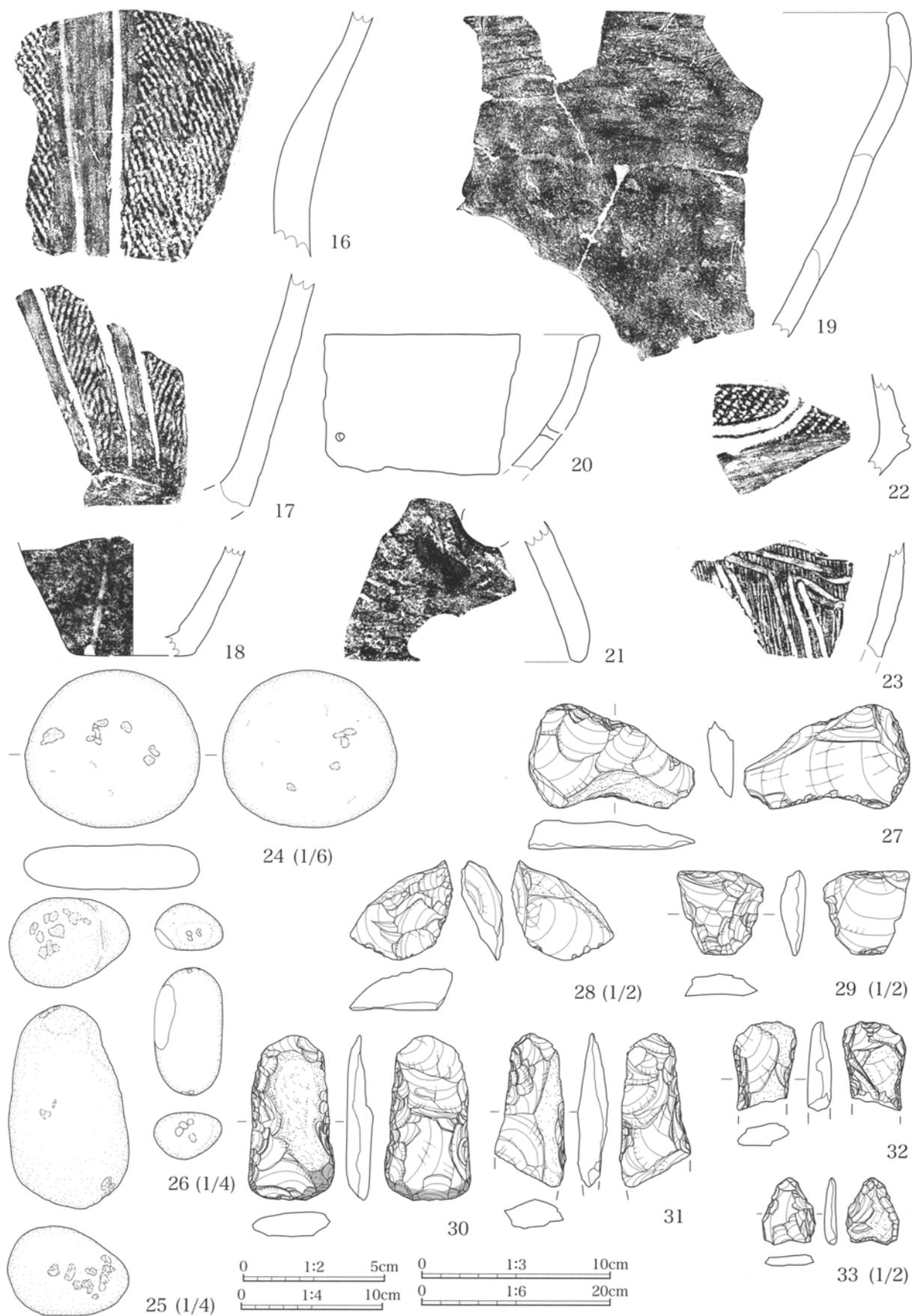
- 1 黒色土 炭化物粒径2mm、明黄褐色軽石粒を含む。
- 2 黒色土 炭化物粒径1mmを含む灰白色細砂を含む。

- 1 黒色土 黄褐色砂を含む。
- 2 黒褐色土 明黄褐色ロームブロックが混入(地山の土)。

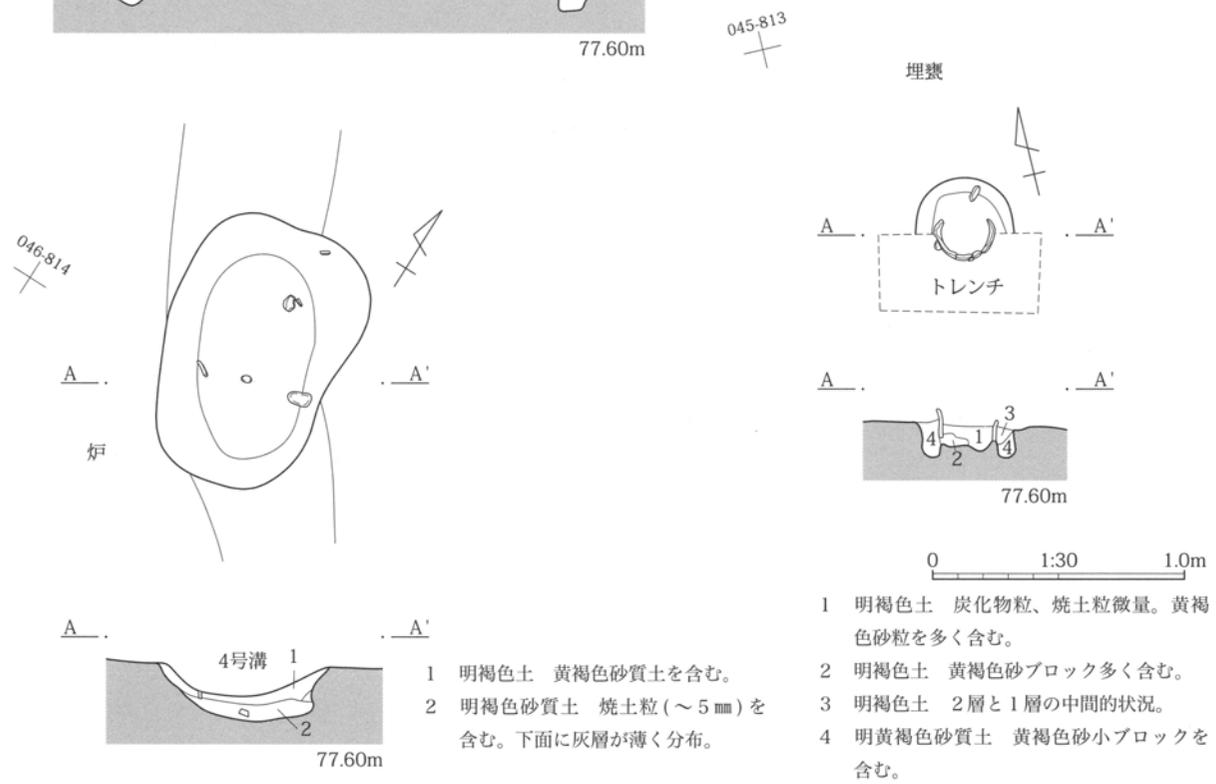
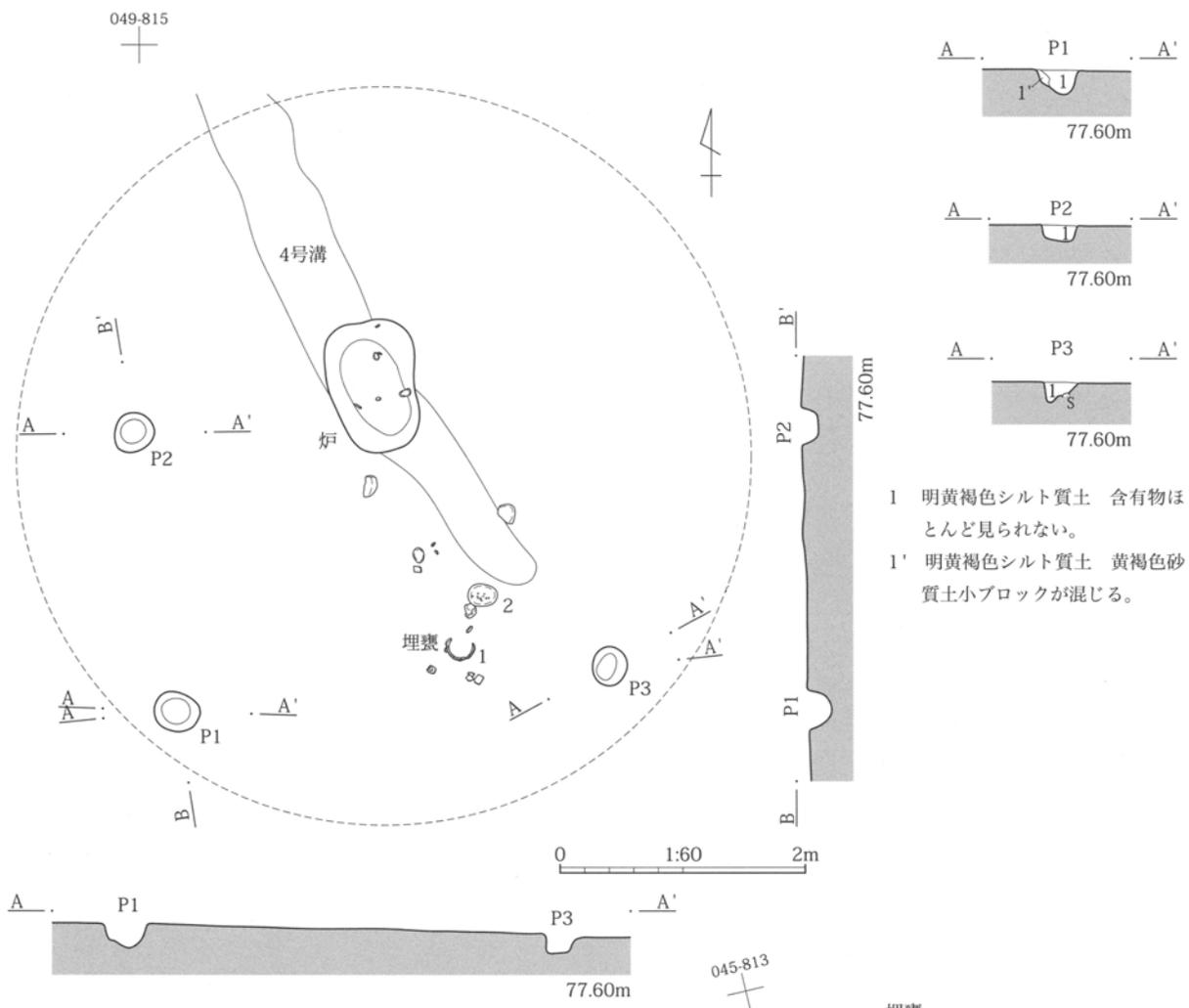
第75図 2区38号住居跡



第 76 图 2 区 38 号住居迹出土遗物 (1)



第 77 图 2 区 38 号住居跡出土遺物 (2)



第78図 2区40号住居跡

2区 40号住居跡 (第78図・PL32)

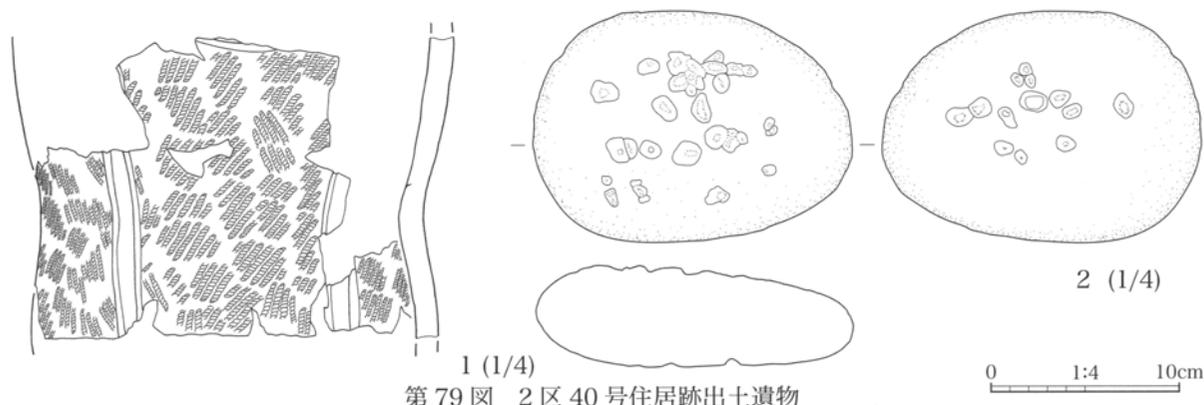
2区東の河道際、(043～046, -811～-815)グリッドに位置する。地床炉が検出され、周辺の柱穴や埋甕の状況から住居跡と認定したが、平面形等詳細は不明である。

炉は、南北1.06m、東西0.69m、深さは22cmである。焼土や炭化物は明瞭に認められた。(2)の表面は被熱による赤化が顕著であり、炉に使用されていた可能性がある。炉の上部は、4号溝により破壊されている。

床面は若干削平されている状況だが、3基のピットが検出された。規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(37×31cm・21cm)、P2(33cm・14cm)、P3(31×28cm・17cm)。

炉の南1.65m地点で、埋甕が1基確認された。径39cm、深さ12cmの円形の土坑内に深鉢胴部(1)が正位に埋設されていた。また、埋甕の北に接して多孔石(2)が出土した。(第79図、PL118)

時期は、縄文時代中期後半(加曾利EⅡ式)に位置づけられる。



第79図 2区40号住居跡出土遺物

2区 41号住居跡 (第80図・PL33)

2区西端部(059～065, -861～-826)グリッドに位置する。平面形は柄鏡形を呈する。主体部は円形もしくは八角形で、張り出し部は長方形を呈する。主軸はN-6.6°-Wを示し、長さは約7mを測る。主体部は直径4.7m、張り出し部は南北約2.8m、東西2.14mである。壁面は、やや開き気味に立ち上がり、深さは最大17cmを測る。

炉は、ほぼ中央に位置する。97cm×83cmの長円形を呈し、深さは20cmである。覆土中には焼土粒や炭化物粒が含まれているが、燃焼部の焼土化は不明瞭であった。

主体部の南半部外周および連結部では礫が弧状に出土しが、いずれも床面からやや浮いた状況である。また、張り出し部には敷石が施されており、南半部の遺存状況が良好である。張り出し部南端はⅡ区調査時に検出された。

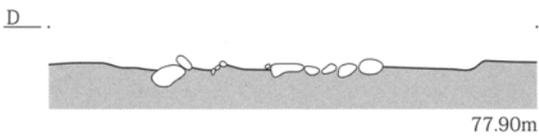
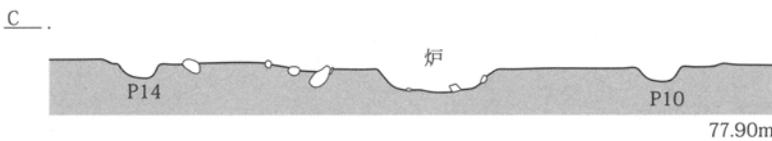
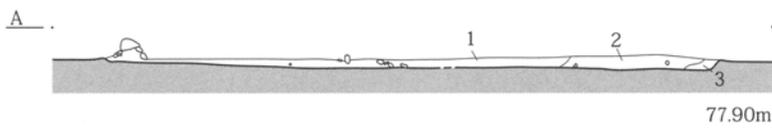
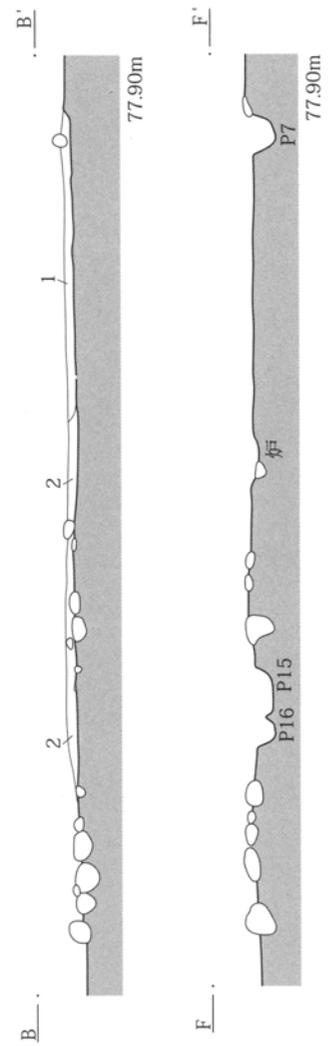
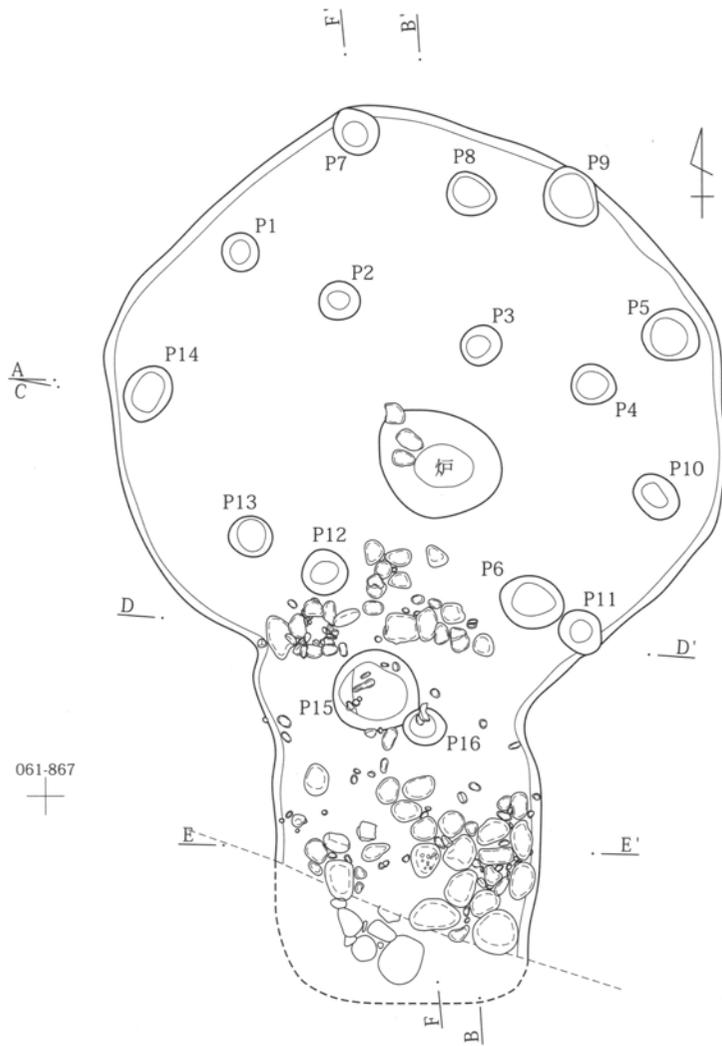
主体部の床面はほぼ平坦で、硬化部は認められな

かった。

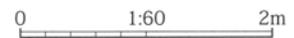
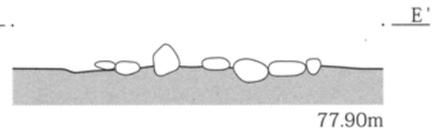
壁面に沿う9基の柱穴を含めて、14基のピットが検出された。P6とP12が連結部対ピットに相当する。張り出し部では2基のピットが検出された。規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(30cm・17cm)、P2(32cm・21cm)、P3(33cm・15cm)、P4(35×31cm・13cm)、P5(45×40cm・18cm)、P6(52×41cm・20cm)、P7(39×34cm・20cm)、P8(39×33cm・12cm)、P9(49×43cm・18cm)、P10(39×30cm・11cm)、P11(37×33cm・12cm)、P12(35cm・21cm)、P13(35cm・14cm)、P14(46×36cm・12cm)、P15(68cm・21cm)、P16(34×29cm・16cm)。

覆土は、砂質ロームが主体で、3層に分層される。

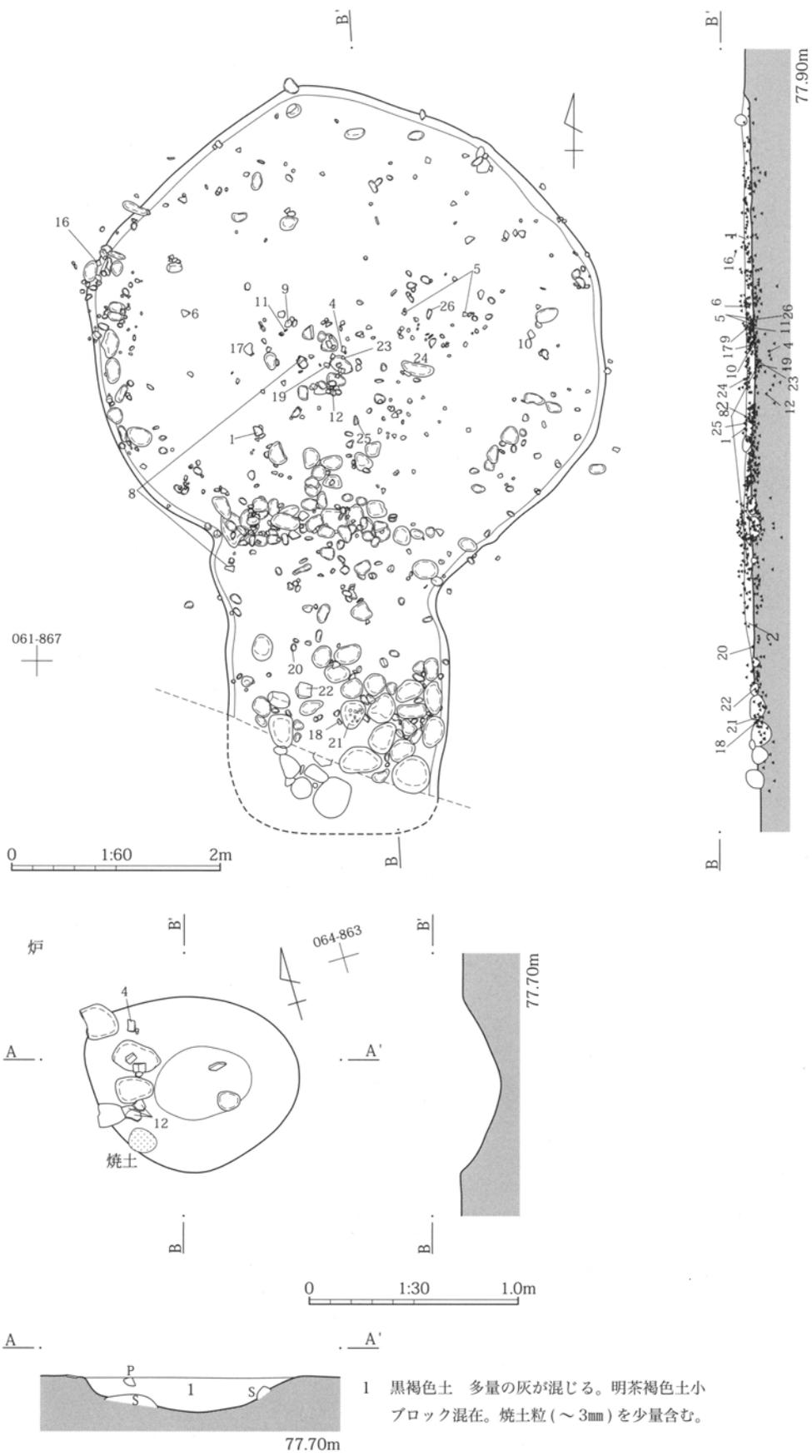
遺物は、床面付近で土器小破片が出土した。(第82・83図、PL119)張り出し部の敷石内には石皿、多孔石、敲石が含まれる。時期は、縄文時代後期初頭(称名寺式)に位置づけられる。



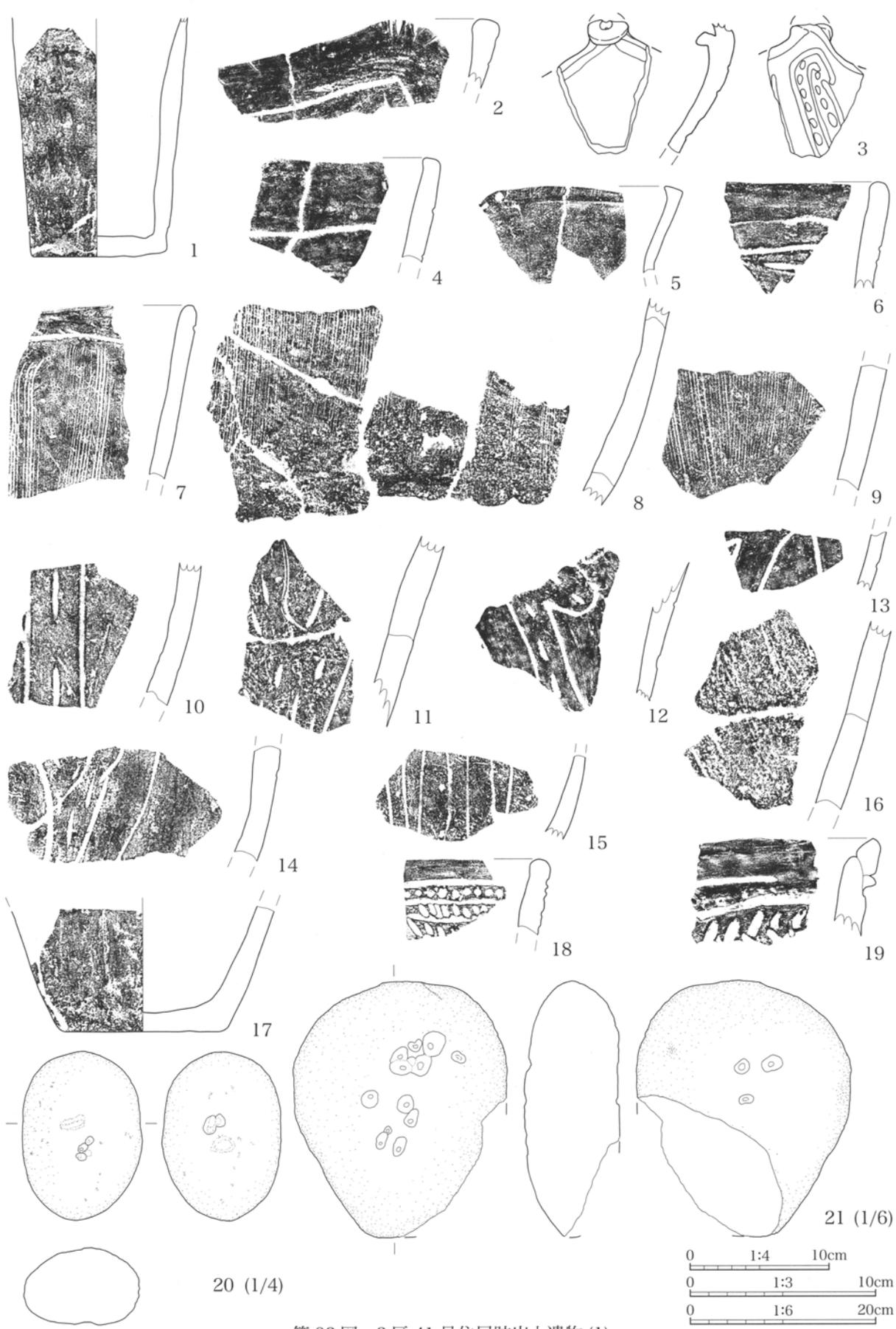
- A' 1 暗褐色土 黄褐色土粒を含む。やや砂質。炭化物粒微量。
- 2 黒褐色砂質土 微量の炭化物粒の他含有物少ない。
- C' 3 黒褐色砂質土 黒褐色砂質土と黄褐色砂質土が混在。



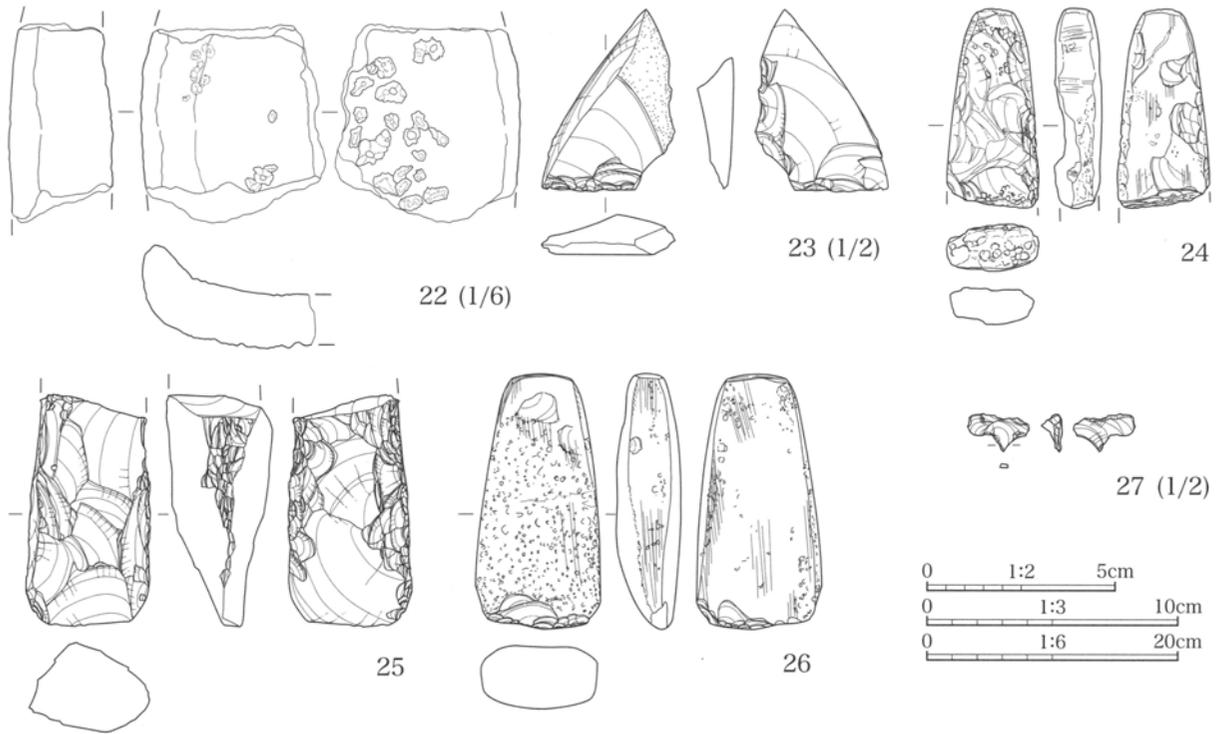
第 80 図 2 区 41 号住居跡



第81図 2区41号住居跡遺物出土状況



第 82 图 2 区 41 号住居跡出土遺物 (1)



第 83 図 2 区 41 号住居跡出土遺物 (2)

2 区 4 2 号住居跡 (第 84 図・PL29)

2 区 (063 ~ 066, -846 ~ -849) グリッドに位置する。平面形は直径 4.5m 前後の円形と想定されるが、南半部が隣接する 37 号住居跡と重複し、また、東壁際は後世の風倒木による攪乱を受けているため、詳細は不明である。壁面は開き気味に立ち上がり、深さは最大 12cm を測る。

炉は、ほぼ中央部に位置する。自然礫を外周に配した石囲炉で、長円形を呈すると考えられるが、北辺は 775 号土坑により失われている。東西は内法 45cm (外法 59cm) で南北は 55cm が確認できる。礫表面の被熱による赤変はさほど強くない。炉中央部には深鉢の胴部 (8) が正位に埋設されている。土器上端部は炉使用時の摩滅が著しい。

床面は、炉周辺は地山の礫層面を整えているが、北側の砂質ローム部分は軟弱で硬化は認められなかった。壁面に沿うと考えられる 5 基のピットが

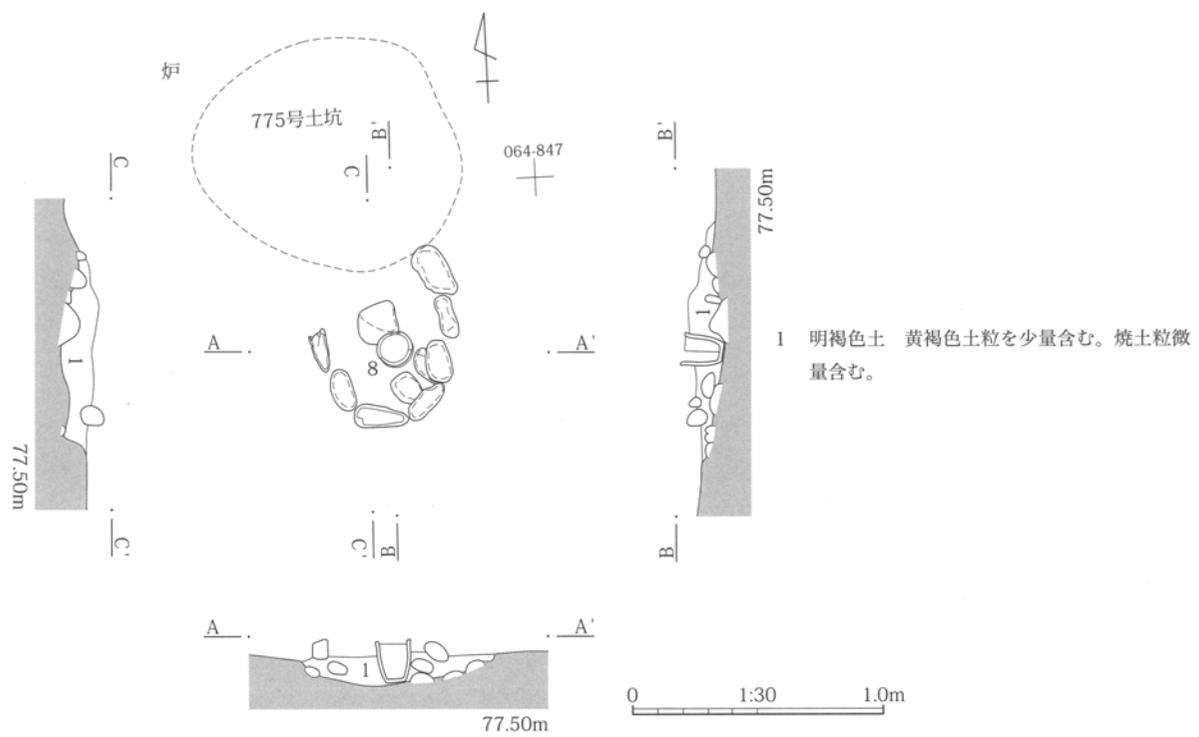
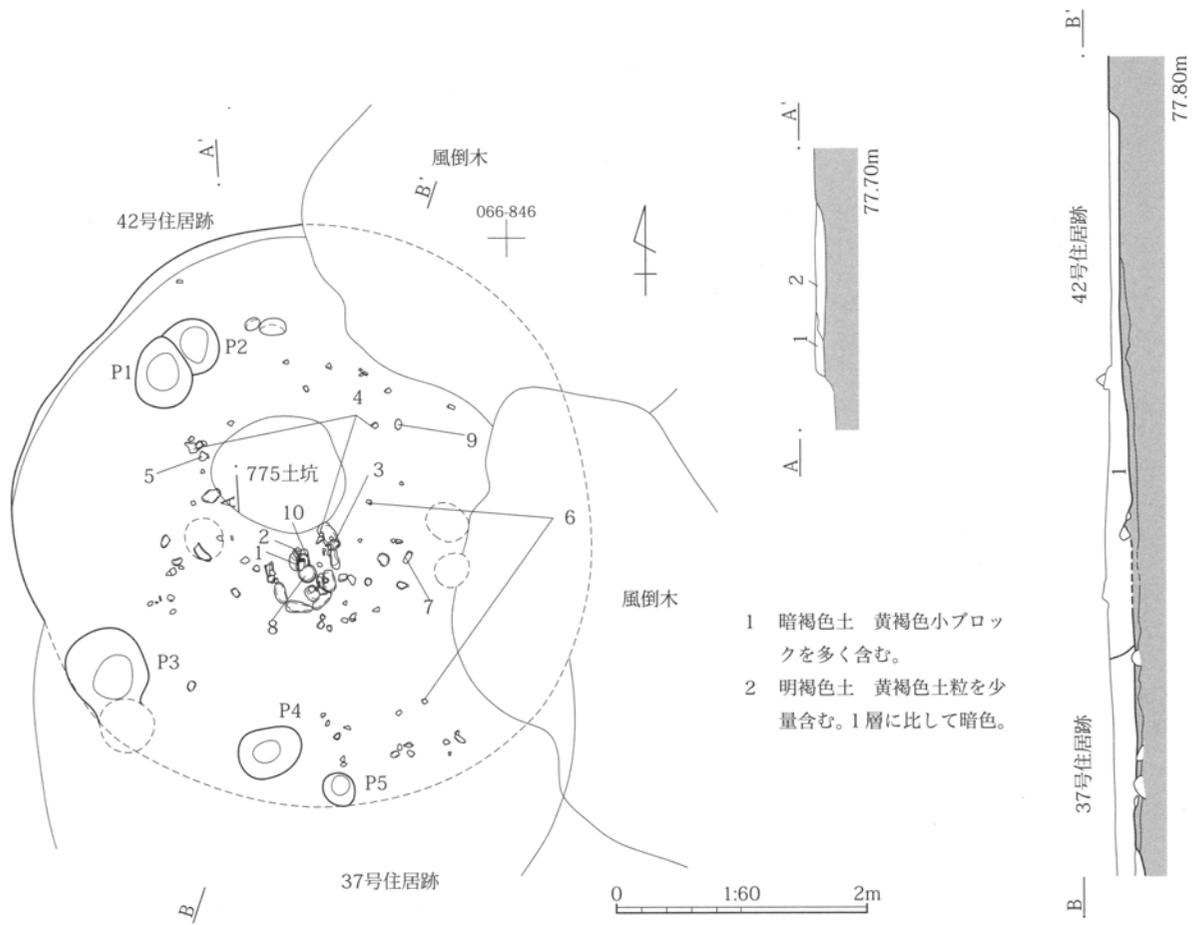
検出され、規模 (径・深さ) は以下の通りである。P1 (55×45cm・25cm)、P2 (45cm・15cm)、P3 (62cm・46cm)、P4 (51×39cm・41cm)、P5 (28×24cm・28cm)。

覆土は、砂質ロームが主体である。

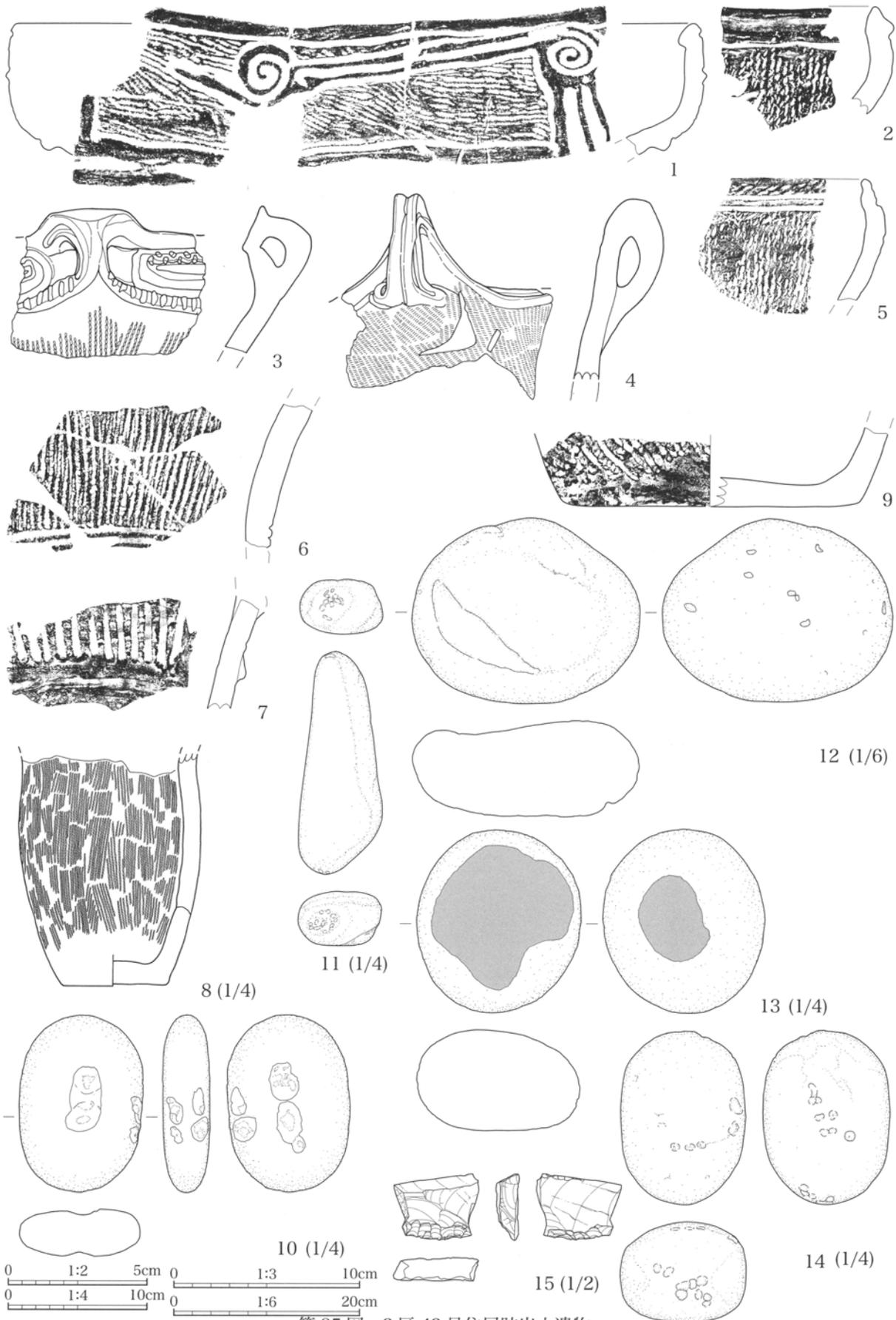
重複の状況から、2 区 37 号住居跡よりも後出する。

遺物は、覆土中と床面付近で土器小破片が数点出土した。(第 85 図、PL119・120) いずれも、加曽利 E I 式である。また、覆土中からスクレイパー (15) や礫石器類が出土した。

本住居跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半 (加曽利 E I 式) に位置づけられる。



第84図 2区42号住居跡



第85图 2区42号住居跡出土遺物

2区 43号住居跡 (第88図・PL34)

2区東側の(047~052, -821~-826)グリッドに位置する。埋没した谷地の東縁部にあたる。平面形は径4.68×4.26mの円形を呈する。壁面は垂直気味に立ち上がり、深さは最大33cmを測る。北壁の一部を2区804号土坑に切られる。

炉は、中央やや北よりに位置する。径71×65cm、深さ11cmの円形の地床炉で、覆土中からは焼土粒・炭化物粒が出土したが、燃烧面の焼土化は顕著でない。

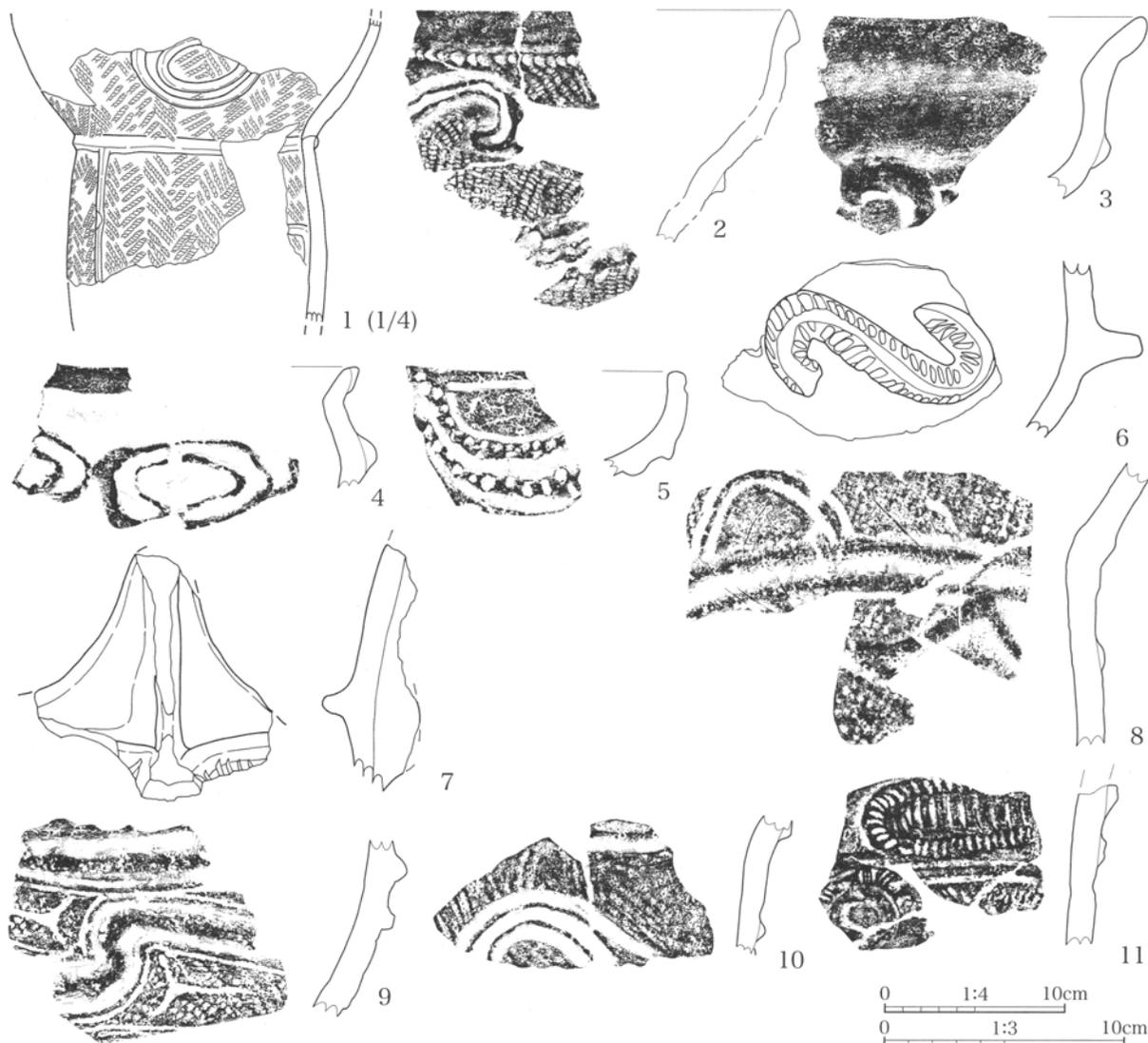
床面は、調査時の出水の影響のため軟弱化している。壁際に沿って8基の柱穴が検出された。規模(径・深さ)は以下の通りである。P1(28×23cm・

15cm)、P2(33×27cm・9cm)、P3(29cm・16cm)、P4(27cm・5cm)、P5(34cm・13cm)、P6(40×33cm・6cm)、P7(35×31cm・11cm)、P8(31cm・9cm)。

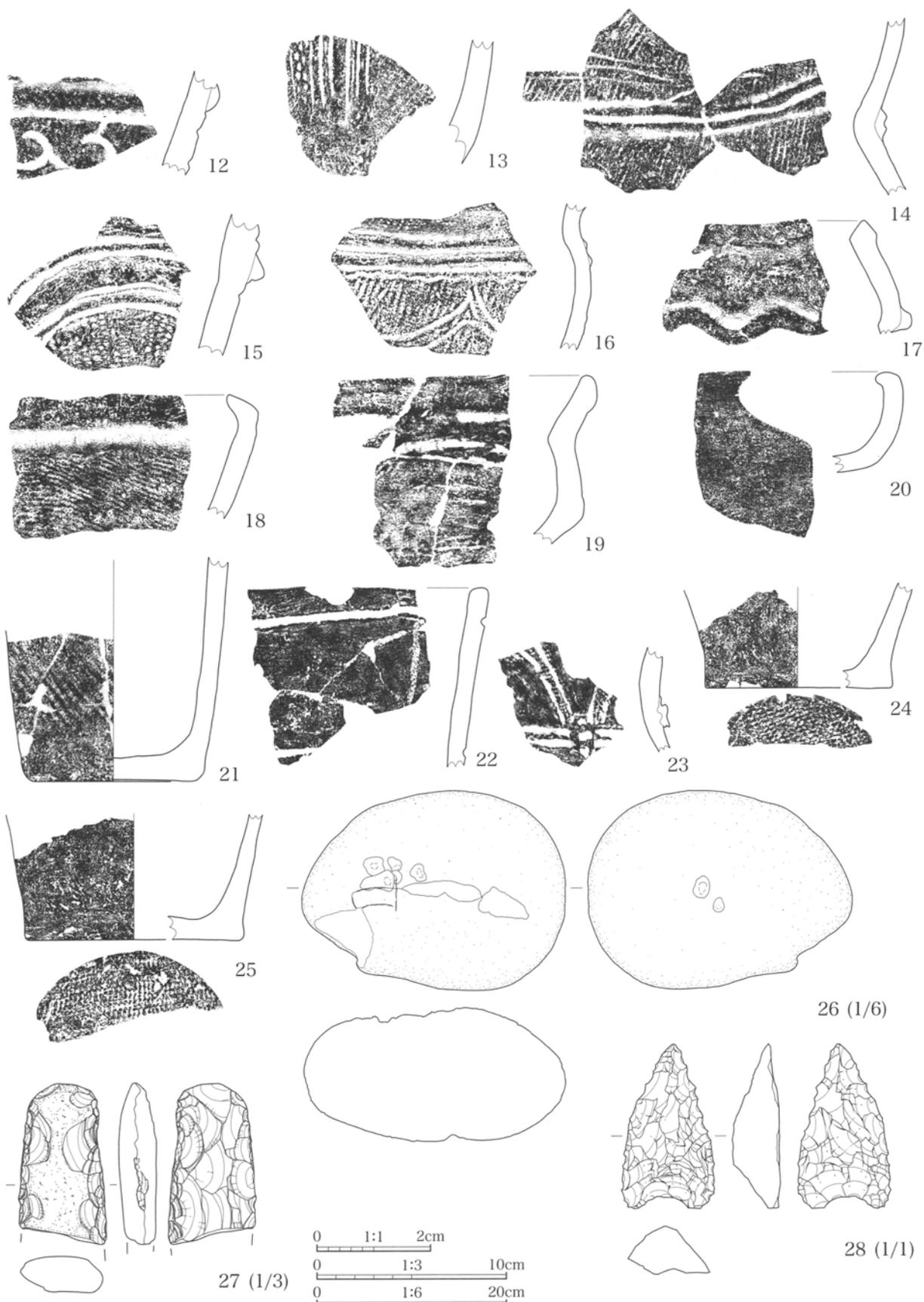
覆土は、地山に類する粘質土で2層に分層される。

遺物(第86・87図、PL120・121)は、覆土上面から中位にかけて土器小破片や小礫が多く認められたが、床面付近では少ない。土器の接合関係も散乱した状況が顕著である。大半が加曾利E I式であり、縄文時代後期の遺物が少量混入する。多孔石(26)は南壁際で、覆土中では打製石斧(27)、石鏃(28)が出土した。

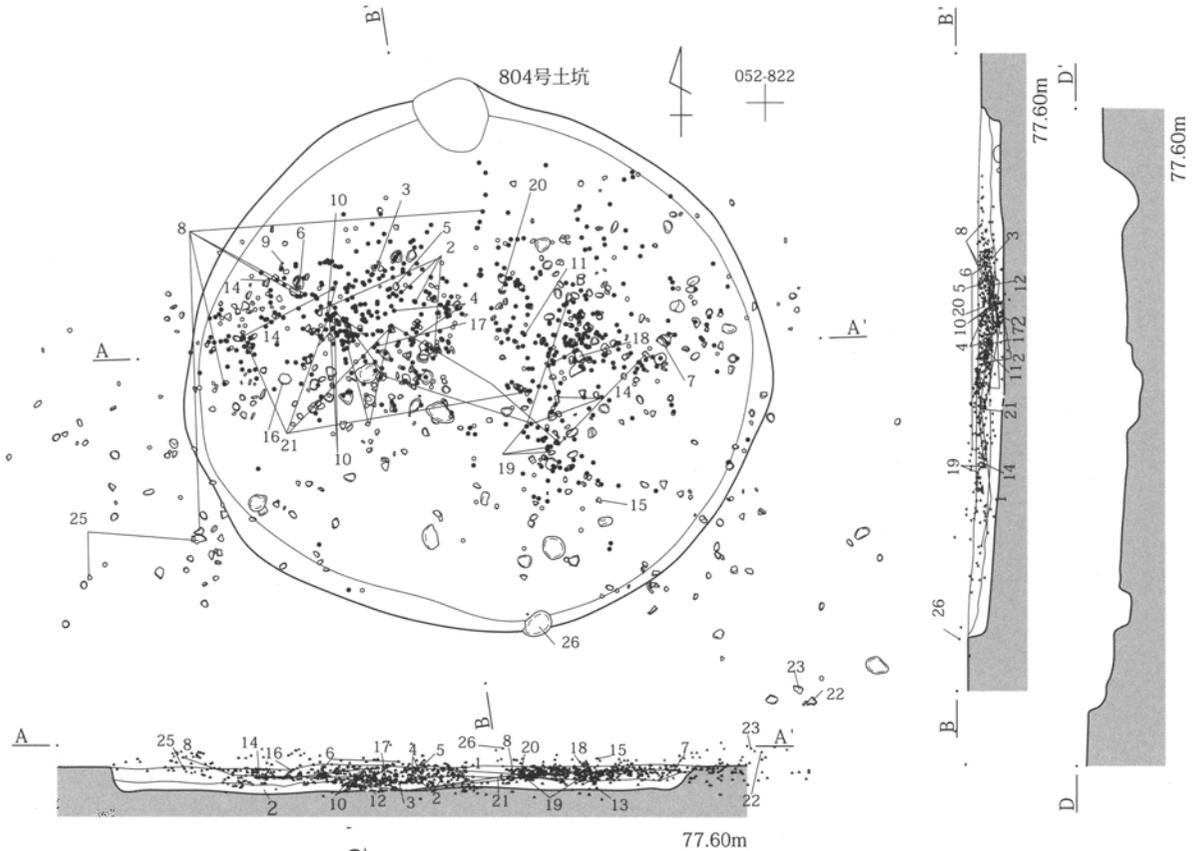
時期は、縄文時代中期後半(加曾利E I式)と考えられる。



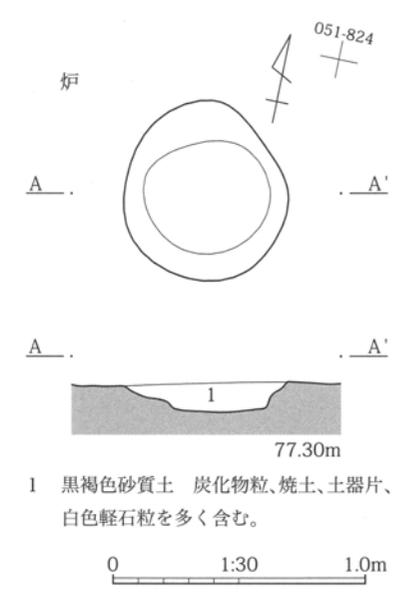
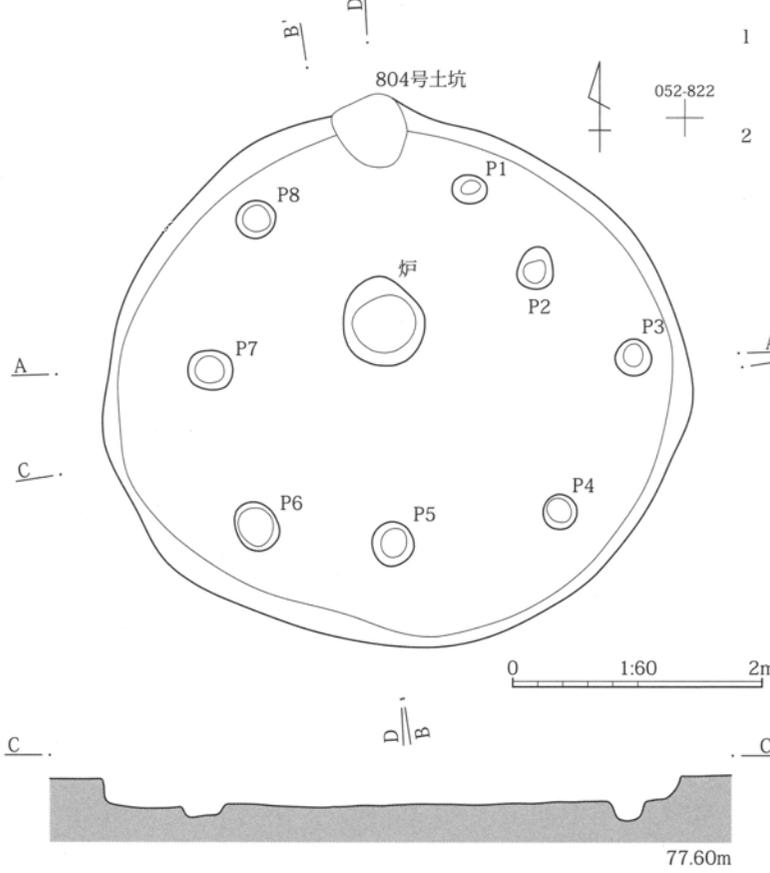
第86図 2区43号住居跡出土遺物(1)



第 87 图 2 区 43 号住居跡出土遺物 (2)



- 1 黒色土 焼土粒、土器片を多く含む。南半部は北半部より明色。鉄分の付着が多い。西半部に明黄褐色ローム粒径1~2mmが混入。
- 2 黒色土 西半部下部に灰黄褐色ロームブロックが混入。東半部に暗褐色砂質土が混入。



- 1 黒褐色砂質土 炭化物粒、焼土、土器片、白色軽石粒を多く含む。

第88図 2区43号住居跡

IV区 1号住居跡 (第89・90図・PL35)

IV区北西部(986～993, -659～-663)グリッドに位置する。遺物の出土範囲やピットの配置から、平面形は柄鏡形を呈すると想定されるが不明な点もある。主体部は概ね円形で、張り出し部は長方形を呈すると考えられる。推定される主軸はN-68°-Eで長さ約7m前後、主体部は直径約5.3m、張り出し部の詳細は不明である。壁面は、やや開き気味に立ち上がり、深さは最大15cmを測る。連結部では礫がやや浮いた状態で出土した。

炉は、中央やや西よりに位置し、深鉢形土器を埋設している。65cmのほぼ円形を呈し、深さは土器上端から28cmである。覆土中には焼土粒や炭化物粒が含まれているが、燃焼部の焼土化は不明瞭であった。

床面は不明瞭で、硬化部は認められなかった。住居跡の範囲からは26基のピット類が検出されたが、壁柱穴と想定されるピットの他に浅い土坑状の落ち込みが含まれ、遺構への帰属は検討を要する。P1とP2が連結部対ピットに相当する可能性がある。

その他のピットの規模(径・深さ)は、以下の通りである。P1(72×64cm・39cm)、P2(62cm・20cm)、P3(20cm・8cm)、P4(49×26cm・36cm)、P5(93cm・21cm)、P6(26cm・48cm)、P7(41cm・10cm)、P8(38cm×40cm・8cm)、P9(48×42cm・18cm)、P10(56cm・8cm)、P11(46・9cm)、P12(38×33cm・16cm)、P13(52×39cm・8cm)、P14(50×45cm・9cm)、P15(34×30cm・10cm)、P16(26×22cm・13cm)、P17(118×124cm・30cm)、P18(47×39cm・18cm)、P19(59×47cm・27cm)、P20(21×65cm・14cm)、P21(78×69cm・30cm)、P22(40cm・16cm)、P23(37cm×40cm・23cm)、P24(80×72cm・16cm)、P25(39cm・15cm)、P26(49×36cm・12cm)、P27(103cm・9cm)。

連結部西側の礫の下部で、埋甕が1基検出された。

覆土は、地山と類似する白色軽石を含む黒色粘質

土が主体で、遺構の検出が困難であった。

遺物は、確認面から床面にかけて深鉢の大形破片を含む遺物が多数出土した(第91～95図、PL121・122)。主体部全体に散乱した状況で分布した状況である。また、(6)は南側の土器分布との接合関係がある。加曽利EIV式が主体である。連結部に分布する礫の中には、凹石・多孔石・磨石・敲石・台石などの礫石器が含まれる。

時期は、縄文時代中期後半(加曽利EIV式)に位置づけられる。

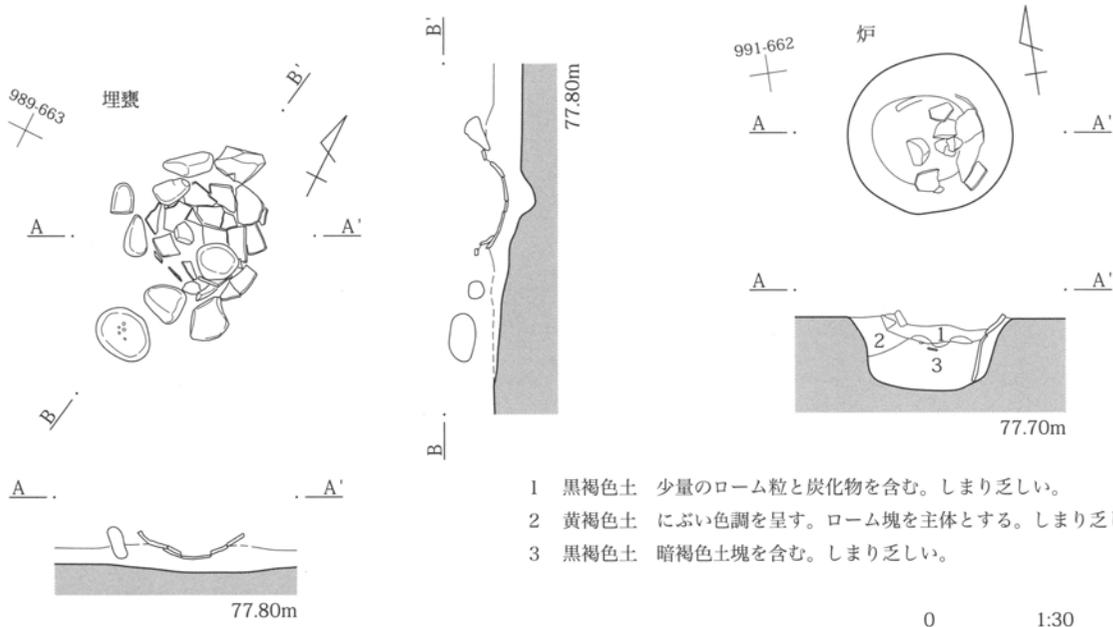
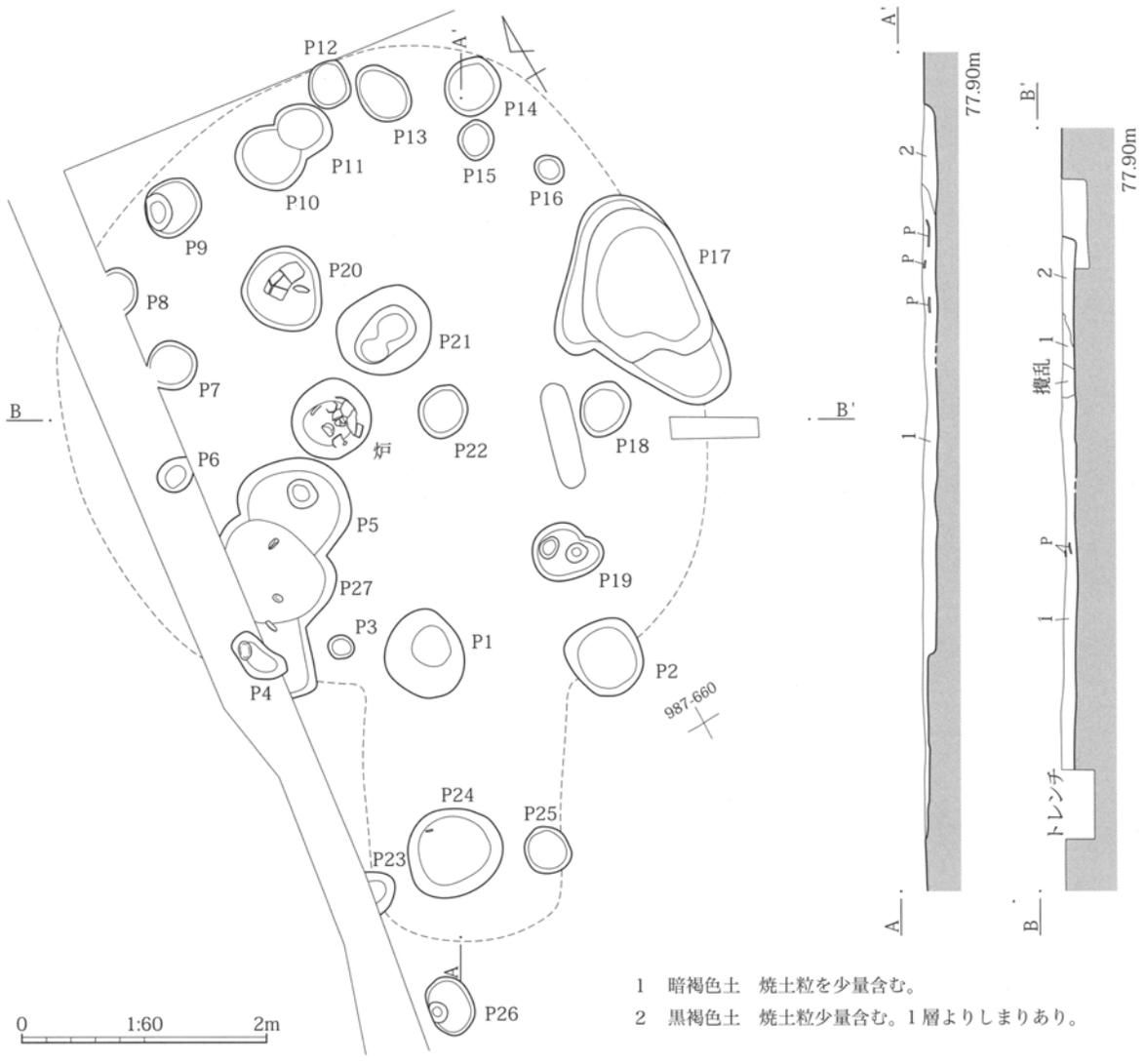
・IV区1号土器集中(第95図、PL122)

土器集中は、IV区1号住居跡張り出し部の南に近接して検出された。周囲の土層には全体に縄文時代の遺物が包含されている。

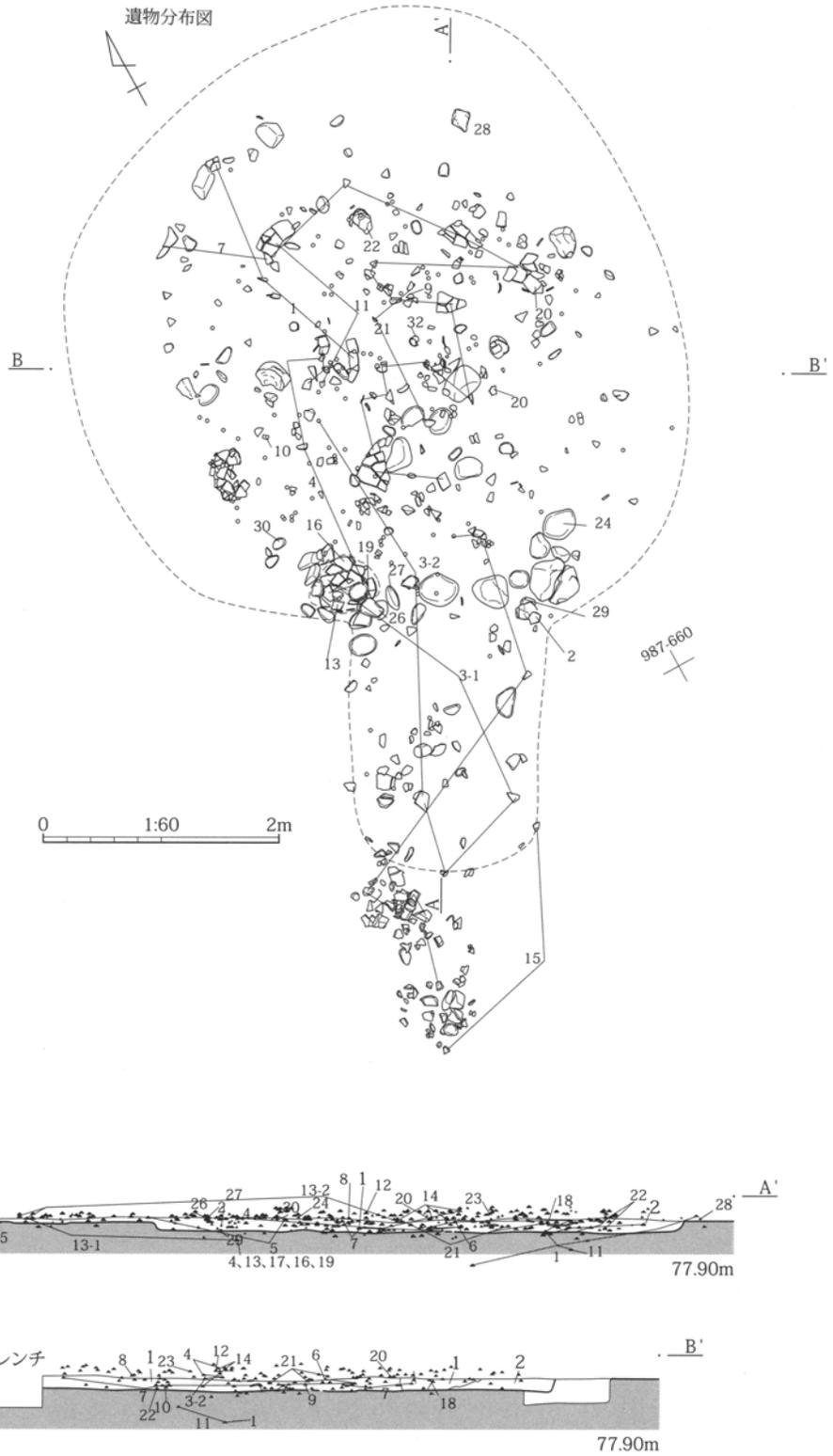
住居跡の土器群の延長上にあるが、住居跡の規模・形状を検討した結果、わずかに距離を置くことから、別遺構として調査した。

西側は攪乱を受けるが、南北1.9m×東西0.6mの範囲に多数の土器片が密集する。大部分は小破片である。深鉢(1)は、口縁部に微隆起線を有し、上部は無文帯となる。

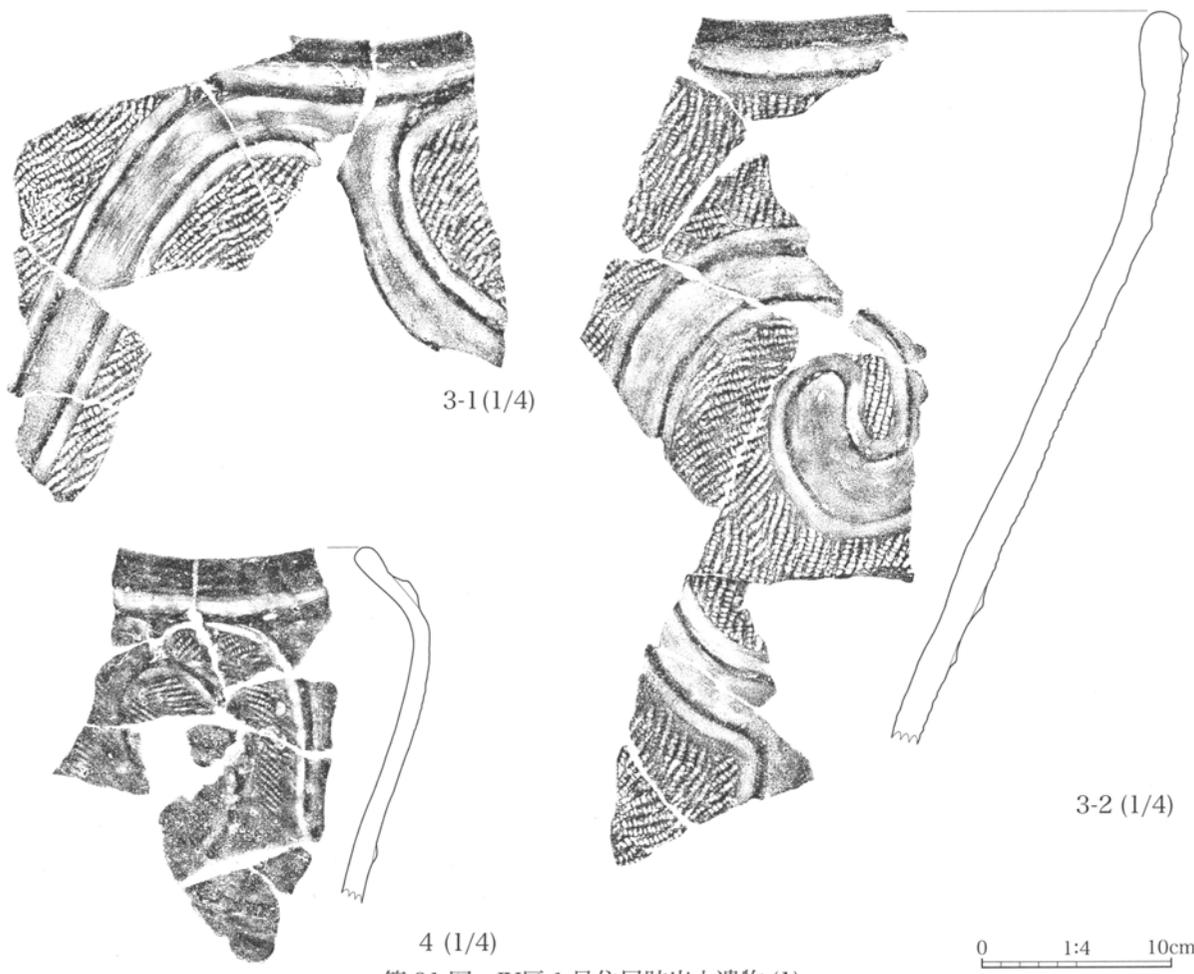
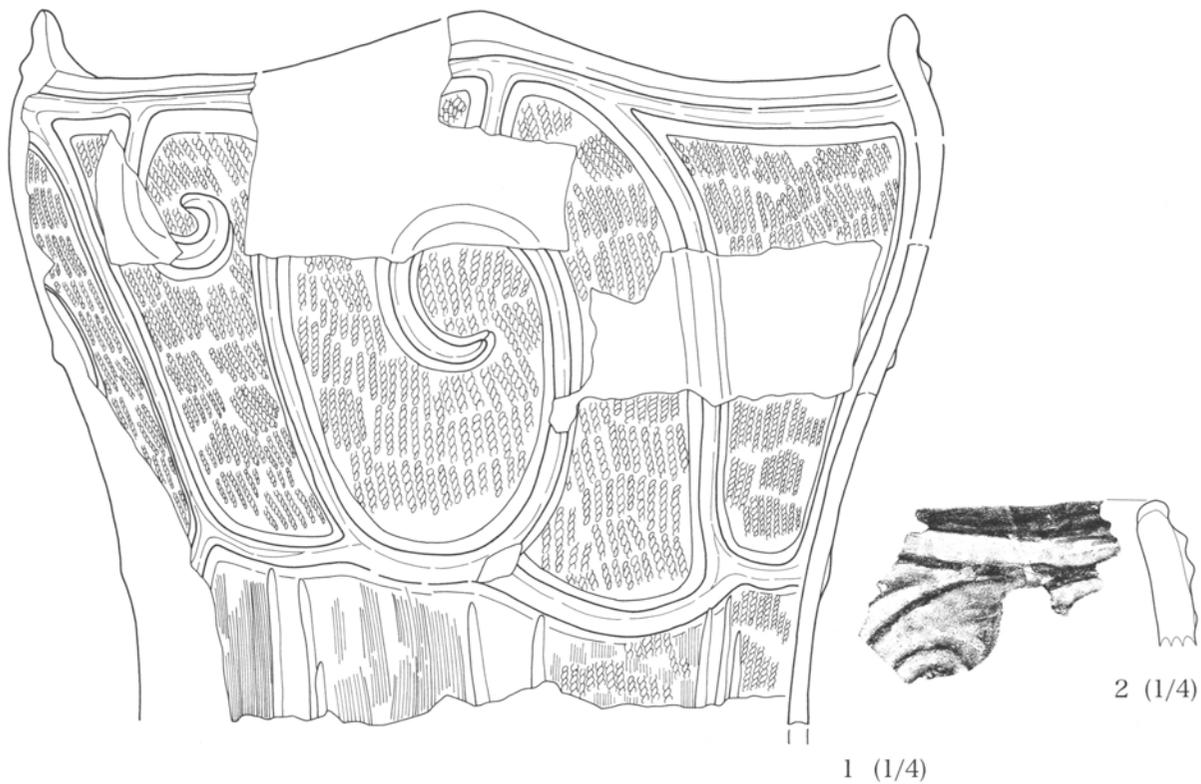
1号住居跡の遺物との接合も認められたことから、両者の関係が窺われる。住居跡の遺物が、後世の土壌の攪拌により移動した可能性が考えられる。



第 89 図 IV区 1号住居跡



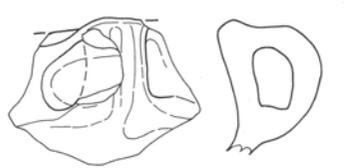
第90図 IV区1号住居跡・1号土器集中遺物出土状況



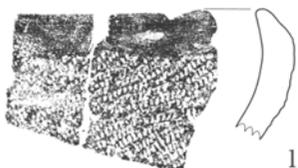
第91图 IV区1号住居跡出土遺物(1)



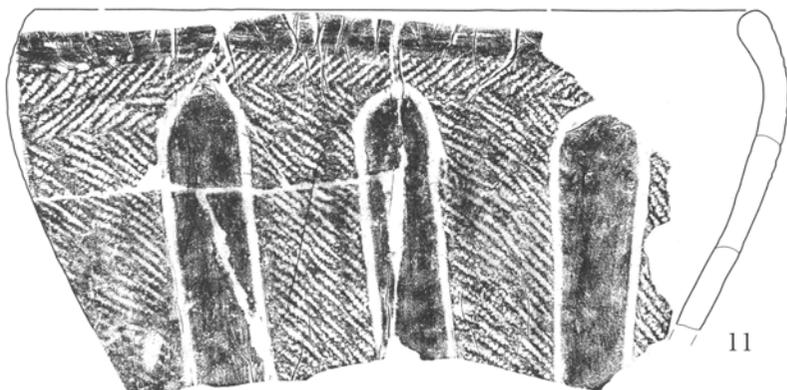
第 92 图 IV区 1 号住居迹出土遗物 (2)



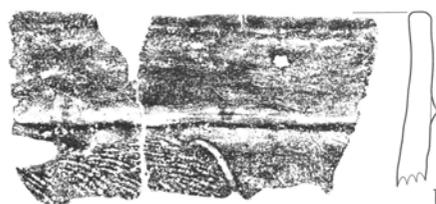
9



10



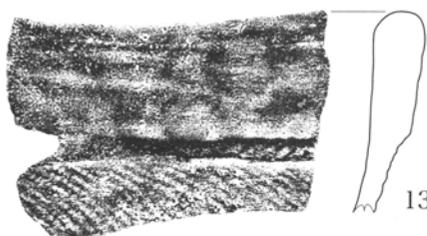
11



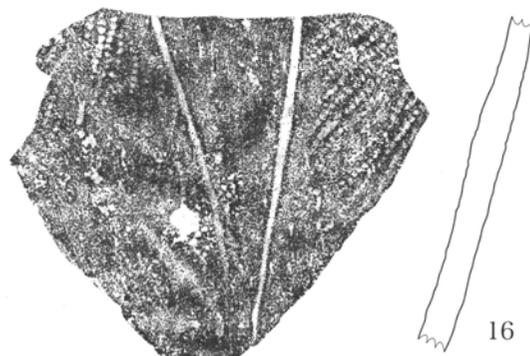
12



15



13



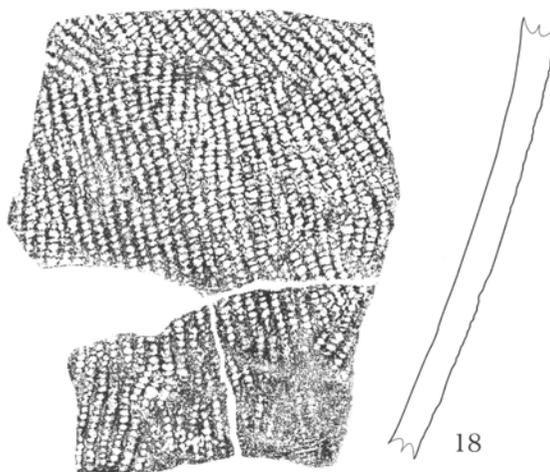
16



14



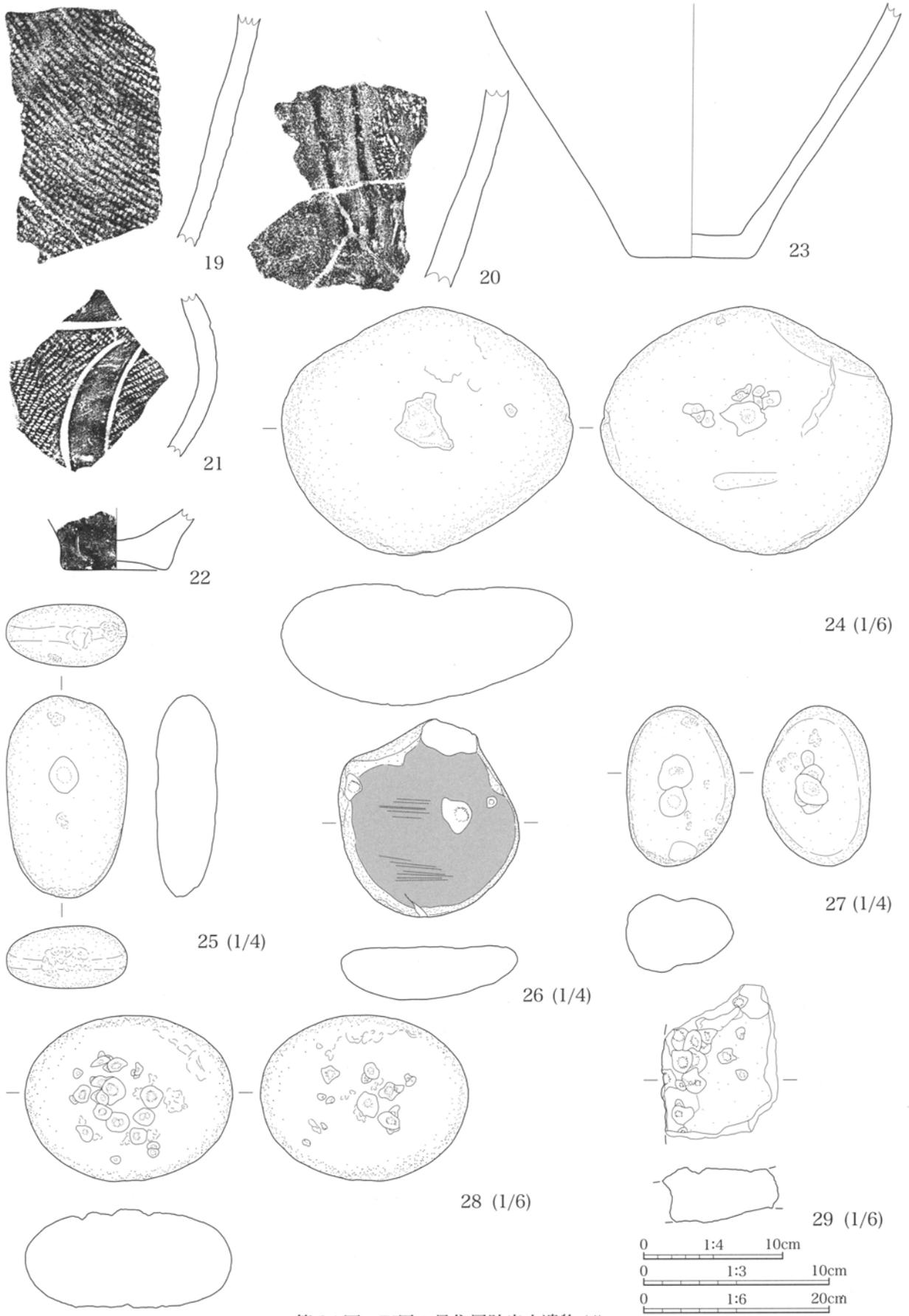
17



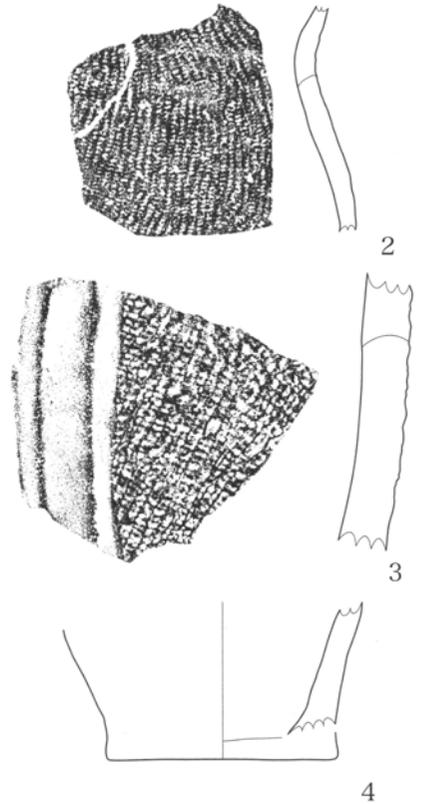
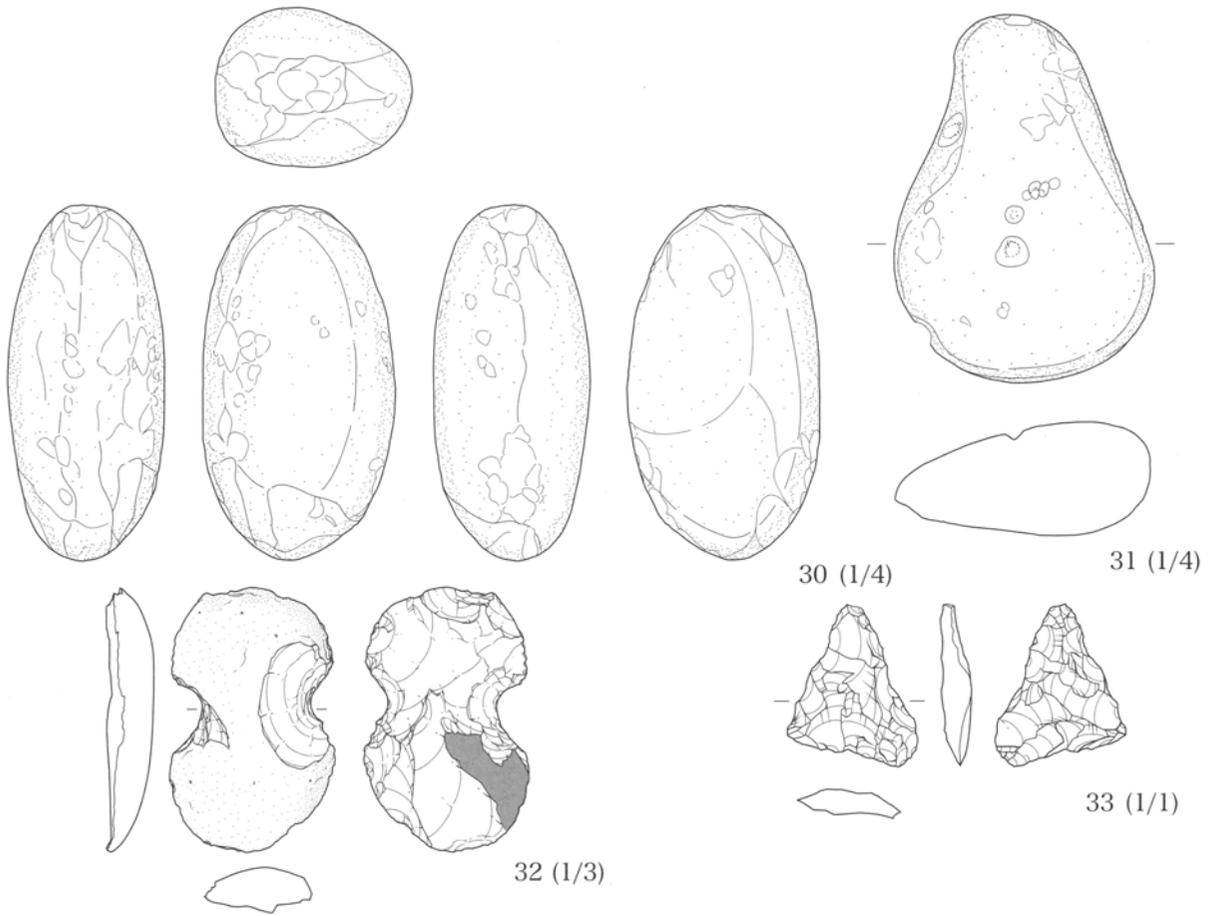
18

0 1:3 10cm

第 93 图 IV区 1 号住居跡出土遺物 (3)



第94图 IV区1号住居跡出土遺物(4)



0 1:1 2cm
 0 1:4 10cm
 0 1:3 10cm

第95图 IV区1号住居跡出土遺物(5)、1号土器集中

5区 1号住居跡 (第96・97図・PL36・37)

5区中央の谷地西側の(988～993, -537～-541)グリッドに位置する。平面形は径4.96×4.67mの円形を呈する。壁面は垂直気味に立ち上がり、深さは最大20cmを測る。

炉は、中央やや東よりに位置する。深鉢口縁部(9)を埋設しており、内法は直径46cm、深さ33cmである。覆土中からは焼土粒・炭化物粒が出土したが、燃焼面の焼土化は明瞭でない。

床面は、ほぼ全域が固く踏みしめられた状況であった。床面で検出された7基のピットの規模(径・深さ)は以下の通りである。P1(26×24cm・11cm)、P2(28cm・32cm)、P3(38×33cm・34cm)、P4(28×23cm・17cm)、P5(24cm・34cm)、P6(33×20cm・12cm)、P7(31×24cm・24cm)。

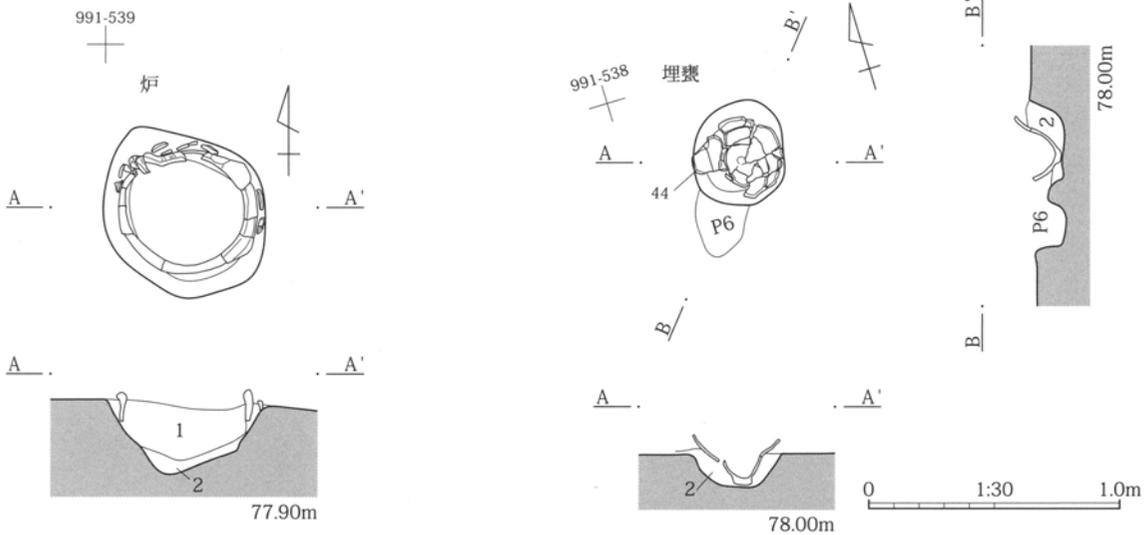
覆土は、砂質ロームが主体で2層に分層される。

遺物(第98～103図、PL123～125)は、覆土中層から上層にかけて土器片が多数廃棄された状況で出土した。深鉢(7)は炉に近接する床面に埋設された状況が確認された。

2点の三角柱状土製品が出土した。(51)は各面に縄文施文後に沈線で渦巻文が施される。(53)は各面がやや内湾し無文である。瓢形壺(10)は隆線により上半に波状文、下半に渦巻文が施されている。注口部は欠失する。他に鏝付広口壺(11)がある。土器の大部分は加曾利EⅢ式である。覆土中からは磨石(55・56)が出土している。

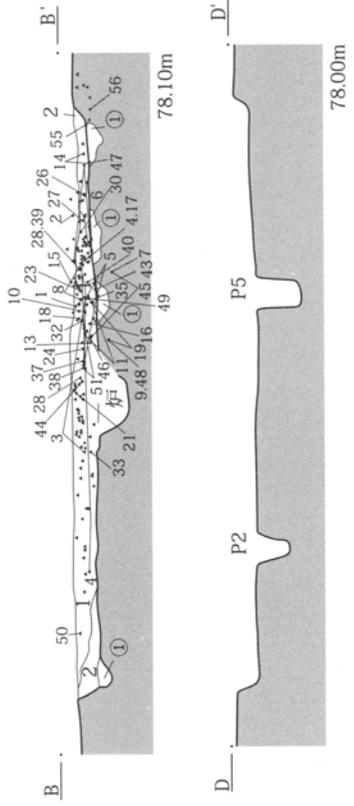
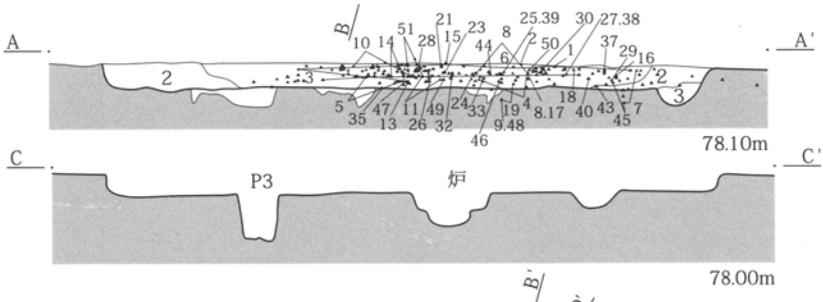
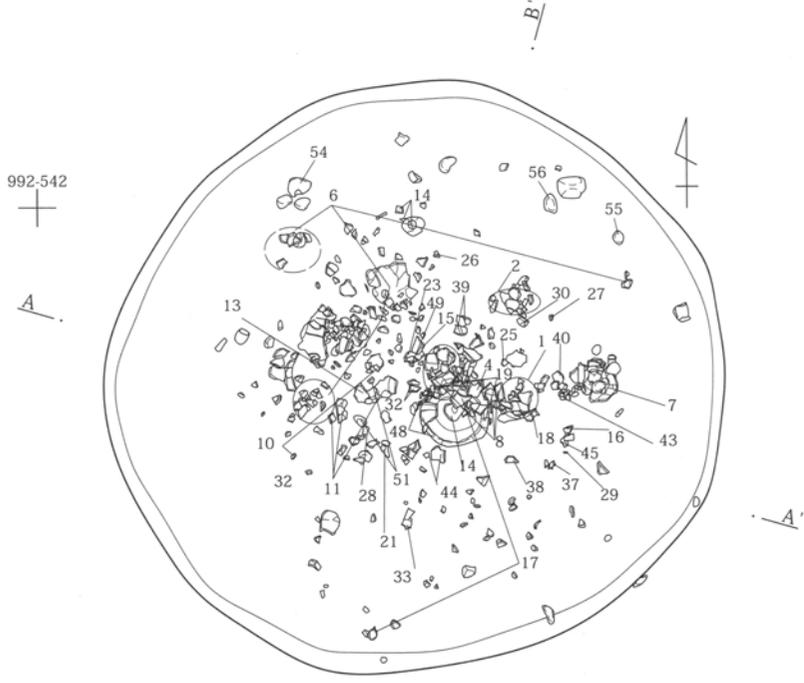
時期は、出土遺物から縄文時代中期後半(加曾利EⅢ式)に位置づけられる。

なお、炉覆土中から山形押型文が施文された土器小片(52、縄文時代早期)が1点出土した。

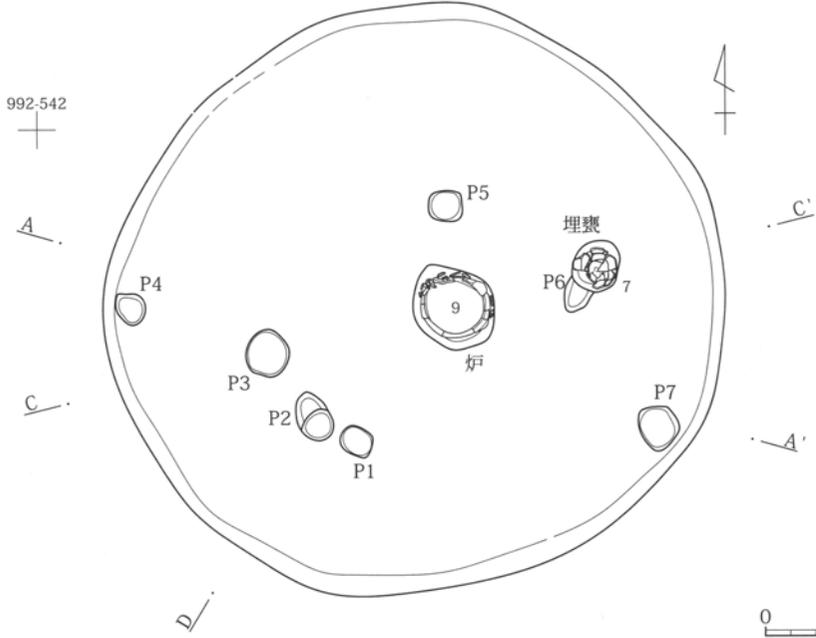


- 1 暗褐色土 ローム細粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に比して多量のローム粒(～2mm)を含む。

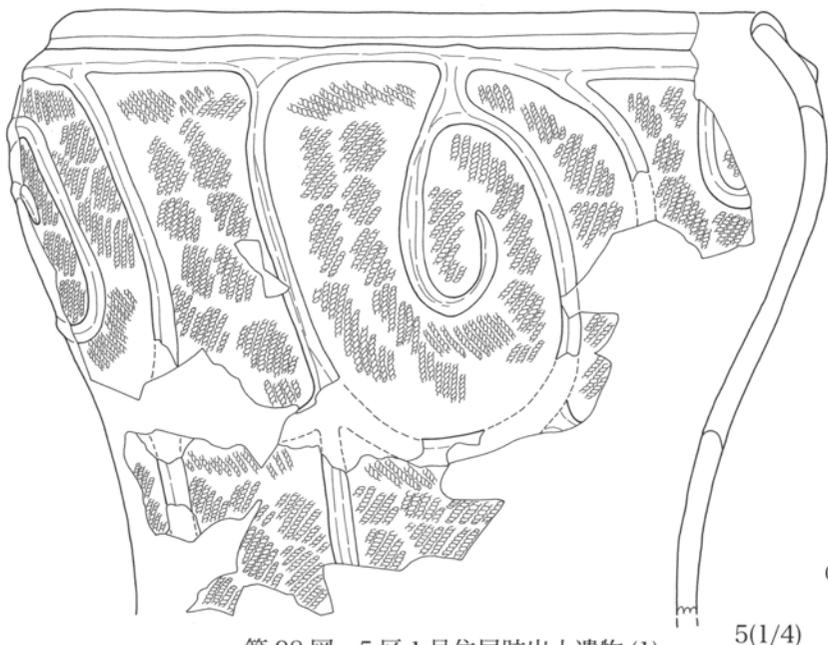
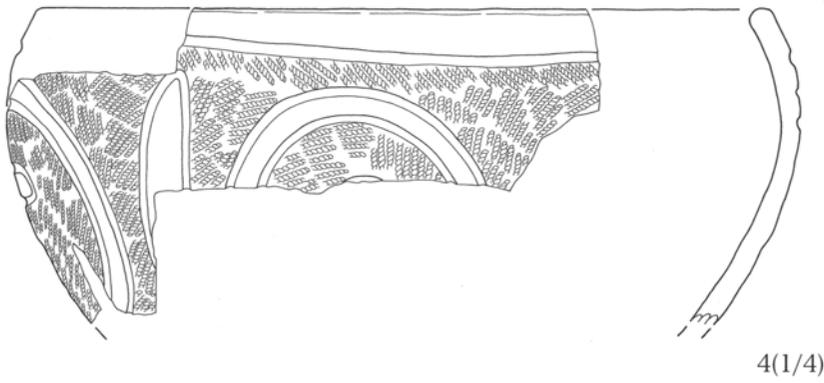
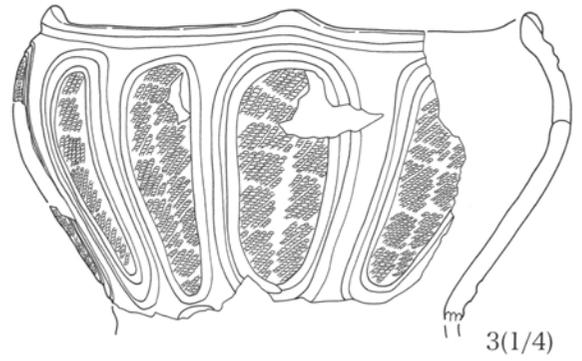
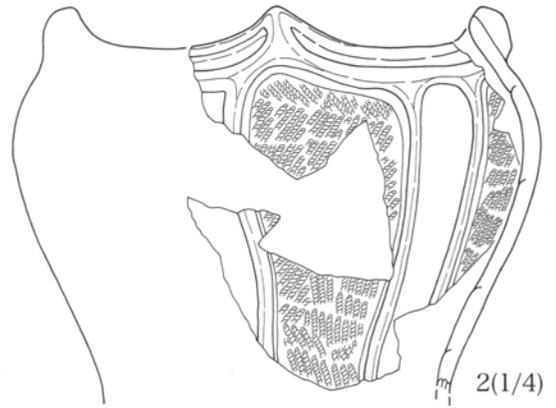
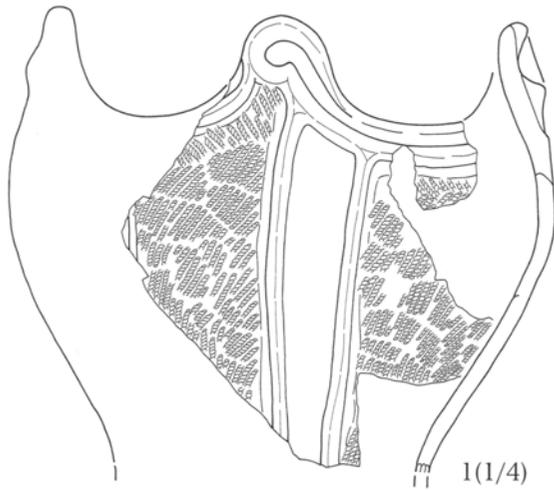
第96図 5区1号住居跡(1)



- 1 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック (径5mm以下) を少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック (径10mm以下) を多く含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒、ロームブロック (径5mm以下) を非常に多く含む。
- ① ロームと暗褐色土ブロックの混層。(貼り床材)

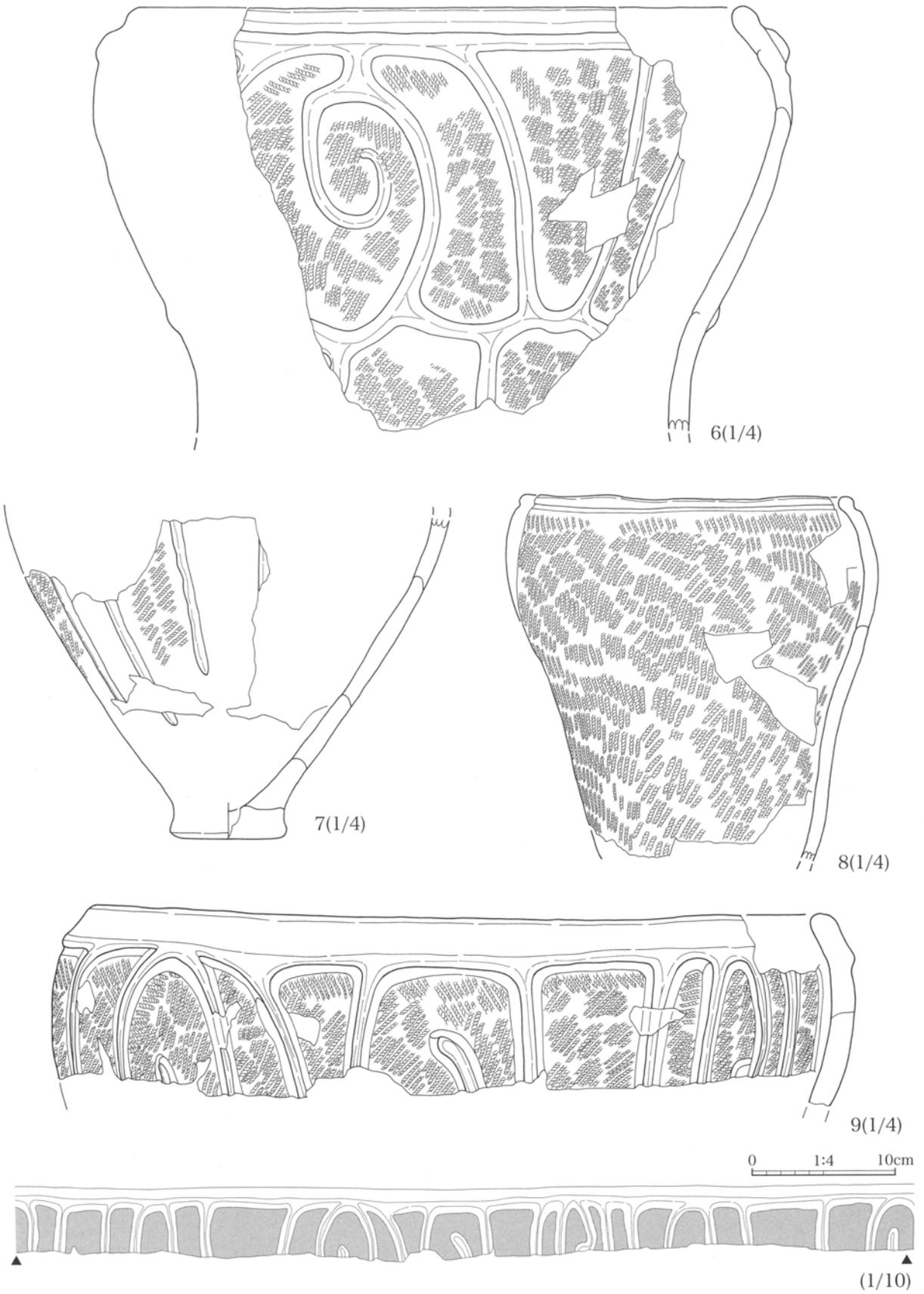


第97図 5区1号住居跡(2)

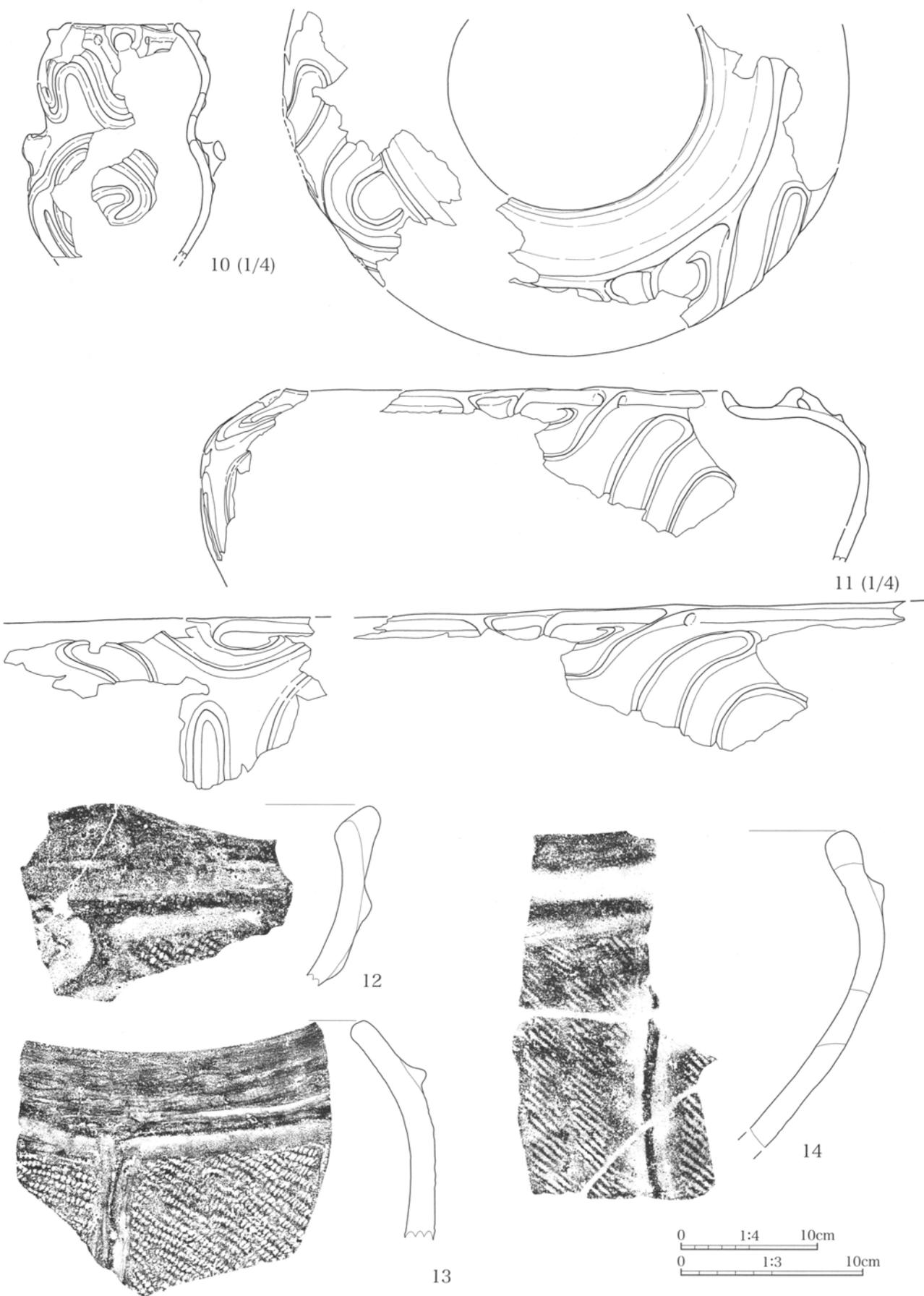


0 1:4 10cm

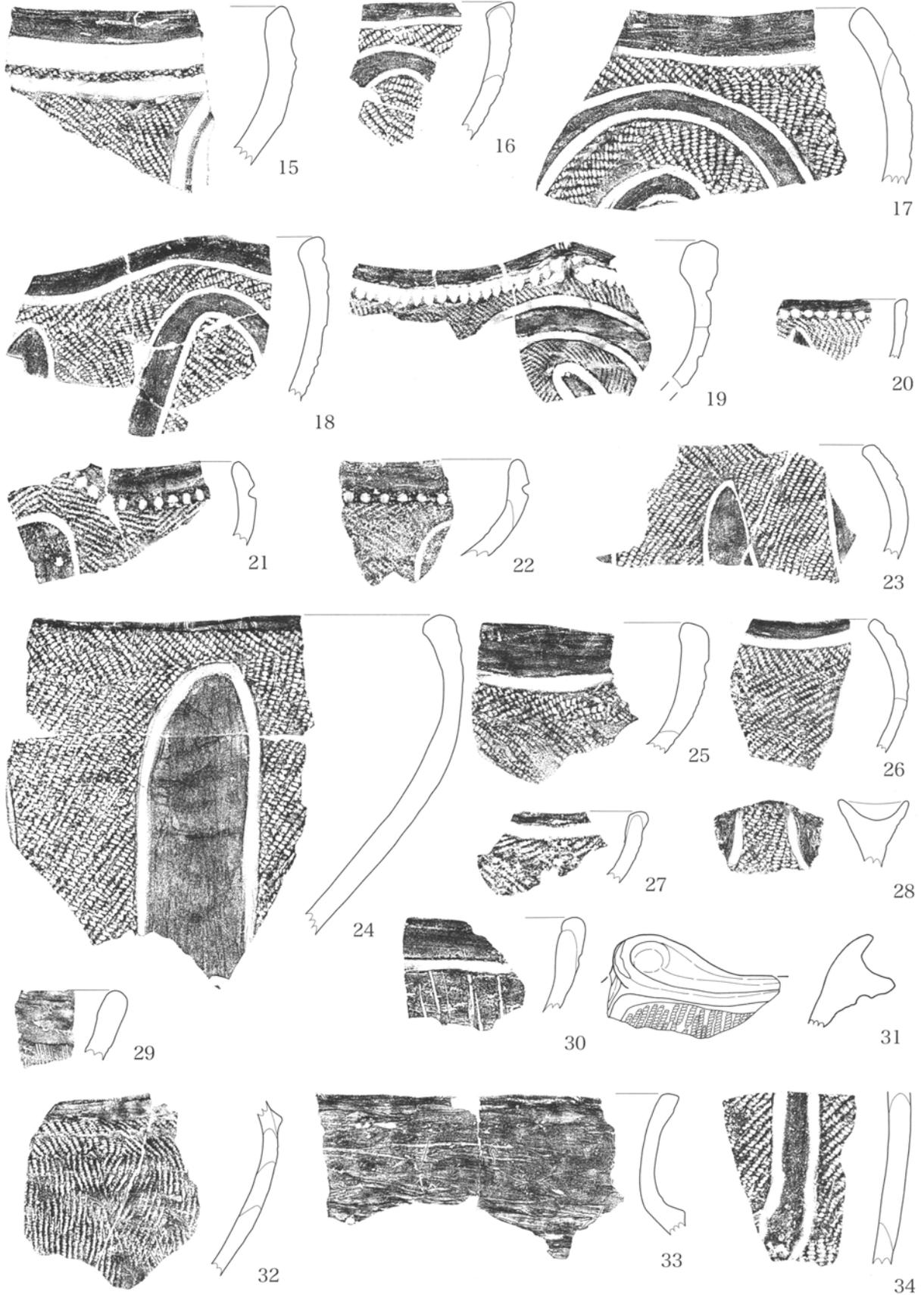
第 98 图 5 区 1 号住居跡出土遺物 (1)



第 99 图 5 区 1 号住居迹出土遗物 (2)

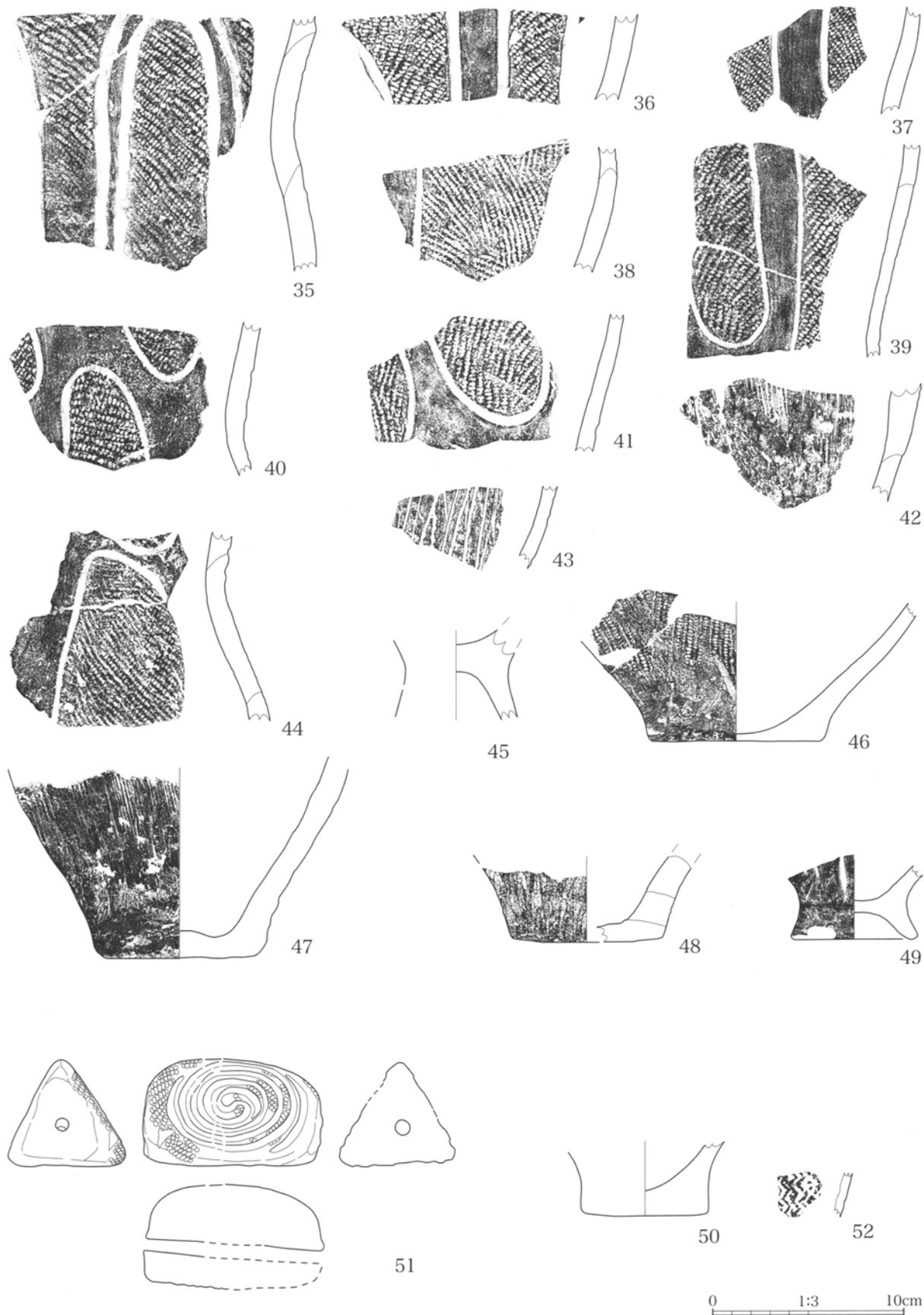


第 100 图 5 区 1 号住居跡出土遺物 (3)

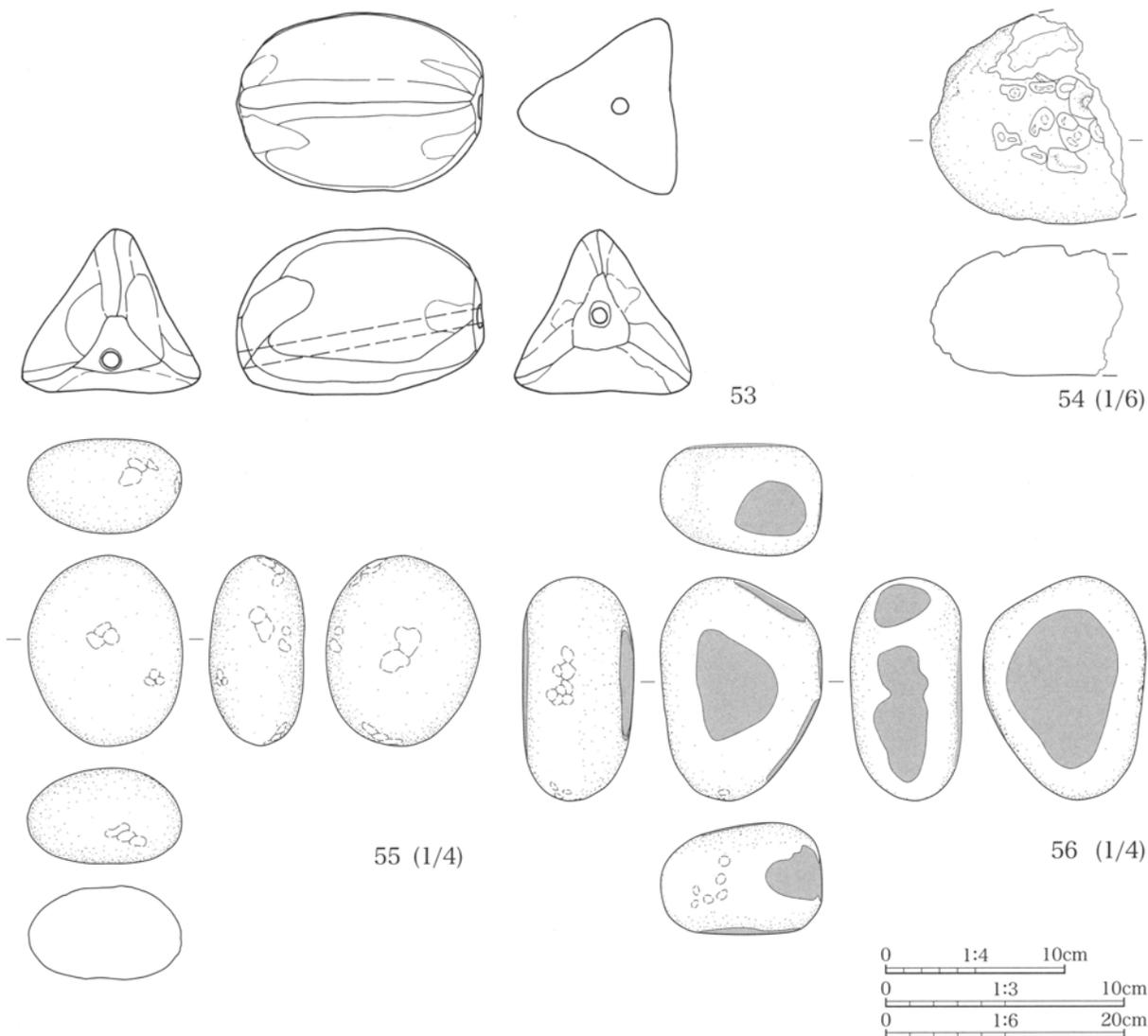


0 1:3 10cm

第 101 图 5 区 1 号住居跡出土遺物 (4)



第 102 图 5 区 1 号住居跡出土遺物 (5)



第103図 5区1号住居跡出土遺物(6)

5区 2号住居跡(第104図・PL38)

5区1号住居跡の西、(985~993, -537~-541)グリッドに位置する。南西部は後世の風倒木による攪乱を受け、全体的に不明瞭な確認状況であったが、遺物の分布状況やピットの配置から、円形の平面形を想定した。

炉は、中央やや東よりに位置する。長径86cm、短径63cmの長円形で、深さは10cmである。燃烧部は被熱による赤変が非常に顕著であった。中央部では深鉢下半部(39)が出土した。

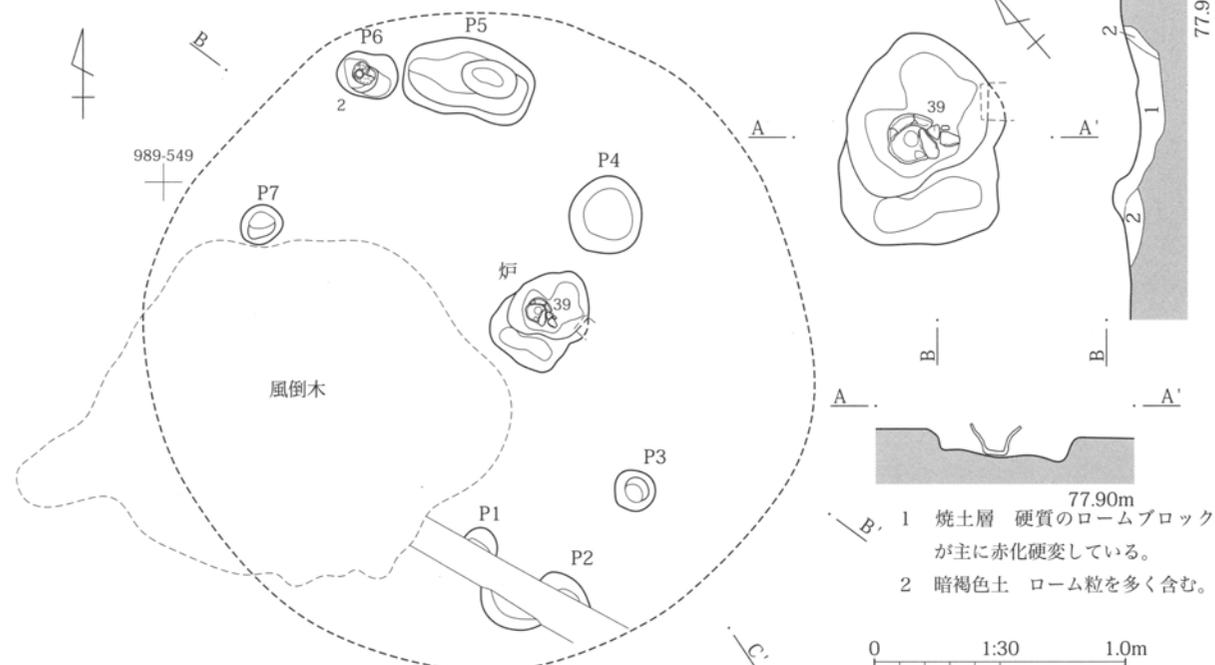
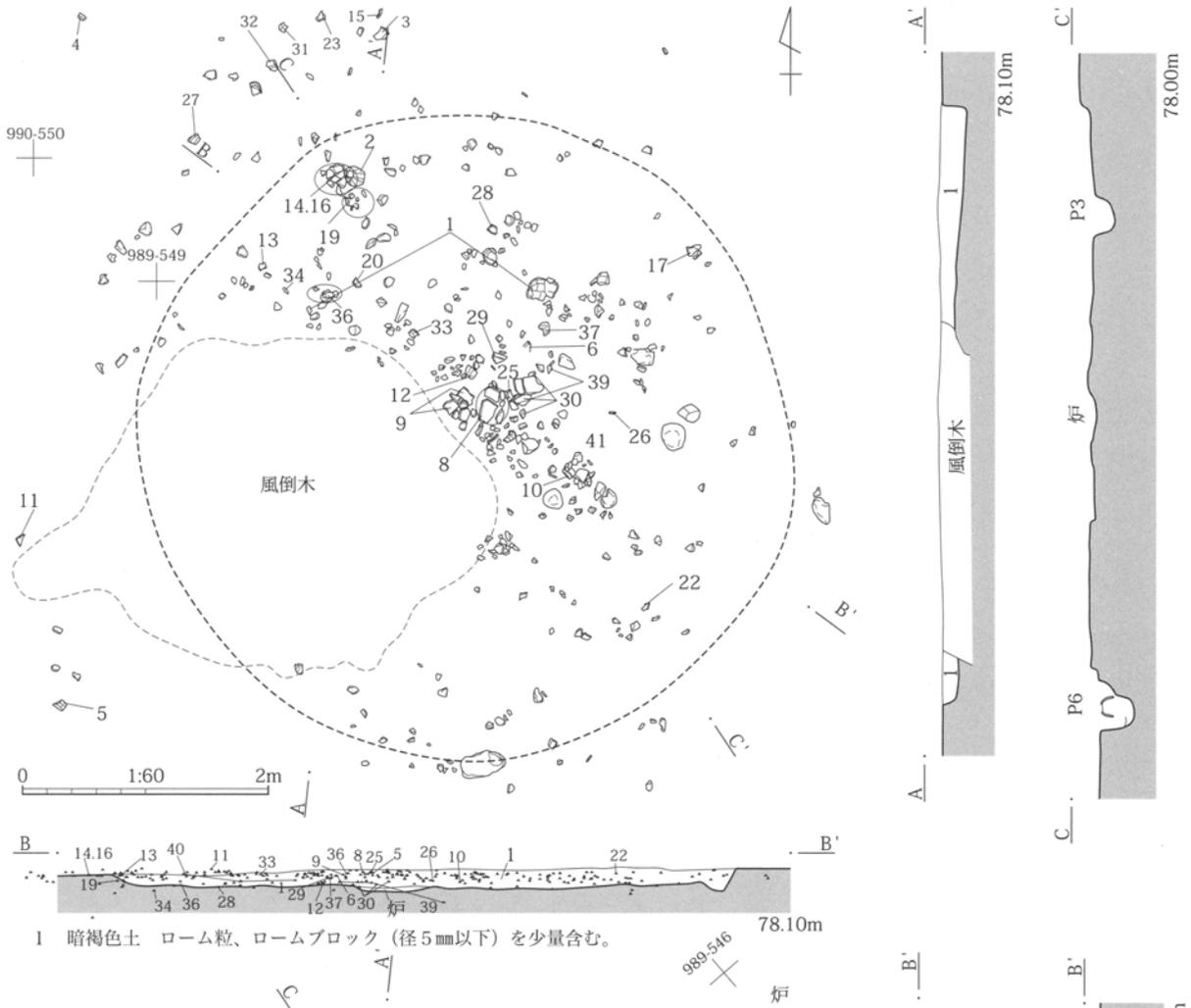
床面は、軟弱で不明瞭である。検出された7基のピットの規模(径・深さ)は以下の通りである。P1(29cm・19cm)、P2(46cm・15cm)、P3(32cm・

17cm)、P4(62cm・32cm)、P5(103×58cm・31cm)、P6(48×43cm・17cm)、P7(33cm・12cm)。なお、P6内からは深鉢(2)が逆位で出土した。

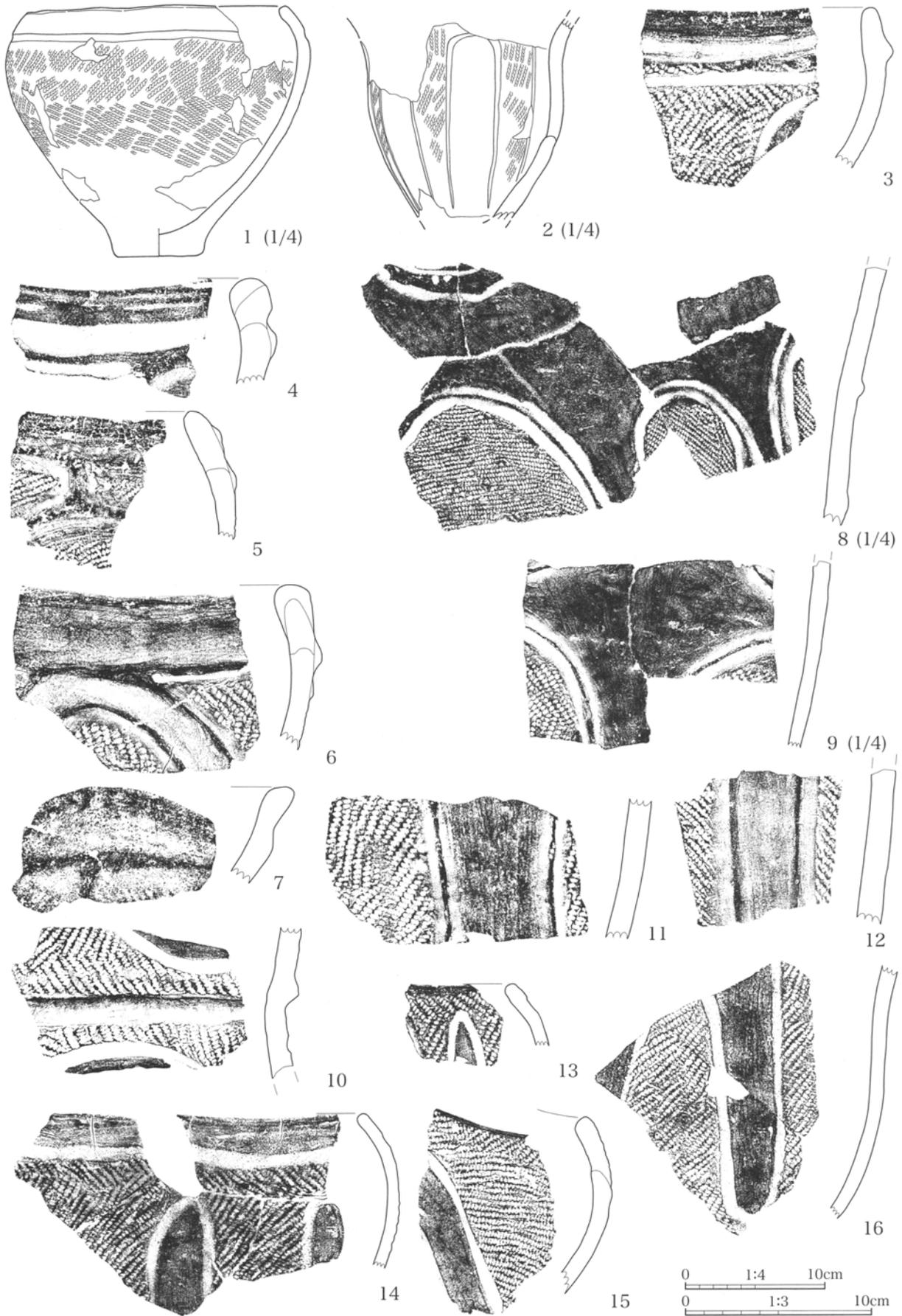
覆土は、砂質ロームであるが、地山に類するため判然としない。

遺物(第105・106図、PL125・126)は、床面からやや浮いた状態で土器片が多数出土した。遺物の大部分は加曾利EⅢ式である。堀之内Ⅰ式も1点混入する(38)。なお、楔形石器(40)は覆土中からの出土である。

時期は、縄文時代中期後半(加曾利EⅢ式)に属する。



第104図 5区2号住居跡



第 105 图 5 区 2 号住居跡出土遺物 (1)

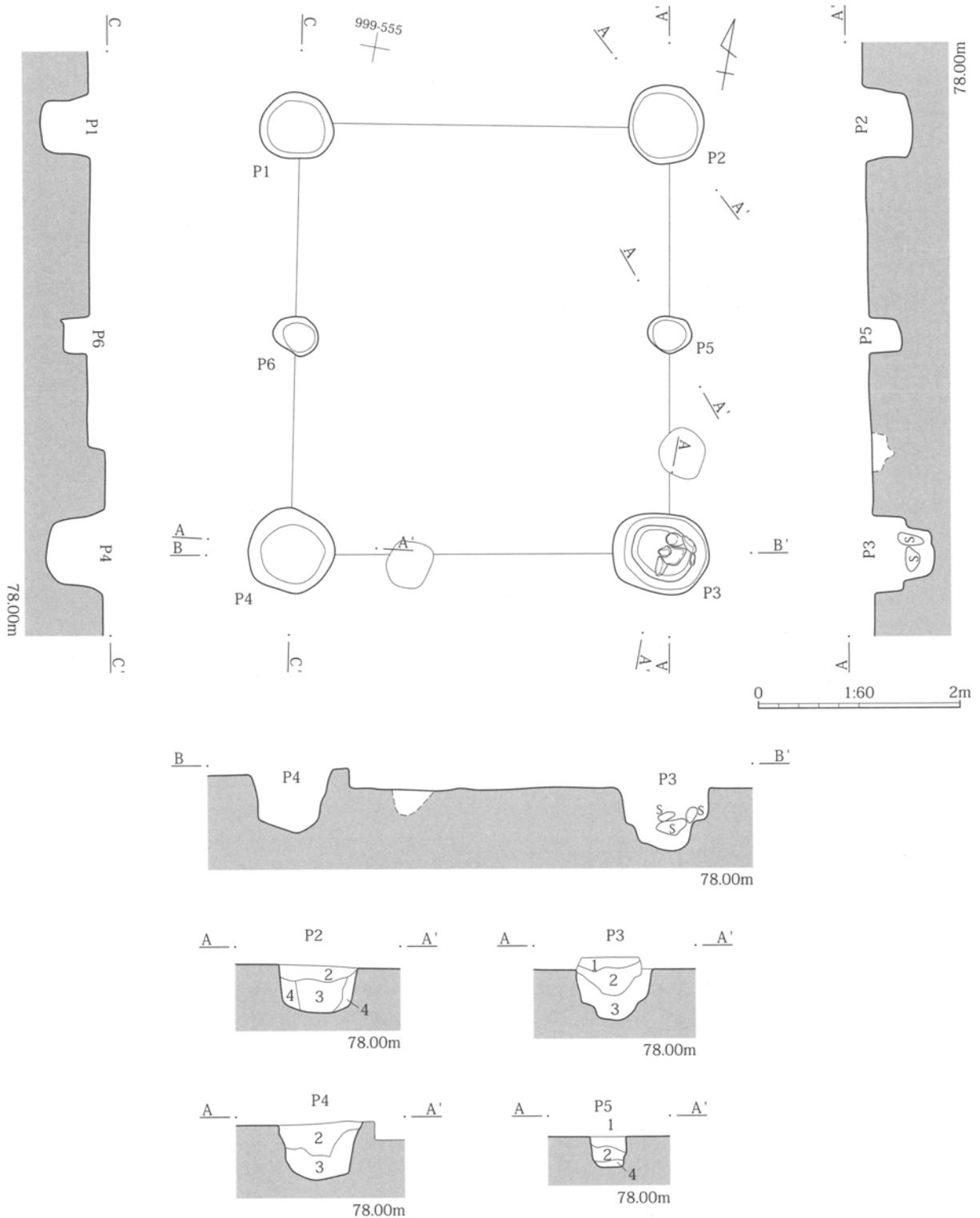


第 106 图 5 区 2 号住居跡出土遺物 (2)

(2) 掘立柱建物跡

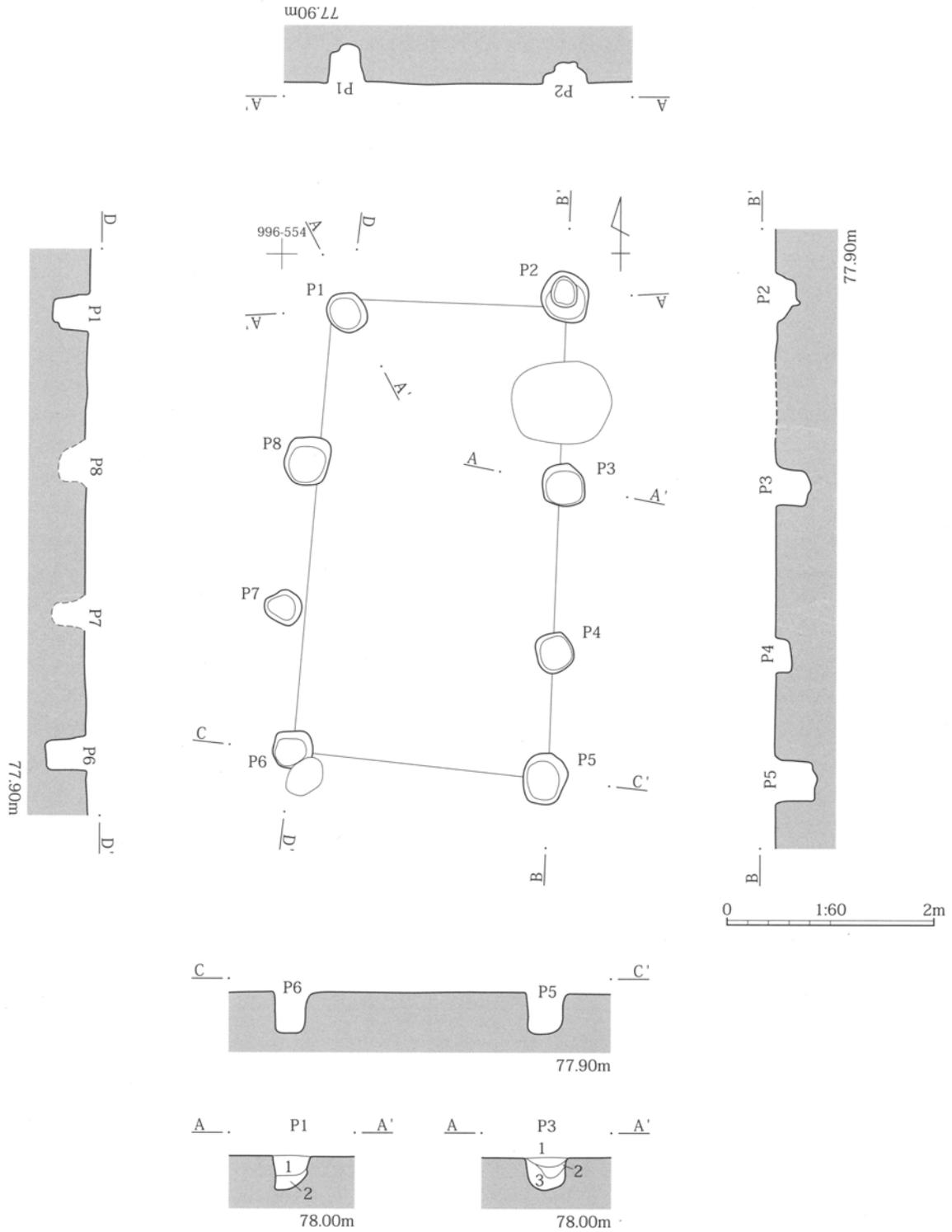
V・5区の微高部において、掘立柱建物跡3棟が
検出された。1間2間の建物が2棟と、1間3間の

建物が1棟である。他の調査区では、明瞭な掘立柱
建物跡は検出されなかった。



- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色土 黄褐色土斑状に多量含む。 | 3 暗灰褐色土 ローム粒、炭化物を微量含む。 |
| 2 暗褐色土 ローム粒、炭化物を微量含む。 | 4 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を多量含む。 |

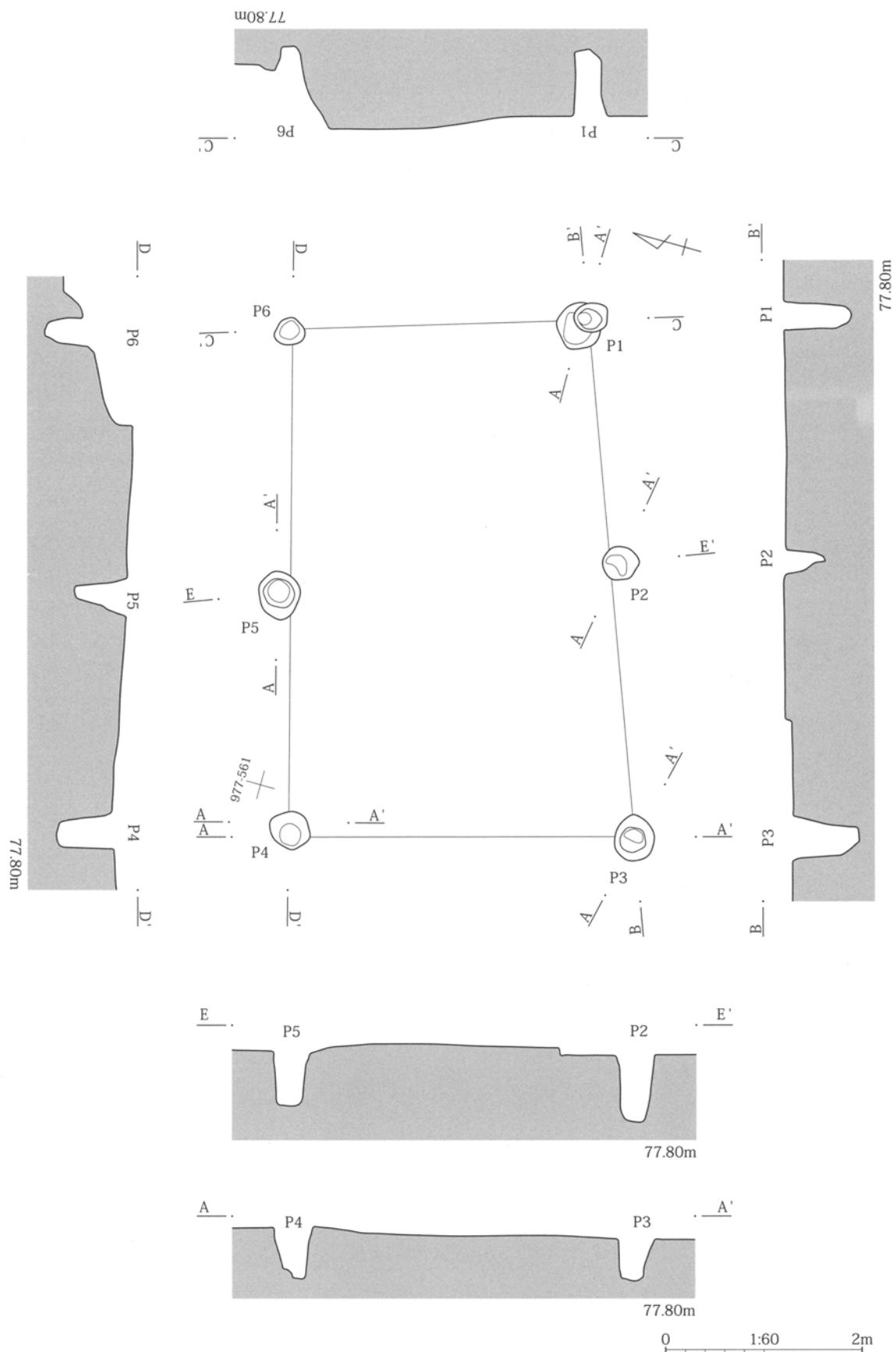
第107図 5区1号掘立柱建物跡



- 1 暗褐色土 ローム粒を微量含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック、ローム粒を少量含む。

- 1 暗褐色土 黄褐色土斑状にを少量含む。
- 2 暗褐色土 ローム粒を微量含む。
- 3 暗褐色土 黄褐色土斑状、ローム粒を少量含む。

第 108 図 5 区 2 号掘立柱建物跡



第 109 图 V 区 3 号掘立柱建物迹 (1)

5区1号掘立柱建物跡 (第107図、PL40)

5区西微高部北の(995～999, -549～-554)グリッドに位置する。南北2間×東西1間、最大で南北5.01m、東西4.60m、芯々距離は南北4.25m(P4～P5:2.15m、P5～P6:2.10m)、東西3.75mを測る。柱穴は四隅が大きく、中間は補助的で小さい。各柱穴の規模(径・深さ)は以下の通りである。P1(74×67cm・50cm)、P2(45×36cm・31cm)、P3(88cm・55cm)、P4(78cm・46cm)、P5(45×36cm・34cm)、P6(97×79cm・65cm)。P6の底面には柱を固定するため15～20cm前後の礫が6点設置されていた。

2号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

5区2号掘立柱建物跡 (第108図、PL40)

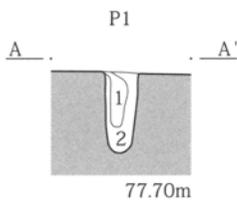
5区西微高部北の(993～997, -548～-553)グリッドに位置する。南北3間×東西1間、最大で南北5.13m、東西2.85m、芯々距離は南北4.60m(P2～P3:1.80m、P3～P4:1.60m、P4～P5:

1.20m)、東西2.45mを測る。各Pitの規模(径・深さ)は以下の通りである。P1(41×35cm・38cm)、P2(50cm・21cm)、P3(40cm・39cm)、P4(38cm・17cm)、P5(51×42cm・42cm)、P6(40cm・41cm)、P7(39cm・32cm)、P8(48×44cm・26cm)。

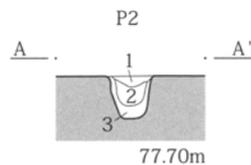
1号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

V区3号掘立柱建物跡 (第109・110図、PL40)

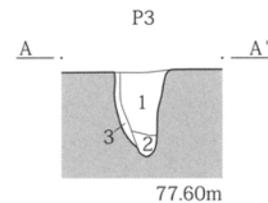
5区西微高部北の(971～978, -557～-561)グリッドに位置する。南北2間×東西1間で、南北5.70m、東西3.93m、芯々距離は南北5.20m、(P1～P2:2.40m、P5～P6:2.80m)、東西3.55mを測る。各Pitの規模(径・深さ)は以下の通りである。P1(48cm・69cm)、P2(38cm・44cm)、P3(49×39cm・72cm)、P4(40cm・59cm)、P5(48×42cm・54cm)、P6(30cm・88cm)。



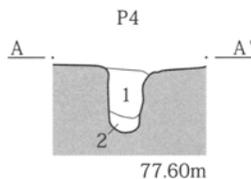
- 1 黄褐色土 白色軽石(径1mm)を均一に混入(40%)
- 2 暗褐色土 やや粘質。ロームブロック2～3cm(30%)混入。



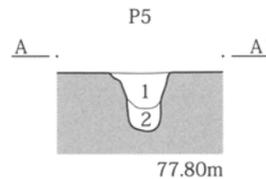
- 1 暗褐色土 ローム粒、淡黒土少量混入。
- 2 暗褐色土 淡黒ブロック少量混入。
- 3 褐色土 黒褐色土、ローム土混入。粘性ややあり。



- 1 暗褐色土 黒褐色土多量に混入。ローム土少量含む。
- 2 褐色土 ローム土多量に含む。
- 3 褐色土 ロームブロック多量に含む。



- 1 暗褐色土 水性ロームブロック少量含む。
- 2 にぶい暗褐色土 水性ロームブロック(径10mm前後)混入。砂質土を含む。



- 1 暗褐色土 ローム粒、淡黒土少量混入。ロームブロック(径10～30mm)混入。淡黒土含む。
- 2 暗褐色土 ロームブロック(やや水性)(径～10mm)混入。

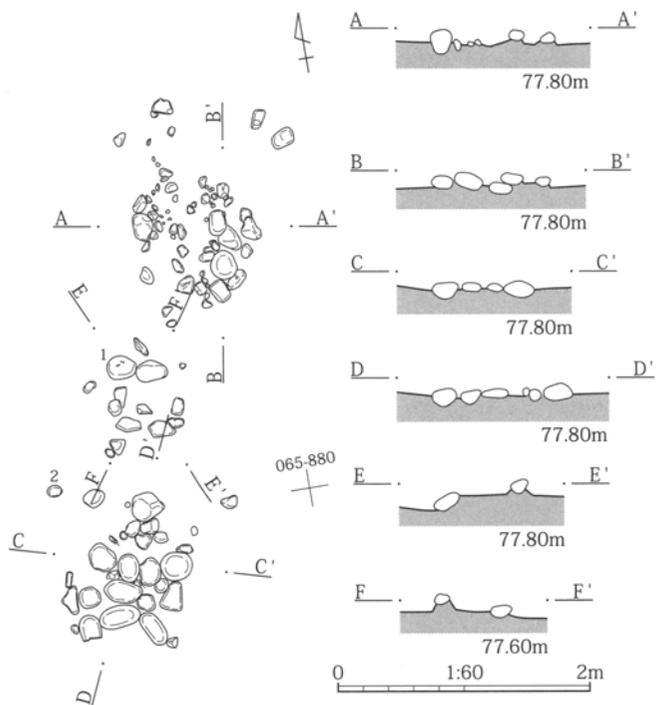


第110図 5区3号掘立柱建物跡(2)

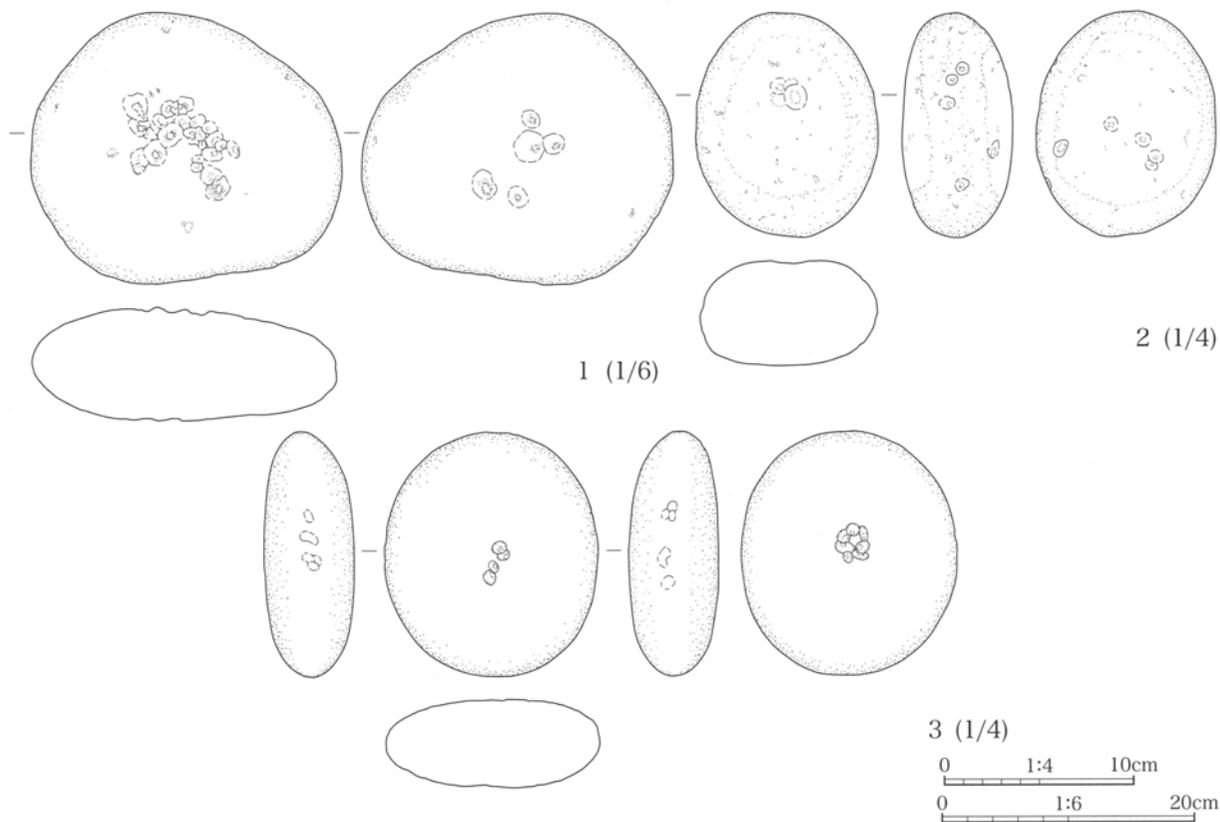
(3) 配石

1区5号配石 (第111図、PL41)

1区東微高部西縁の(064~066, -879~-881)グリッドに位置する。礫は3グループに分散している。南側は80×70cmの範囲に20cm前後の礫を敷き詰めた状況である。中央は同様の礫が径45cmに並んだ状況で検出された。北側は風倒木の上面に同様の礫の配置が認められた(図東半。西半は風倒木に伴う可能性が高い。)。直上の土層まで古代の水田耕作による攪乱がおよぶため、3グループの配置が個別であるのか一遺構に伴うものか判然としなかったため、5号配石として調査を行った。中央の配石には凹み石(1)が含まれる。



第111図 1区5号配石



第112図 1区5号配石出土遺物

4区1号配石 (第113図、PL41)

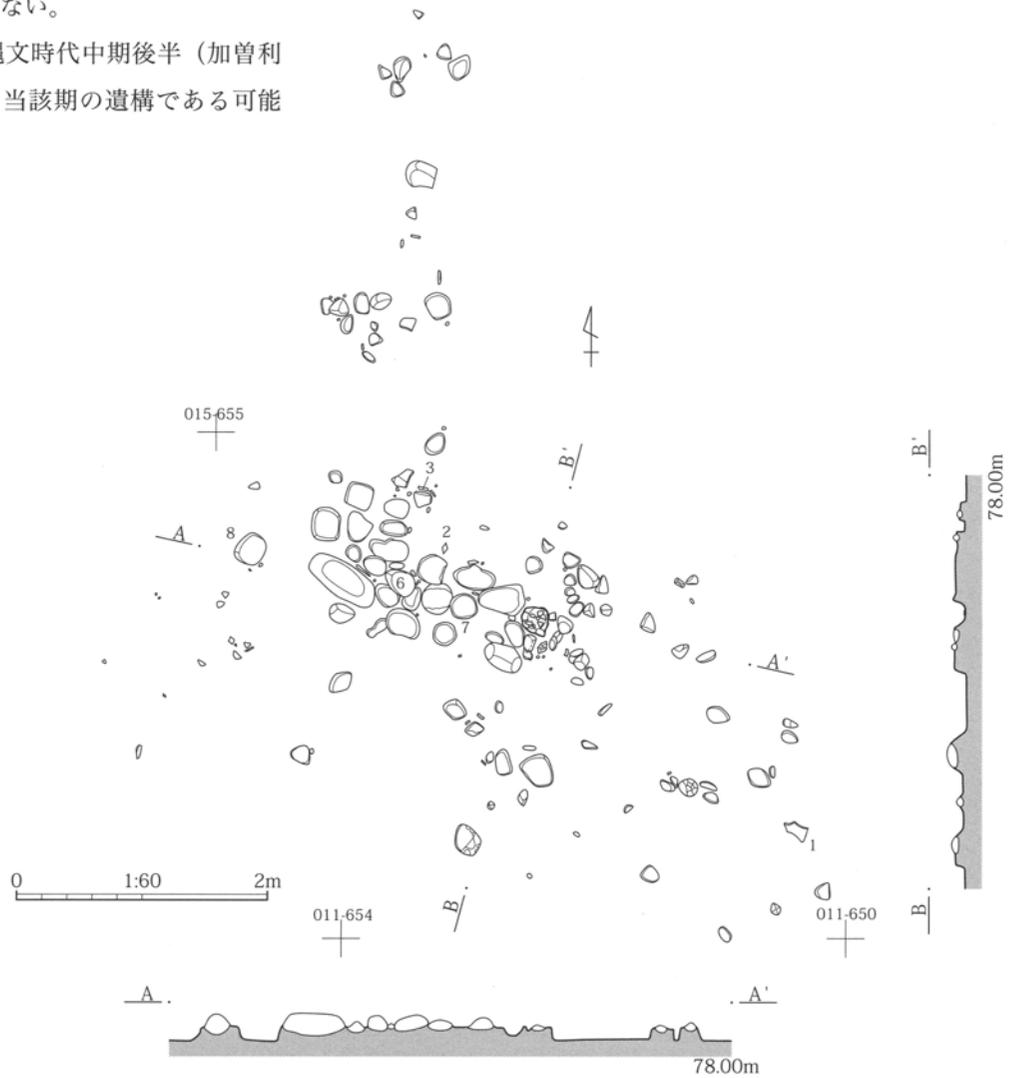
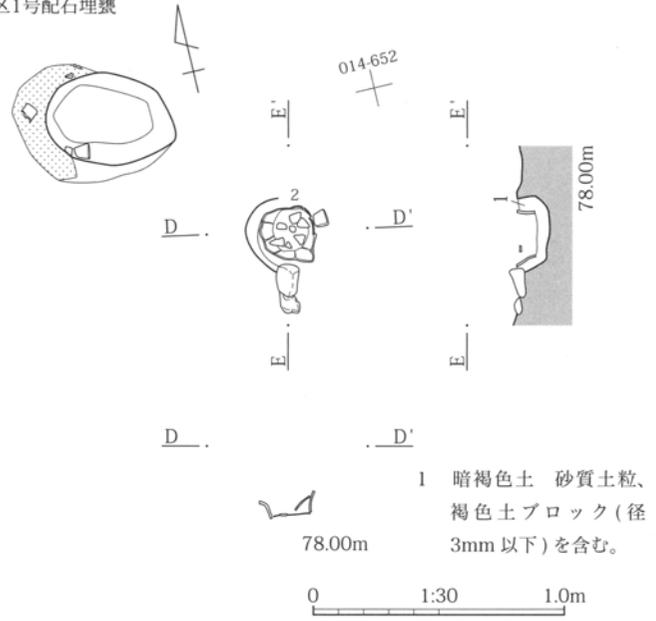
4区西微高部の(064~066, -879~-881)グリッドに位置する。中心部分は礫の上面がややずれてはいるが、本来の位置に近いようである。しかし、周縁部は後世の攪拌によって本来の位置から動いたものと考えられる。

配石の東端では、胴下半部を欠く深鉢(2)が正位で埋設されている(第114図、PL127)。また、埋甕の北西には炉状の焼土分布が検出された。西側縁辺は特に被熱による赤化硬変が著しい。埋甕・焼土分布ともに、配石の礫を除去した後に確認された。

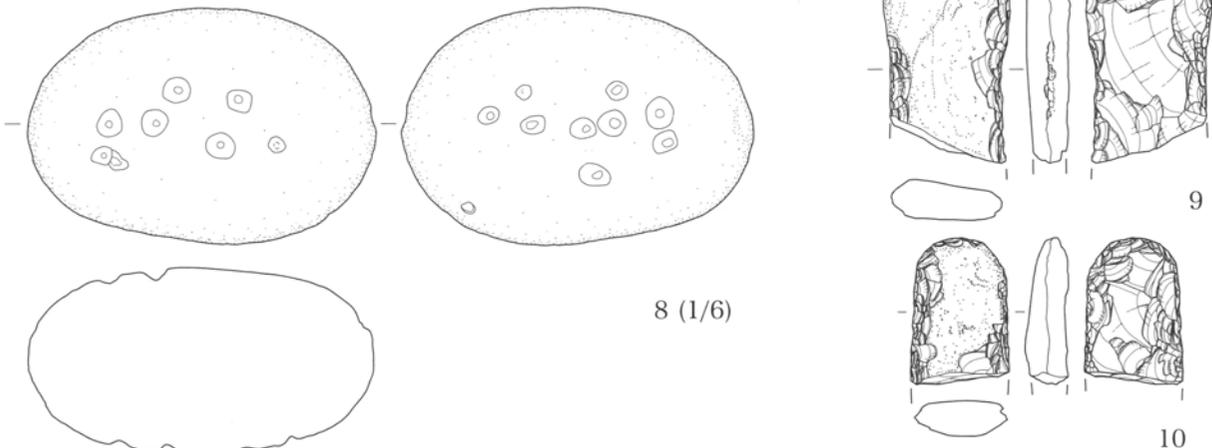
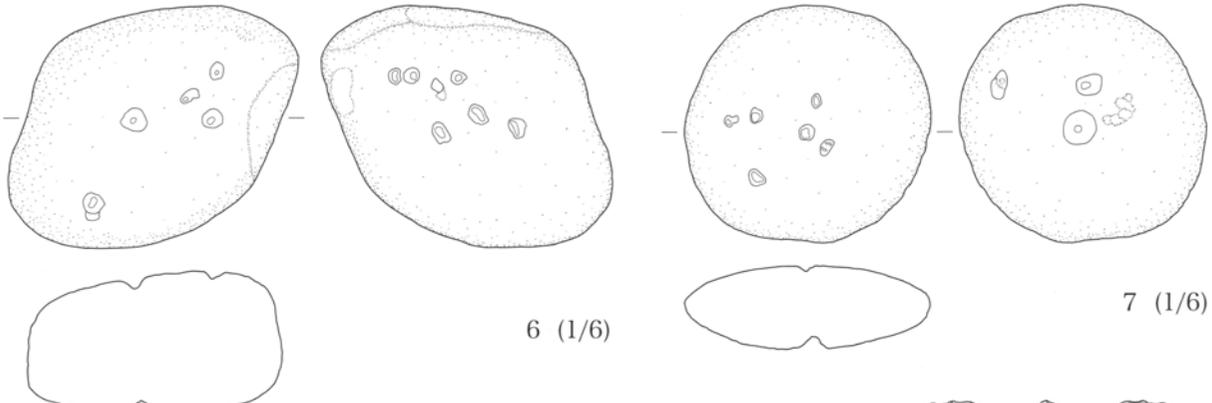
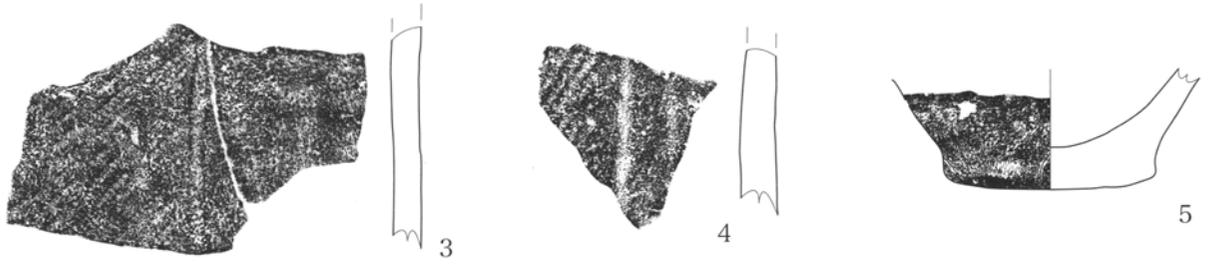
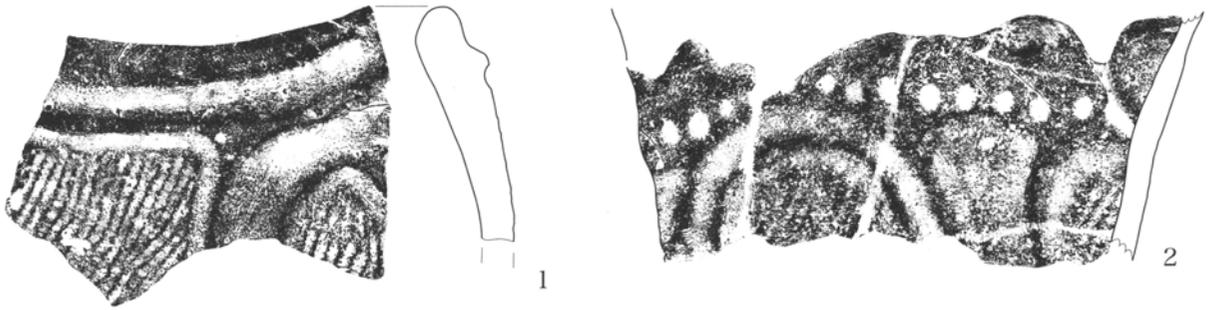
配石・埋甕・焼土分布(炉か)の関連については確定できない。

出土遺物は、縄文時代中期後半(加曾利EIV式)であり、当該期の遺構である可能性が高い。

4区1号配石埋甕

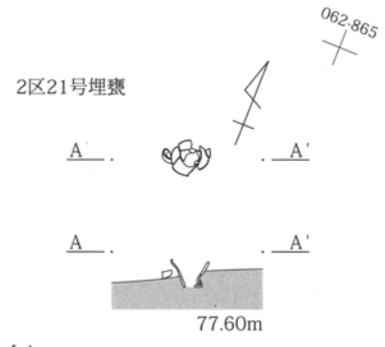
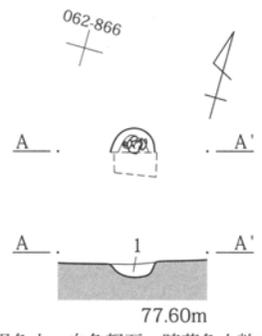
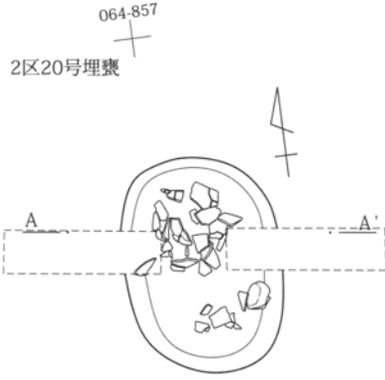


第113図 4区1号配石

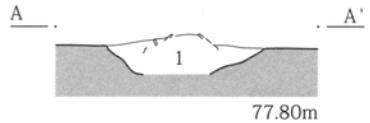


0 1:3 10cm
0 1:6 20cm

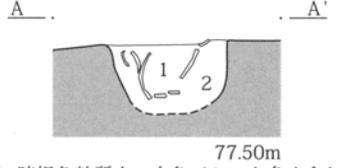
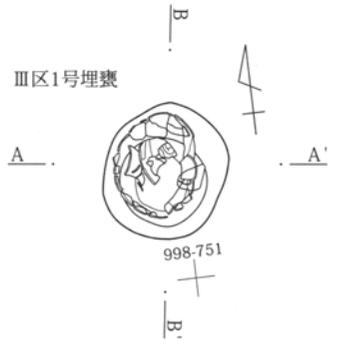
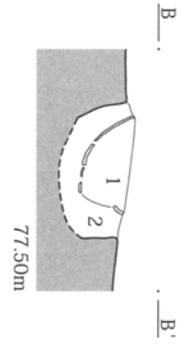
第 114 图 4 区 1 号配石出土遗物



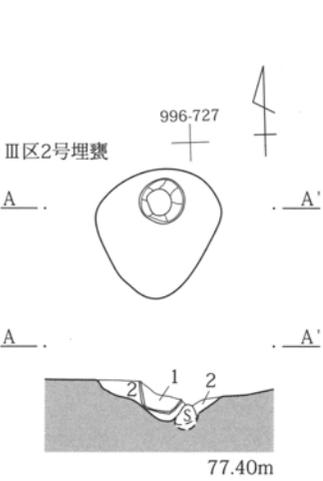
1 黒褐色土 白色軽石、暗茶色土粒を含む。



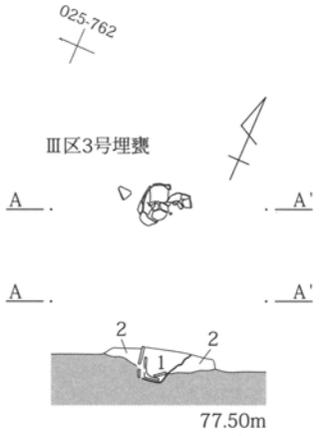
1 黒褐色土 粘質土(径1mm)以下の粒子多く含む。



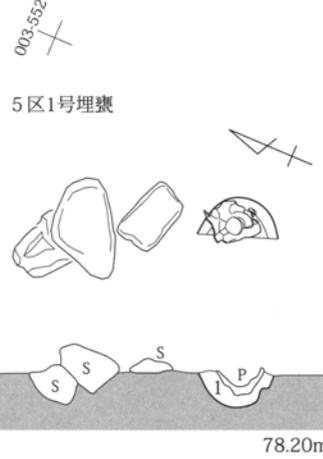
1 暗褐色粘質土 白色パミスを多く含む。硬くしまっている。
2 暗褐色粘質土 白色パミスを少量含む。硬くしまっている。



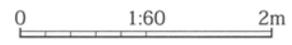
1 黒褐色土 粘質土(径1mm)以下の粒子多く含む。
2 暗褐色土 地山黄砂ブロック径2cm以下を含む。



1 暗褐色粘質土 白色パミスを多く含む。硬くしまっている。
2 暗褐色粘質土 白色パミスを少量含む。硬くしまっている。



1 暗褐色土 ローム粒を多く含む。



第 115 図 埋甕出土状況

(4) 埋甕

2区20号埋甕 (第115図、PL42)

(856, -063)グリッドに位置する。長径1.72cm、短径1.22cmを測る小判形の掘り込みの北半部に深鉢(第116図、PL127)を逆位に埋設した状況である。上面は攪乱を受け遺存しない。別個体の土器片も混入する。

縄文時代後期前半(称名寺式)に位置づけられる。

2区21号埋甕 (第115図、PL42)

(061, -865)グリッドに位置する。2区41号

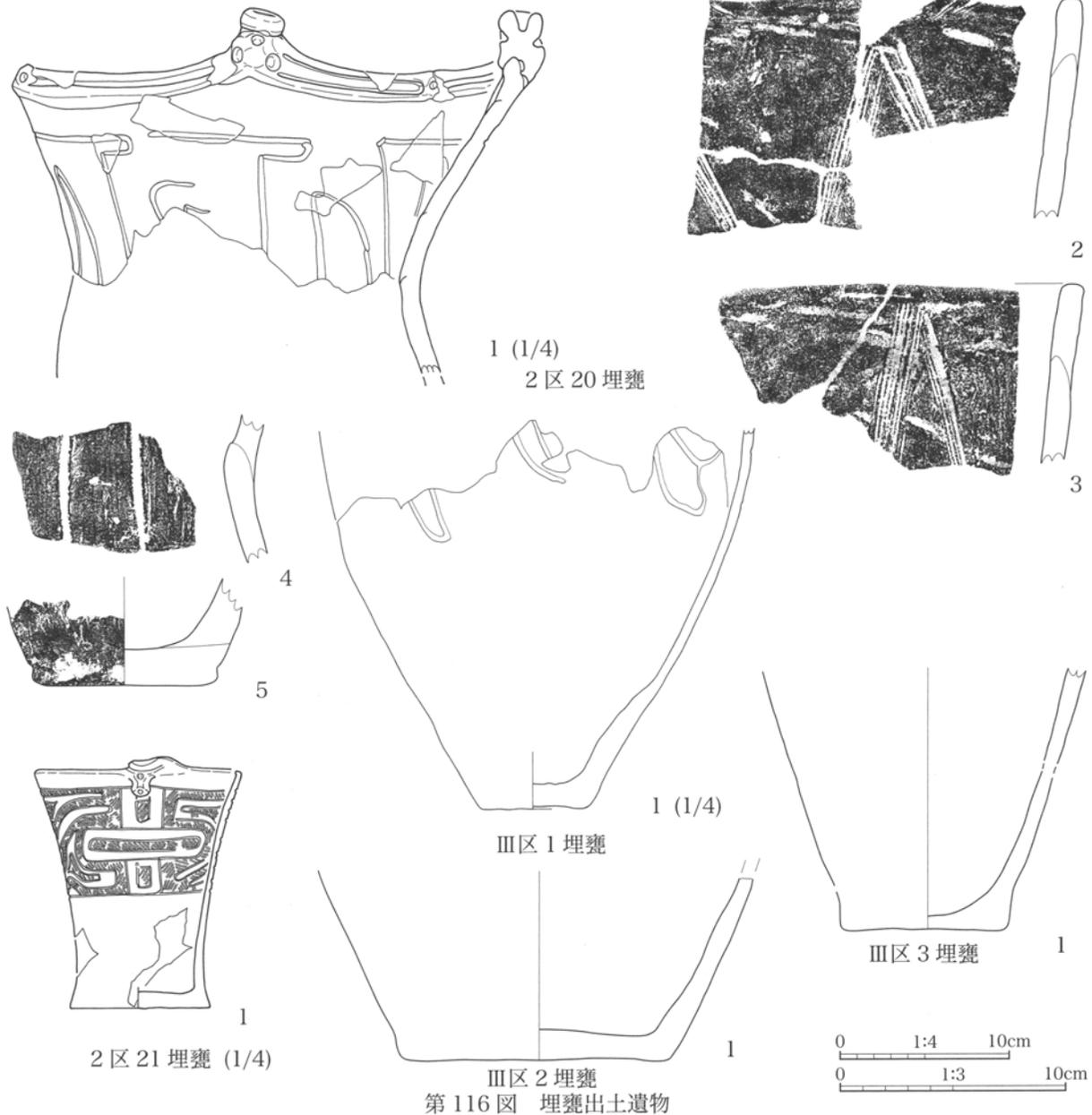
住居跡張出部西に近接する。底面付近が径35cmの小ピット中に正位で埋設されている。

完形の深鉢(第116図、PL127)で胴部には2単位の抽象的文様が施される。口縁部には「8」字状貼付文2と小突起1が付される。

縄文時代後期前半(堀之内2式)に位置づけられる。

Ⅲ区1号埋甕 (第115図、PL42)

(998, -751)グリッドに位置する。上面は攪乱を受け遺存しないが、深鉢(第116図、PL127)



下半部が正位に埋設された状況である。胴部に沈線文が施文されている。

縄文時代後期前半（堀之内1式（古））に位置づけられる。

Ⅲ区2号埋甕（第115図、PL43）

（995，-727）グリッドに位置する。上面は攪乱を受け遺存しないが、深鉢（第116図、PL127）下半部が正位に埋設された状況である。底部は平底、胴部は無文であり、摩滅している。

Ⅲ区3号埋甕（第115図、PL43）

（024，-761）グリッドに位置する。上面は攪乱を受け遺存しないが、深鉢下半部が正位に埋設された状況である。底部は平底で摩滅が著しい。

V区1号埋甕（第115図、PL43）

（002，-552）グリッドに位置する。上面は攪乱を受け遺存しないが、深鉢（第116図、PL127）下半部が正位に埋設された状況である。隣接して被熱した礫が出土しており、住居跡炉の埋設土器の可能性も考えられる。

（土器は基礎整理時の混乱により確定できなかったため掲載できなかった。）

（5）屋外炉

V区1号屋外炉（第117図、PL44）

（975，-562）グリッドに位置する。長径推定40cm、短径30cmの長円形で、深さは最終燃焼部で10cm、掘り方は14cmである。燃焼部の焼土化は顕著である。

周辺に上屋を想定できるピット等が伴わないため、屋外炉として認定した。

袋状土坑であるV区165号土坑の覆土上にあり、

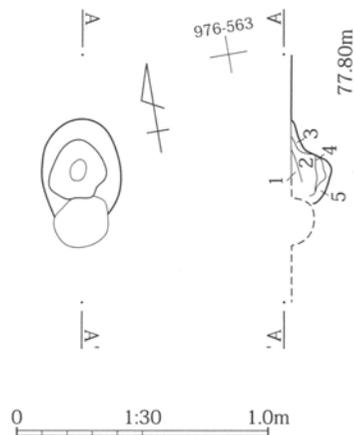
南端を後出する195号土坑に壊されている。

遺物が出土しなかったため、時期は特定できない。

（6）土坑

今回報告する、縄文時代の土坑はI区36基、I区12基、II区92基、2区76基、III区3基、3区15基、4区2基、V区88基、5区107基の合計431基である（第118～149図、PL45～74）。I・1区、II・2区の縄文時代の集落が占地する微高部に集中しているが、この微高部を北東から南西方向に入る浅い谷地部分では粗になる。III・3区、IV・4区では、散漫な分布にとどまる。V・5区は西微高部を中心に小規模な土坑が多数分布する状況である。各土坑については、土坑一覧表（第11表）にまとめた。以下には、特徴的な土坑についてのみ個別の記載を行う。

I区122号土坑（第120図、PL46）は、1.21m×1.0mの長円形を呈する土坑であり、覆土上半部には拳大から径20cm前後の礫が集中して出土し



- 1 暗黄褐色土 炭化物（径5mm）と焼土粒を多く含む。
- 2 暗黄褐色土 2～1cmの炭化物が均一に混入。少量の焼土粒とロームブロック径1cmも混入。
- 3 暗黄褐色土 炭化物や焼土はほとんど含まれていない。
- 4 暗褐色土 焼土粒径2mm程度が均一に入る。
- 5 暗褐色土 焼土ブロック多量混入。

第117図 1号屋外炉

た。1区123号土坑(第121図、PL47)の覆土上層にも多量の礫の集中が認められた。1.5m×1.33mの長円形で、断面は袋状を呈する。1区131号土坑(第121図、PL48)は、直径13.5×1.26mの円形で、断面は円筒形で下半の一部はやや袋状となる。

II区343号土坑(第130図、PL49)、344号土坑(第130図、PL49)は直径1.3～1.5m程度の断面円筒形を呈する円形土坑の底面と考えられる。2区761号土坑(第123図、PL52)は3.1m×2.01mの長円形を呈する大形の土坑である。中央部下層から土器片がまとまって出土した。2区778号土坑(第124図、PL53)底面では深鉢上半破片や礫が出土した。2区803号土坑(第126図、PL55)は礫や土器片が西側から流入した状況で出土した。

3区15号土坑(第135図、PL59)の覆土上層からは、壺胴部の大形破片が伏せられた状況で出土した。

5区8・9号土坑(第136図、PL61)は、直径76～77m、深さ81～87cmと深く、いずれも抜き取り痕状の張り出しが認められるなど類似点が見られ、対をなす可能性もある。5区23号土坑覆土下層からは多数の土器片が出土した。5区98号土坑と198号土坑は直径0.9m前後の円形を呈し、底部が大きくオーバーハングする袋状土坑である。5区100号土坑は、直径112mの円形で断面形は円筒状を呈する。底面から深鉢の大形破片が出土した。5区179号土坑は、直径41×33cm、深さ31cmの円形を呈し、北寄りの位置に深鉢胴下半部が逆位に伏せられた状況で出土した。

(7) 土器集中

III区土器集中

III区北東部の遺物包含中で特に密集した出土状況が確認されたため、土器集中(分布)として調査した。下部には明確な遺構は検出されなかった。

土器片は全体として表面の摩滅が著しい。

(8) 河道

調査区内では西半部の低地帯部分で埋没した河道の跡が二群確認された。一群はI・1区を斜行し、もう一群はII・2区～III・3区にかけて南流する。各河道は、現早川の旧河道と考えられる。

河道の土層断面の観察からは、複数の河道群が時期により流路を変え続けた状況が認められる。三地区の流路群は、As-B層堆積段階ではほぼ埋没している。

縄文時代の河道は、厳密には後世に繰り返された変流の結果、浸食されて残存していないと考えられる。しかし、地形条件を勘案すれば、検出される河道にほぼ近似するものと想定される。継続整理中のII区では、集落東縁部で河道への傾斜部に展開する遺構も検出されている。

河道埋没土からは、縄文時代中期から後期にかけての遺物が出土している。

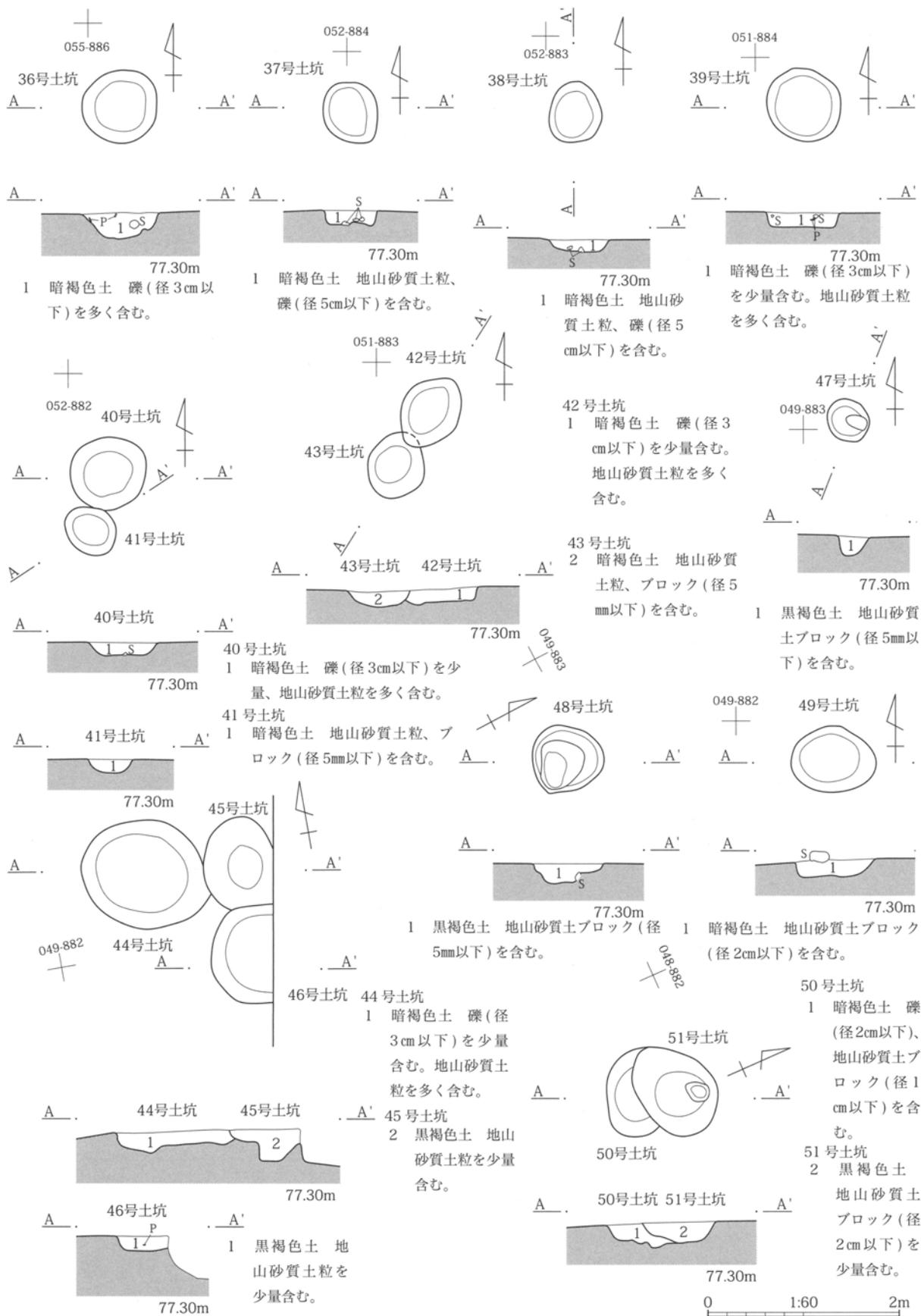
(9) 遺構外出土遺物

I・1区～II・2区の微高部では遺物包含層が広範に認められた。特にII・2区では2層(VI・VII層)の包含層から多量の遺物が出土している。遺物は、縄文時代中期前半(阿玉台式)を少量と、中期後半から後期前半(加曾利E I～堀之内2式)が大半である。確認が困難であった住居跡の覆土中の遺物も一定数含まれると考えられる。

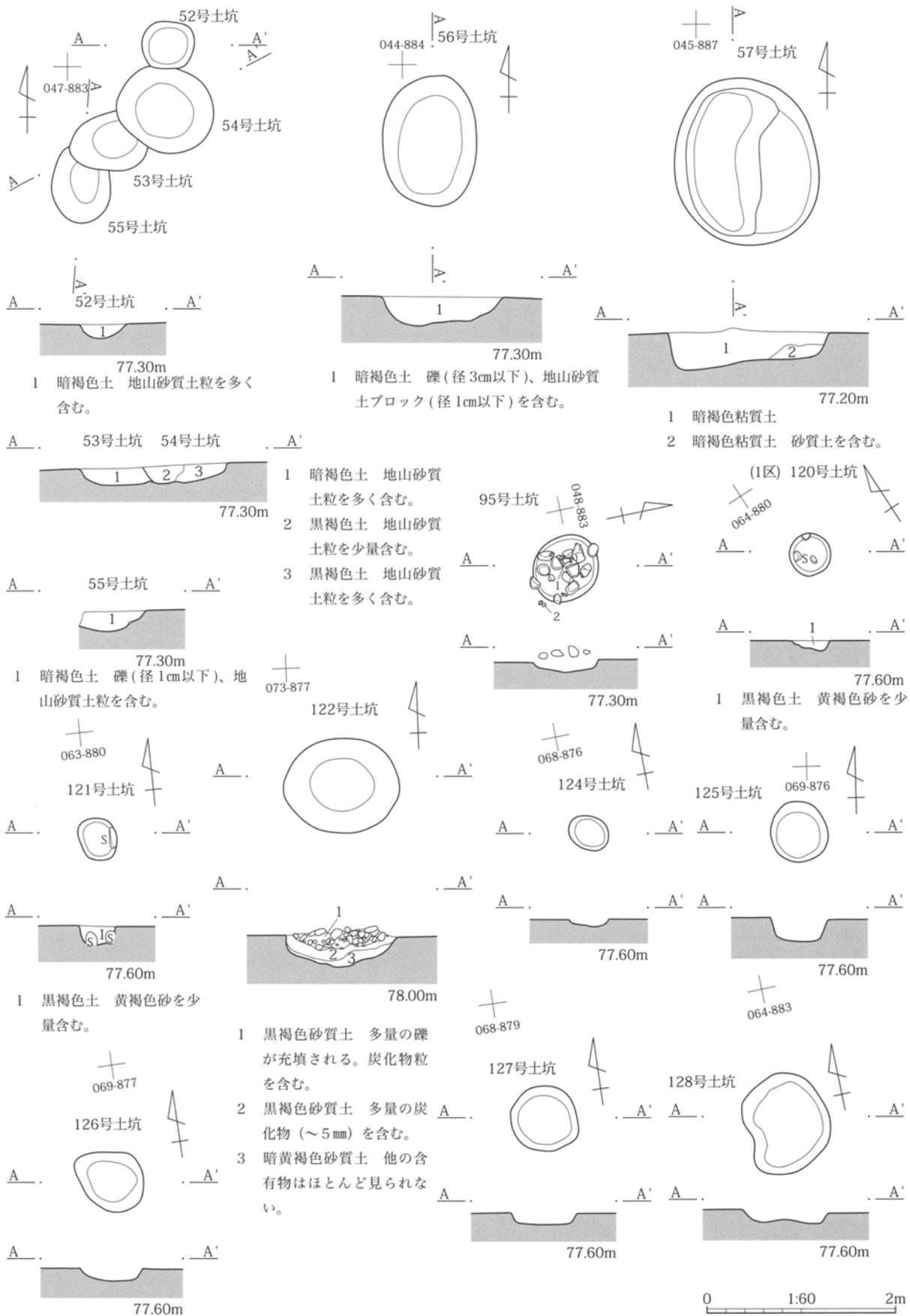
III・3区東半からIV・4区西端にかけての遺物包含層は、III区北東部で特に密集した出土状況があった。時期はI・II区と同様である。いずれも低地特有の黒色粘質土系の土壌中からの出土であり、表面が摩滅した土器類が多数を占める。

IV・4区では中期後半の加曾利E III～IV式および後期前半の称名寺式が集中し、少量だが堀之内式が加わる。

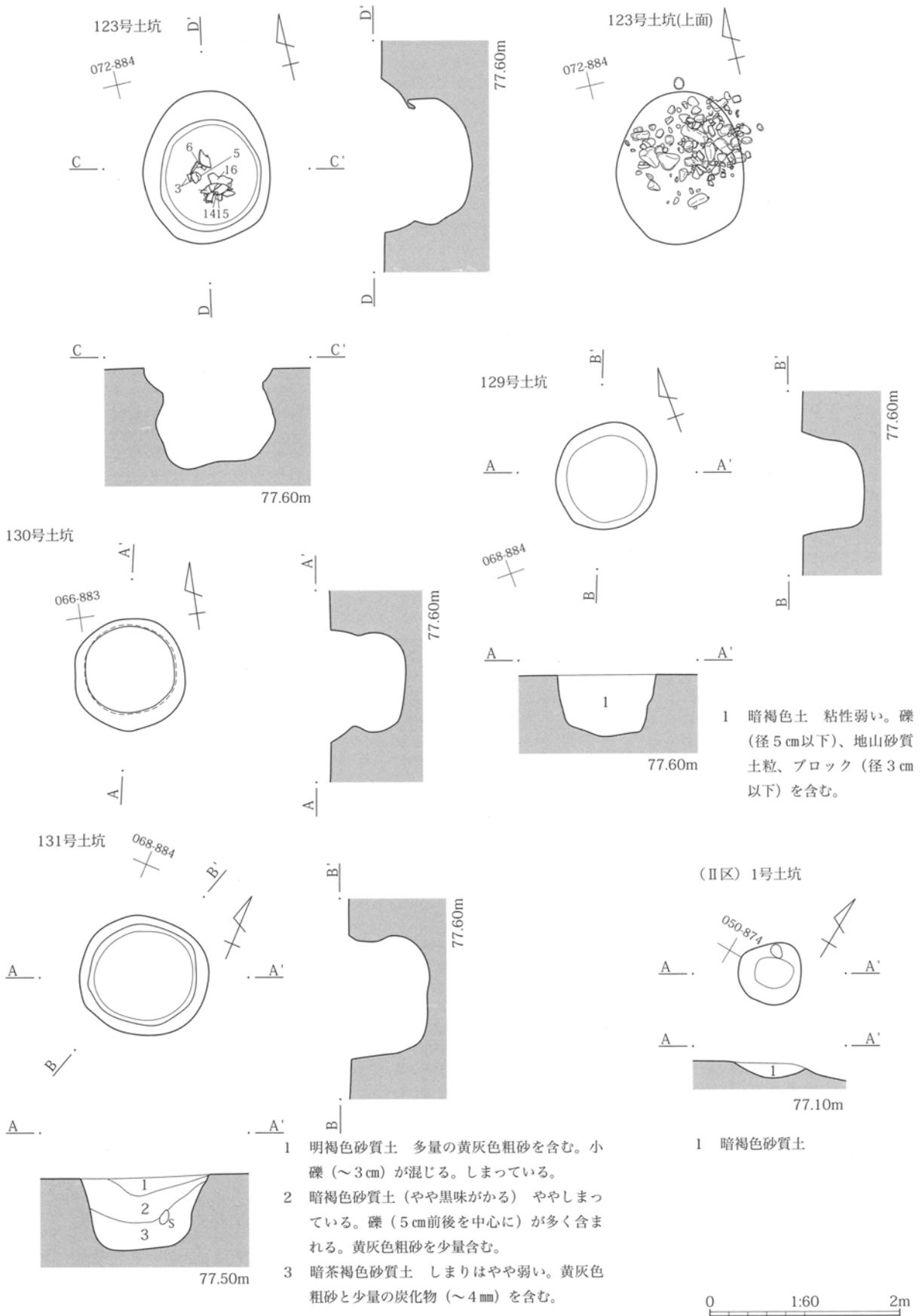
V・5区の微高部では、中期後半でも加曾利IV式が主体となる。他に、早期・前期の遺物が微量ながら出土している。



第119図 縄文時代土坑 I区(2)

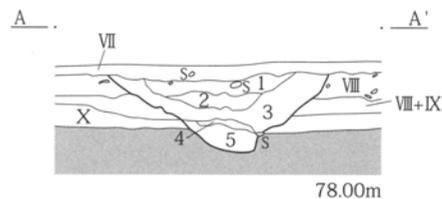
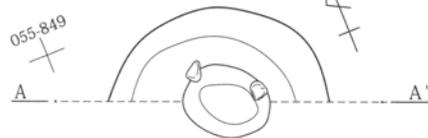


第120図 縄文時代土坑 I区(3)・I区(1)

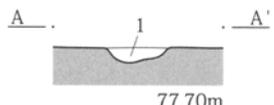


第121図 縄文時代土坑 1区(2)、II区(1)

(2区) 750号土坑

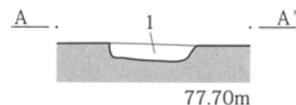
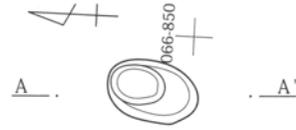


- 1 暗褐色土 黄褐色砂、焼土粒を微量含む。
- 2 明黄褐色土 黄褐色砂が主体。褐色土と混じる。
- 3 暗褐色土 1層に類するが、明黄褐色土ブロックが混じる。
- 4 明黄褐色土 明黄褐色砂主体。明褐色土と混じる。
- 5 明褐色砂質土 小礫 (~3cm) を少量含む。



- 1 暗褐色土 砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

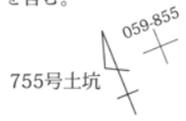
753号土坑



- 1 暗褐色土 砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。



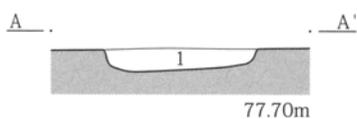
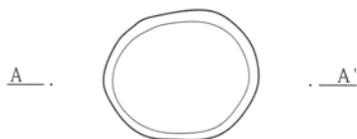
- 2 暗褐色土 砂質土ブロック (径2mm以下)、礫 (30mm以下) を含む。



- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

061-190

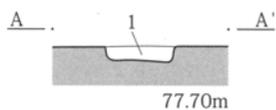
756号土坑



- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

062-854

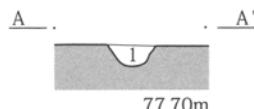
757号土坑



- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

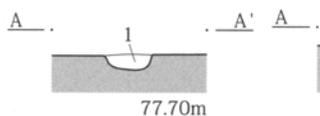
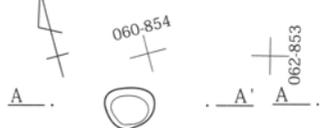
063-856

760号土坑



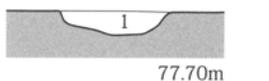
- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

758号土坑



- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

759号土坑



- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

765号土坑



- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

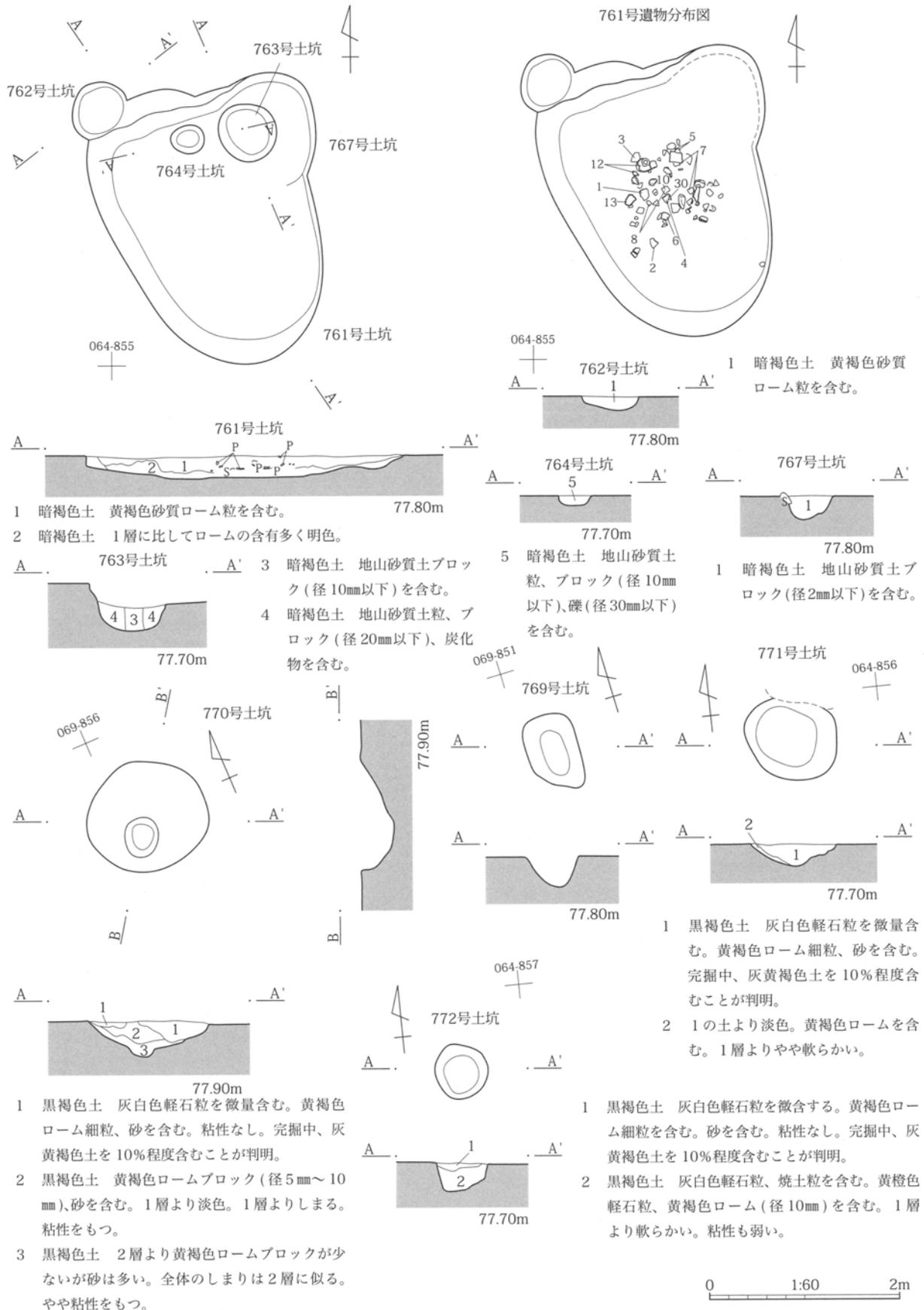
768号土坑



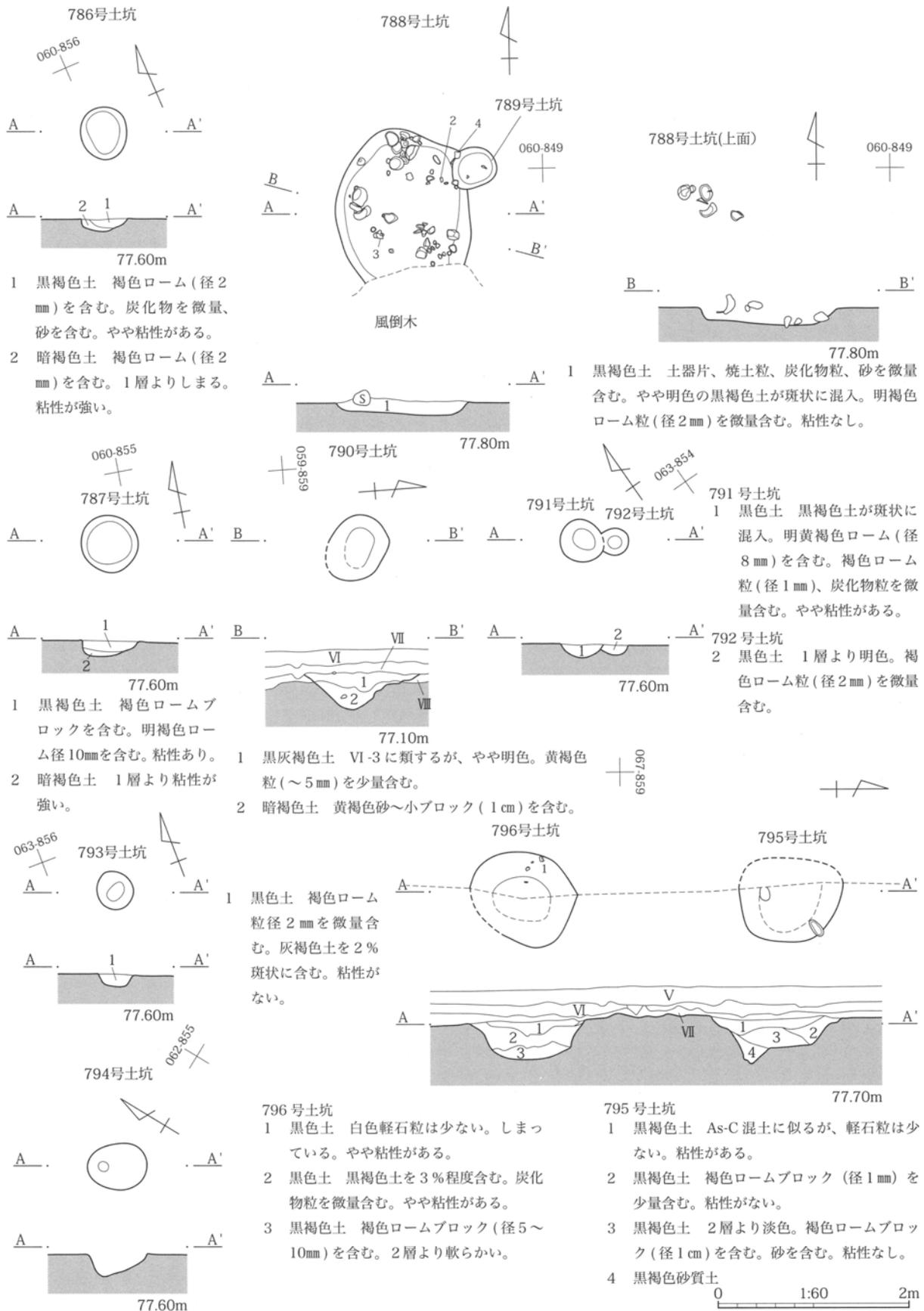
- 1 暗褐色土 地山砂質土ブロック (径2mm以下) を含む。

0 1:60 2m

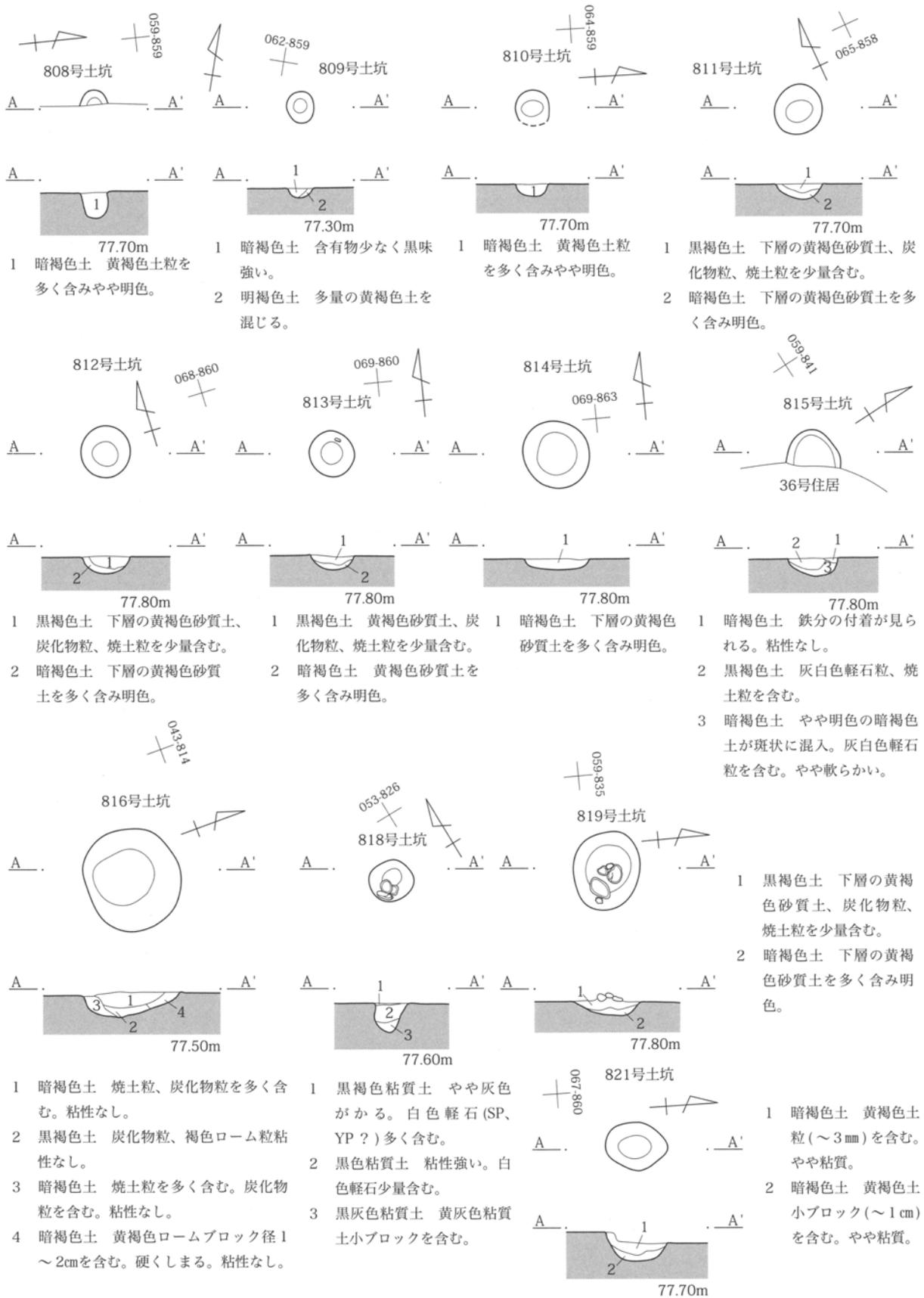
第122図 縄文時代土坑 2区(1)



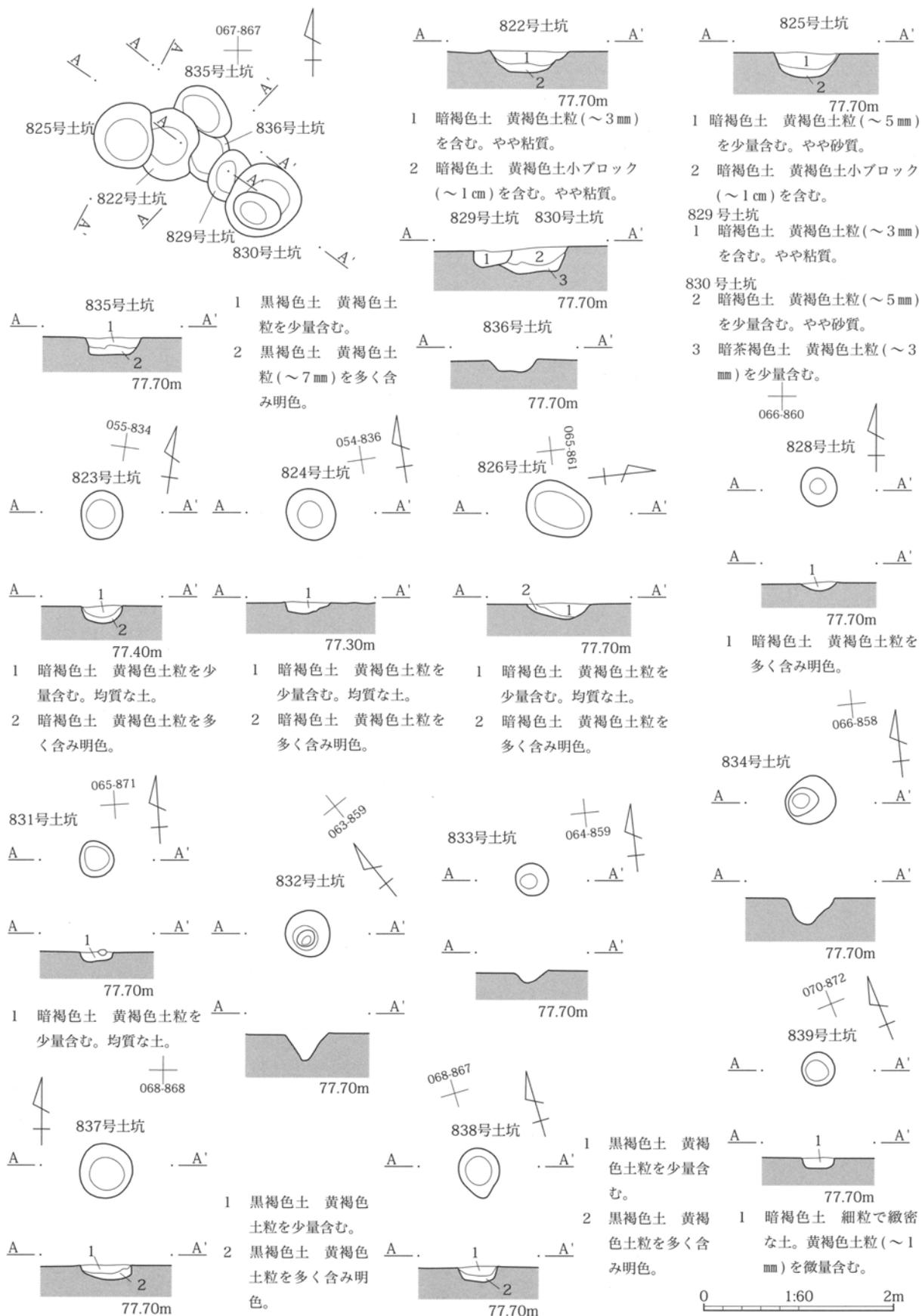
第123図 縄文時代土坑 2区(2)



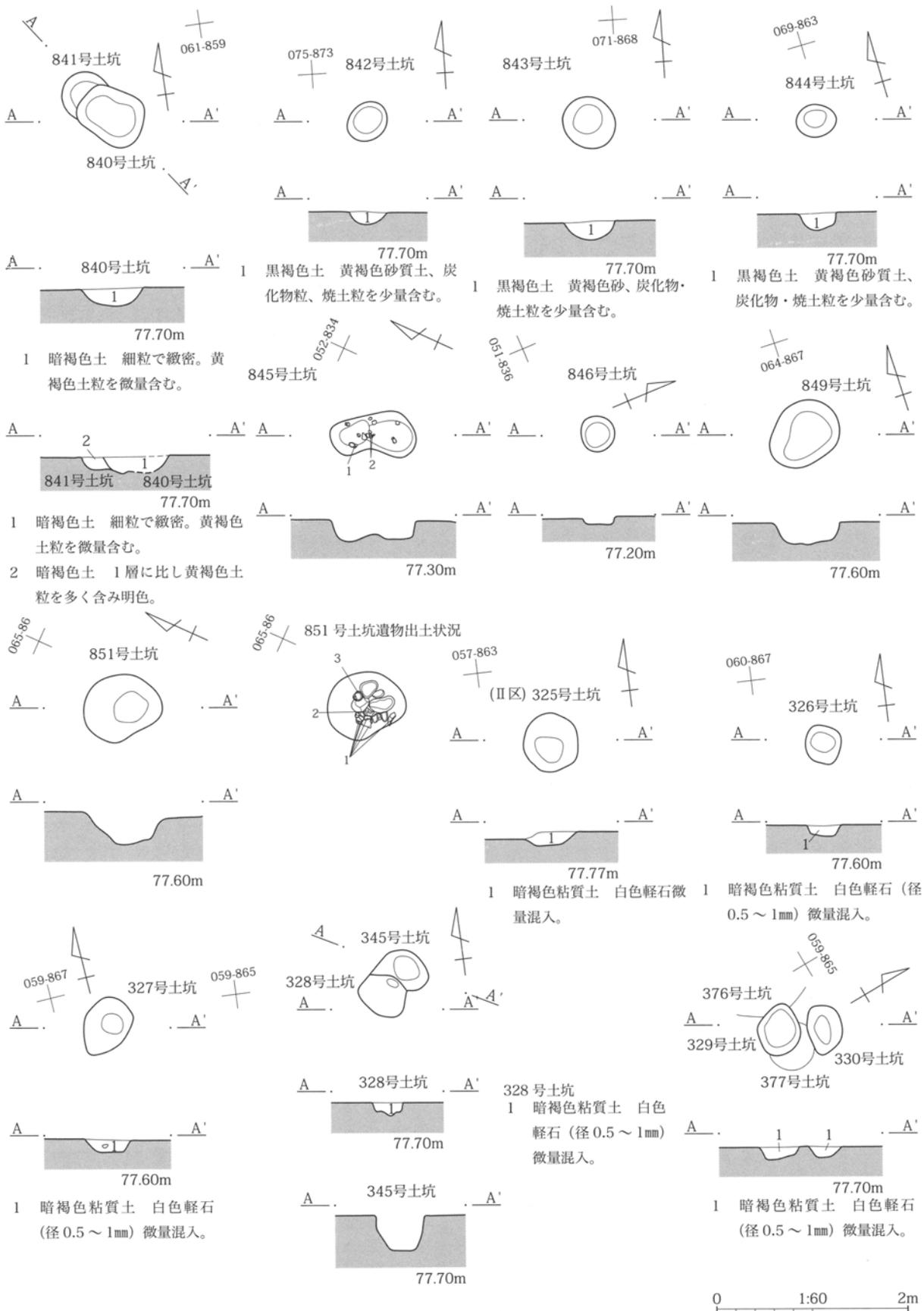
第125図 縄文時代土坑 2区(4)



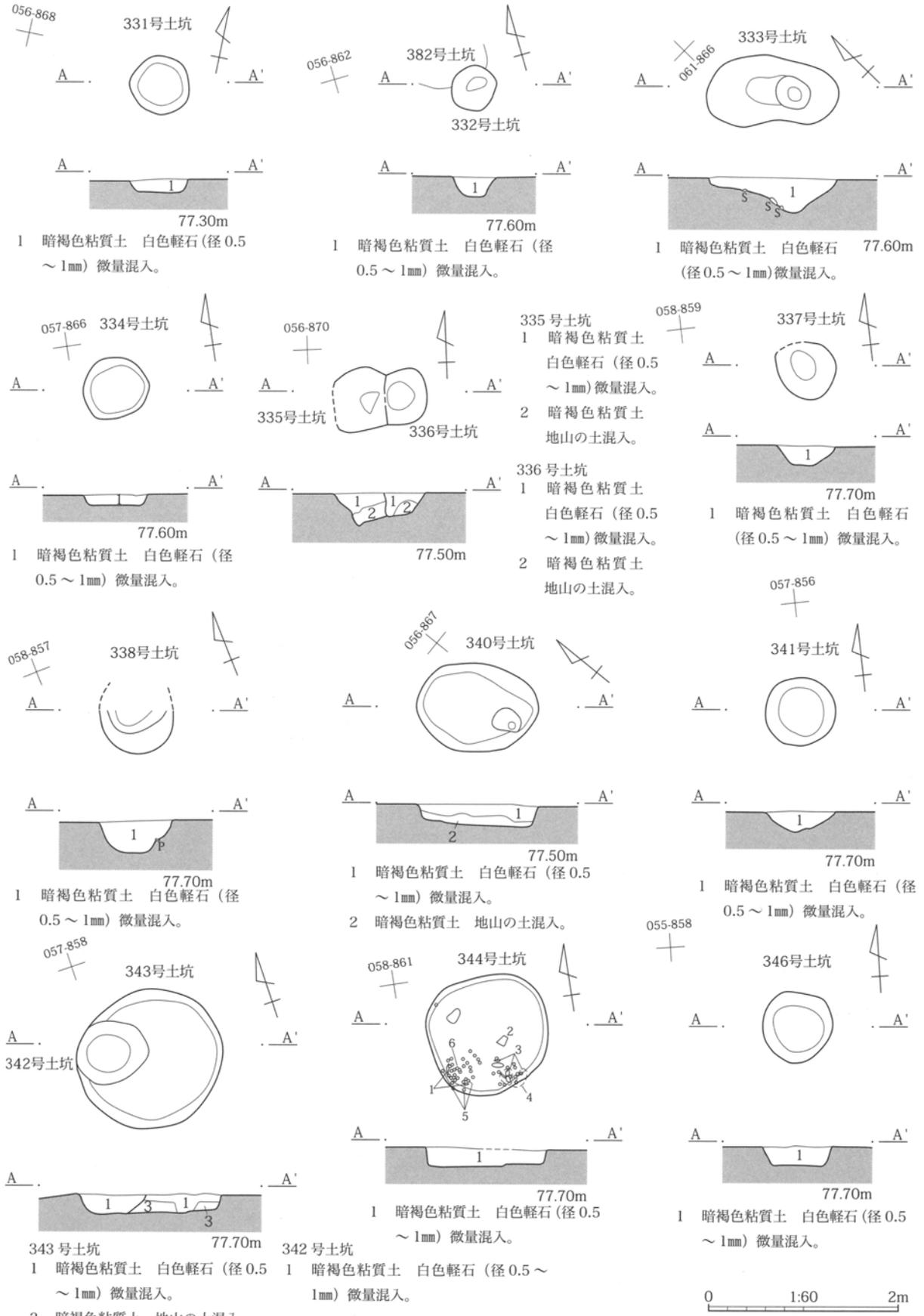
第127図 縄文時代土坑 2区(6)



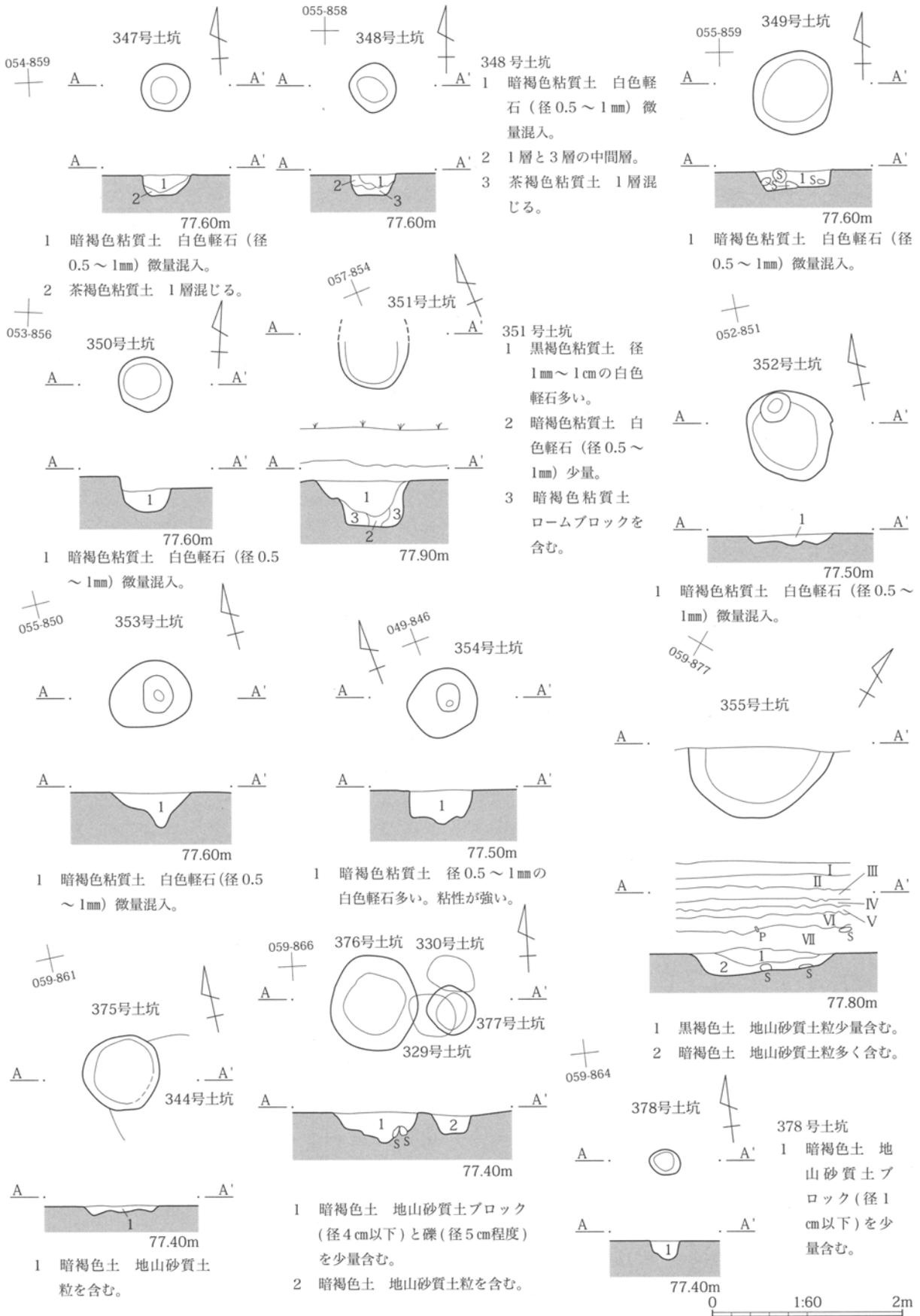
第128図 縄文時代土坑 2区(7)



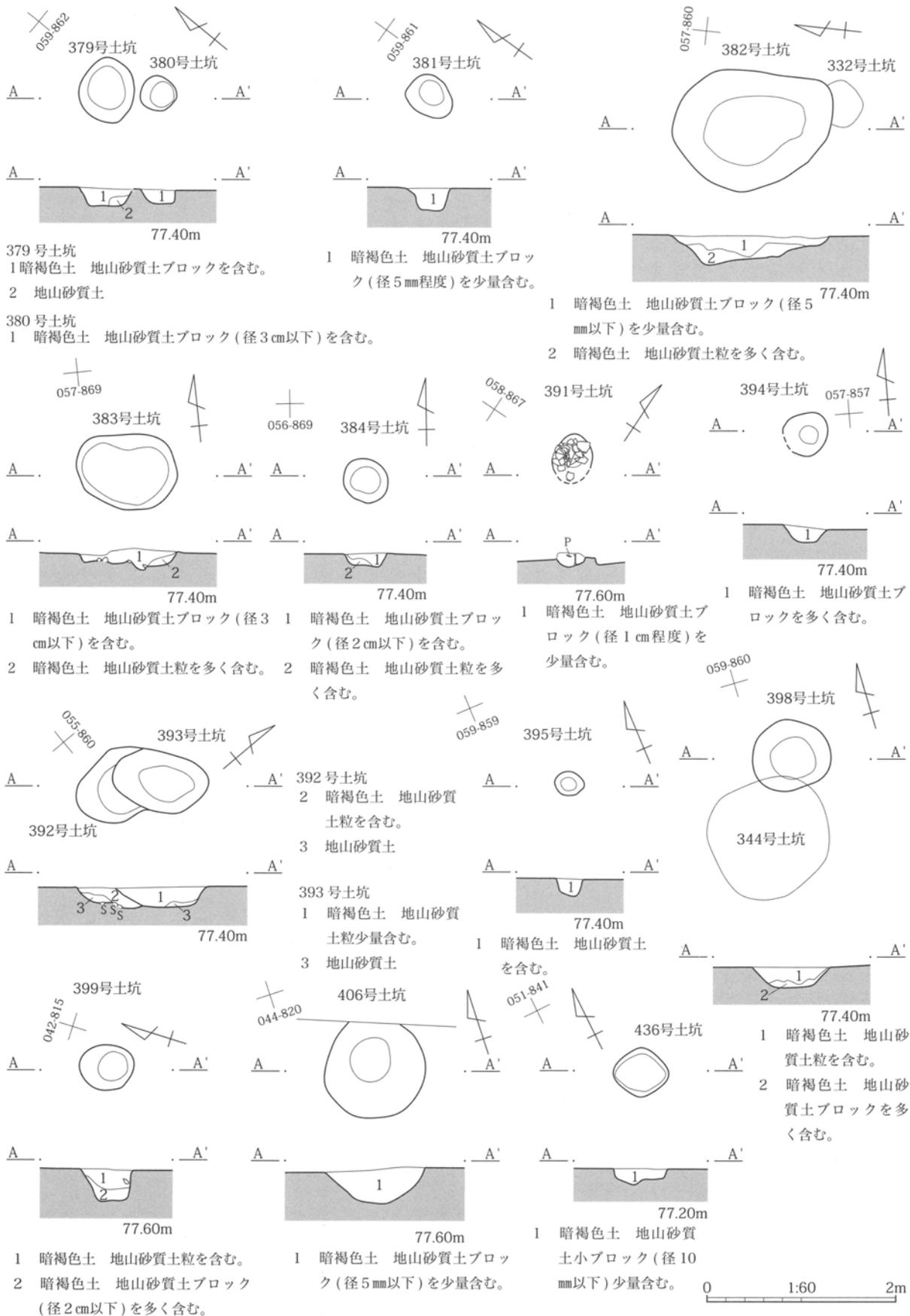
第 129 図 縄文時代土坑 2区(8)・II区(2)



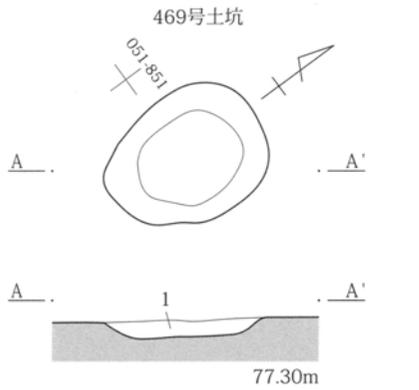
第130図 縄文時代土坑 II区(3)



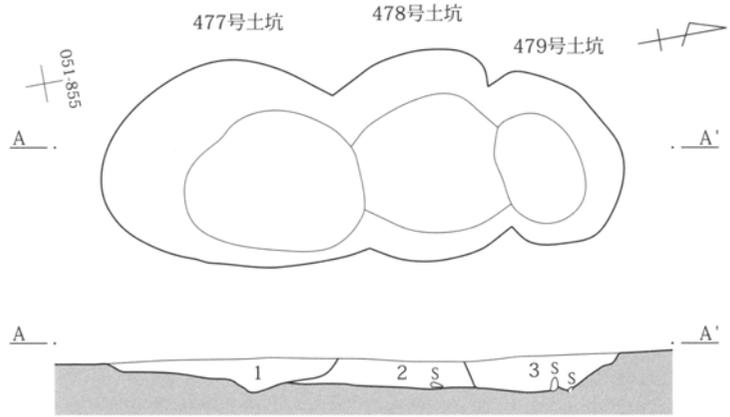
第131図 縄文時代土坑 II区(4)



第 132 図 縄文時代土坑 II区(5)



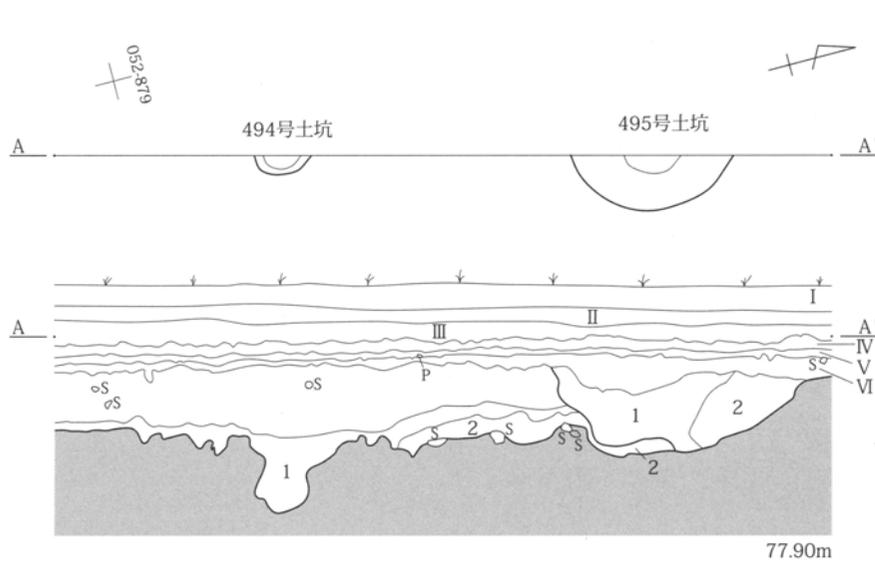
1 暗褐色土 地山砂質土ブロック(径10mm以下)少量含む。



477号土坑
1 暗褐色土 地山砂質土粒少量含む。

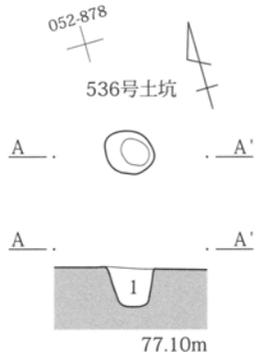
478号土坑
2 暗褐色土 地山砂質土粒、焼土、炭化物を少量含む。

479号土坑
3 暗褐色土 地山砂質土粒、炭化物を少量含む。



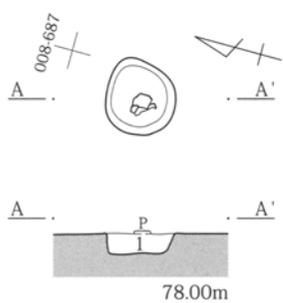
494・495号土坑

1 黒褐色土 地山黄色砂質土含む。
2 暗褐色土 地山黄色砂質土多く含む。径～5cmの円礫含む。

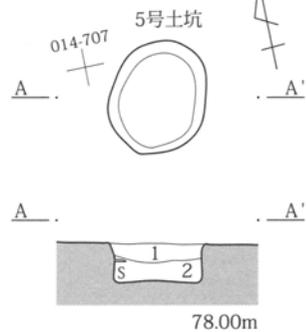


1 暗褐色土 地山砂質土を多く含む。～4cmの黄ブロック含む。

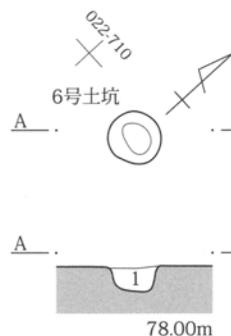
(3区) 4号土坑



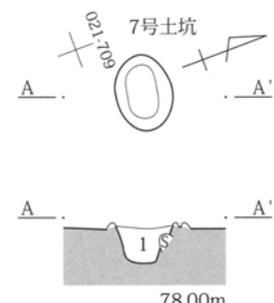
1 暗褐色粘土質 白色軽石(径0.1～0.5mm)、地山黄褐色砂質土少量混じる。



1 黒褐色粘質土 白色軽石(径0.1～2mm) 20%混入。
2 黒褐色粘質土 地山黄褐色砂質土粒(径1～2mm) 微量混入。



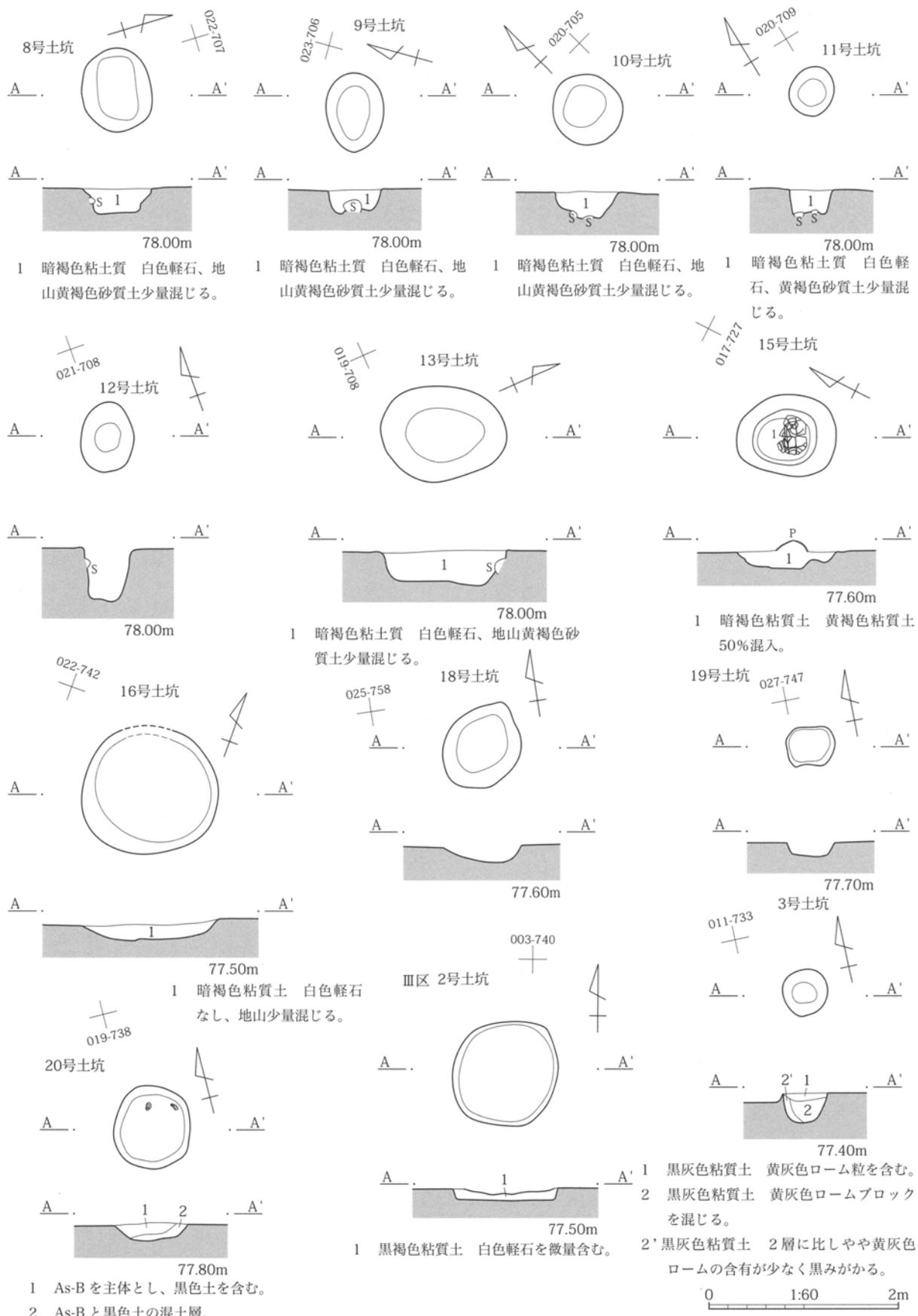
1 暗褐色粘土質 白色軽石、地山黄褐色砂質土少量混じる。



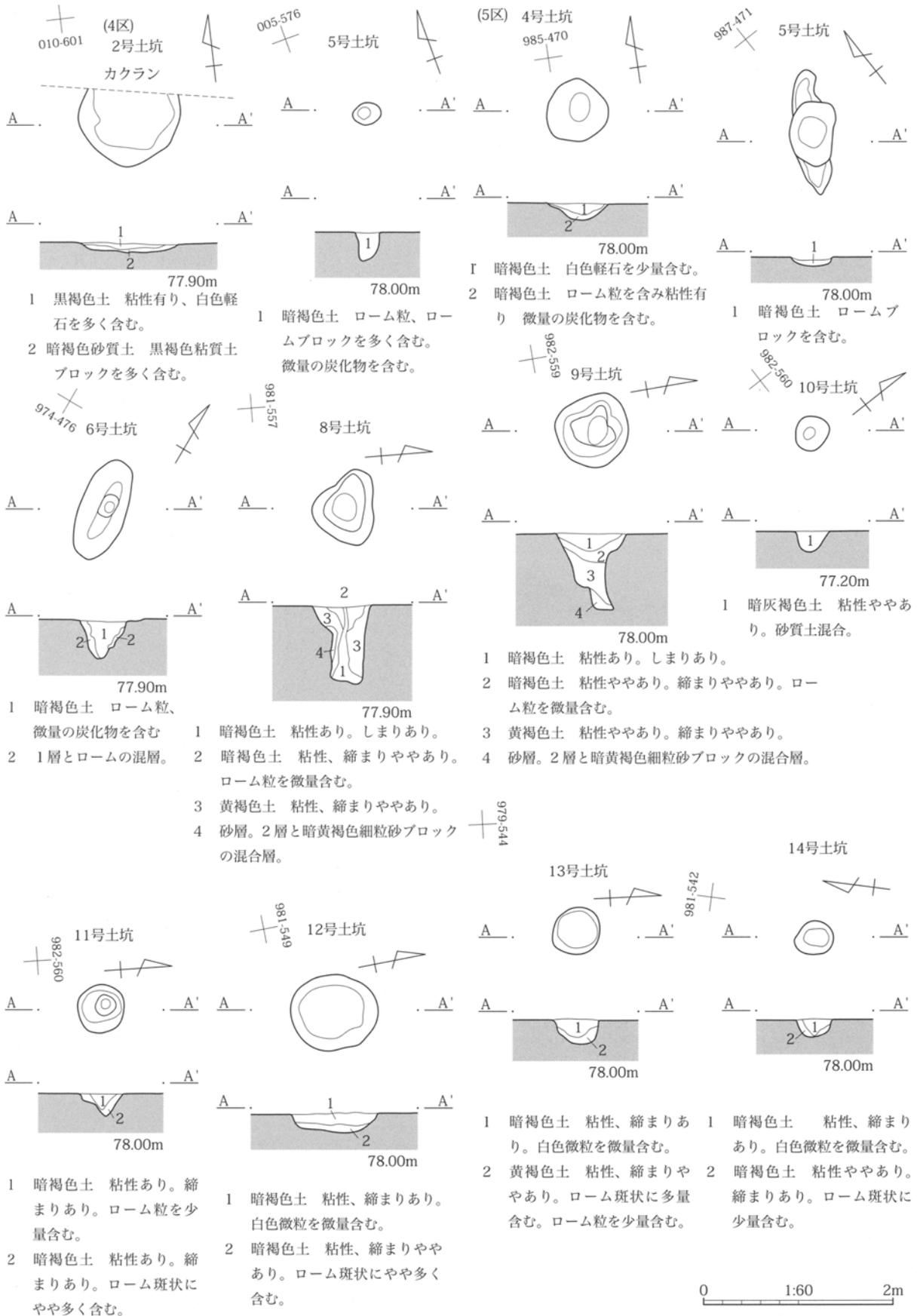
1 暗褐色粘土質 白色軽石、地山黄褐色砂質土少量混じる。



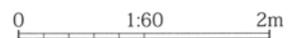
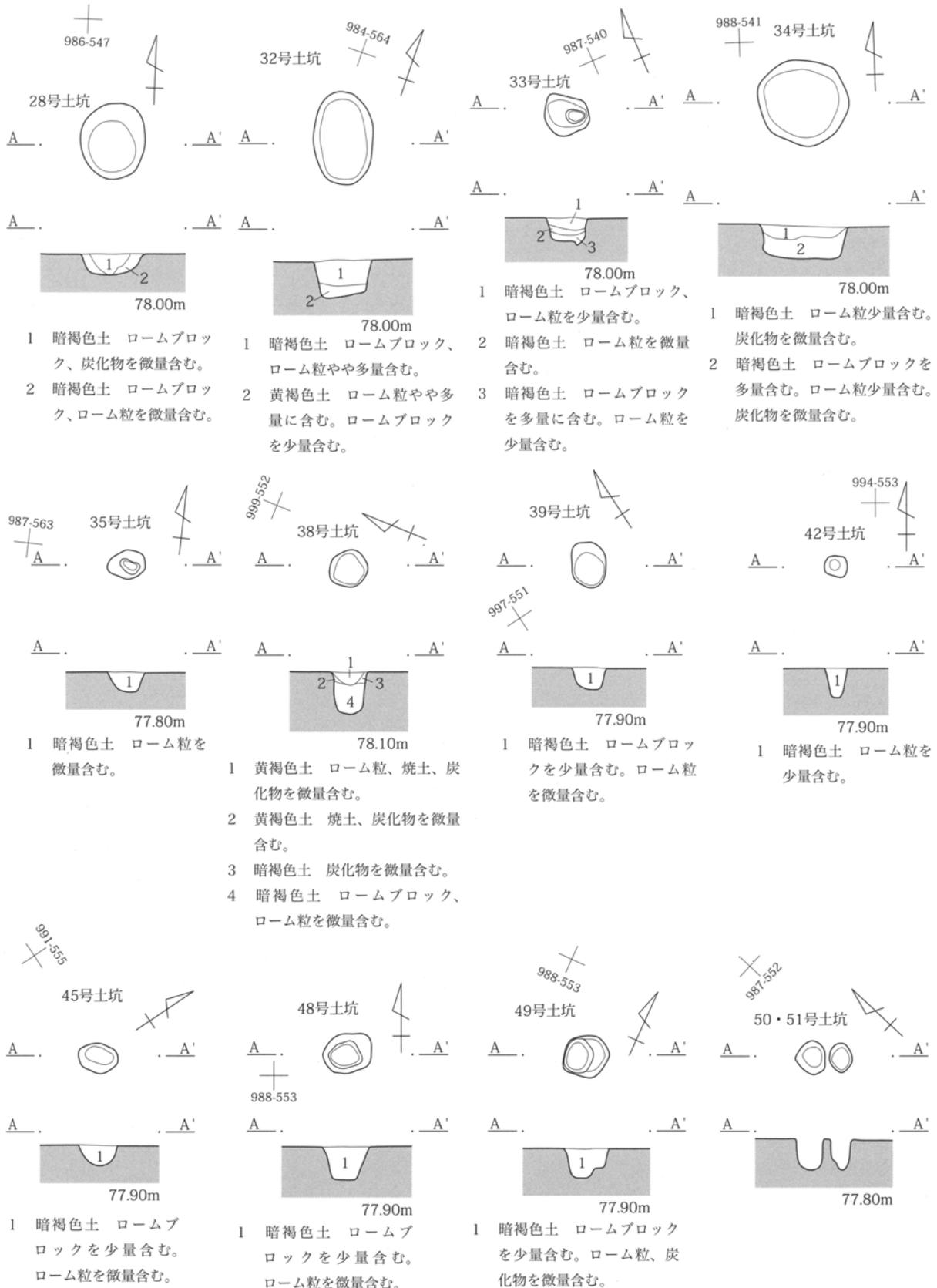
第134図 縄文時代土坑 II区(7)・3区(1)



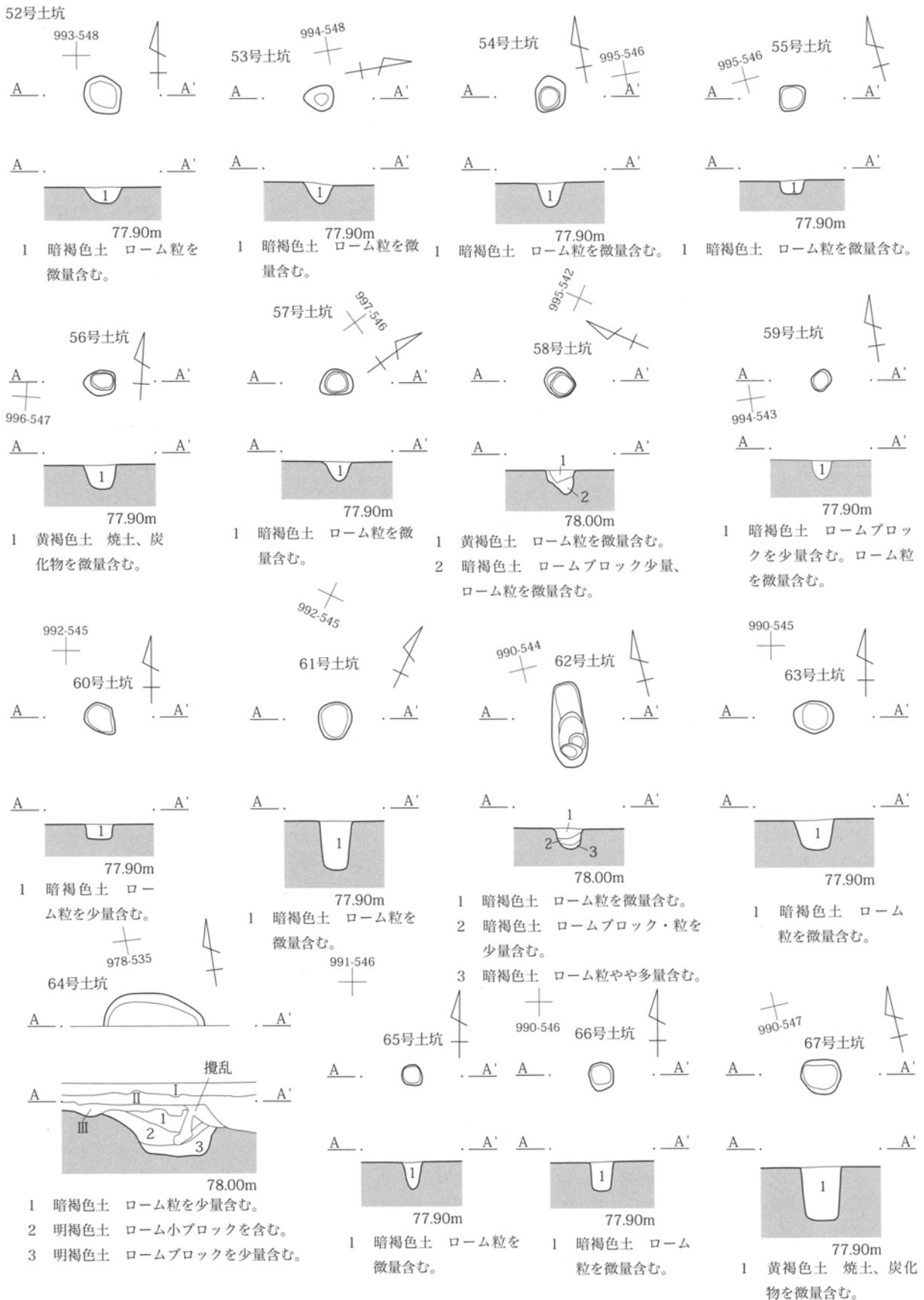
第 135 図 縄文時代土坑 3区(2)・III区



第136図 縄文時代土坑 4区・5区(1)

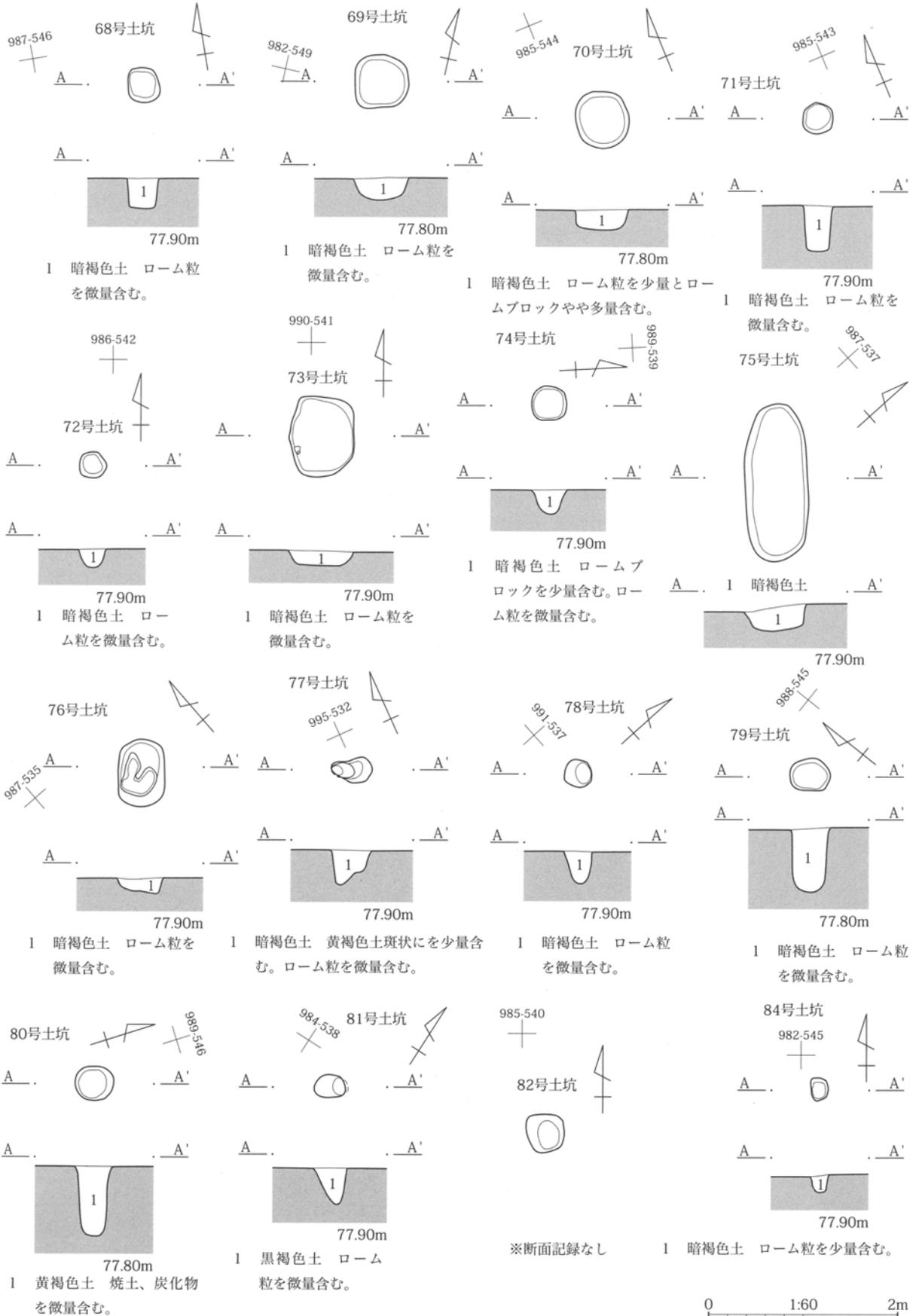


第 138 図 縄文時代土坑 5 区 (3)



第 139 図 縄文時代土坑 5 区 (4)

0 1:60 2m

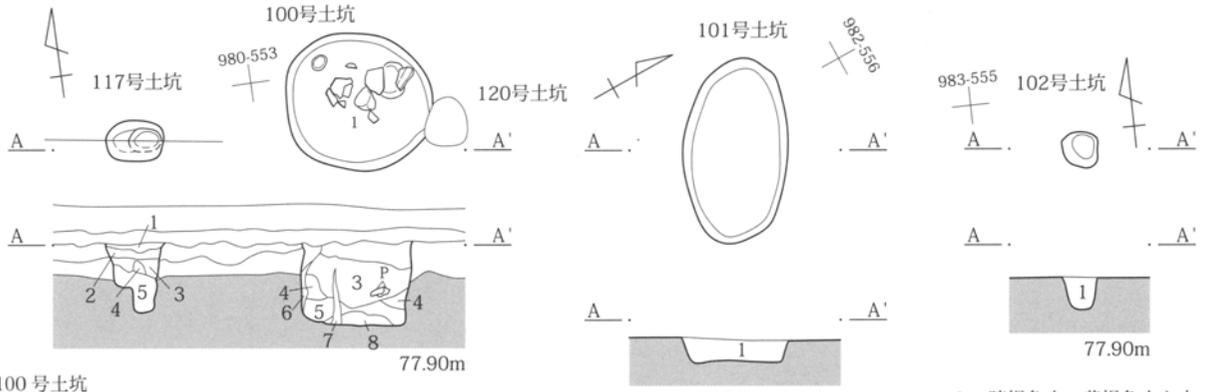


第 140 図 縄文時代土坑 5 区 (5)





第141図 縄文時代土坑 5区(6)

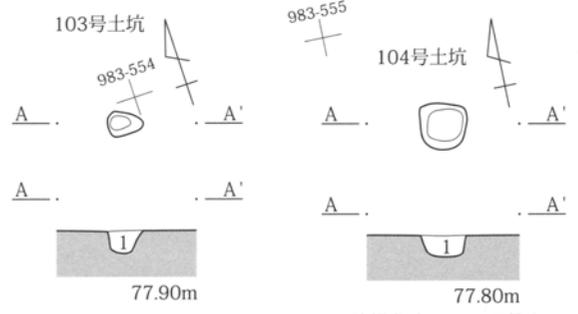


- 100号土坑
- 1 黄褐色土 ローム斑状にを微量含む。
 - 2 暗褐色土 ローム斑状にやや多量に含む。ローム粒を少量含む。
 - 3 暗褐色土 ロームやや多量に含む。
 - 4 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
 - 5 黒褐色土 ロームブロック多量に含む。ローム粒を微量含む。
 - 6 明灰褐色細粒砂。噴砂。
 - 7 1層と8層の混合層。地割れ。
 - 8 黒褐色土 白色軽石粒を含む。

- 117号土坑
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。
 - 2 黄褐色土 ローム斑状に少量含む。
 - 3 暗褐色土 縮まり強し。白色微粒を少量含む。
 - 4 黄褐色土 ロームを多量含む。灰褐色土、暗褐色土を少量含む。
 - 5 黒褐色土 白色軽石粒を少量含む。

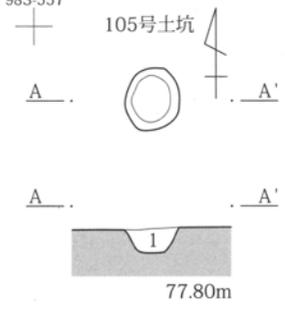
- 1 暗褐色土 黄褐色土斑状にを少量、ローム粒を微量含む。

- 1 暗褐色土 黄褐色土を少量、ローム粒を微量含む。

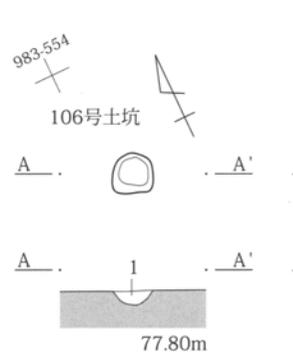


- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。

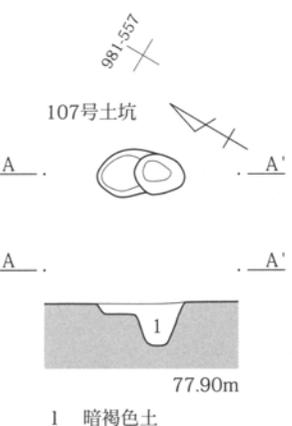
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



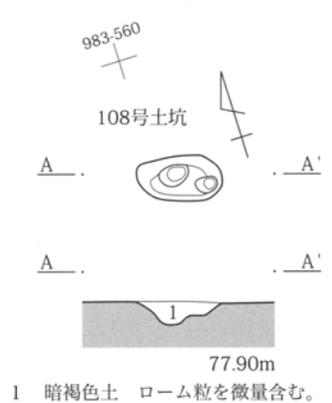
- 1 暗褐色土 黄褐色土を少量、ローム粒を微量含む。



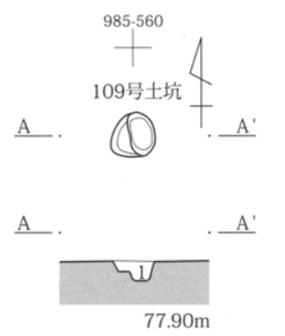
- 1 黄褐色土 焼土、炭化物を微量含む。



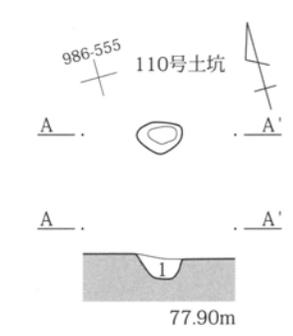
- 1 暗褐色土



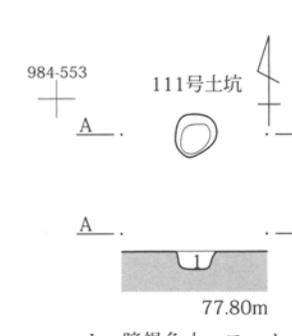
- 1 暗褐色土 ローム粒を微量含む。



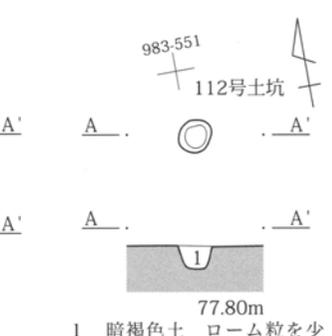
- 1 黄褐色土 ローム粒を微量含む。



- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



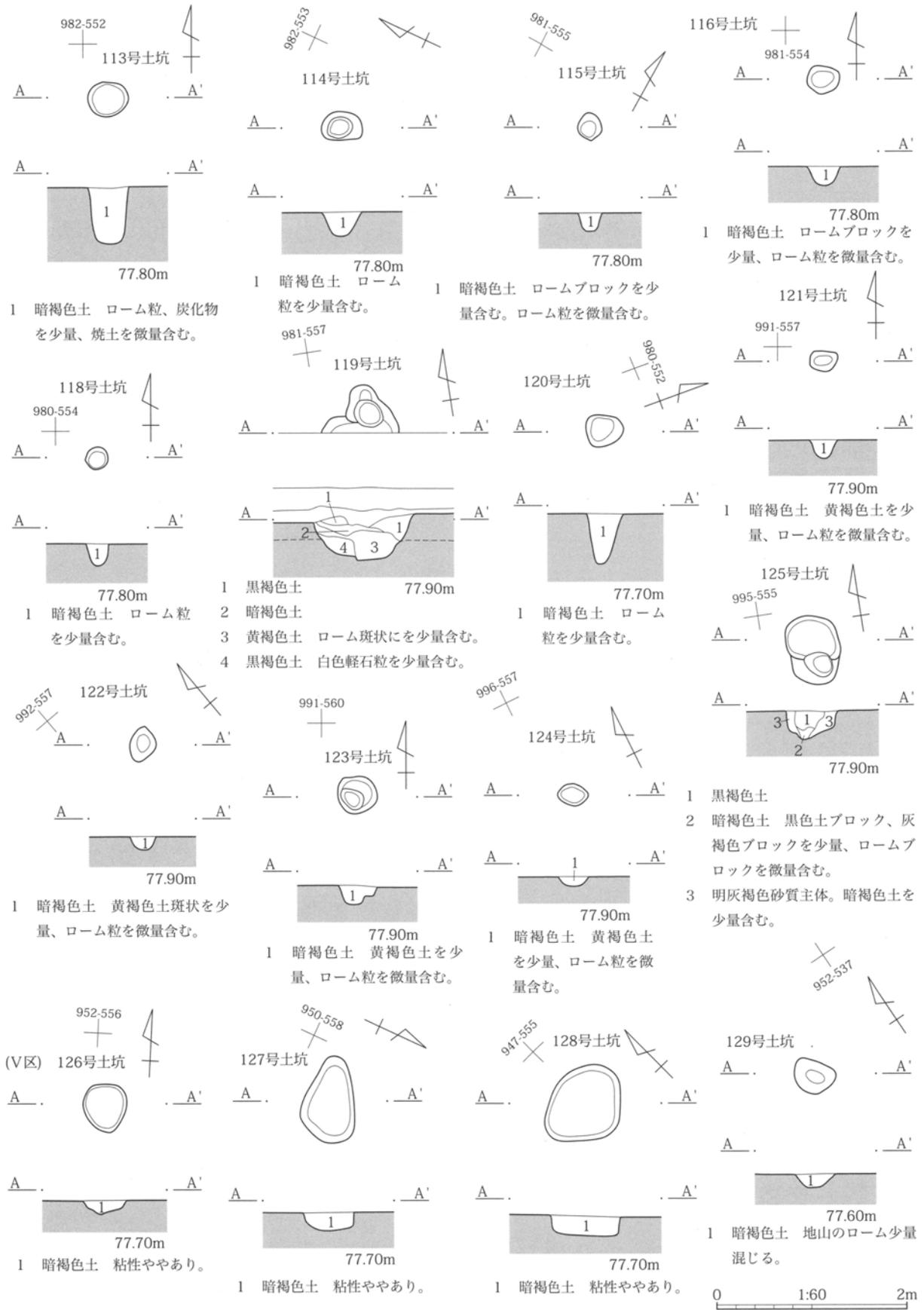
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



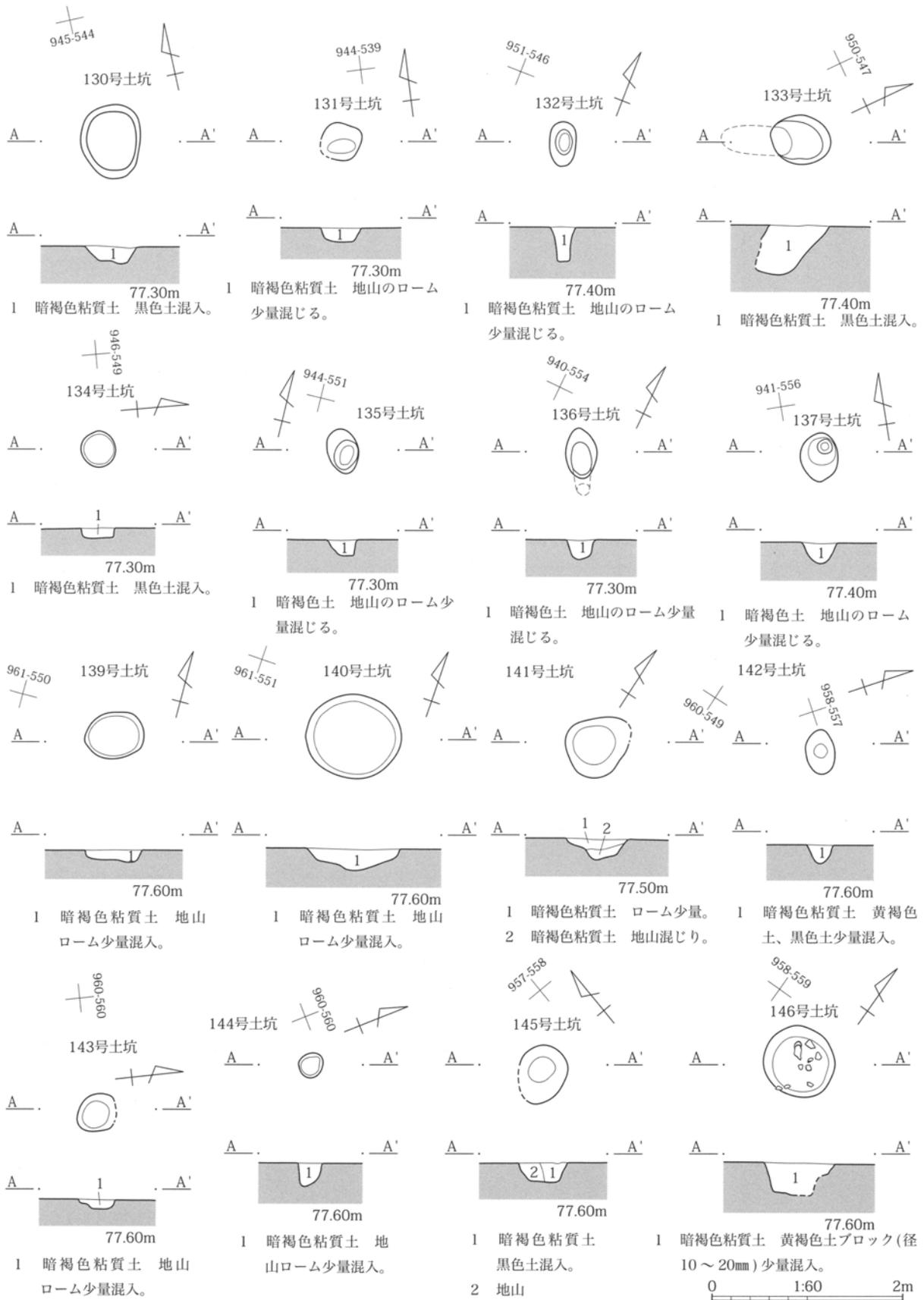
- 1 暗褐色土 ローム粒を少量含む。



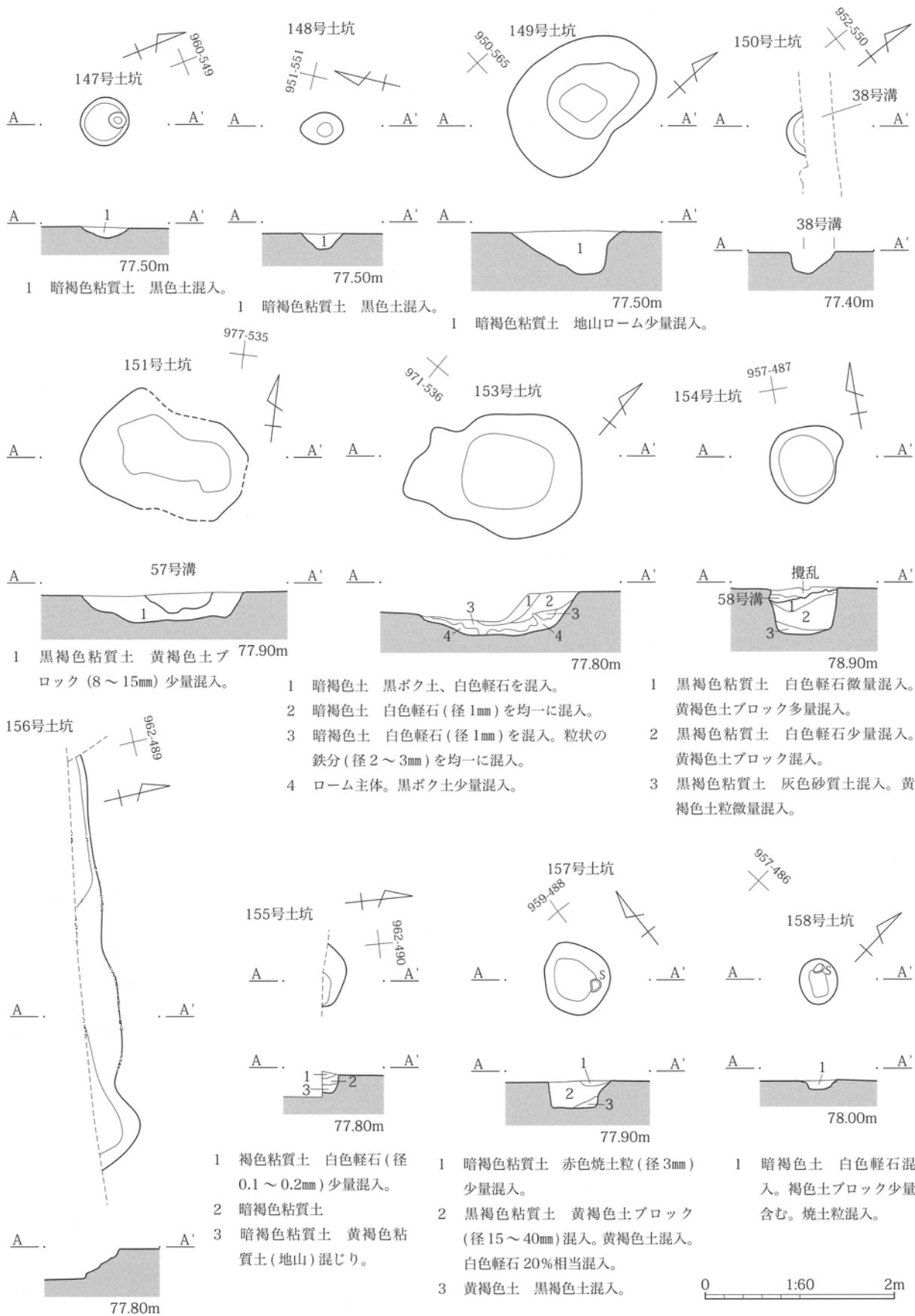
第 142 図 縄文時代土坑 5 区 (7)



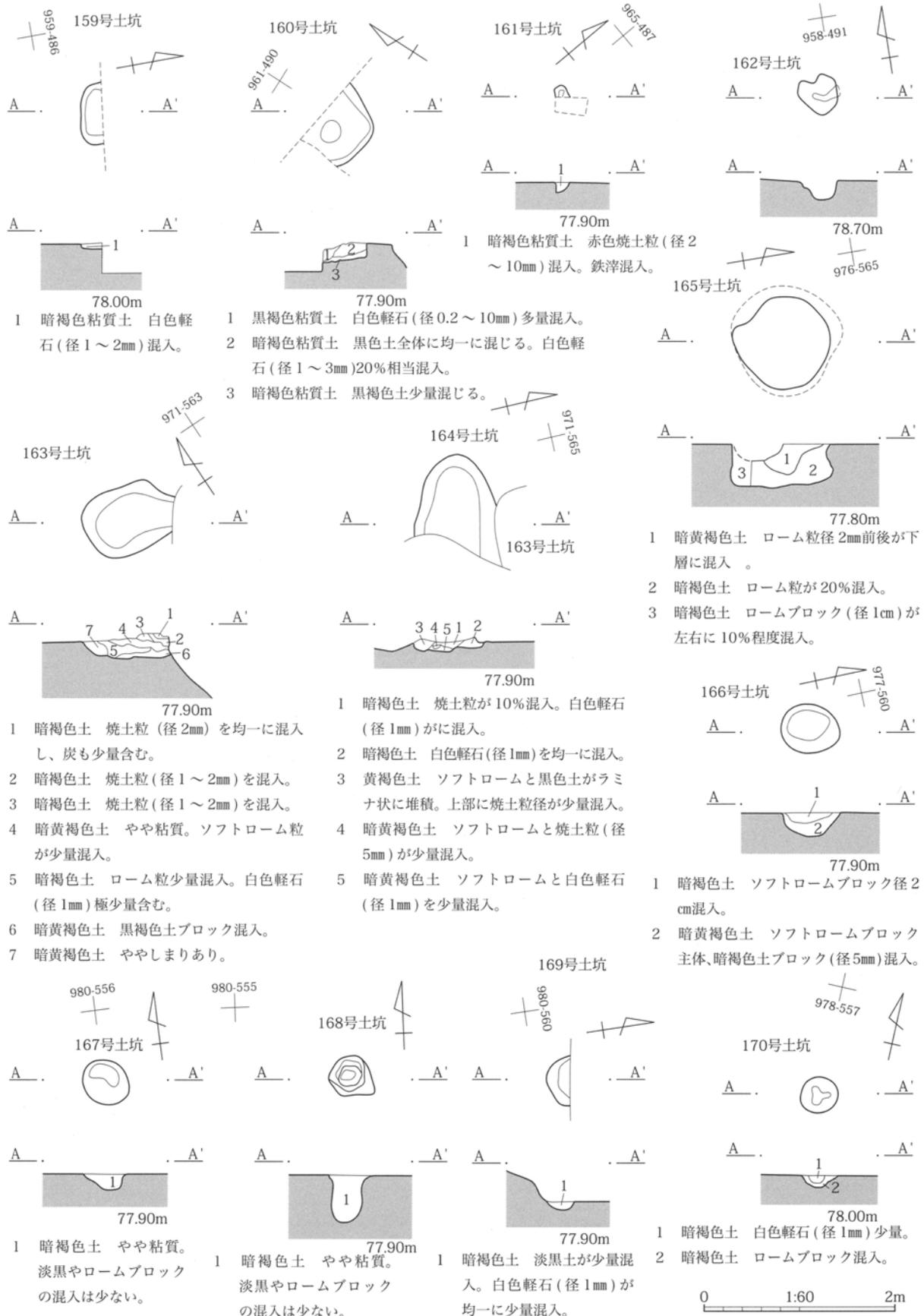
第 143 図 縄文時代土坑 5 区 (8)・V 区 (1)



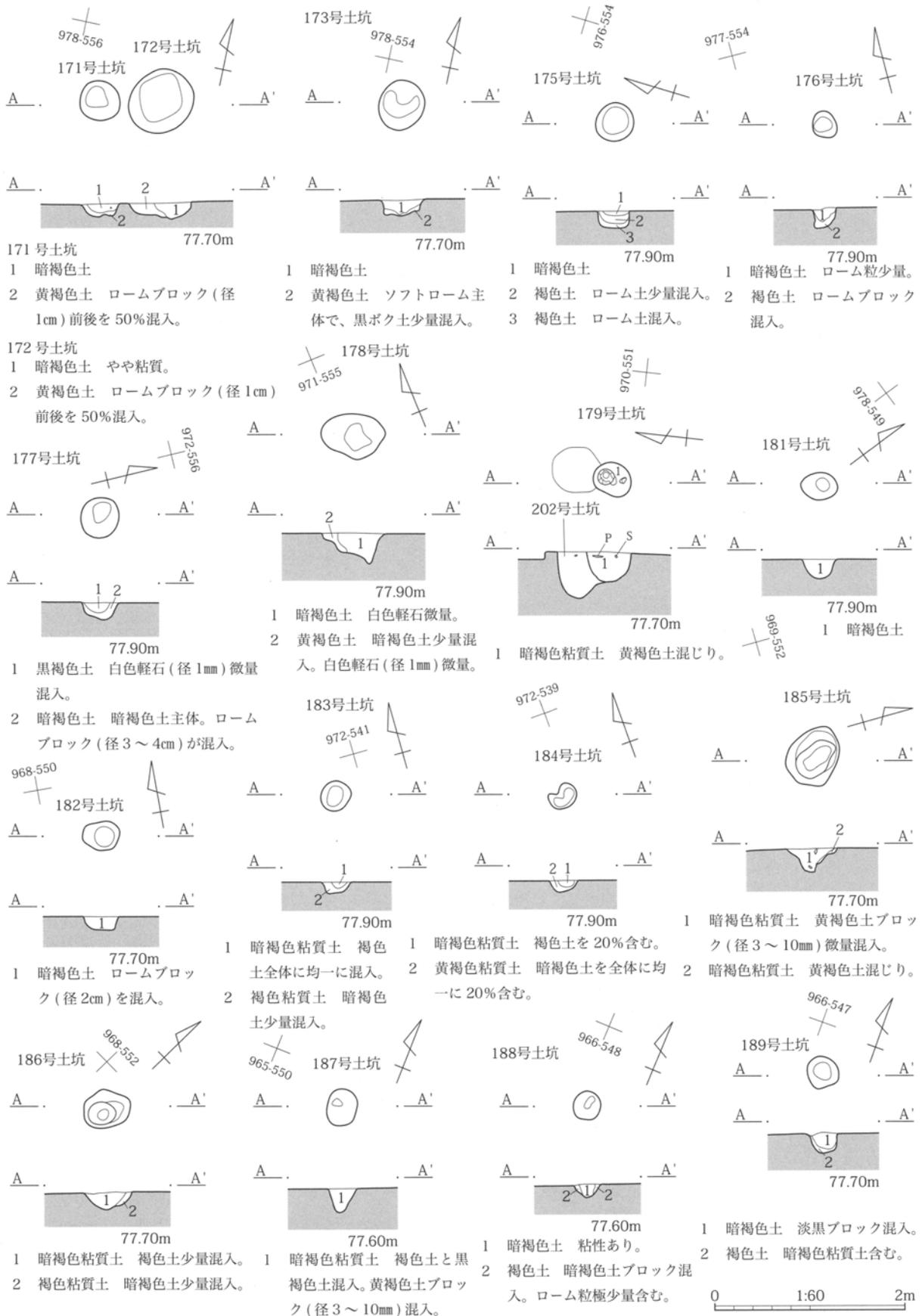
第 144 図 縄文時代土坑 V区 (2)



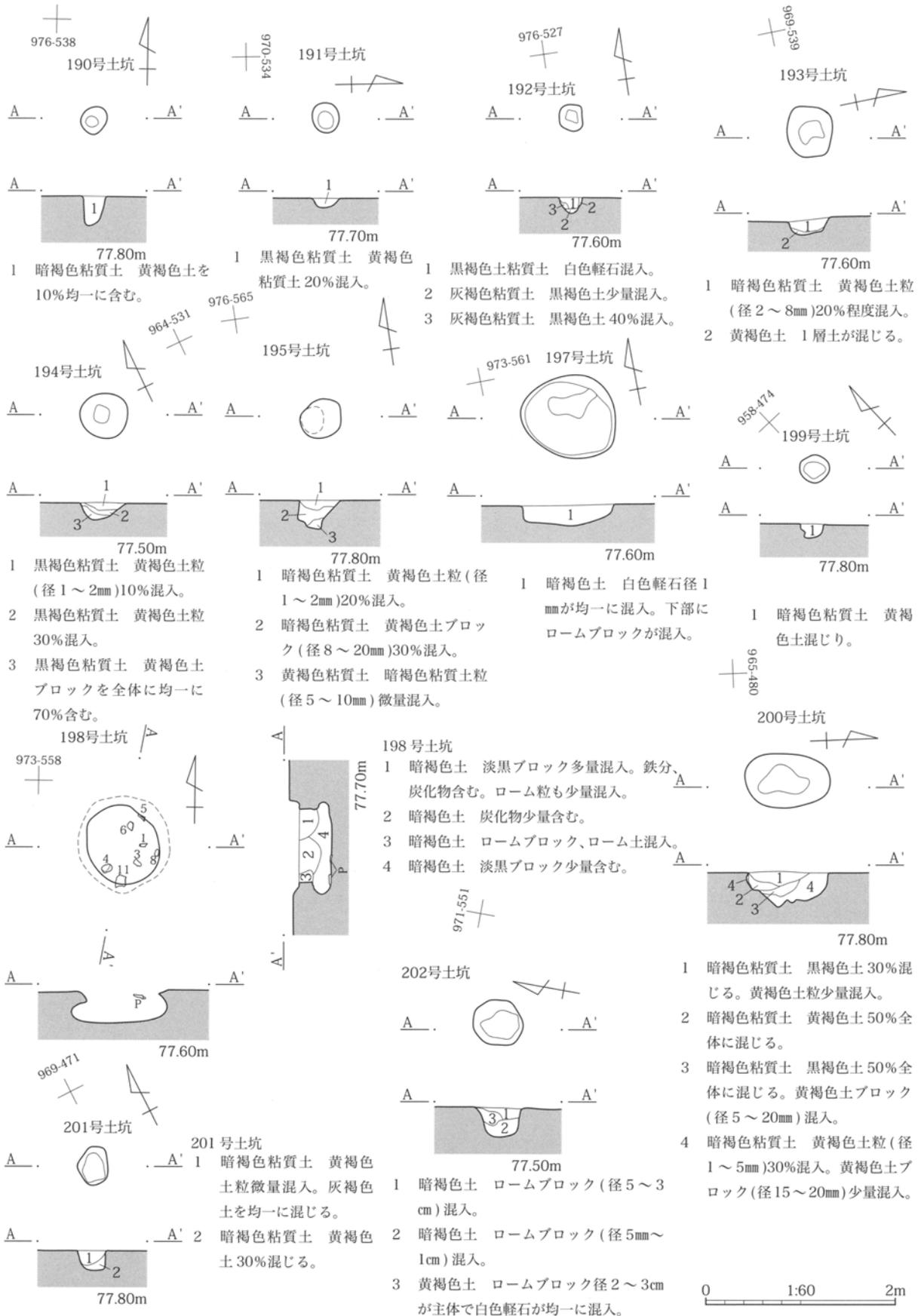
第145図 縄文時代土坑 V区(3)



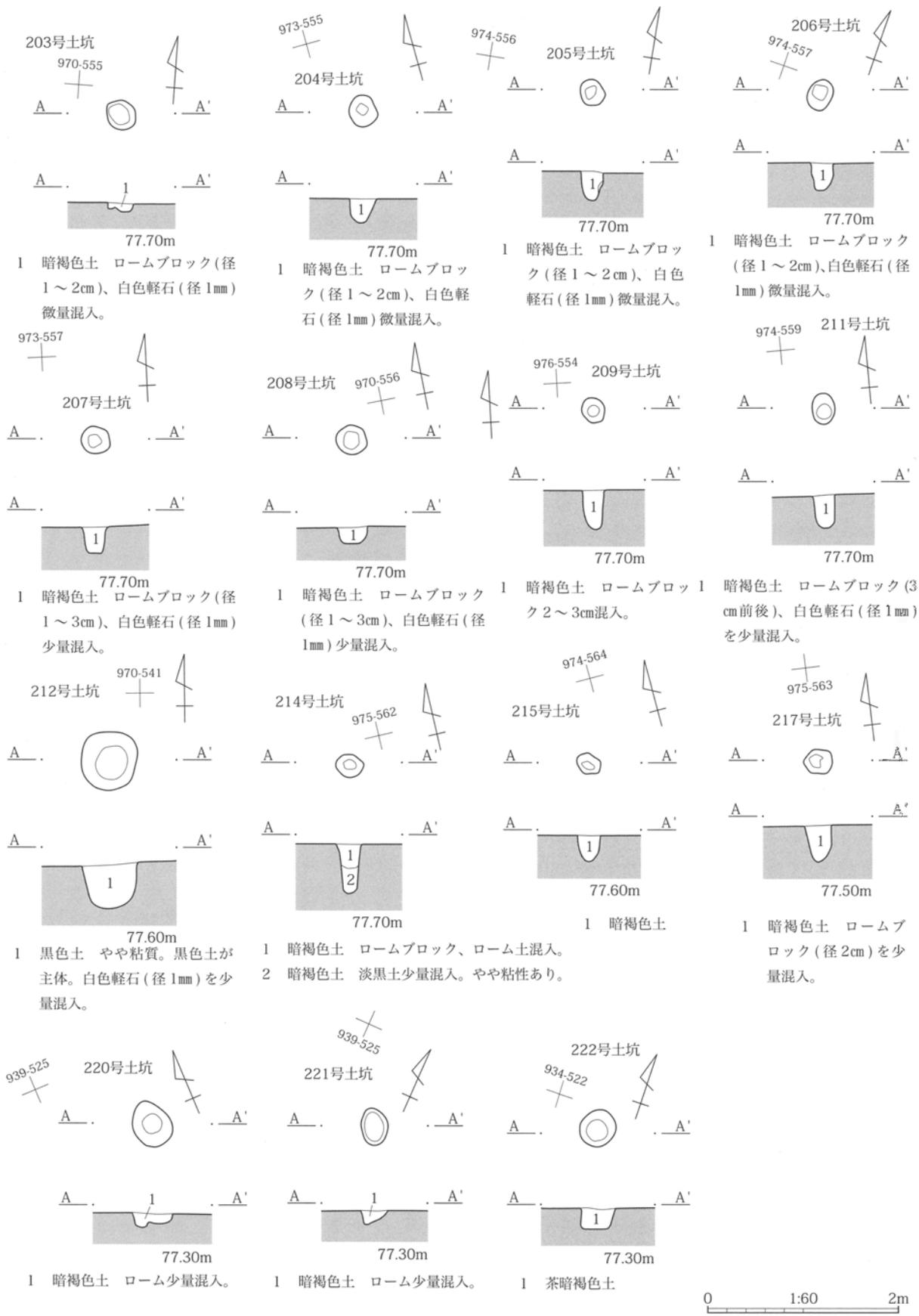
第 146 図 縄文時代土坑 V区(4)



第147図 縄文時代土坑 V区(5)



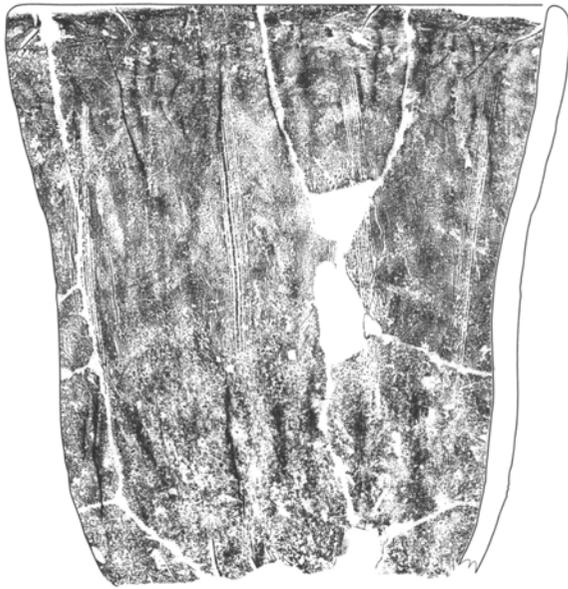
第148図 縄文時代土坑 V区(6)



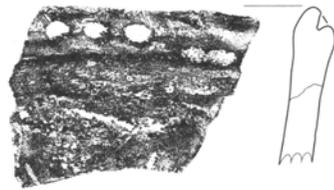
第149図 縄文時代土坑 V区(7)



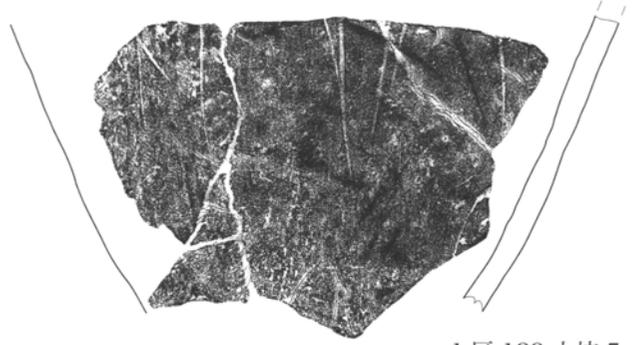
第 150 图 縄文時代土坑出土遺物 (I)



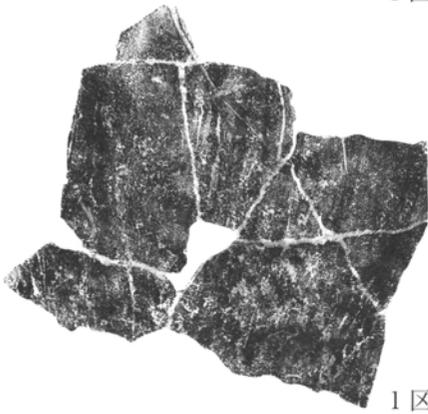
1区123土坑3



1区123土坑4



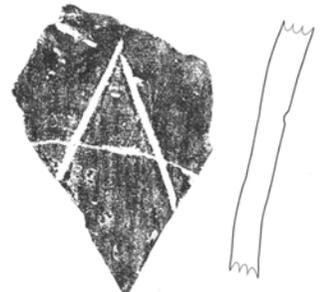
1区123土坑5



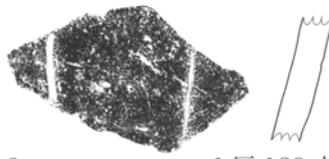
1区123土坑6



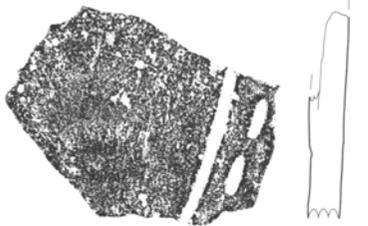
1区123土坑7



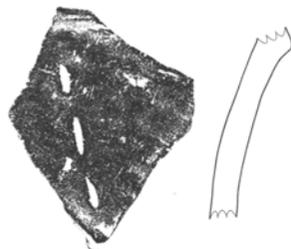
1区123土坑9



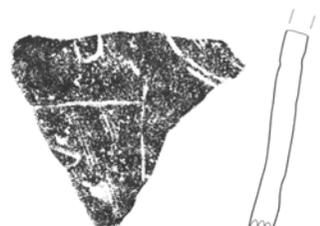
1区123土坑8



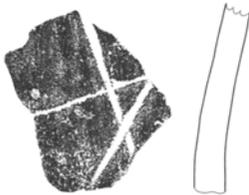
1区123土坑10



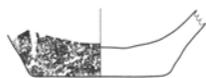
1区123土坑11



1区123土坑12



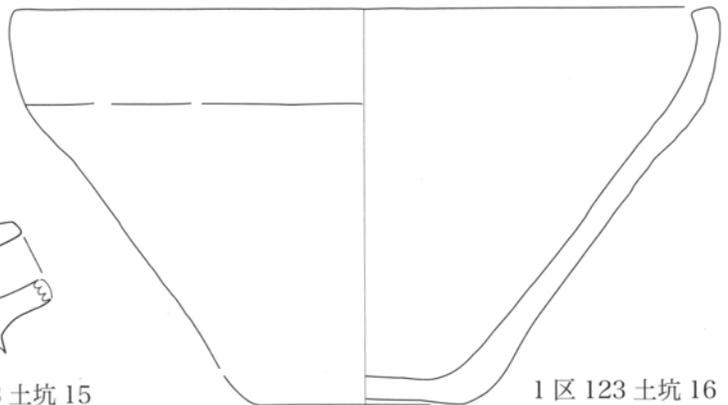
1区123土坑13



1区123土坑14



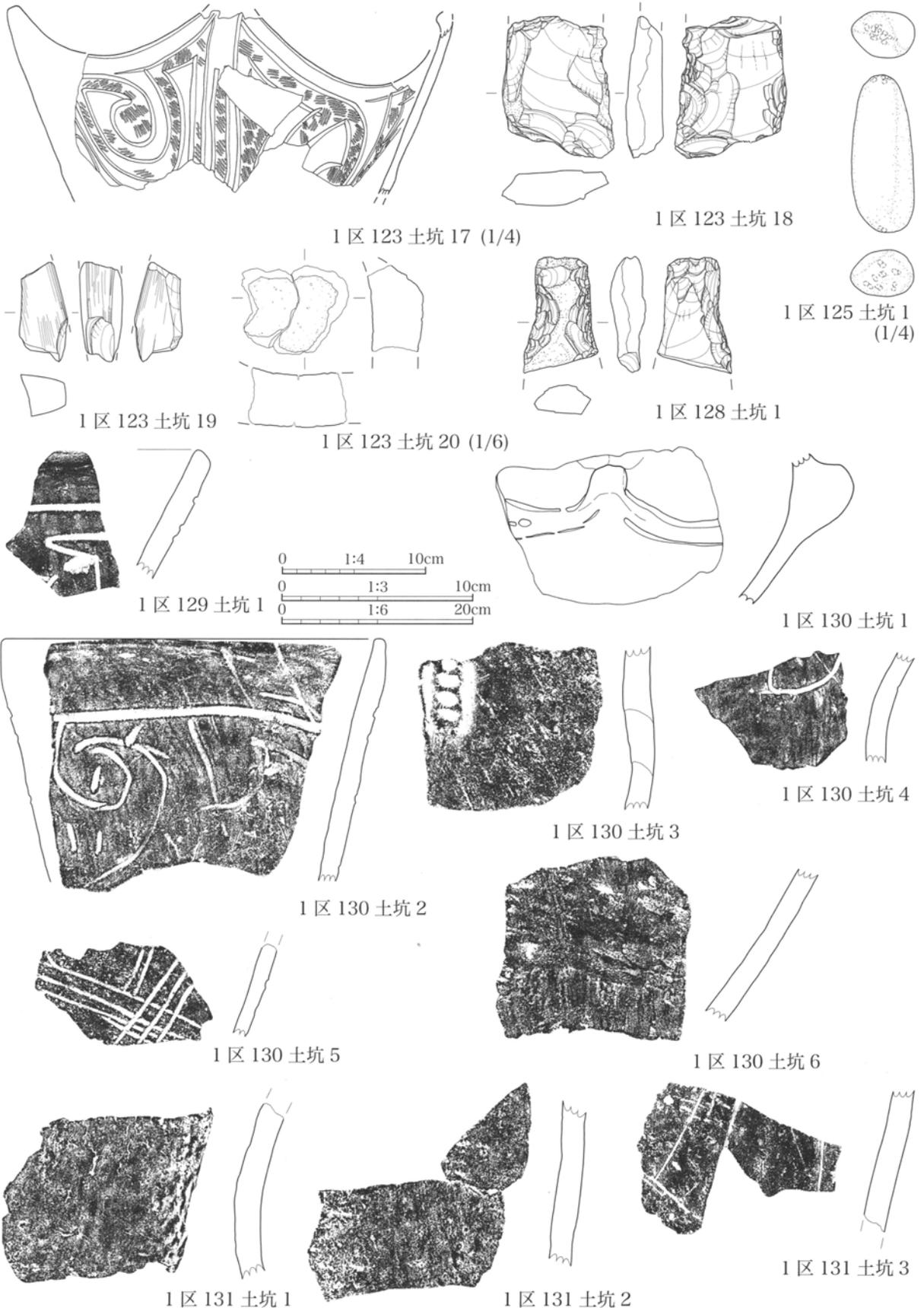
1区123土坑15



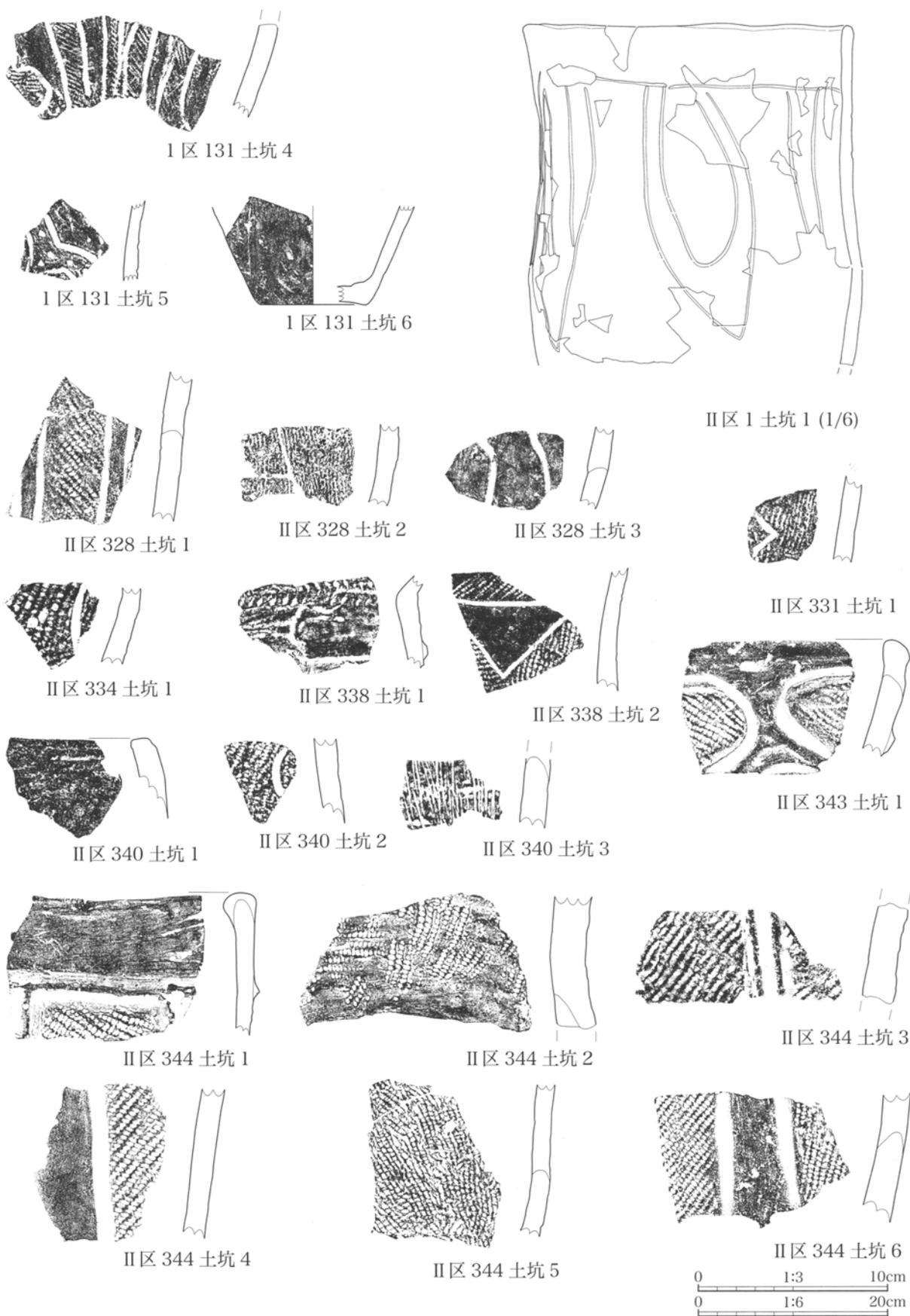
1区123土坑16

0 1:3 10cm

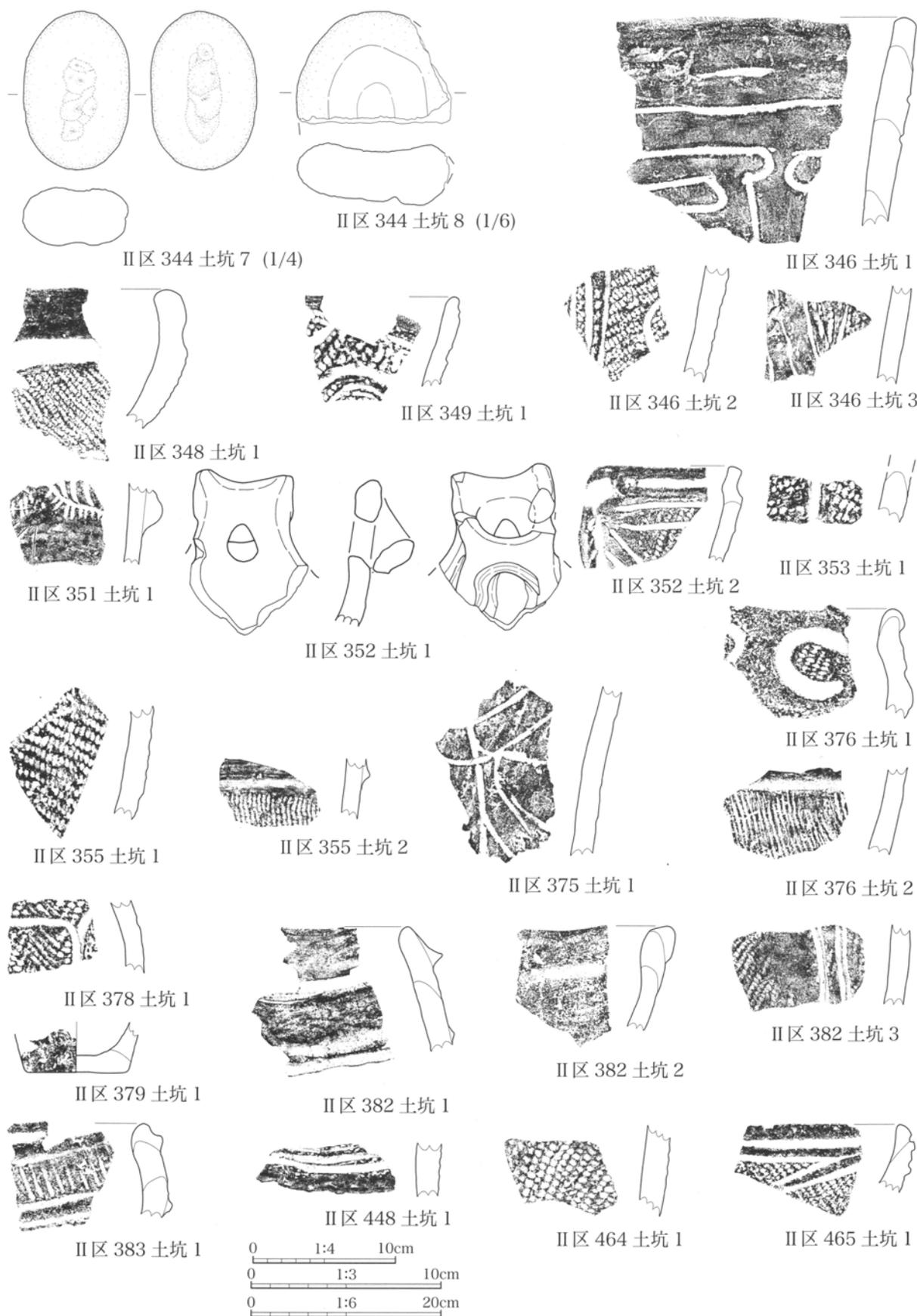
第151图 縄文時代土坑出土遺物(2)



第 152 图 縄文時代土坑出土遺物 (3)



第 153 图 縄文時代土坑出土遺物 (4)



第 154 图 縄文時代土坑出土遺物 (5)



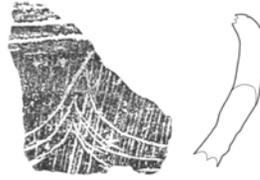
II区 391 土坑 1
(1/4)



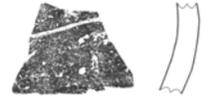
2区 750 土坑 1



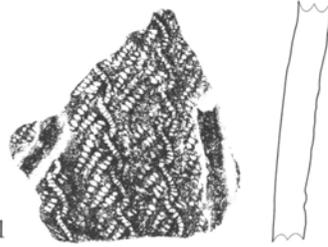
2区 752 土坑 1



2区 750 土坑 2



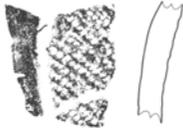
2区 753 土坑 1



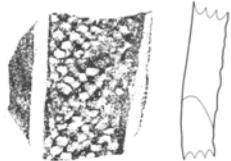
2区 750 土坑 3



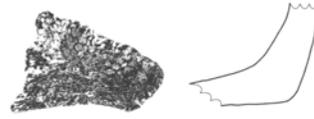
2区 755 土坑 1



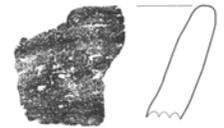
II区 391 土坑 2



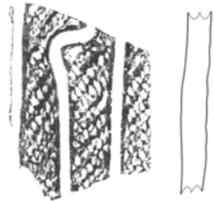
II区 391 土坑 3



2区 750 土坑 4



2区 756 土坑 1



2区 754 土坑 1



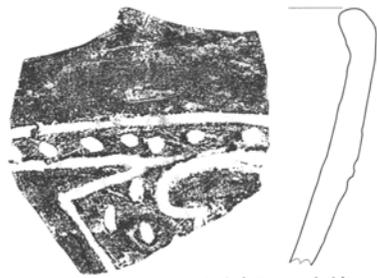
2区 754 土坑 2



2区 754 土坑 3



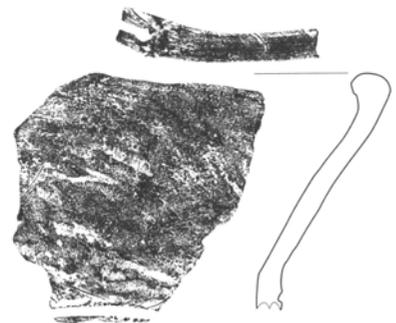
2区 756 土坑 2



2区 761 土坑 1



2区 761 土坑 2



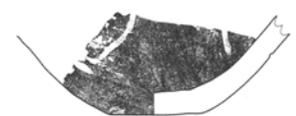
2区 761 土坑 3



2区 761 土坑 4



2区 761 土坑 5

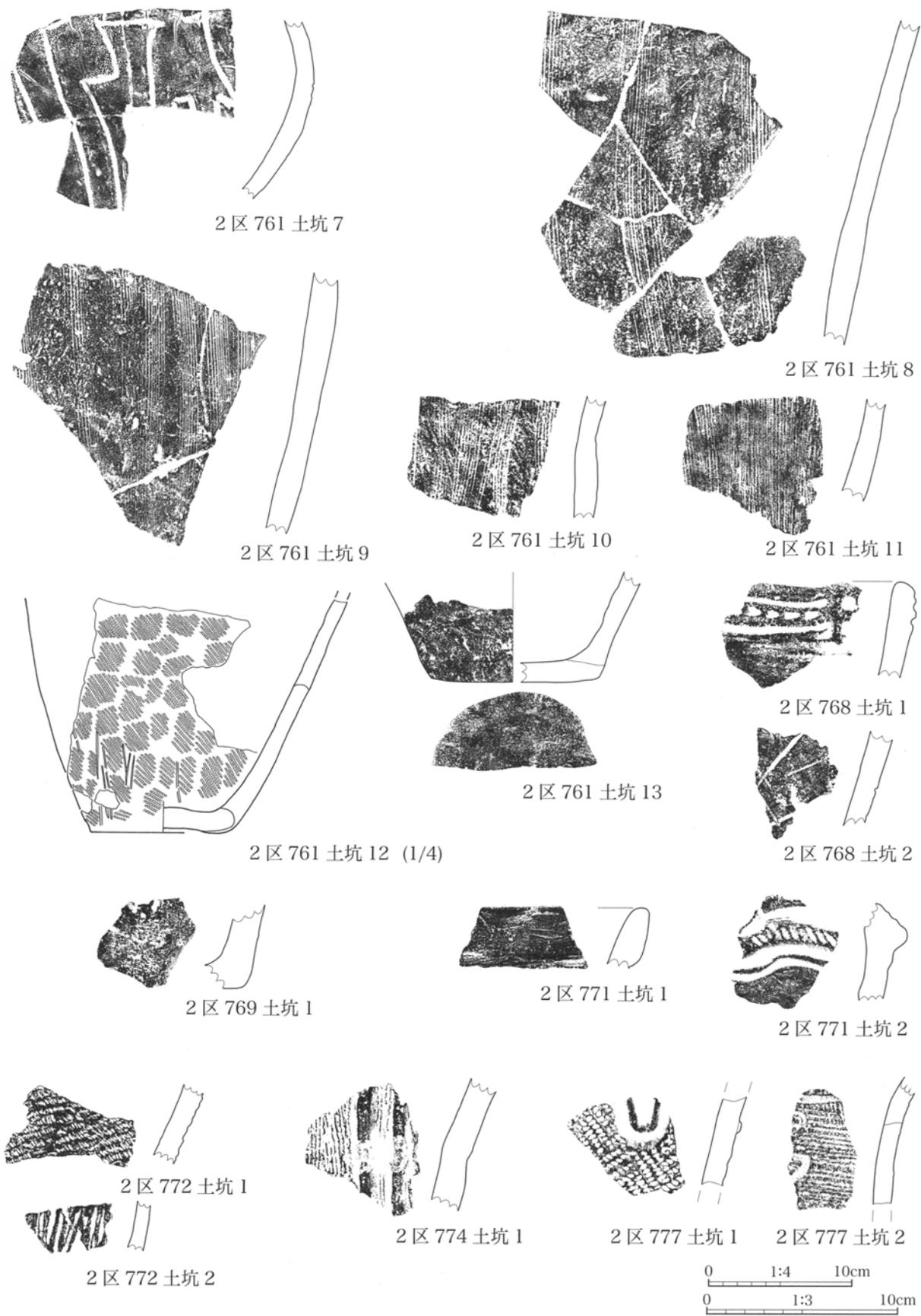


2区 761 土坑 6

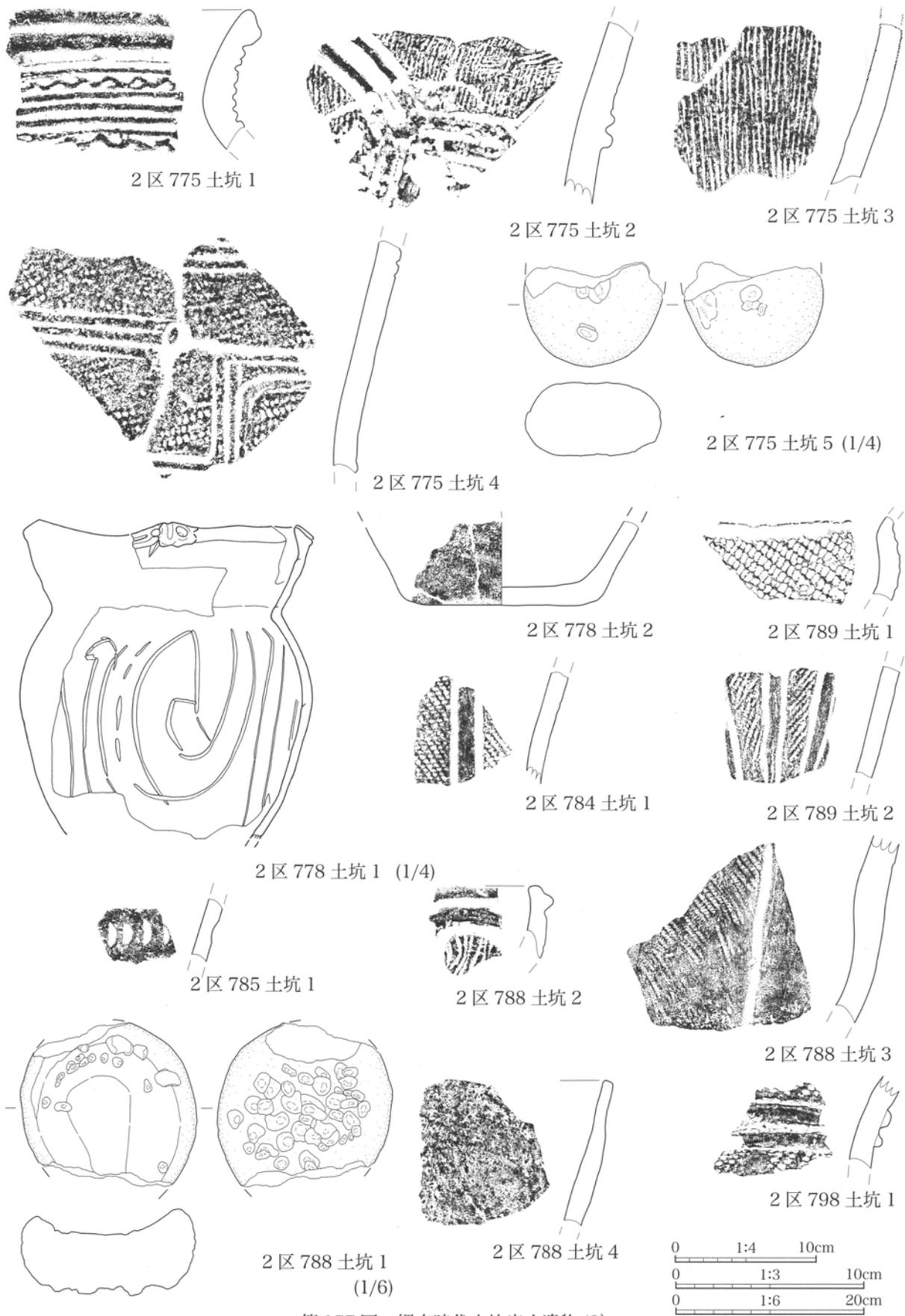
0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第 155 图 縄文時代土坑出土遺物 (6)



第 156 图 縄文時代土坑出土遺物 (7)



2区 775 土坑 1

2区 775 土坑 2

2区 775 土坑 3

2区 775 土坑 4

2区 775 土坑 5 (1/4)

2区 778 土坑 2

2区 789 土坑 1

2区 784 土坑 1

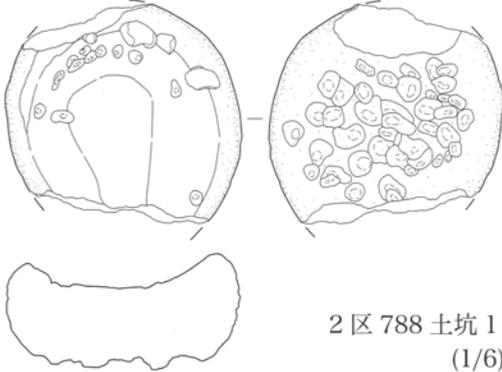
2区 789 土坑 2

2区 778 土坑 1 (1/4)

2区 785 土坑 1

2区 788 土坑 2

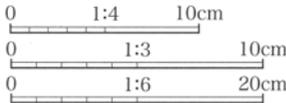
2区 788 土坑 3



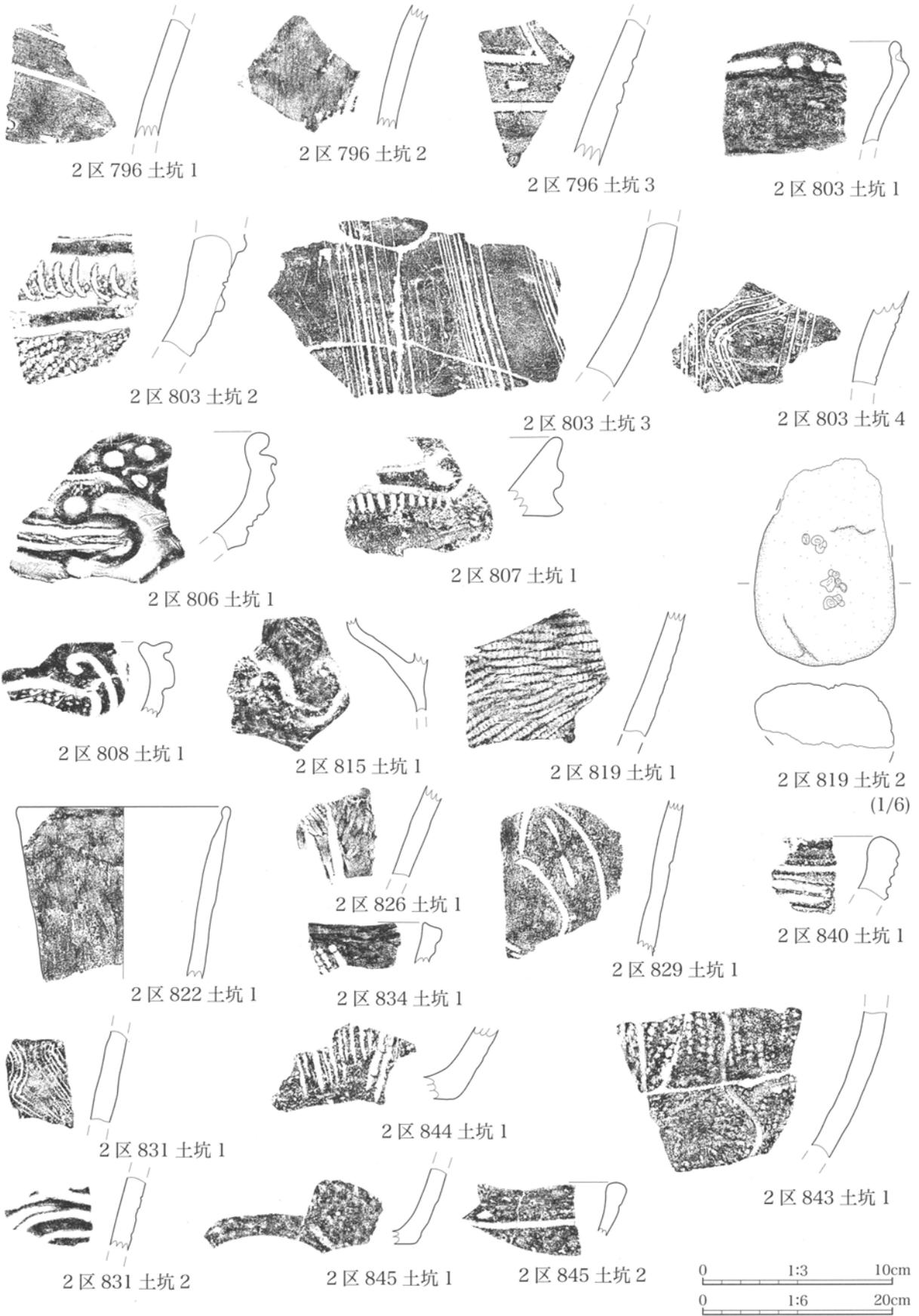
2区 788 土坑 1 (1/6)

2区 788 土坑 4

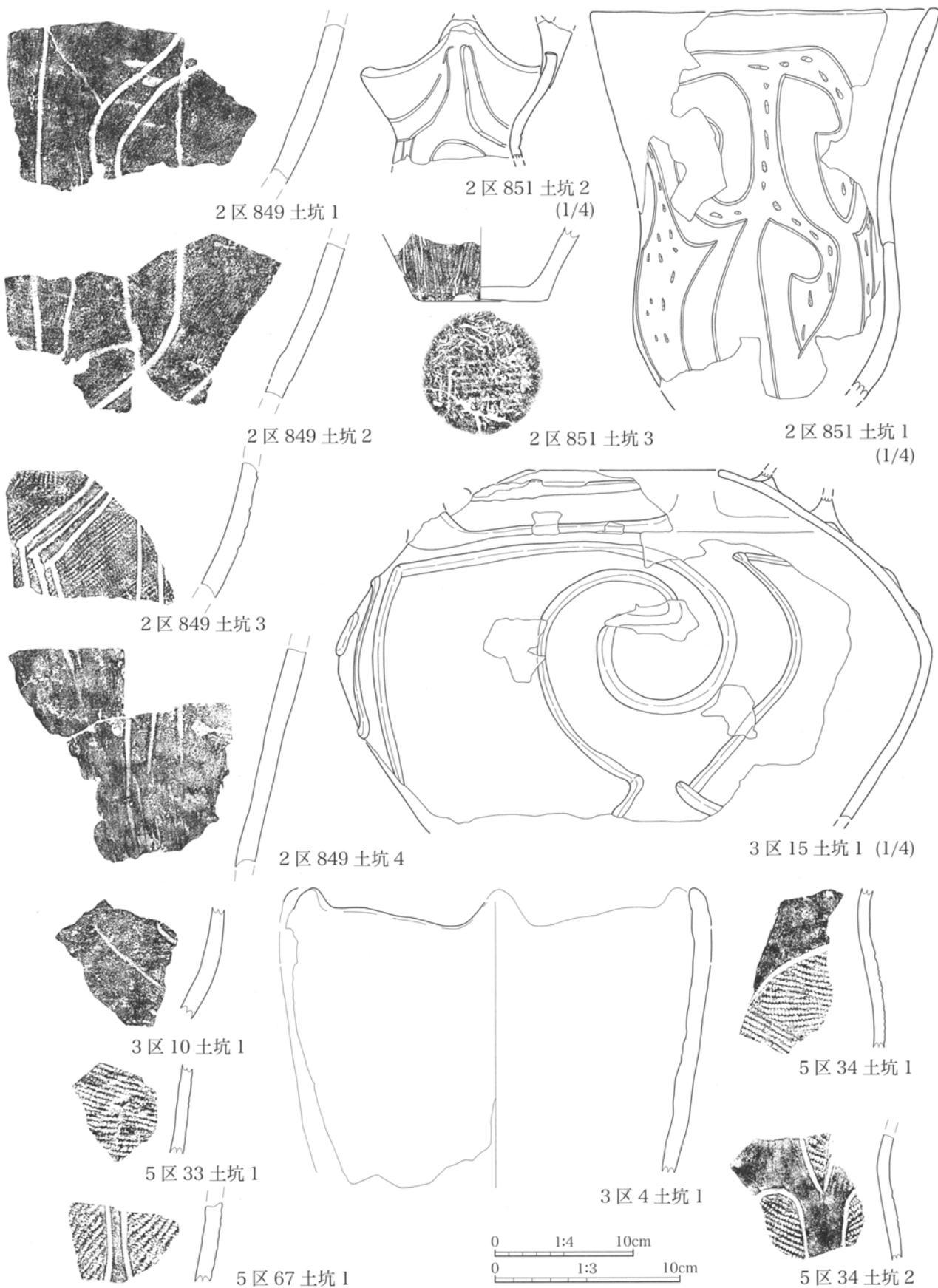
2区 798 土坑 1



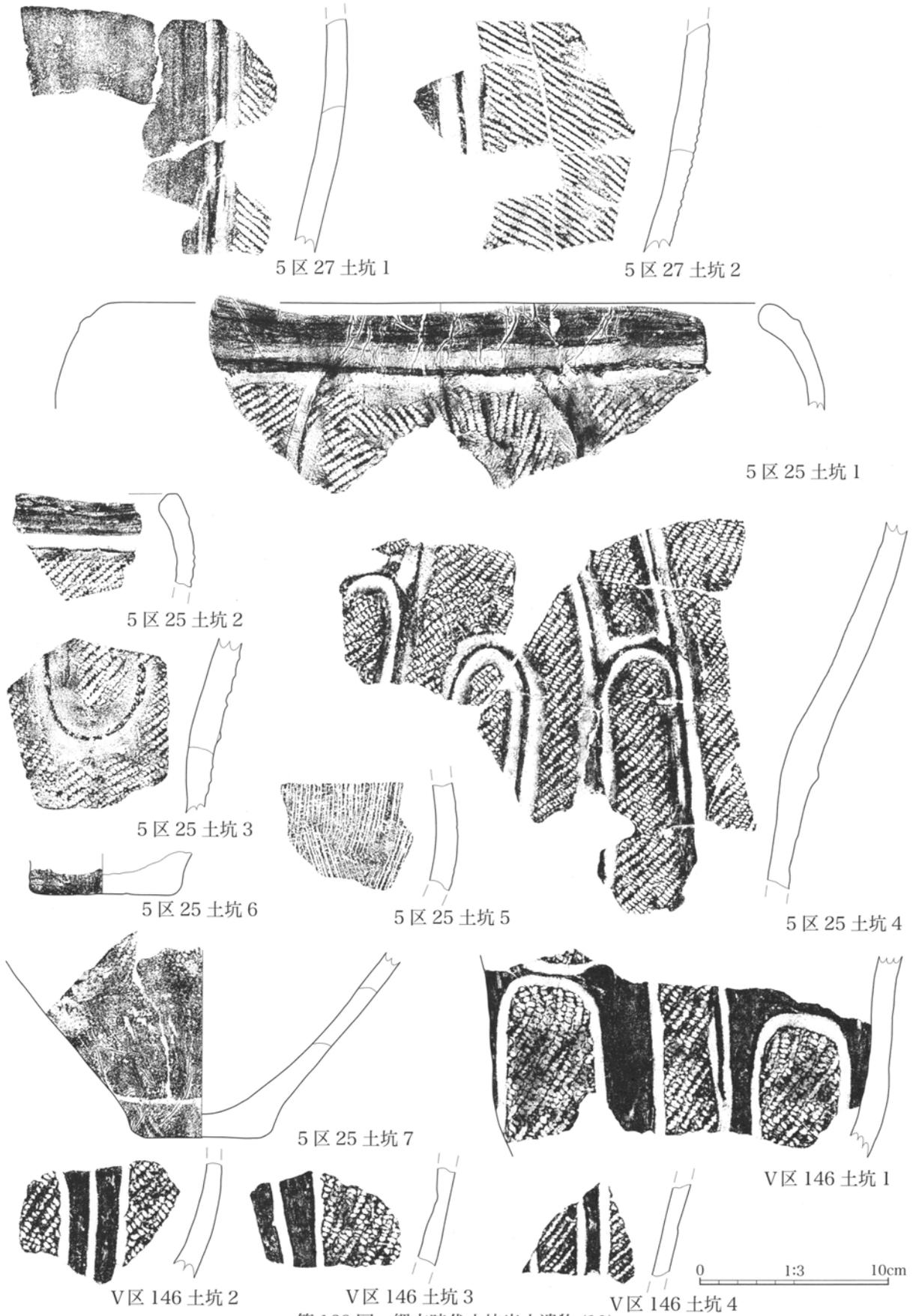
第 157 图 縄文時代土坑出土遺物 (8)



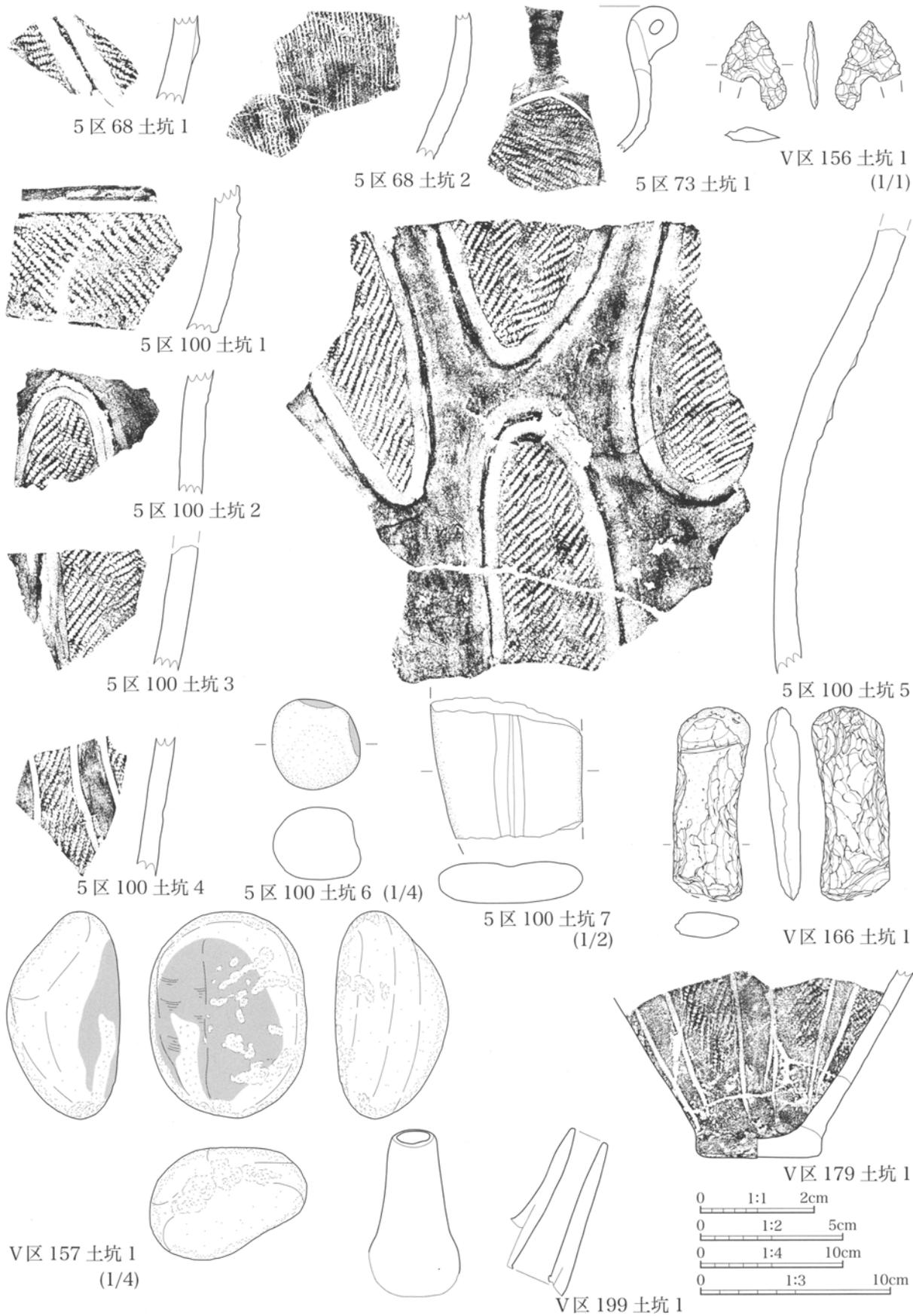
第 158 图 縄文時代土坑出土遺物 (9)



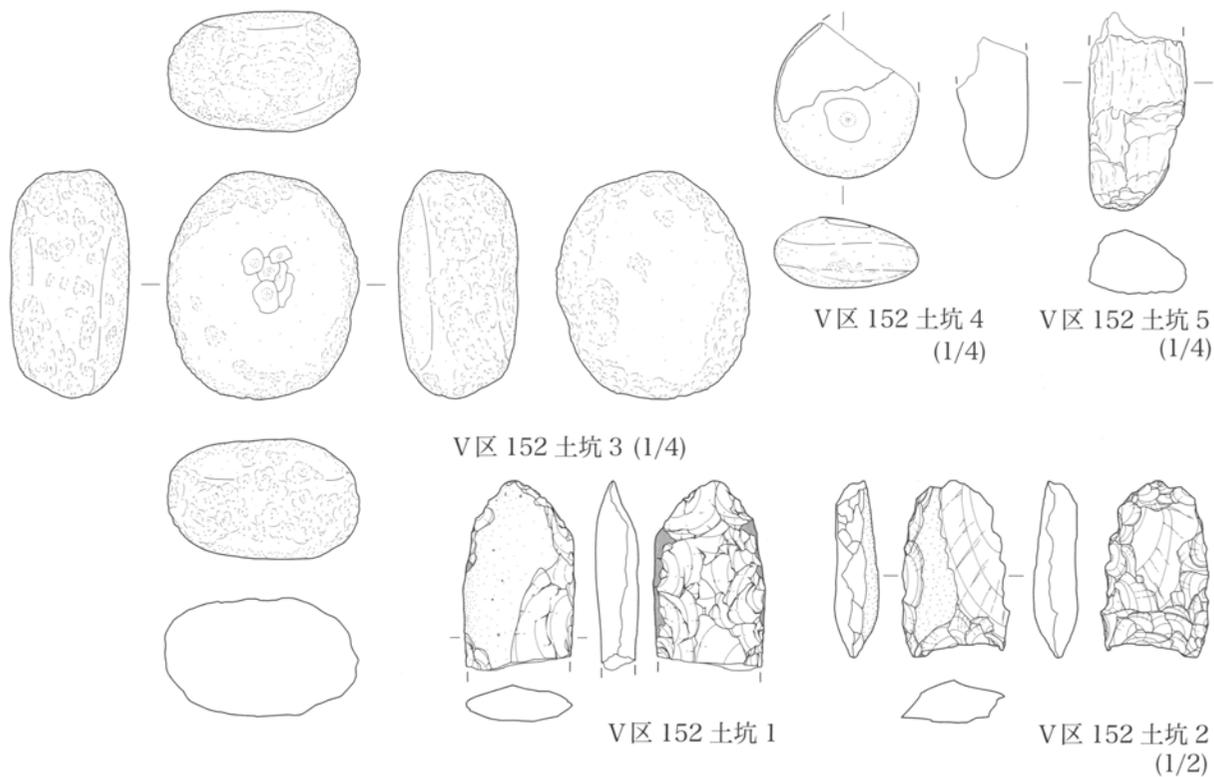
第 159 图 縄文時代土坑出土遺物 (10)



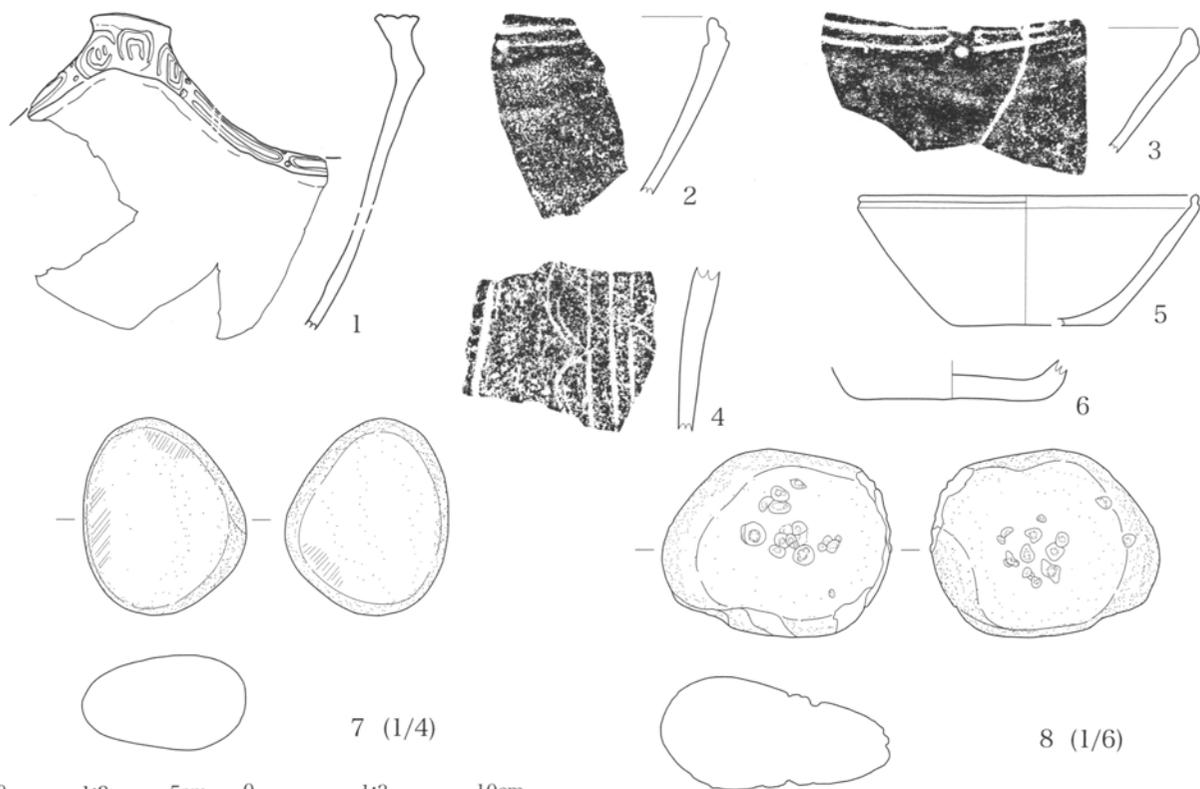
第 160 图 縄文時代土坑出土遺物 (11)



第 161 图 繩文時代土坑出土遺物 (12)



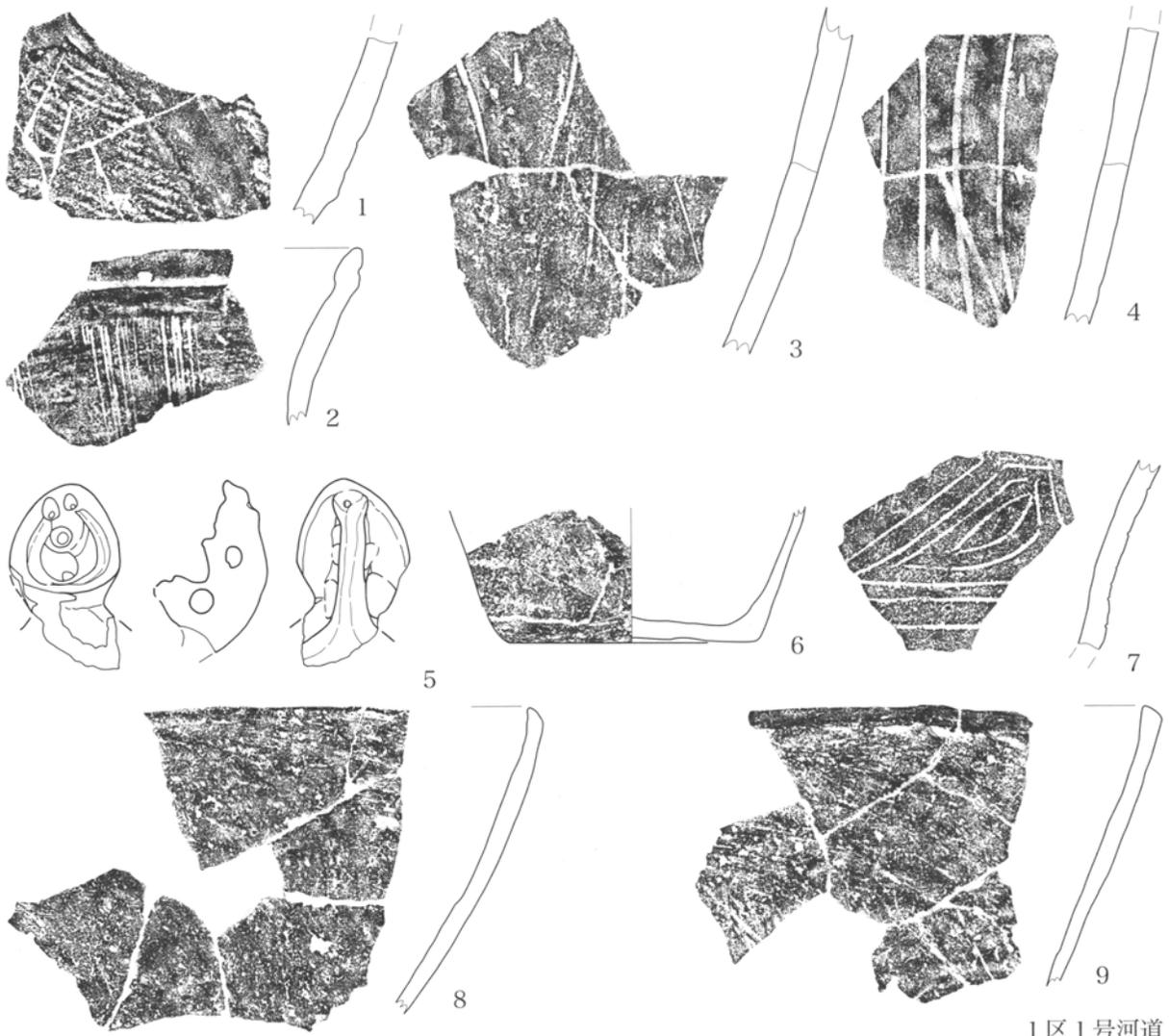
Ⅲ区土器集中



0 1:2 5cm
0 1:4 10cm

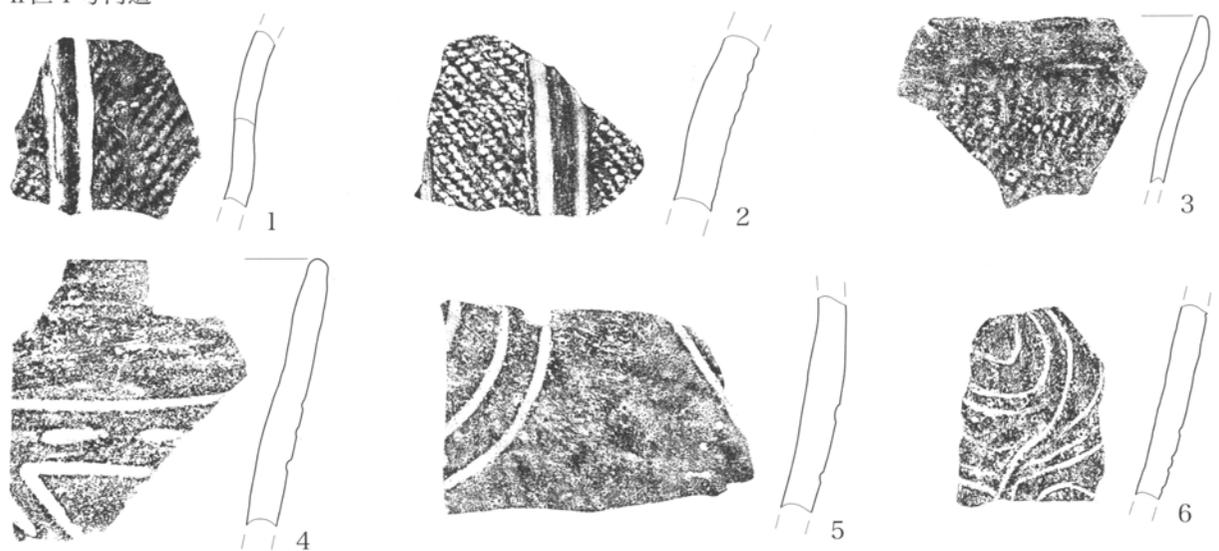
0 1:3 10cm
0 1:6 20cm

第 162 图 縄文時代土坑 (13)、Ⅲ区土器集中出土遺物



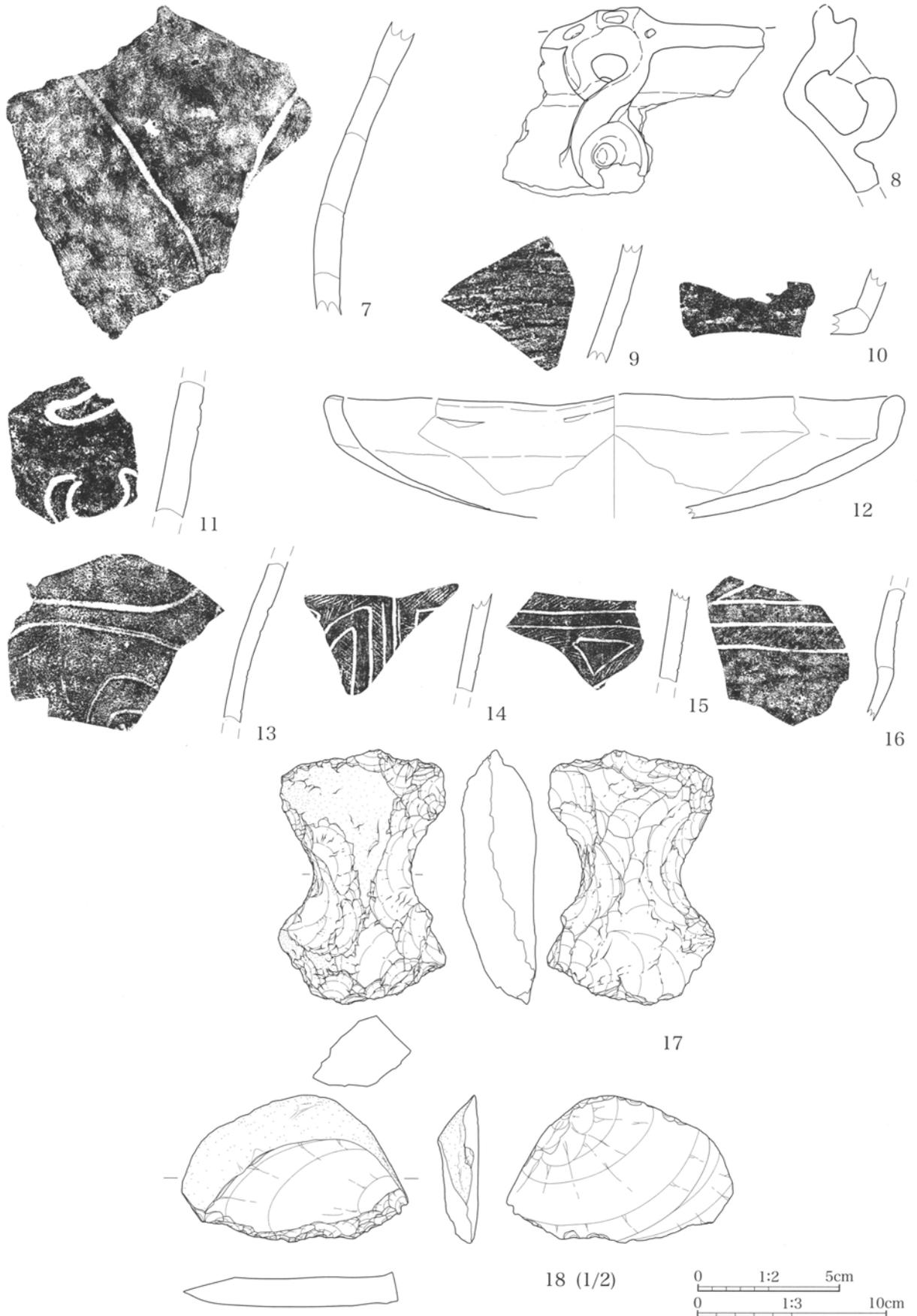
I区1号河道

II区1号河道

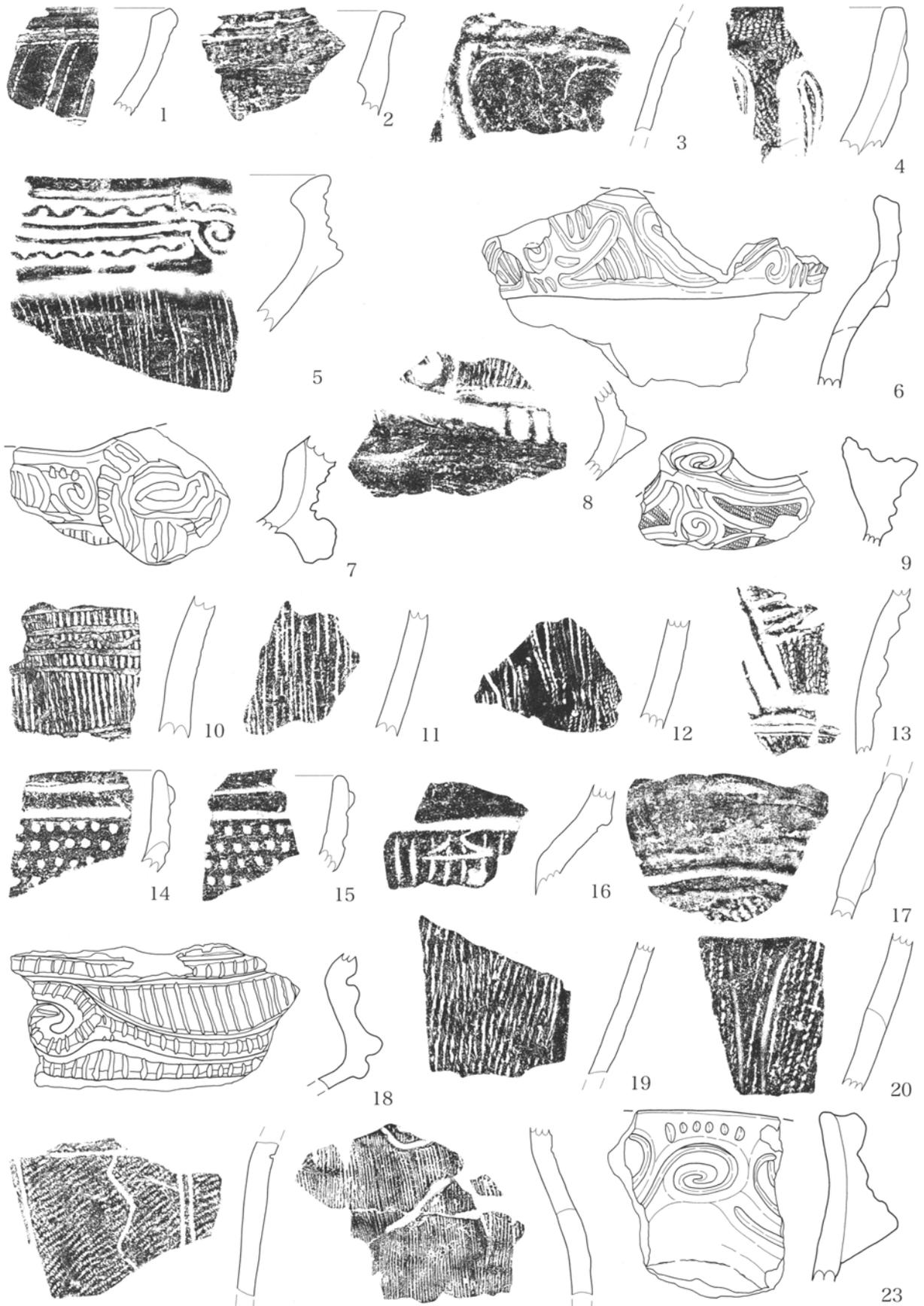


0 1:3 10cm

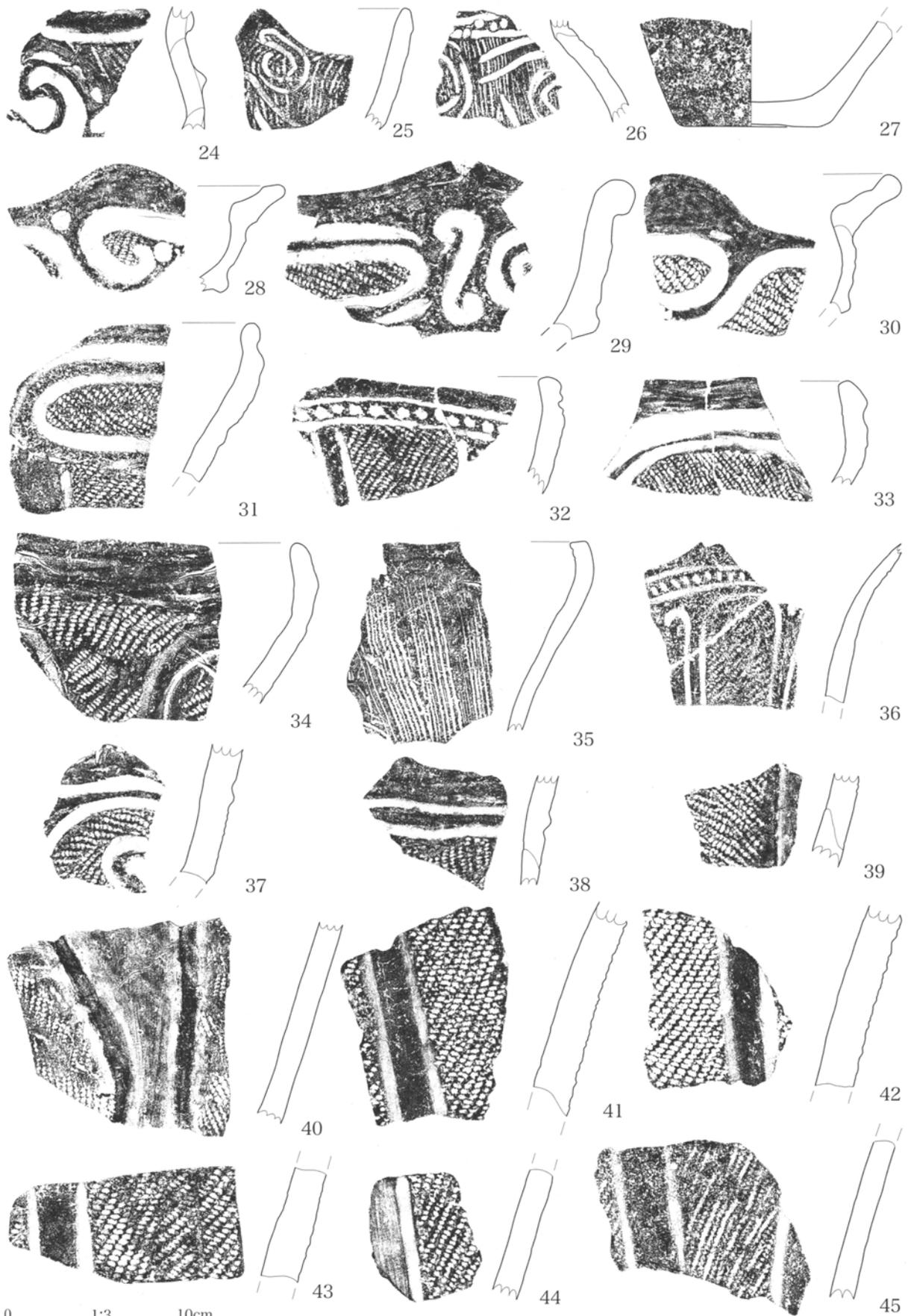
第163图 I区1号河道、II区1号河道出土遗物(1)



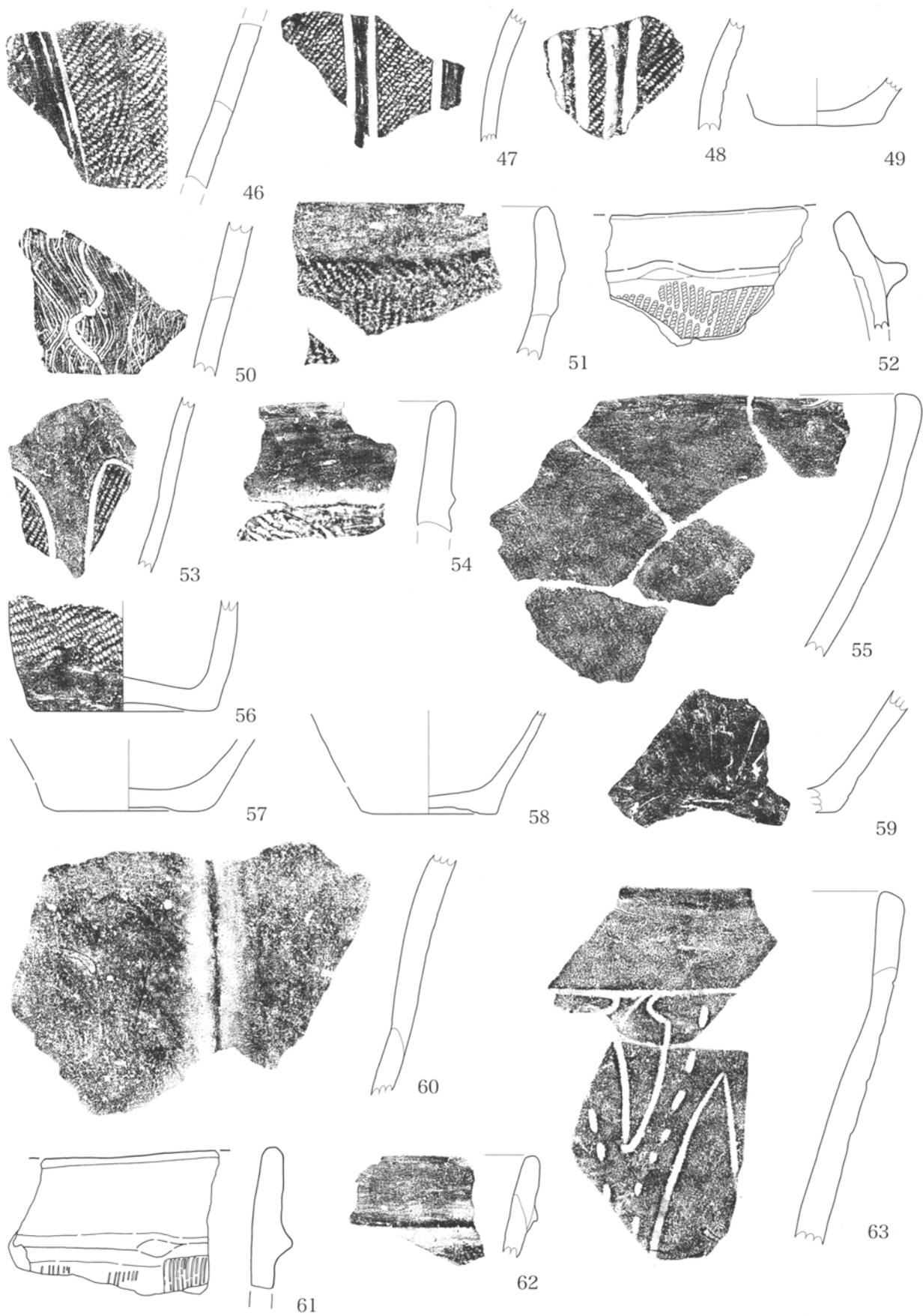
第 164 图 II 区 1 号河道出土遗物 (2)



第 165 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (1)

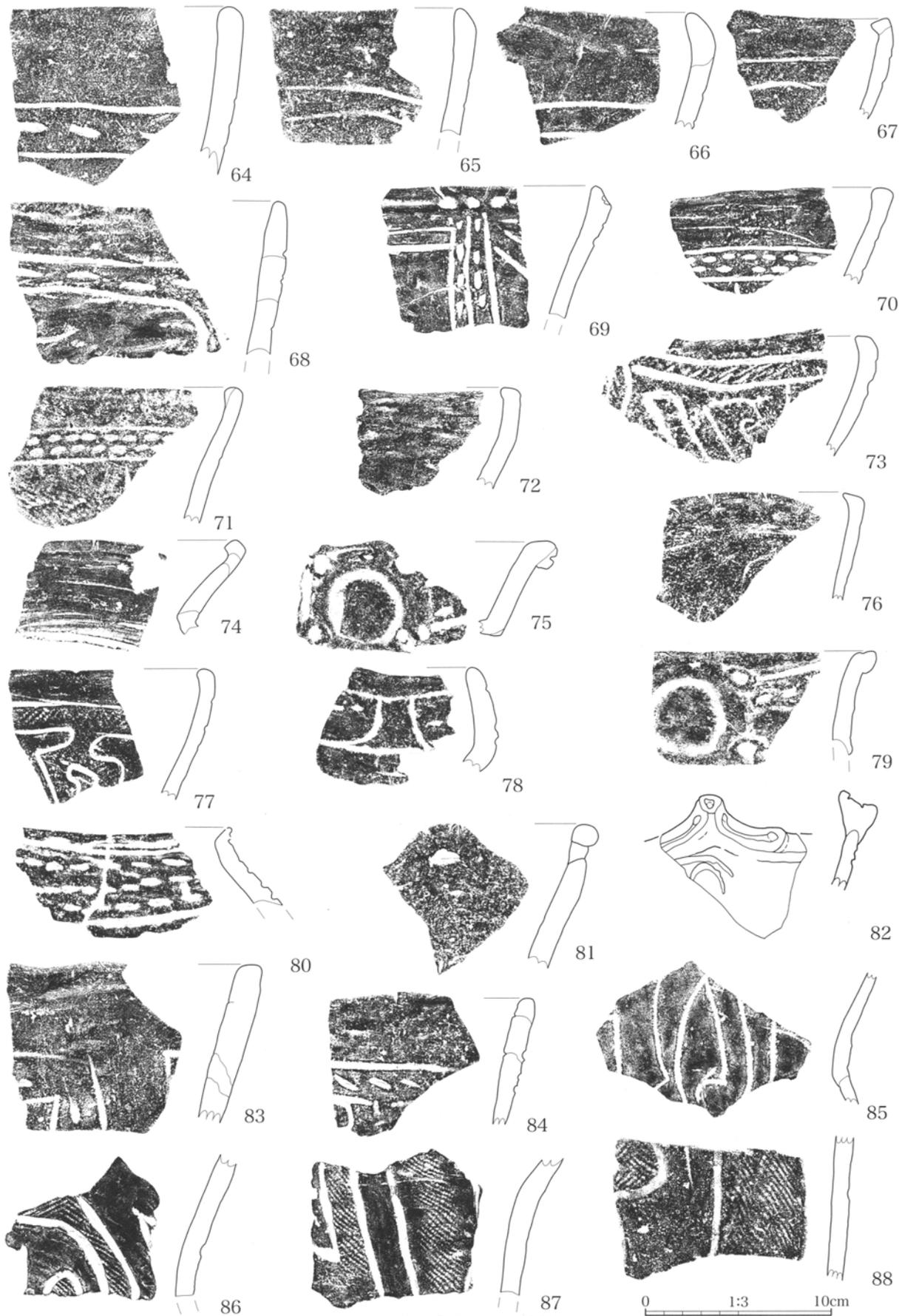


第 166 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (2)

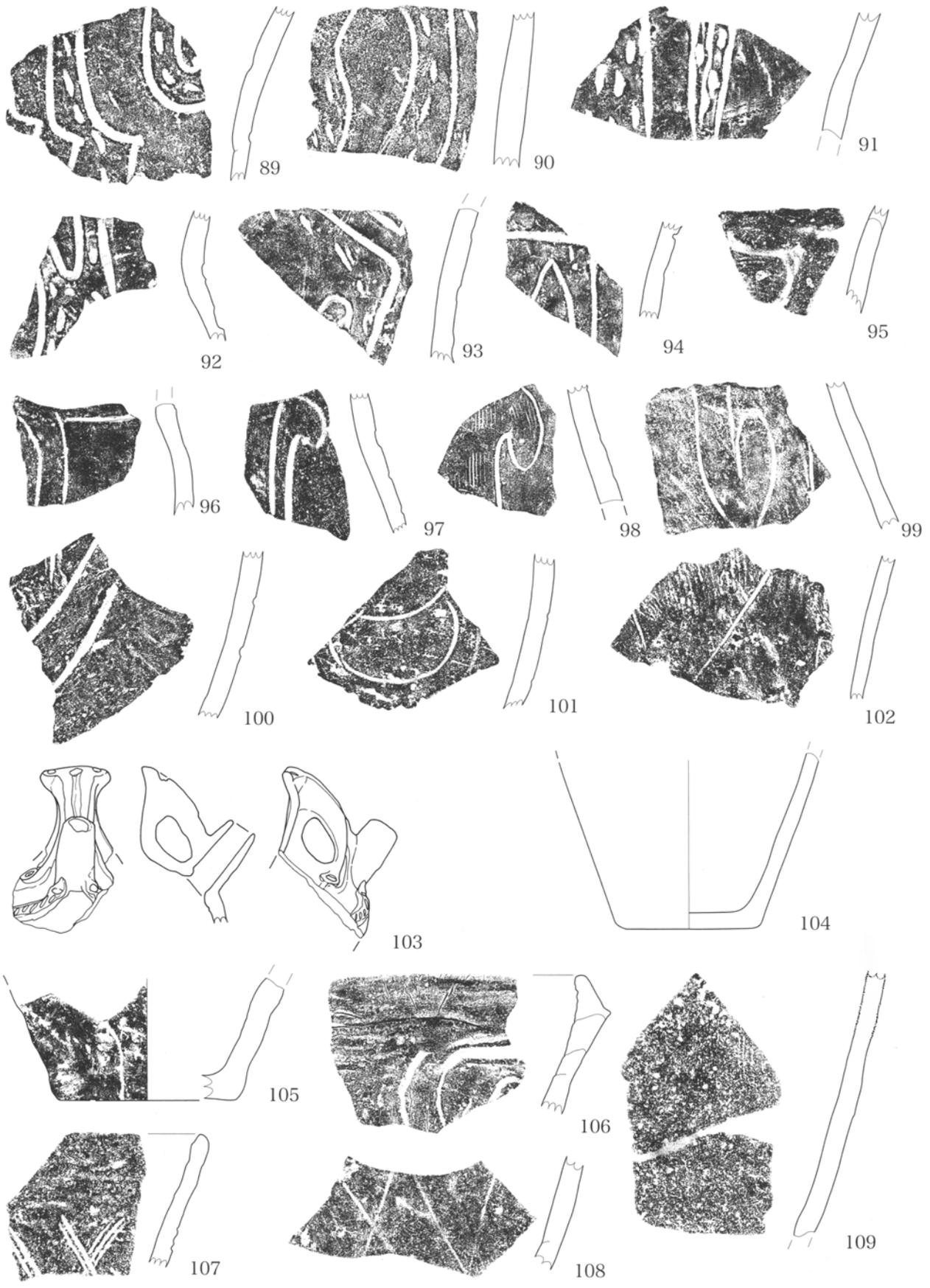


第 167 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (3)

0 1:3 10cm

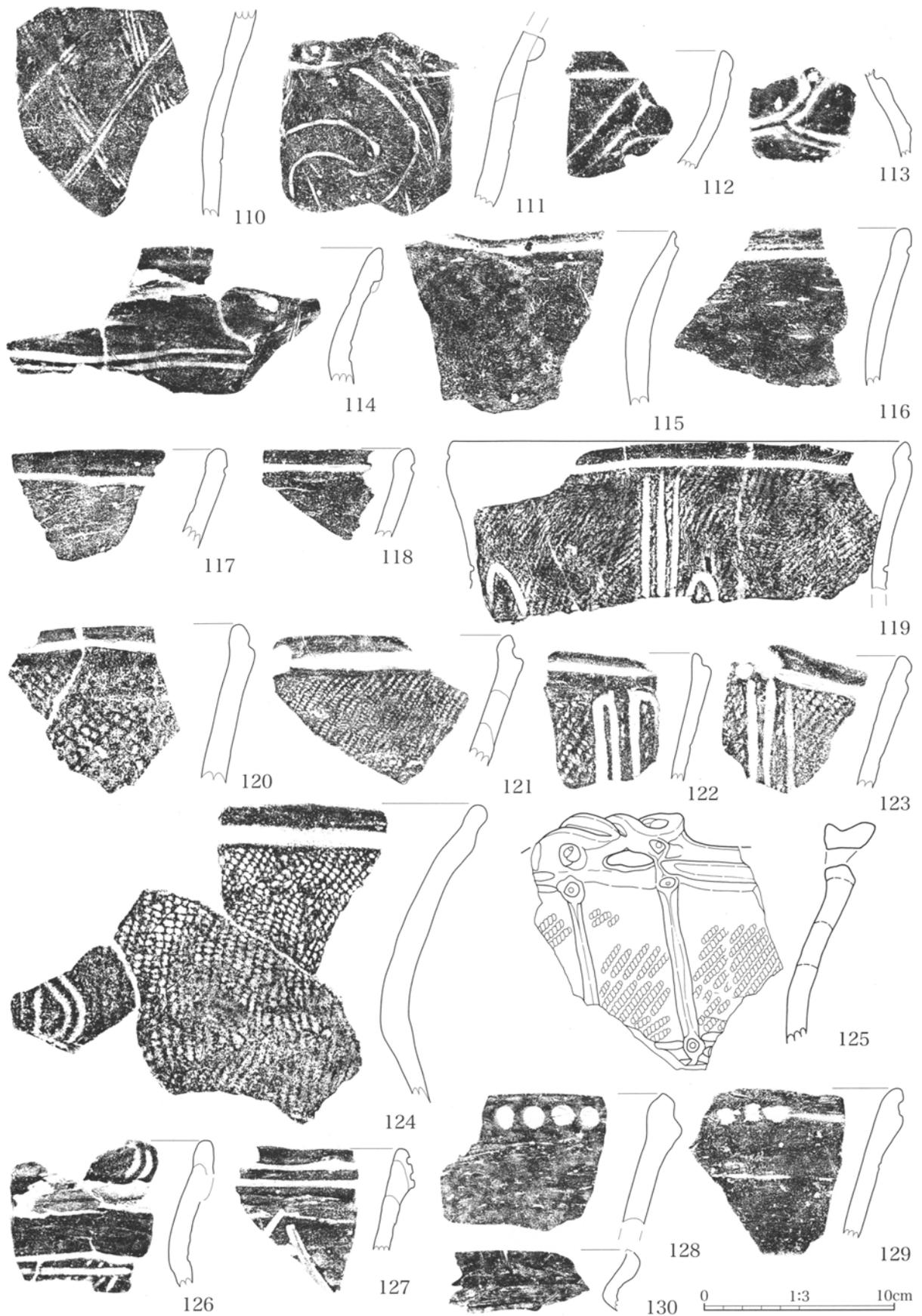


第 168 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (4)

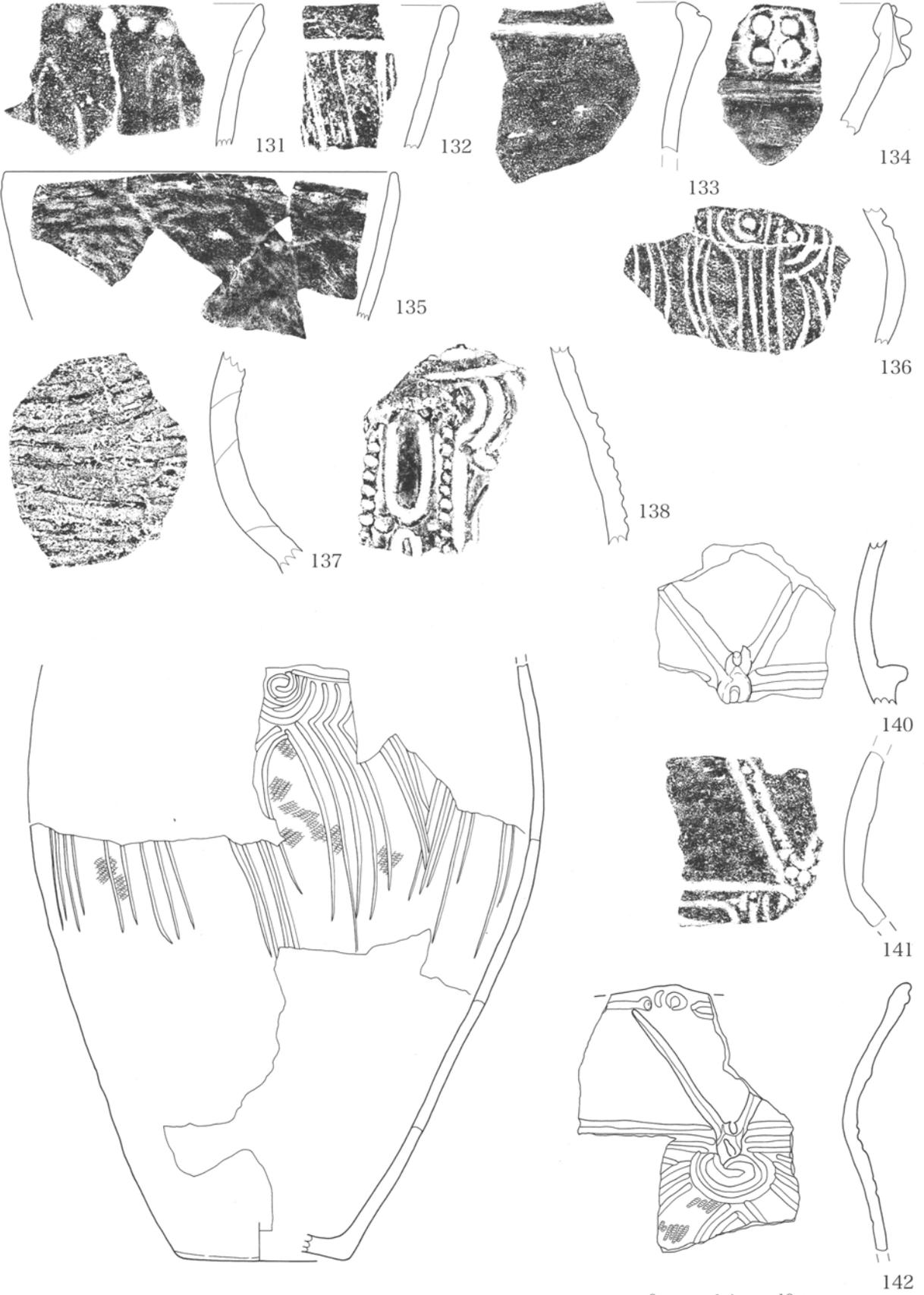


0 1:3 10cm

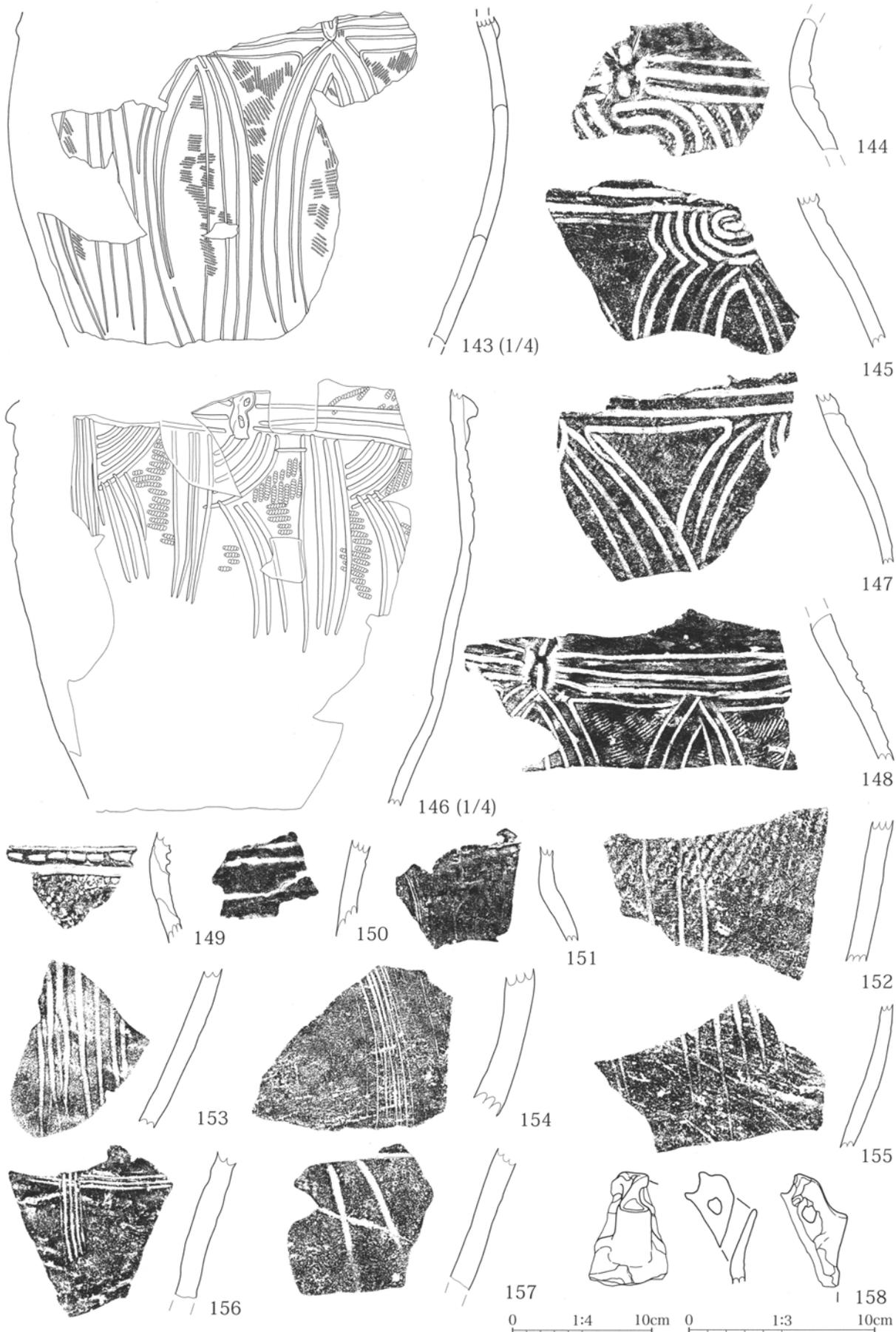
第 169 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (5)



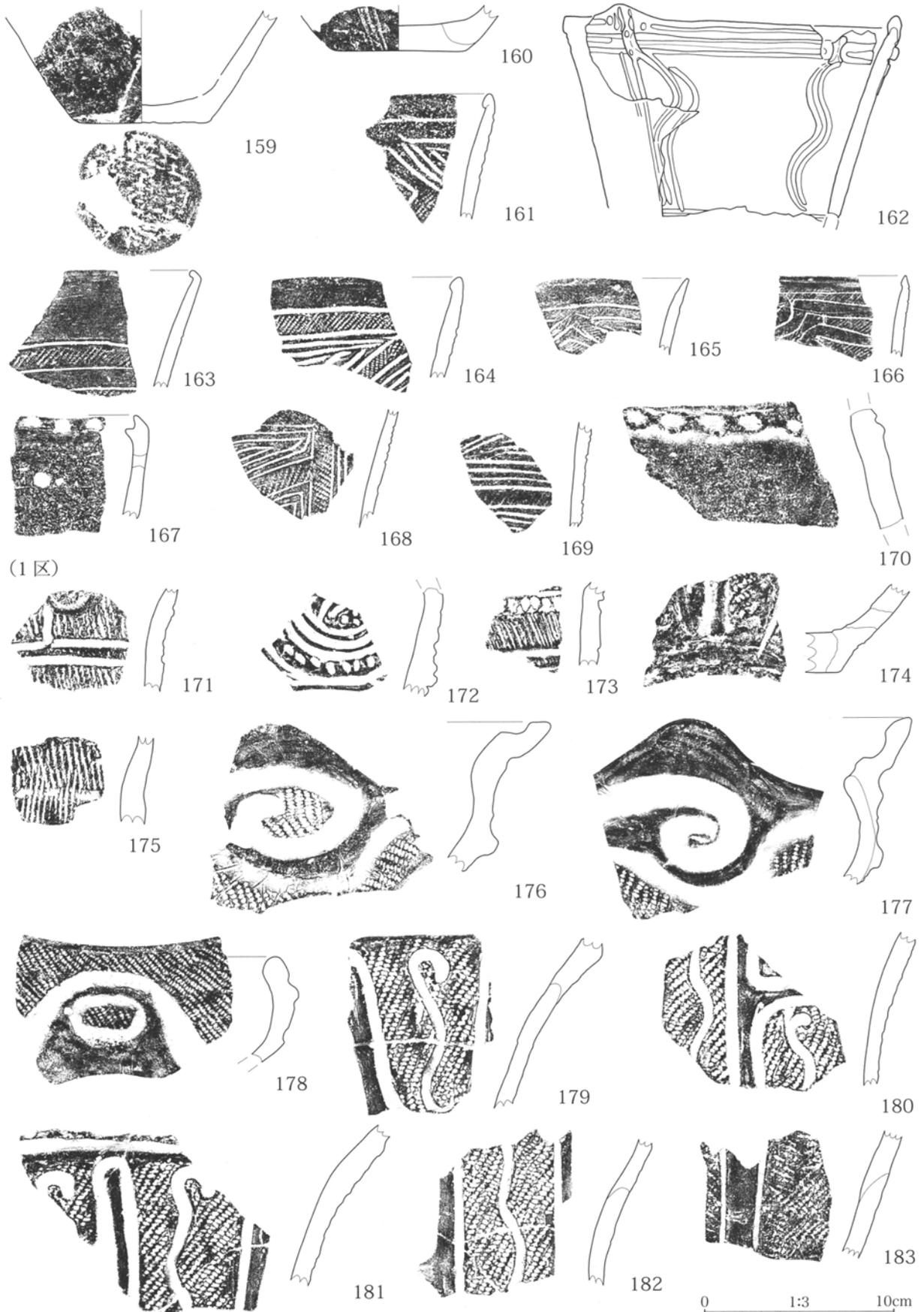
第 170 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (6)



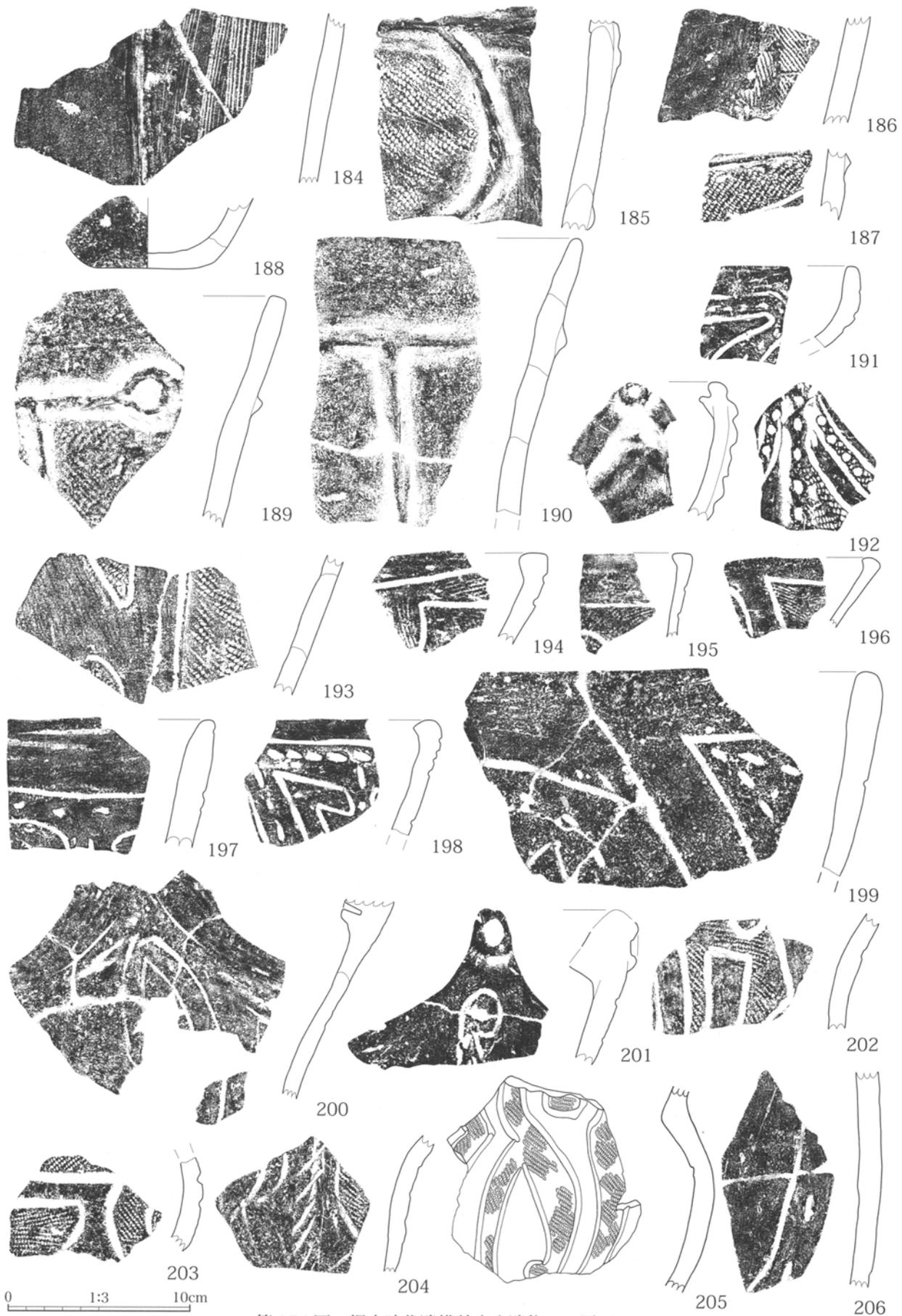
第 171 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (7)



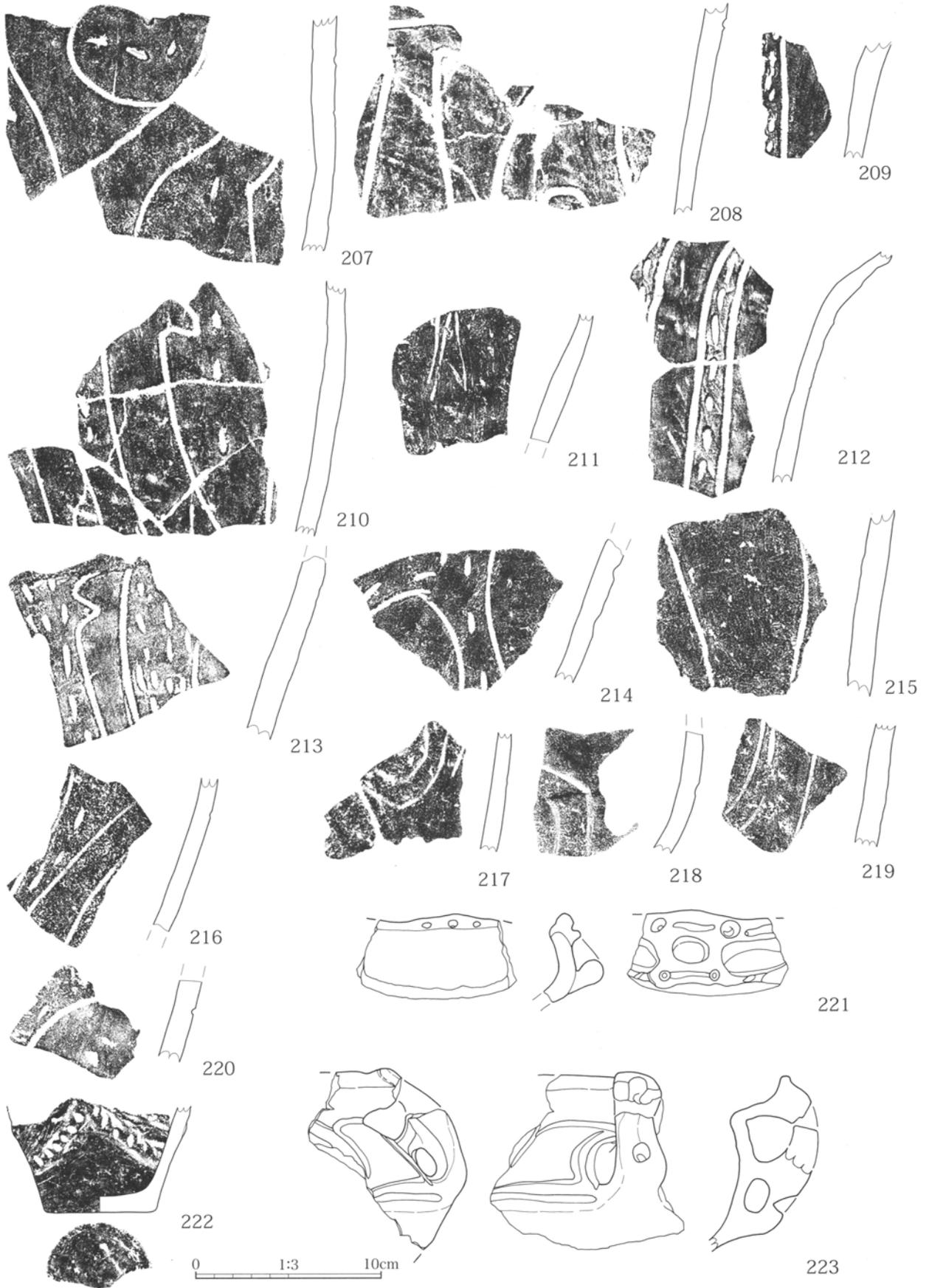
第 172 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (8)



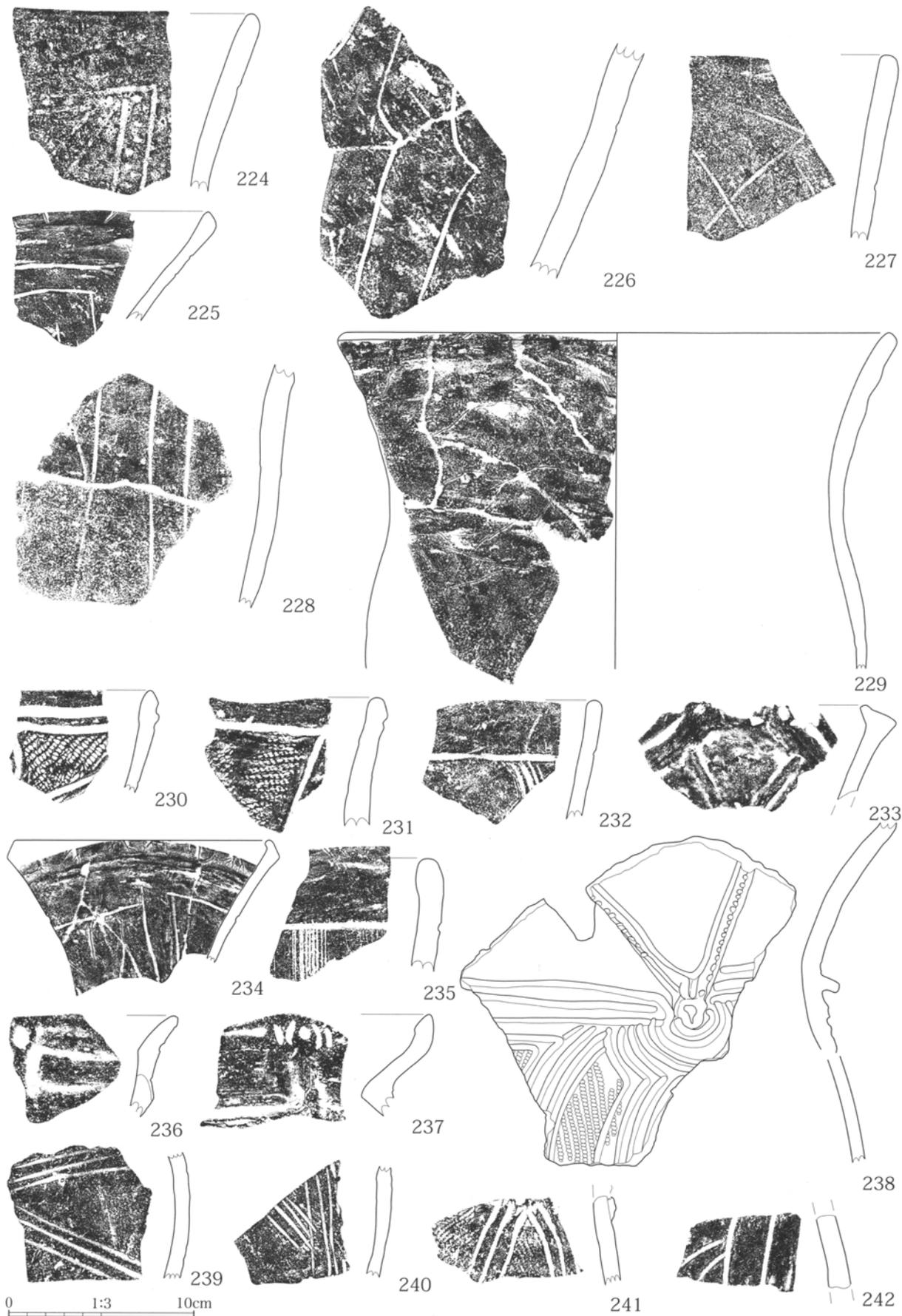
第 173 図 縄文時代遺構外出土遺物 I 区 (9)・I 区 (1)



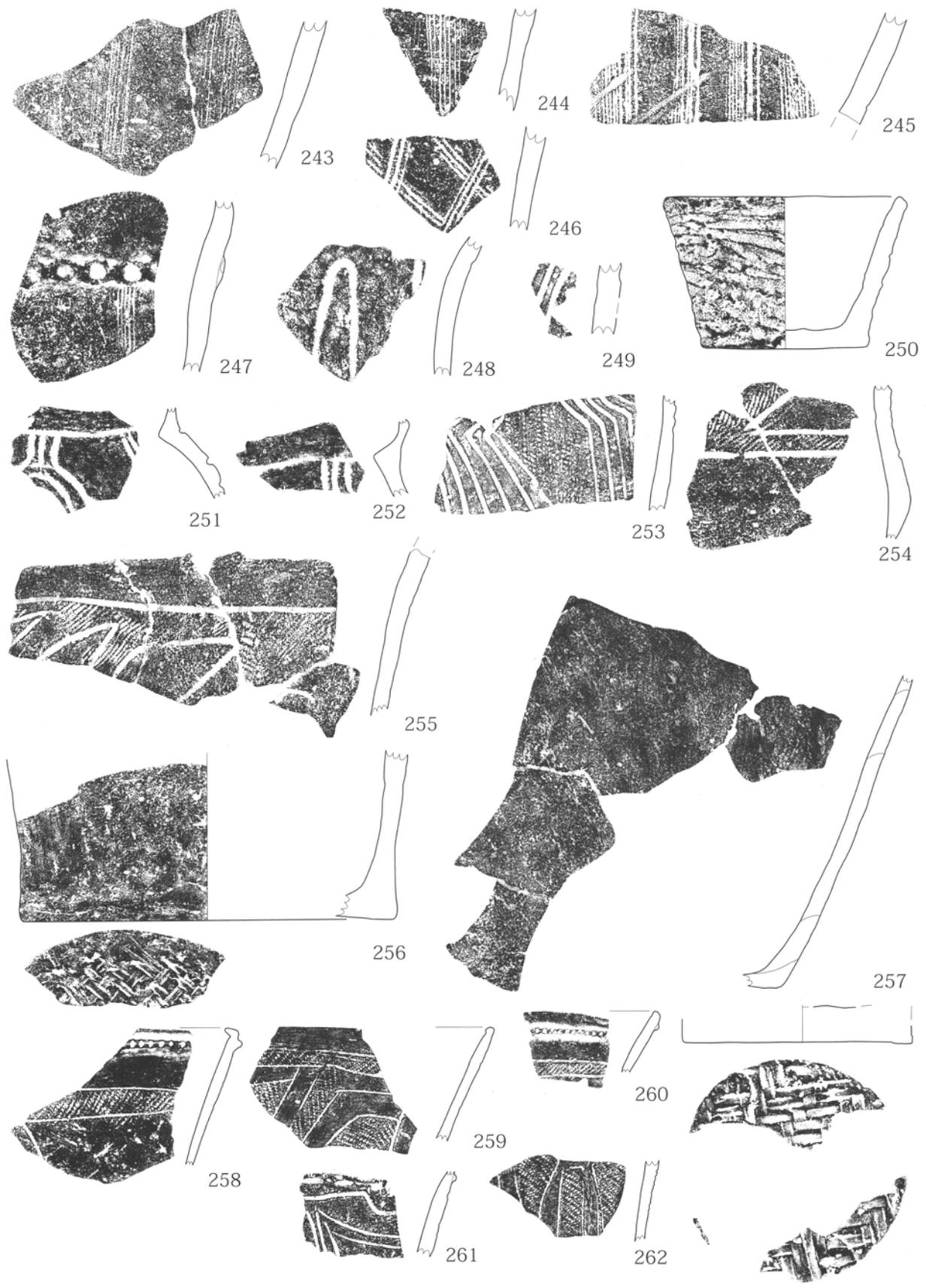
第 174 図 縄文時代遺構外出土遺物 1 区 (2)



第 175 図 縄文時代遺構外出土遺物 1 区 (3)



第 176 図 縄文時代遺構外出土遺物 1 区 (4)



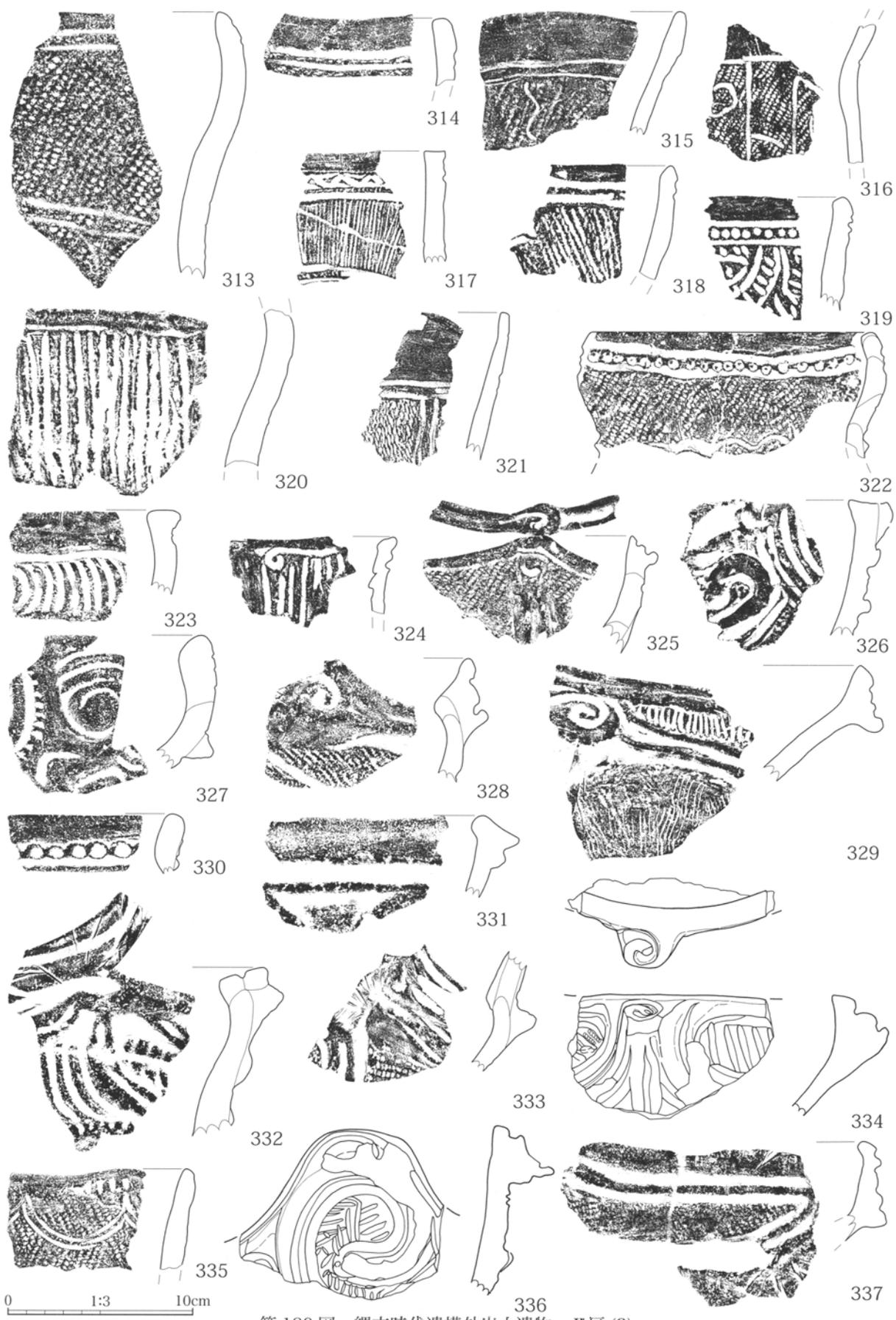
第 177 図 縄文時代遺構外出土遺物 1 区 (5)



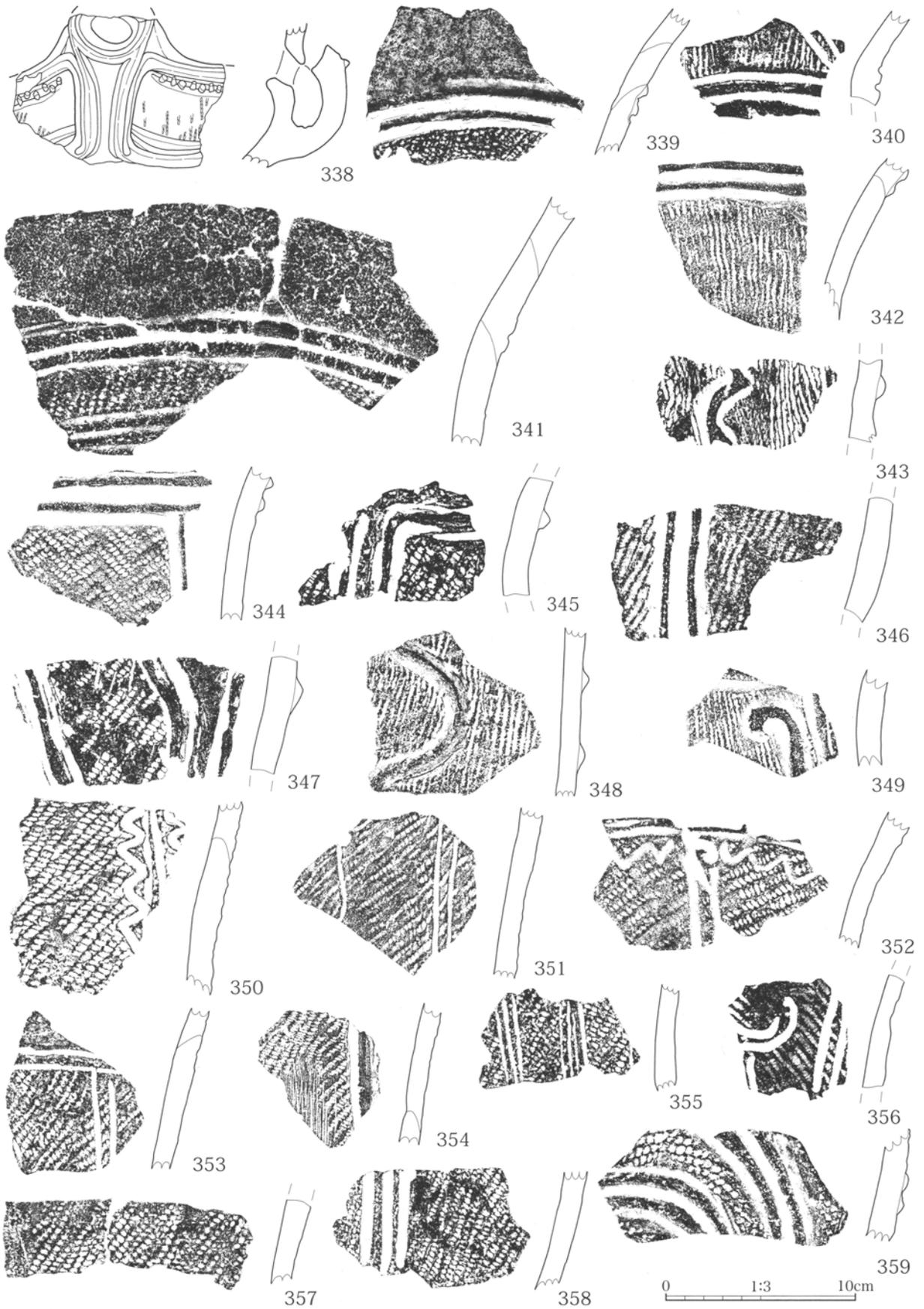
第 178 図 縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (1)



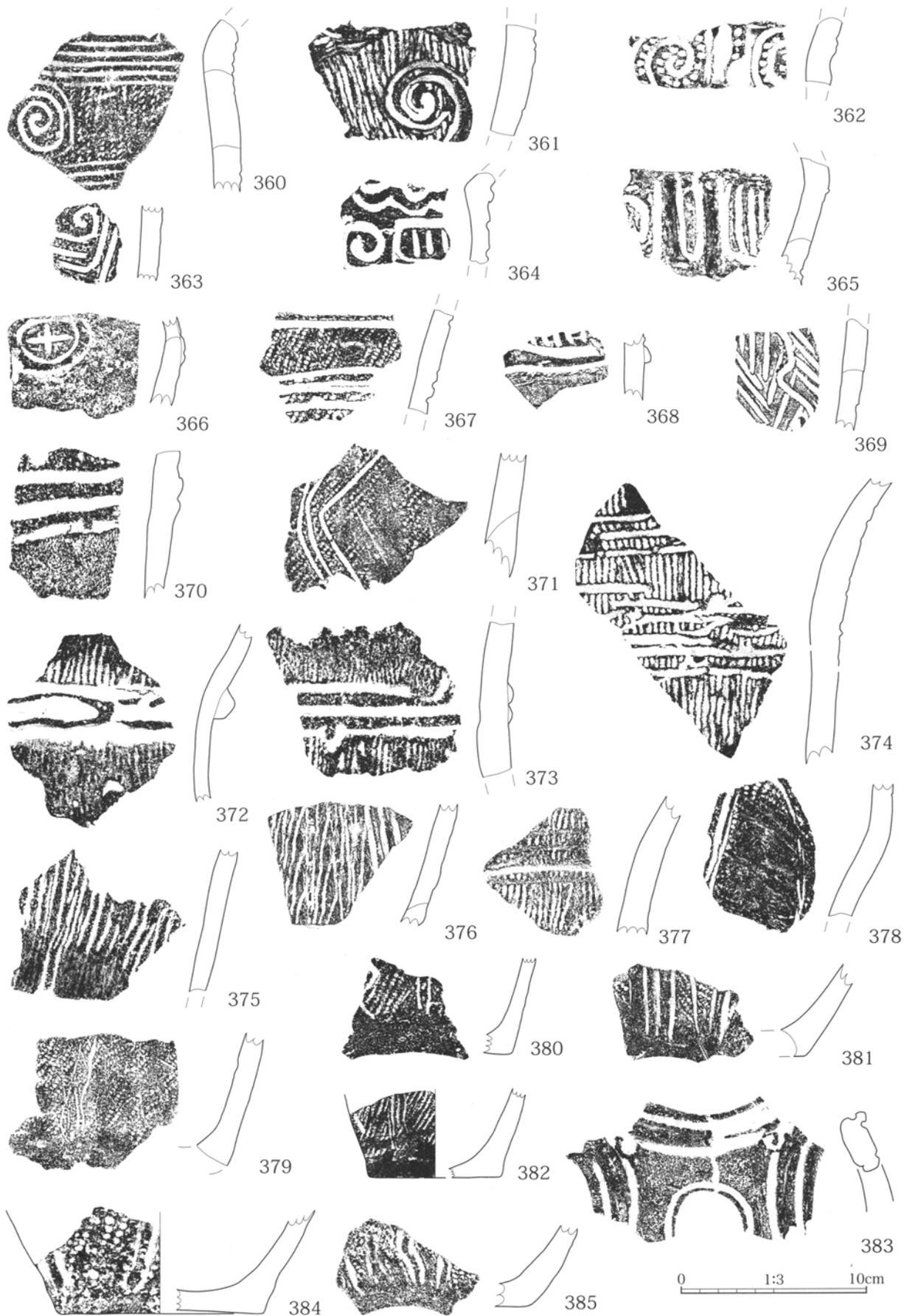
第 179 図 縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (2)



第 180 図 縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (3)



第181图 縄文時代遺構外出土遺物 II区(4)



第 182 図 縄文時代遺構外出土遺物 II 区 (5)